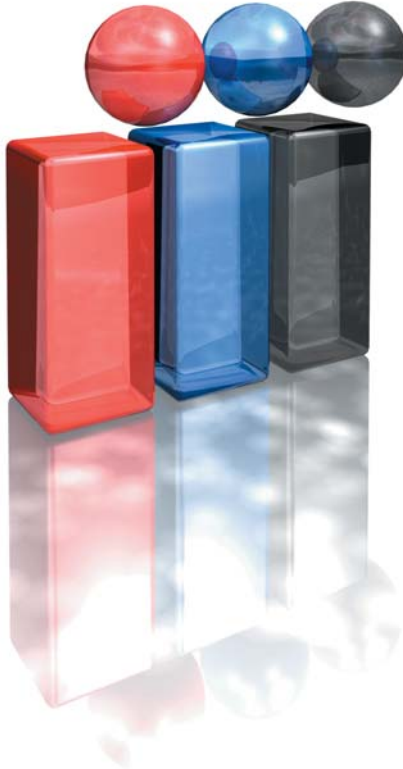


東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

第6号
(通巻38号)

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo



2010



東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

二〇一〇年度 第六号(通巻三十八号)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

第 6 号 (通卷 38 号)

2010 年度

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

I. 現状と課題	1
1 組織説明	1
1.1 概要	1
1.2 理念と沿革	3
1.3 行動シナリオ	6
1.4 教職員組織	8
1.4.1 教職員数	8
1.4.2 昇任・採用（教授昇任人事）	9
1.5 財務	14
1.6 運営	17
1.6.1 情報学環教授会	17
1.6.2 学府委員会	17
1.6.2.1 社会情報学コース	17
1.6.2.2 文化・人間情報学コース	18
1.6.2.3 先端表現情報学コース	18
1.6.2.4 総合分析情報学コース	19
1.6.2.5 アジア情報社会コース	19
1.6.3 教務委員会	20
1.6.4 情報学環戦略企画室	20
1.6.5 入試・カリキュラム制度検討委員会	21
1.6.6 施設整備委員会	30
1.6.7 福武ホール管理運営委員会	30
1.6.8 情報セキュリティ委員会	31
1.6.9 情報ネットワーク委員会	32
1.6.10 情報倫理審査会	33
1.6.11 業績評価委員会	33
1.6.12 企画広報委員会	33
1.6.13 図書出版委員会	33
1.6.14 国際活動委員会	34
1.6.15 産学連携委員会	34
1.6.16 ヒトを対象とした実験および調査研究に関する倫理審査委員会	34
1.6.17 知的財産室	34
1.6.18 利益相反アドバイザー	34
1.6.19 ハラスメント予防担当者	35
1.6.20 社会情報研究資料センター	35
1.6.20.1 情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構	36

1.6.21	総合防災情報研究センター	36
1.6.22	ユビキタス情報社会基盤研究センター	37
1.6.23	駒場カリキュラム連携運営委員会	37
1.6.24	学生・留学生委員会	37
1.6.25	教育部委員会	38
1.7	事務組織	39
2	教育活動	40
2.1	概況	40
2.2	教育カリキュラム	40
2.3	カリキュラム支援体制	41
2.3.1	主指導教員・副指導教員の配置	41
2.3.2	修士・博士 研究計画書の作成	41
2.3.3	ウェブ発表	42
2.3.4	修士論文中間発表会	42
2.3.5	博士課程コロキウム	42
2.3.6	E-LEARNING 授業 (III ONLINE)	43
2.3.6.1	III ONLINE の目標	43
2.3.6.2	III ONLINE の概要	43
2.3.6.3	III ONLINE の評価	45
2.3.7	ソウル大学大学院との大学院国際共同演習授業	46
2.4	学際情報学府への進学	47
2.5	修士論文及び博士論文の執筆	48
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向	51
2.7	学際情報学府以外の教育活動	51
2.7.1	教育部	51
2.7.2	コンテンツ創造教育研究コア	53
2.7.3	ベネッセ先端教育技術学講座 (寄付講座)	54
2.7.4	電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座	54
2.7.5	OKI ユビキタスサービス学寄付講座	55
2.7.6	ユビキタス情報社会基盤学寄付講座	55
2.7.7	「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座	55
3	研究活動	56
3.1	概況	56
3.1.1	文理の相互作用と連携	56
3.1.2	流動教員制度	56
3.2	大型研究プロジェクト (1,000 万円以上規模)	57
3.3	附属センターの役割	60
3.3.1	社会情報研究資料センター	60

3.3.2	総合防災情報研究センター	60
3.3.2.1	災害情報研究の発信	61
3.3.2.2	災害情報教育プログラムの実施と社会連携	61
3.3.2.3	災害情報研究の推進と研究拠点としての活動	62
3.3.3	ユビキタス情報社会基盤研究センター	63
4	社会との交流	64
4.1	国際的委員会	64
4.2	政府・自治体委員会	67
4.3	学協会活動	69
4.4	セミナー・研究会・公開講座	75
4.5	出版活動	83
4.5.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』	84
4.5.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』	85
4.5.3	『英文紀要』	85
4.6	定期刊行物・ホームページ	85
4.6.1	定期刊行物	85
4.6.2	ホームページ	86
4.7	国際交流	87
II.	資料	89
1	沿革	89
2	学環の教員（定員）	90
3	学府の学生数	91
4	教育部	92
5	予算	93
6	土地・建物面積	94
7	入試定数と受入数	94
8	年度別入試データ詳細	94
9	修了者数の推移	99
10	学生支援機構（旧育英会）奨学生数	100
11	日本学術振興会特別研究員数	101
12	リサーチアシスタント数	101
13	就職状況	101
14	研究員（客員）等	104
15	学会賞など受賞者リスト	104
16	論文数	105
17	特許出願・公開数	106
18	国際団体役員・委員数	106
19	政府関係委員会委員数	106

20	地方公共団体関係委員会委員数	107
21	ジャーナル編集・会議運営	107
22	定期刊行物一覧	107
23	留学生数の推移	108
24	留学生国籍別一覧	109
Ⅲ. 個人業績編		111
Ⅳ. 外部資金獲得状況		241

I. 現状と課題

1 組織説明

1.1 概要

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、研究組織（教員が所属）である情報学環と教育組織（学生が所属）である学際情報学府という2つの対をなす機構によって構成されている。大学院の組織モデルとして、研究科が研究と教育の統合モデルであるのに対して、学環・学府は分離モデルだといえる。従来の研究科が専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、この大学院組織は、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した形態として考え出された。

その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にある。すなわち、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に教員枠及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合を目指している。教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、授業科目の担当は、これらの教員以外に他研究科・研究所等に所属する教員にも委嘱する。また、副指導教員制や副専攻制度の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際的教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

大学院 情報学環

■学際情報学圏

情報生命・思想学域

情報システム・言語学域

情報表現・造形学域

情報環境・認知学域

情報社会・制度学域

■社会情報学圏

ジャーナリズム・メディア学域

情報行動・機能学域

情報法・政策学域

情報経済・産業学域

情報文化・歴史学域

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies & Graduate School of Interdisciplinary Information Studies



教育組織である大学院学際情報学府では、一方では情報現象についての文理を越境する幅広い視野を、他方では社会情報学からコンピュータ科学までの高度な専門的能力を、同時に身につけた人材を持続的に社会に提供していくために、それぞれの自律性と相互の連携をあわせもったカリキュラムを編成し、それを運営する以下のような5つのコースを設置している。このコース制は、教育効果を上げるために学生をコースに振り分けるものであって、教員がコースに帰属するものではない。教員は学環に帰属している。

また、学際情報学府は学際情報学の1専攻という形式をとってはいるが、この「専攻」は従来の研究科における専攻とは異なるものであり、そこに教員が帰属しているわけではない。

社会情報学コース

このコースでは、メディア、コミュニケーション、社会情報に関わる社会現象・文化現象を分析するための学識を養い、専攻分野における研究および応用の能力を培うことを目的とし、社会情報学の発展に貢献できる研究者を養成するとともに、社会人を受け入れて研究手法を身につけさせ、知識の高度化をはかる教育を行っている。

文化・人間情報学コース

このコースでは、情報学の視座から文化・人間科学の諸領域を体系的に再編し、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの21世紀的な諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいくことのできる深い学識と精緻な方法的能力をそなえた研究者や実践者を養成する教育を行っている。

先端表現情報学コース

このコースでは、21世紀の社会・産業・個人の情報環境の基盤となる専門的な理数情報学の知を深めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

総合分析情報学コース

このコースでは、センサーから大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、保存・解析したうえで、有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している

アジア情報社会コース

このコースでは、情報通信技術の影響をますます受けつつある現代アジアの諸社会や国際関係に対する分析力や洞察力を養成する為の大学院教育を行っている。講義や指導はすべて英語で行われ、学年は10月から始まる。

これらの5つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

情報学環教育部

また、学部生を対象とした教育カリキュラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、大学2年次以上の在学者及び大学卒業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年50名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限2年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

1.2 理念と沿革

* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた。技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクトによって、根本的な変革を促されつつある。21世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、今日、きわめて多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領域に

固有な対象や方法とも深く結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられた。また、情報学は、急速な発展途上にある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導体制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、平成 12 年 4 月から、学校教育法第 66 条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有のもつ教育枠で採用される教員であり、流動教員とは既存の研究科・研究所等から 3 年ないし 7 年の期間をもって情報学環に定員及び人が移され、それによって情報学環教員となる教員のことである。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する教員にも兼担当教員として委嘱する。

*** 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯**

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004 年 4 月 1 日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一步を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約 75 年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929 年 10 月 1 日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ 1 名の指導教授が横断的に参加し、1 名の指導補助、および 3 名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方で東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合崇治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、経済学をまさしく代表する教授 3 名が参

画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の1949年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49年5月31日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は20世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門1：コミュニケーション過程、特殊部門2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門3：世論及び宣伝という5研究部門の構成となり、63年度からはこれに放送部門が、さらに74年度からは情報社会部門が、80年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中枢的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992年4月1日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報行動、情報・社会という3大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992年から95年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的に関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係をもち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

1.3 行動シナリオ

部局別行動シナリオ「情報学環・学際情報学府」

2009年4月就任した濱田純一総長のもとで策定された「行動シナリオ FOREST 2015」の部局別行動シナリオにおいて、情報学環・学際情報学府は次のような行動シナリオを掲げた。

2010年度に設立十年を迎えた大学院情報学環・学際情報学府は、東大全体の取り組みと歩調を合わせつつ「新たな十年」に向けて次のような課題に積極的に取り組みます。

1. 学術研究の深化と卓越性の追求

文理を越えた学際情報学研究の大学院として、世界最先端の総合的な情報学研究を推進、研究と開発の国際的な連携体制を構築する。特に現行の研究センター等の研究組織を発展させた基礎研究拠点群を構築し、情報社会基盤、メディア文化資源、国際情報社会等での未来分野と新しい学術領域を開拓する（「ユビキタス情報社会基盤研究拠点」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」、「アジア情報社会国際研究拠点」の推進）。

2. 教育の新たな取り組み

1) プログラム 大学学部前期課程から大学院博士後期課程までを縦断・横断して学際情報学関連授業科目を展開し大学全体の情報学教育の充実に貢献する。学際情報学府では履修モデルの多様化・個別化をはかり、院生のキャリア設計にもとづいた指導的人材育成のプログラムを強化する（「教養学部後期課程新学科」構想への参画、「学部・大学院横断プログラム」の充実、「高等教育情報化研究機構」の設立、「情報学環人材育成プログラム」の設置）。

2) 国際化の推進 ポスドク、若手研究者の海外派遣プログラム・国際インターンシップを推進する。国際連携校との間に授業交換および博士共同指導体制を導入する。留学生受け入れ体制を強化し、英語での授業を拡充させ、外国人教員を積極的に登用する（「国際教育研究拠点ネットワーク」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」などの設置、「留学生オフィス」の拡充）。

3) 院生・ポスドク支援 RA・TA 制度を拡充・充実させ、大学院生奨学金の充実につとめ、優れた人材を世界中から集めうる院生支援体制を構築する（「博士学位取得研究支援プログラム」、「学際情報学府インターンシップ」制度の導入）。

3. 社会との連携

1) 組織 大学の社会連携コミュニケーションのデザインに関する研究と実践の組織を設立し、21世紀における大学と社会の「知の共創」イニシアティブを発揮する。情報社会基盤の研究開発のための新しい産官学の連携、学内ベンチャーの育成のための教育研究プログラムを推進する。（「知の共創セン

ター」の設立、「情報社会基盤教育研究プログラム」の設置)

2) 人 同窓生の組織化をはかると同時に、社会連携や産学連携のためのフェローやフォーラムの制度を発足させる。広く社会の人材との日常的な交流のために、学術カフェやラーニングバー等の活動を拡充させる（「学環フェロー」、「学環フォーラム」の組織、「U-Talk」の拡充）。

4. ガバナンス・コンプライアンスの向上

情報学環の学内「流動システム」をさらに発展させて組織の流動性を確保し人材の絶えざる活性化を実現する。情報倫理・研究倫理教育プログラムを学府カリキュラムのなかに位置づける。教員の活動業績、各種委員会の活動状況、組織全体の運営に関わる情報を統一フォーマットで処理しうる情報基盤を整備し、構成員の自己統治能力の向上、組織運営の合理化と効率化のためのFDプログラムを実施する。（「業績評価委員会」の拡充、「コンプライアンス推進室」の設置）。

5. 研究基盤・教育施設の整備

情報学環発足当時からの建物面積・設備面の慢性的な不足の解決に向け、新たな教育研究棟の建設、研究・教育施設の整備に全力をあげる。とくに情報学環の先進的な情報基盤技術のノウハウを活かして、21世紀の持続可能社会のモデルとなる「スマート・キャンパス」の実証実験を実現する（目白台分院跡地に「スマート・キャンパス」型研究棟の建設と「情報社会基盤研究拠点」および「次世代アーカイブ研究拠点」の設置を追求）。

1.4 教職員組織

1.4.1 教職員数

給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員）の採用枠は 75 人及び特別教育研究経費による教員は 1 名、計 76 人となっている。内訳は図 1-4-1 のとおり、教授等の常勤教員 62 人、常勤職員 14 人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図 1-4-2 のとおりとなっている。基幹教員の定員数は 38 名、流動教員の定員数は 24 名とおおむね同数であり、両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

図 1-4-1 教職員採用枠（全 76 人）の内訳
（平成 21 年 4 月 1 日現在）

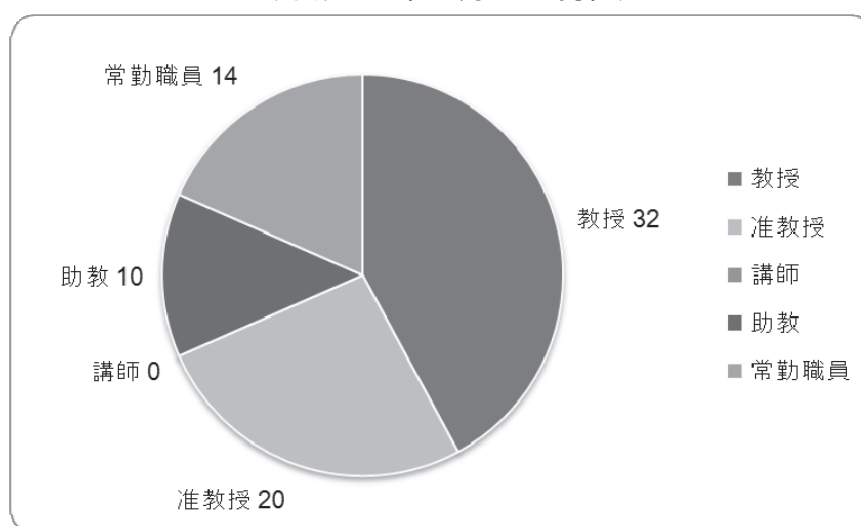
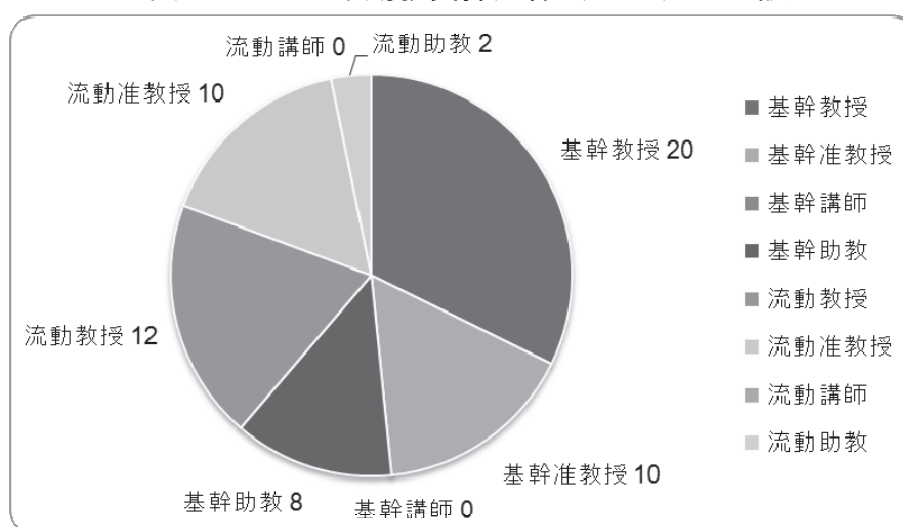


図 1-4-2 常勤教員採用枠（62 人）の内訳



1.4.2 昇任・採用（教授昇任人事）

2009 年度には、田中秀幸氏・林香里氏・越塚登氏・水越伸氏の 4 件の教授昇任人事が行われた。以下に人事選考委員会による教授昇任報告を掲載する。

・社会情報学圏

田中秀幸教授昇任報告（2009 年 7 月 10 日）

人事選考委員会

須藤 修 教授（委員長）

石田英敬 教授

姜 尚中 教授

石崎雅人 教授

人事選考委員会は、本人より提出された主要著作 3 点および研究業績リスト等にもとづき審査をおこなった。

田中秀幸氏は昭和 61 年 3 月、東京大学経済学部卒業、同年 4 月より通商産業省（現経済産業省）に勤務し、在職中、9 ヶ月間アメリカ合衆国タフツ大学フレッチャー法律外交大学院に留学し、その後、平成 12 年年 8 月より社会情報研究所、平成 16 年 4 月より情報学環に助教授、准教授として勤務し、現在に至る。

田中秀幸氏の研究内容について、提出された主要業績に沿って説明する。

Hideyuki Tanaka (2005), *Research and Development Partnerships Bridged by the Intermediate Domain*, (in) Osamu Sudoh ed., *Digital Economy and Social Design*, Springer-Verlag, pp.184-209.

【査読あり】では、半導体産業分野においてベルギーの非営利研究機関 IMEC（Interuniversity Micro-Electronics Center）を対象としてケース・スタディを行い、中間組織がつなぐ新たなイノベーション・モデルの意義を明らかにしている。1990 年代以降の半導体分野では、①グローバルな規模での研究開発パートナーシップの確立、②さまざまな学問分野の研究成果の取り込みが見られるが、両方を可能にする取り組みの代表的な成功例として IMEC を取り上げて分析し、企業間パートナーシップと産学間パートナーシップの複合的な結節点として機能する中間組織がイノベーションにとって果たす役割を明示している。堅実な事例研究として高い評価を与えることができる。

Hideyuki Tanaka, Kanta Matsuura and Osamu Sudoh (2005), *Vulnerability and Information Security Investment*, (in) *Journal of Accounting and Public Policy*, Vol.24, no.1, pp37-59. 【査読あり】では、費用対効果分析に基礎を置きながら、情報システムの脆弱性とセキュリティ投資の関係を明らかにするものであり、中程度の脆弱性に対して投資を行うことが合理的であることが示されている。この

研究は、地方自治コンピュータ総覧（総務省）2002 年度版の統計データを用いて、Gordon and Loeb(2002)のモデルを実証的に検証したものであり、市町村の有するネットワークの形態に応じてシステムの脆弱性を区分し、情報セキュリティ・ポリシー（ISP）策定の有無をセキュリティ投資の代理変数として用いて分析を行い、Gordon and Loeb(2002)の理論的枠組みが成り立つことを実証的に明らかにしている。統計データを用いた実証研究として世界的にみて高く評価され、引用件数も多い。

Hideyuki Tanaka and Takeshi Okamoto (2008), *Effects of Information Communication Technology on Urban and Rural Service Sectors: An Empirical Analysis of Japanese Economic Geography*, (in) M. Oya et.al. eds, *Towards Sustainable Society on Ubiquitous Networks*, Springer-Verlag, pp.265-277. 【査読あり】では、2000 年度から 2006 年度にかけての統計データに基づいて、ICT は、製造業においては大都市部から地方部への立地の分散に影響する一方で、サービス業においては地方部から大都市部への集積に影響する可能性があることが示されている。この研究は、ICT の利用が地理的な側面からみた経済構造の変容を加速させていることを実証データに基づいて明らかにしており、データエビデンスに基づいた堅実な研究として高く評価できる。

なお、経済と情報に関する計量的実証研究を着実に遂行しつつ、コンテンツ産業分析、さらに地域 SNS に関するネットワーク実証研究などにも取り組み、研究領域を拡大深化させており、今後、情報学環の研究発展への貢献が大いに期待される。

教育においても指導している複数の学生の修士論文が学会賞を獲得しており、教育においても優れた実績を有している。その他、国内外の学会における精力的活動、財務担当情報学環長補佐を始めとする情報学環への多大な組織的貢献等を総合的に勘案すると、人事選考委員会は、教育研究活動他から判断して、田中秀幸氏は、情報学環基幹教授として、十二分に適任と認め、益々の活躍が期待できるものと判断した。

林香里教授昇任報告（2009 年 7 月 10 日）

人事選考委員会

吉見俊哉 教授（委員長）

橋元良明 教授

石崎雅人 教授

石田英敬 教授

本人事選考委員会は、本人より提出された主要著作 3 点及び研究業績リスト等に基づき審査を行なった。

林香里氏は、南山大学外国語学部在学時から盛田留学生奨学財団奨学金奨学生としてドイツ連邦共和国ヨハネス・グーテンベルク大学に 1 年間留学、国際ロータリー奨学生財団奨学金奨学生としてアメリカ合衆国ペンシルバニア大学に 9 ヶ月留学と海外経験を重ね、1987 年 3 月に同大学を卒業後、ロイタ

一通信社東京支局記者等の実務を経験している。1992年から東京大学大学院社会学研究科に入学、マスメディア論、ジャーナリズム論を専攻した。林氏は1995年4月に同大学院博士課程に進学、1997年に同社会情報研究所助手就任のため単位取得退学の後、2001年に博士学位申請論文「〈マスメディア・ジャーナリズム〉の矛盾と革新」により博士学位（社会情報学）を得ている。2004年3月には同社会情報研究所助教授に就任。組織合併により同情報学環准教授として現在に至る。博士学位論文は、すでに『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』（新曜社、2002年）として出版され、高い評価を得ている。

本委員会に提出された3点の著作のうち、著書『〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム』（審査時において刊行決定済、岩波書店 2011年刊）は、現代日本のジャーナリズム現場の実践知とコミュニケーションに関する学術的知を果敢に接合し、女性や子ども、高齢者や貧困層、障害者、外国人等からの視点を組み込んだジャーナリズム研究の可能性を開拓した。現場の記者への豊富なインタビューを重ね、ジャーナリズム現場における様々な問題をめぐって調査を実施し、情報化社会におけるジャーナリズムの新しい可能性を提起している。審査委員会は、林氏が、既存のジャーナリズム研究の学問的蓄積を十分に踏まえ、支配的な秩序の周縁に位置する者の立場に立って真摯に学問研究を深めている点を高く評価した。

提出された2つの英文論文も、日本における放送システムの発展や近年の韓流ブームについて目配りよく考察を深めた精度の高い研究であるとの評価で一致した。すなわち、*Television and Public Policy* (David Ward ed., Lawrence Erlbaum Associates 2008) に収録された論文“The Dilemmas of Reforming Japan’s Broadcasting System: Ambivalent Implications of Its Liberalization”は、現代日本における放送システムの発展を、歴史的、制度的、文化的に捉え返しながら、グローバリゼーションと情報化のなかで危機に直面するこのシステムの困難を鋭く分析した成果である。他方、*Social Science Japan Journal* に開催された“The Potential of Fandom and the Limits of Soft Power: Media Representations on the Popularity of a Korean Melodrama in Japan” (Eun-Jeung Lee と共著 2007) では、いわゆる「韓流」ブームの先駆けとなったテレビドラマ「冬のソナタ」の受容についての日韓比較分析を説得的に進め、大衆文化まで視野に収めた林氏の研究の幅の広さが示されている。

教育面では、すでに多くのすぐれた大学院生、若手研究者を育てており、学生たちの信頼も厚く、教育者として高い資質を備えていること、また組織面においても、これまでの国際活動委員長として、情報学環の国際戦略の中核になってきたことが高く評価された。

以上から、審査委員会は、林香里氏が、東京大学大学院情報学環教授として十分な学問的業績と教育実績、組織的能力を有しており、教授昇任が適切であるとの結論で一致した。

・学際情報学圏

越塚登教授昇任報告（2009年7月10日）

人事選考委員会

坂村 健 教授（委員長）

池内 克史 教授

佐倉 統 教授

須藤 修 教授

石田英敬 教授

暦本純一 教授

越塚登氏の教授人事に関し、平成21年6月12日14時より下記委員により選考委員会を開催した。

越塚登氏は1994年3月 東京大学大学院理学系研究科情報科学専攻・博士課程を修了（博士（理学））し、同年4月 東京工業大学理学部情報科学科・助手として赴任した。1996年7月 東京大学大学院人文社会系研究科・助教授、1999年8月 情報基盤センター・助教授を経て、2006年4月より大学院情報学環・助教授となり現在に至っている。越塚登氏は計算機科学の研究者であるが、1996年、東京大学大学院人文社会研究科赴任と同時に主に人文社会系の学問と計算機科学間の学際融合研究として、デジタルミュージアムの研究を始めた。研究は実践的で研究の成果は1997年1月の東京大学総合研究博物館における「デジタルミュージアム展」から、東京国立博物館デジタル展示の構築に使われ、多数の国際会議等の論文としてとりまとめられた。

また、1999年より始めた Ubiquitous Computing 環境におけるセキュリティーアーキテクチャである eTRON (Entity and Economy TRON) の研究では、対称鍵暗号版、非対称鍵暗号版、マルチメディアストリーミング機能版等のスマートカードの実現を行い、2001年の IEEE Micro 誌の論文の他、約20件の特許となった。

さらに越塚登氏は、2002年より、ユビキタスコンピューティングの技術基盤として、Ubiquitous ID アーキテクチャの研究に従事し、産業標準化を担った。運用を行うためのユビキタスIDセンターが2002年に設立されたが、氏の研究成果は学術論文に終わらず標準規格にもなった。その規格に則ったシステムは現在多くの公的機関や産業界で実装され使われている。

また教育実績としては1994年、東京工業大学赴任中は助手として計算機プログラミングの演習を担当し、法政大学第一教養部ではコンピュータリテラシー教育を非常勤講師として担当した。1996年、東京大学大学院人文社会研究科に赴任後は、文科系の学部生・大学院生を対象とした講義を担当した。

2000年より、社団法人トロン協会「教育普及グループ」の主査を務め、産業界の技術者の為の、組込みリアルタイムシステムの教育コースの実践を行い、のべ数百人の人材を輩出した。現在は、大学院学際情報学府総合分析情報学コース教務委員を務め、カリキュラムの策定やその運営に主導的な役割を果たしている。

ICT分野の研究成果が実際に普及するためには、国際標準となることが重要である。越塚登氏は、以前よりIECにおけるヒューマンインタフェースの国際標準化に寄与し、2001年にはIEC TR 61997を成立させた。更に、2005年以降はITUにおいてユビキタス分野の標準化活動を先導し、2008年にはITU勧告F.771、H.621を成立させ、現在も2つのITU勧告のエディタである。2008年より、日中韓三カ国間の国際標準化交流会議の議長も務めている。これらの成果が評価され、2009年5月日本ITU協会賞・国際活動奨励賞が授与された。

以上のように、越塚登氏は、計算機科学の既存の理論的研究を踏まえながら、実践を通じて広く研究を社会に還元させていくタイプの優れた研究者である。それらは文理を融合する新たな計算機科学の展開である。研究領域を拡大し、計算機科学広範に研究成果を援用していこうとする意欲も強く、その能力からみて、当情報学環の研究発展に大いに寄与しうるものと期待できる。

その他、内外の学会、国際機関における精力的活動、東京大学総長補佐、情報学環内での学務への多大な寄与等を総合的に勘案するに、人事選考委員会は、情報学環基幹教授として、越塚登氏を十二分に適任と認めた。

水越伸教授昇任報告（2009年7月10日）

人事選考委員会

石田英敬 教授(委員長)

西垣 通 教授

吉見俊哉 教授

佐倉 統 教授

暦本純一 教授

人事選考委員会は、本人より提出された主要著作3点および研究業績リスト等にもとづき審査をおこなった。

水越伸氏は、昭和61年3月筑波大学第二学群比較文化学類現代思想学コース卒業、同年4月東京大学大学院社会学研究科社会学専攻新聞学専修修士課程入学、昭和63年3月修士課程修了、同4月同大学院博士課程進学、平成元年3月に同課程を中途退学し、東京大学新聞研究所助手に採用され、平成5年4月に東京大学社会情報研究所助教授に昇任、平成12年4月に東京大学大学院情報学環助教授に異動、現在にいたる。

水越氏の研究業績は、おもに、以下の4つに分類することができる。

- 1) 電話・ラジオ・テレビなどのメディアおよび情報技術の歴史社会的研究
- 2) メディア技術と社会との相関的なダイナミズムを、人間や社会の側からとらえていく「ソシオ・メディア論」の提唱

- 3) メディアの思想的・社会的な実証的研究を踏まえたメディア実践を研究しあたらしいあり方を実践的に模索していく「批判的メディア実践」
- 4) 上記3)のメディア実践を市民社会と結びつけていくメディア・リテラシーのネットワーク化の実験と実践

このいずれの研究においても、氏は、新しい情報技術がもたらしているメディア環境の変化に敏感に反応しながら、学術的な理論の世界とメディアの実践的な世界をつなぐ柔軟で鋭利な分析と批評を重ねてきた。とくに氏の主著『デジタル・メディア社会』（岩波書店 1999年、新版 2002年）は、デジタル・メディアの歴史的展望から説き起こし、メディア表現、ジャーナリズム、公共圏、リテラシーに渡る全体的なパースペクティブのうちにデジタル・メディア社会をとらえた優れた研究であり、この分野での基本的なレフェランスとして広く認められている。また『メディアのビオトープ：メディアの生態系をデザインする』（紀伊國屋書店 2005年）は、メディア環境を生態系ととらえ、メディア実践への新しいアプローチを説いて学際的な問題提起を行い多くの研究者の支持を集めてきた。また氏のモバイル・メディアに関する共同研究の成果『コミユナルなケータイ：モバイル・メディア社会を編みかえる』（岩波書店 2007年）は、モバイル・メディアをめぐって理論と実践を結びつけたメディア・リテラシーの指導的アカデミッシェンとしてのめざましい成果をいかんなく示している。これらいずれの観点から見ても、氏が傑出した研究者であることは十二分に証明されていると言える。

水越伸准教授は、また東京大学における教育活動においても、大学院人文科学研究科、大学院学際情報学府、社会情報研究所および情報学環教育部においてメディア論関連科目を担当、また東京大学学部教育においてもメディア論・マスコミュニケーション論を担当し、精力的献身的に教育に従事してきた。そして、すでに多くの若手研究者を輩出させ、教育者としての卓越した力量は明らかである。

さらにまた、東京大学の学内行政においても、企画広報・将来計画、本部における総長補佐など、要職を歴任し、また大学の社会連携にも貢献してきた。

以上、あらゆる観点から見て、氏の研究教育成果は、傑出したものであり、教授に任ずるに誠にふさわしいものと判断できる。

1.5 財務

平成 21 年度予算に基づき、大学院情報学環の財務構造を説明する。なお、対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管理が直接に及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

さて、具体的な数字を見る前に、学環財務の特徴である流動教員に関する資金の取り扱いについて説明する。資金計上の段階では、流動教員に係る資金及び基幹教員に係る資金のいずれの取り扱いに差がない。すなわち、運営費交付金及び外部資金のいずれも、一旦、大学院情報学環の予算として計上される。しかしながら、執行の段階に入ると、流動教員に係る資金は流動元部局に移る。そして、大学院情報学環に残るのは基幹教員に係る資金と社会情報資料センターなどの大学院情報学環固有の事務に関するものだけとなる。このため、教員の研究教育資金に付随する間接経費については、流動教員分は流動元で執行され、大学院情報学環に残り執行されるのは基幹教員分だけとなる。

それでは、数字に基づき、大学院情報学環の財務構造を概観する。平成 21 年度の収入総額は 746 百万円で、比率としては、運営費交付金¹が 3 割強に対して外部資金が 8 割弱を占めている。

次に、運営費交付金の使途内訳を見ると²、表 1.5.1 のとおりとなる。他部局にない特徴としてあげられるのが、流動元部局に移される資金（約 74 百万円）が全体の約 3 割を占めることである。したがって、運営費交付金のうち、大学院情報学環の裁量が及ぶのは、残り約 7 割の約 1 億 5 千万円となる。そして、約 1 億 5 千万円の中の約 5 割（全体の約 3 5 %）が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費という事務管理の経費となる。残りの 5 割（全体の約 3 2 %、約 7 千 4 百万円）が、直接の研究教育活動に充てられることになる。このうち、約 1 千 2 百万円の社会情報資料センター経費と約 1 千万円の図書費は、同センター及び図書室を維持するために必要な資料等の購入に充てられ、固定的経費の性格を帯びている。

経費区分	執行額(単位:千円)	備考
光熱水料	0	*間接経費より支出 (17,297 千円)
通信運搬費	2,540	
建物保守料	0	*間接経費より支出 (2,806 千円)
業務委託料	9,010	*執行実績(9,179 千円)のうち 169 千円は間接経費より支出
非常勤職員人件費(事務)	14,902	*執行実績(20,255 千円)のうち 5,353 千円は本部引上分より支出
非常勤職員人件費(教育教育)	14,736	*執行実績(25,905 千円)のうち 11,169 千円は本部引上分より支出
旅費交通費	1,358	
事務/教育研究一般用経費	36,735	
教員研究費	27,658	
各種委員会等経費	45,858	*委員会内訳
施設整備委員会		0
情報ネットワーク委員会		2,438
業績評価委員会		1,131
企画広報委員会		4,400

¹ 本項では、運営費交付金のうち新規教育研究事業（社会情報研究センター高度アーカイブ化：36,450 千円）については外数として扱っており、収入総額等には含んでいない。

² 本段落では、部局長裁量経費（約 14 百万円）については、外数として扱い、割合の算出の際には分母及び分子のいずれにも含まれない。

図書・出版委員会		9,777
社会情報研究資料センター運営委員会		12,252
国際活動委員会		913
教務委員会		4,272
学生留学生委員会		734
入試実施委員会		3,518
教育部教務委員会		2,368
福武ホール経費		1,729
総合防災情報センター経費		4,055
小計	152,797	
流動教員分	74,407	
総計	227,204	
部局長裁量経費	14,115	

表 1.5.1 平成 21 年度実績（運営費交付金）

外部資金の収入内訳は、表 1.5.2 のとおりである。ここに計上しているのは、外部資金関係間接経費（学環分）を除いては、直接、研究教育に充当される資金の金額となっている。外部資金のうち、大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。なお、外部資金についても、流動教員の外部資金に係る間接経費は流動元の部局に移され、大学院情報学環では計上されない点は同じである。

区分	総額	うち流動元執行分	学環収入分
寄付講座	84,000	0	84,000
寄附金	70,205	5,174	65,031
科学研究費補助金	184,763	115,411	69,352
受託研究費	392,508	188,500	204,008
共同研究費*	80,257	27,557	52,700
間接経費（部局分）	82,913	38,957	43,983
外部資金合計	894,646	375,599	519,047
*:一部に間接経費および実質的な間接経費を含む		(単位：千円)	

表 1.5.2 外部資金の収入内訳

大学運営費交付金が毎年度削減される一方で、学際的な情報学に対する研究及び教育ニーズが引き続き高いことを踏まえると、外部資金の積極的な獲得は極めて重要である。定常的な研究・教育のための資金であっても例外とは言えず、特に新たな資金を必要とする場合には外部資金の確保は不可欠となっている。また、外部資金は基本的に時限的という性格を有していることを踏まえると、現在進行中の研究等のプロジェクトで確実に成果をあげるにとどまらず、時代を先取りした研究及び教育テーマを設定していきえるように、資金的なリソース配分についても常に見直しを行い、フィードフォワード的な対応を取っていくことが課題となる。

1.6 運営

1.6.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会が研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が帰属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に1度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙権は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は2年、その後の、つまり2006年4月からの学環長は3年となっている。再任はない。

学環長が副学環長2名を指名する。学環長が主宰する総務委員会が、教授会と教授会の間で諸案件や方針について協議し、教授会にかける案件の準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、両学圏長、重要委員会の委員長、5コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ月に1度開催される。これが実質的な執行部である。

1.6.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか兼担教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、先端表現情報学コース、総合分析情報学コース、アジア情報社会コースに分かれて入試を行い、合格した学生はそれぞれのコースの所属となるが、それぞれのコースの運営に責任を持つ、コース会議および運営委員会が置かれている。各コース長が責任者を務め、適宜開催される。

1.6.2.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会の主な業務は、他のコース運営委員会と協力しつつ、入試実施委員会の指示下で修士課程入学試験および博士課程入学試験を実施することである。その際、それぞれの入試に

関わる準備も大きな任務の一つである。また、入学試験同様、他のコース運営委員会と協力しながら、教務委員会の指示下で、修士課程学生の「修士論文中間報告会」、博士課程学生の「博士課程コロキウム」の実施に携わっている。2009 年度において社会情報学コースでは、修士課程、博士課程ともに、ほぼ前年度の方式を引き継ぐ形で業務を遂行した。

今後の課題として、(1) とくに修士課程入学試験において、他コースとの共通点、相違点を明確にしつつ、適切な人材を選抜する入試方法のあり方を検討すること、(2) 修士課程在学生在がより深く社会情報学を学習し、質の高い修士論文を執筆できるよう、コースワーク・カリキュラムおよび論文指導を充実させること、(3) 博士課程在学生在が在学期間内に博士論文を執筆できるよう論文執筆指導に関わる授業・演習を充実させ、段階的に無理なく論文提出できる教務スケジュールを構築すること、等が考えられる。

1.6.2.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の先端表現情報学コース、総合分析情報学コースとをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合を進めながら、新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいる。このコースを担当している教員には、基礎情報学、進化学、生態心理学、科学技術コミュニケーション、知覚情報論、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、計量社会分析、脳神経科学、フェミニズムなどの諸領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導、いくつかの教育上のプロジェクトの実施に当たっている。このコースの教育は、①生命・身体・環境、②文化・表象・映像、③メディア表現・学習・リテラシー、④アーカイブ・歴史情報という、理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしつつ、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいる。教員の専門分野、また学生の研究テーマも多岐に渡るため、基礎的な研究方法や学術リテラシーを涵養するために、コースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎(4単位)と文化・人間情報学研究法(2単位)にはさまざまな工夫を凝らしており、上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習、量的・質的研究法の訓練、社会情報学コースとの合同科目などが用意されている。

1.6.2.3 先端表現情報学コース

先端表現情報学コースは、教員26名(学環基幹2名、流動8名、兼担・課程担当15名、兼担・授業担当1名)が担当しており、毎年修士(定員19名)と博士(定員8名)の学生を受け入れて教育している。

コースは、先端表現情報学コース運営委員会(コース会議)のもとに、コース長、教務担当、入試担当がおかれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局(情報理工学系研究科、工学系研究科、総合文化研究科、生産技術研究所、情報基盤センターなど)からの多くの流動教員、兼任教員、さらには授業担当・併任・客員教員の協力によって運営されていることである。これによって、多様な背景と

目的を持つ学生の教育が可能になっている。一方で関係教員の負担が課題となっている。

今後の課題としては、(1)多様な背景を持つ学生を、「学際的に協調できる理数系情報学の専門家」として育成するための、入学試験選抜方法の検討、教育カリキュラムの検討、(2)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、などが挙げられよう。

1.6.2.4 総合分析情報学コース

総合分析情報学コースは、平成 18 年 4 月に設立されたコースである。本コースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの基礎知識を基に、センサーや観測衛星から大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、それを保存・解析したうえで、更に実社会において有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している。分析情報学が有効に適用できる分野は多岐にわたり、農学や水産学、環境学、資源学、社会学、考古学といった学問分野をはじめ、災害支援や遭難救助、社会安全保障、国土や社会基盤の管理保全といった国レベルの施策、更には情報セキュリティポリシーの策定やインターネット等のサイバー空間の管理といった分野へも及ぶ。こうした現実社会に深く関わる技術課題とともにそれを支える社会制度までも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学及び計算機科学の研究者を育成することを目標としている。

1.6.2.5 アジア情報社会コース

アジア情報社会コース International Master's/Doctoral Degree Program: Information, Technology, and Society in Asia (ITASIA) は、大学院情報学環と東洋文化研究所の協力に基づき、2008 年 4 月に発足した、大学院学際情報学府の 5 番目のコースである。留学生、日本人を問わず、アジアや世界の舞台で専門的職業人として活躍することを志す学生を対象に、情報通信技術の発達に大きな影響を受けている現代アジアの社会と国際関係に対する分析力と洞察力を養う大学院教育を目指し、2007 年度から準備が進められてきた。

本コースの特徴は、すべての教育を英語で行い、学生に日本語能力を求めないことである。入学時期は 10 月に一本化し、入学者の選抜も他コースのように筆記試験ではなく、TOEFL・GRE のスコア、推薦書、研究計画書やこれまでの業績などを含む書類選考に基づいて行い、さらに学内外の支援により上位合格者に与える奨学金枠を用意することで、これまで英語圏に進学していたアジアの優秀な学生に対して、日本の東大で学ぶことを現実的な選択肢として提示した。

修士課程は、グローバル化するアジアにおける変容する政治的、経済的、社会的現実を把握できるよう、アジアの歴史と国際関係、メディア研究、社会調査方法論、情報技術という文理にまたがる 4 分野の必修基礎科目を軸に関連科目を提供するとともに、修士論文完成に向けた段階的の行事と個別指導を通じて学生を訓練し、それぞれの専門分野で適切な判断や提言を行える修了生を送り出すことを目指している。

博士課程は、アジア研究および情報学の研究における高水準の研究者・専門家の養成を目的としており、文理にわたる広範な知識とともに、政治学、経済学、メディア研究その他の社会科学における先端的な研究に必要な調査研究法と理論的分析能力を修得する機会を提供する。

発足して2年目に当たる2009年度は、修士課程8名、博士課程3名が10月に入学した。これで修士課程には15名、博士課程には4名の学生が、それぞれ在籍したことになる。修士課程学生については、もう少し多くの合格者を出していたものの、奨学金が供与できなかった学生の中には他大学への進学を選択する者が出た。今後、奨学金の充実が優秀な学生の確保にとって不可欠であることを実感した年でもあった。

2009年10月5日(月)には修士1年生7名が最初の修士構想発表会を実施、二期生も数人傍聴した。こうした作業を通じて、学生たちの論文執筆への取り組みを促進しようとしたことである。

また、2010年2月15日(月)には、修士論文中間発表を実施。10月に博士課程学生が構想発表を行わなかったこともあり、若干不規則ではあるが、他コースでいう博士コロキウムに相当する報告会も同時に実施した。実施に際しては、中間発表実施マニュアルを作成した。

なお、2009年に情報学環が申請した「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム(俗称・大航海プログラム)」が2010年1月末に採択され(プログラム名称「アジア・グローバリゼーション・スタディーズ」)、日本学術振興会からの要請により、急ぎよ2009年度中に学生を海外に派遣せざるをえなくなったため、東洋文化研究所と交換協定を結んだ台湾・中央研究院社会学研究所での合同ワークショップ(2010年2月22・23日)にアジア情報社会コースの修士課程1年生を2名派遣した。

1.6.3 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、情報学環に属している基幹・流動の教員に加え、学内兼担教員、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、平成21年度現在で、基幹教員27(教授13、准教授14)、流動教員23(教授12、准教授11)、兼担・課程担当教員32(教授21、准教授11)、兼担・授業担当教員9(教授8、准教授1)、客員教員4(教授2、准教授2)、非常勤講師14、総計109名となっており、修士課程1学年約100名、博士課程1学年約50名、学府全体で約350人の大学院生を教育するにも十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力をしていただきながら、カリキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、後述するような大学院生たちの教育研究促進のための諸々のプログラムを実施している。

1.6.4 情報学環戦略企画室

情報学環戦略企画室は、2004年度に設置された、大学院情報学環の長期的な戦略を検討する将来計画委員会を発展させ、2009年度から設置された。2009年度は、概算要求案の作成、メディア・コンテンツ総合研究機構の設立等の将来計画の策定を行い、新たに全学的に導入された新RA制度のあり方について、昨年度からの懸案として引き継がれた特任スタッフの組織内での位置づけや助教の業務負担減と関連させながら検討し、RAおよび学術専門員との業務切り分けを明確にした制度を設計した。

1.6.5 入試・カリキュラム制度検討委員会

入試制度、カリキュラム制度にかかわる問題を、学環・学府の組織運営体制の根幹にまで立ち戻って再点検し、必要があれば改善・見直しを提案する検討委員会として 2008 年度に設置された。関連する常設委員会との協議やヒアリング、拡大検討会議をおこない、(1) 組織運営上の一般的問題点、(2) 教育体制上の一般的問題点、(3) 研究体制上の一般的問題点について議論を重ねた。その結果、7月の教授会で「検討の指針」を提示し、9月教授会では「改革の柱」を提示、11月教授会では「改革の提案(その1)」を提示して承認され、12月教授会では「改革の提案(その2)」を提示して承認、さらに翌2009年2月教授会で「改革の提案(その3)」を提示して承認された。3月の教授会で以下の「入試・カリキュラム制度検討委員会」報告が提示され承認された。

「入試・カリキュラム制度検討委員会」報告 2009.3.13 (3.06 総務委員会了承)

委員長 石田英敬

委員 池内克史 澤田康文 石崎雅人 橋元良明 佐倉統 坂村健 田中明彦

事務 学務係

情報学環「入試・カリキュラム制度検討委員会」は、平成20年4月の発足以来、学際情報学府の入試およびカリキュラムの制度について、制度的な問題点を検討し、改善すべき項目を挙げ、改革の方向を提案する作業を行ってきた。

ほぼ一年間にわたる継続的な検討作業と検討委員会でのヒアリング、各種委員会との懇談、教員によるブレインストーミング、総務委員会および教授会での改革の方向の提案と審議をへて成案を得てきたので、その全体を平成20年度最後の定例教授会の機会をとらえて以下に概略を報告する。

I. 検討の指針

「入試・カリキュラム制度検討委員会」は、平成20年度7月の情報学環教授会において承認された以下の指針にもとづき検討作業を行った。

1. 委員会の任務

「入試・カリキュラム制度検討委員会」は、入試制度、カリキュラム制度にかかわる問題を、学環・学府の組織運営体制の根幹にまで立ち戻って再点検し、必要があれば改善・見直しを提案することを目的とし、関連する常設委員会との協議やヒアリング、拡大検討会議をおこなう。

2. 検討作業の経過

定例委員会を月1回2回のペースで開催するとした。

将来計画委員会、教務委員会、入試委員会など常設委員会の関係者との懇談・ヒアリングを実施するとした。事務関係者のヒアリングを実施するとした。さらに教員全員参加による拡大検討会議を実施するとした。

3. 現状認識

委員会は、以下の現状認識のもとに、検討作業を行うこととなった。

2000年に発足した情報学環・学際情報学府では、2004年度の旧社会情報研究所との合併を経て、現在では1専攻5コースとなり、学生数の増加も著しい。新しい大学院組織としての創立以来紆余曲折をへてきたが、組織の発足と整備の立ち上がり期の約10年を終え、次の20年を準備すべき時期に差しかかっている。情報分野における新しい知の創出へ向かうという設立時の清新さを維持し発展させ、成熟と持続可能性の次の10年への布石を考えるとときである。問題点を虚心坦懐に洗い出し、大胆に点検・見直しに着手すべきである。自己点検の眼差しは厳しすぎるほどに厳しくあるべきであり、そこから問題を発見し、制度設計に反映すべきである。

4. 問題点の指摘

委員会は以下の問題点を列挙した上で検討作業を行った。

1. 組織運営上の一般的問題点

(1) 運営の「ロード」の問題

組織整備を短期間に急速に進め組織を拡充した結果、「成功の裏面」として組織運営のロードが過度に増えていないか？とりわけ、いわゆる「若手教員」に過度な負荷がかかっているか？

組織運営のための委員会が重複・錯綜し、余計なロードが発生していないか？

(2) 運営の「合理性」の問題

組織の拡充を、「建て増し」方式で進めた結果、組織の構成ユニットが「分立」し、組織としての「効率性」を阻害していないか？とくに、「コース増設」を名目として組織の改組拡充が行われた結果、「教育運営」上のユニットである「コース」を、学環組織自体の「運営組織」として実体化し、結果として、学環組織の「合理的運営」を阻害していないか？5コース制が一応の「完成」を見たことを踏まえ、各コースにおいて行われている業務を、できるだけ整理統合し合理化することは可能か？

(3) 運営の「分かりやすさ」の問題

「すっきり」とした運営を行えているか？とくに、情報学環・学際情報学府の場合、「学環」と「学府」の区別から成り立ち、基幹講座・流動講座という講座組からなり、二つの「学圏」を歴史的経緯から残し、寄付講座の充実などから特任教員が増大するなど、組織運営上の「分かりにくさ」が増大してきていないか？発足以来の運営実体をいまいちどふり返り問題を整序する必要がないか？

2. 教育体制上の一般的問題点

(1) 学力の問題

急速な組織拡充の結果、入試の応募倍率も鈍化し、学力低下を招いていないか？

(2) コース分属の問題点

学生の育て方が「たこつぼ化」していないか？基礎能力の養成と同時に、「文理融合」や「学際情報学」という理念にどのように近づきえているか？既存の研究科・専攻における人材養成モデルの「縮小再生産」に陥っていないか？

(3) 博士学位授与の問題点

学際情報学府における「博士学位授与」実績は現在までのところ極めて不十分である。この事態をどう評価するか？どこに問題点があるか？

(4) 「動機付け」の問題点

バラエティーに富む教育内容、多様な学術活動が、学生の「好奇心」の拡大に結びつかないのはなぜか？

(5) 「国際化」の問題点

学生の「国際化」、「留学」、「留学生との交流」などは十分に行われているか？

3. 研究体制上の一般的問題点

(1) 「学際研究」「文理融合」の問題点

2000 年度における情報学環設立当初の「理念」の斬新さは維持され、明確な成果を上げてきているか？「理念」の斬新さの維持と新たな展開はどのようにしたら可能か？

(2) 研究協働体制の「新陳代謝」の問題点

各分野における「スタープレイヤー」を集めることで出発した情報学環だが、新しい人材が育ってきているか？

(3) 流動教員・特任教員の位置づけ

流動教員や特任教員を速やかに学環にとけ込ませ、有効な研究シナジーを生み出しているか？流動教員・特任教員にとって研究上十分に魅力ある組織となりえているか？

4. 具体的な検討課題および提案ポイント

以上の一般的な諸問題点の認識を踏まえ、具体的に検討されるべき課題は以下の通りである。

<テーマ1：「分かりやすい」組織と「合理的でシンプルな」運営のために>

以上の問題点を鑑みるに、浮かび上がる課題の第一は、いかに「コース」の壁を低くするか、であろう。そこで、より具体的に、次のような諸点につき論点整理の見通しをもつ必要がある。

(1) 「コース内」的発想をいかに打破するか？

コースとはあくまでも教育プログラムであり、教員の所属組織でも、学環の運営単位でもない。この認識を徹底する。教員は、「学環」に所属し、「学府」に教育を「出前」しているという認識スキームをしっかりと共有する。そのために「コース会議」は「コース担当者会議」とでも改称すべきであろう。

コースの「教育」単位としての特徴化のベクトルは十分に維持したうえで、「教育運営」体制のなにもかもを「コース」を単位として代表制的に積み上げる組織論はとらない。コースの運営に関する「ローカル・ルール」は極力排除する。

(2) 「入試」「教務」業務の合理化は可能か？

歴史的な経緯や個別の事情に拘らず、負荷の大きな通常業務としての入試業務は、共通化可能な部分は可能な限り統合し、合理的な運営をめざすことは可能か。「入試委員会」と「入試実施委員会」のよ

うな委員会の重複は避ける。両委員会は統合し、入試実行のあらゆる権限を集中する。コースに別れた教務の運営体制を改善し、「教務委員会」に権限を集めて「決定権限」をもたせ、合理的な運営をはかる。「入試委員会」および「教務委員会」と「学務」事務との協働による運営を強め、ルーチン化した作業の自動化をさらに促進する。そのためにもコース固有の「ローカル・ルール」は極力排除する。

(3) カリキュラムの合理化は可能か？

基礎能力の養成という目的を維持しつつ、カリキュラムの「大綱化」は可能か？ 限られた教員マンパワーで、5つのコースを合理的に運営していく方法という全体的な視点から、カリキュラムを再検討する。5つのコースは、各コースがすべての単位を独自に構成するのではなく、必ず、一定の比率の科目に関しては、他コースと重複する科目編成をもつようにカリキュラムを編成することとする。

<テーマ 2：教育の「質的向上」と、研究・教育の「成熟」のために>

上記の「合理化」が、院生達の教育の質的低下をまねくことがあってはならない。逆に、「質的向上」を引き起こすことができる合理的改革が求められている。カリキュラムの大綱化と同時に、コース間で「基礎科目」をある程度の比率で共通化し、院生たちがコースにまたがって切磋琢磨する環境をつくるべきではないか。「文理」にまたがる基礎知識を十分に教育できるカリキュラムになっているか？

<テーマ 3：博士号授与数の増大のために>

博士課程在学者それぞれに関して、履修モデルおよび博士号取得にいたる道筋を明示させる。優秀な学生が、実力に応じて先に進める履修モデルを導入する。RA 制度を活用するなどして、優秀な学生にインセンティブを与える。

<テーマ 4：履修形態の多様化の必要>

英語科目の充実・必修化を行い、新設の「アジア情報社会コース」の科目として読み合いなどをおして、院生の国際的教育を促進すべきではないか？ 留学生の受け入れだけでなく、院生の留学は活性化しているか？ 留学しやすく留学が無駄にならずに復学しうる履修の柔軟性が確保されているか？ 分野ごとの明確な経路を設計して、学位取得にいたる道のりをしめす必要があるのではないか？ 例えば「プロジェクト科目」を創設するなどして、特任教員を担当させ、院生の好奇心やモチベーションを育てられないか？（「必修基礎」＋「選択必修」＋「プロジェクト科目」などの新たなカテゴリ化ができないか）。

<テーマ 5：組織の活力の維持と更新のために>

あらたに加わる流動教員、特任教員を、研究・教育に迅速に組み入れ、組織としての活力を維持・更新するためには、どのような工夫が必要か？ 具体策として、例えば、新入学生に対して、「オリエンテーション期間」を設け、学環第1期に実施されていたような「顔見せ講義」を教員全員参加で実施する。これは学生のためだけでなく、教員の相互啓発に格好のイベントとなる。

5. より一般的な検討課題

(1) 学府委員会および教育組織の構成は現状のままでよいのか

兼任教員の増大、教員カテゴリの多様化は、現在の組織運営を「分かりにくく」している最大の原因のひとつである。「学府委員会」は他研究科における「研究科委員会」、「専攻会議」を他研究科における「研究科会議」、「コース担当者会議」を他研究科における「専攻会議」と読み替えるように、制度を再調整すべきではないか。

(2) 総務委員会の構成と性格は現状のままでよいのか

現在の構成はやや「重たく」なりすぎていないか。実施担当の常置・特別委員会との溝ができてきてこないか。「流動」・「基幹」講座など組織の根幹を扱う「幹部会」としての「総務委員会」の性格と、教育・研究の運営の元締め組織としての「総務委員会」の性格とが共存し曖昧であるが、今後そこをどのように定義づけていくかは大問題であろう。

(3) 会議日の固定と会議の定期的開催

教授会開催日である金曜日午後の会議時間帯の日程確保を全教授会メンバーに徹底する。主要な常置委員会の開催週、コース担当者会議の開催日などを固定して、会議開催がスムーズに行われるようにする。(教授会の前の週に「総務委員会」・「(改革後の)学府委員会」、その前の週に「教務」など常置委員会など)。会議開催日の調整自体に無駄なエネルギーが使われないことが重要。

II. 「改革の柱」

7月教授会での「検討の指針」の承認をうけて、9月教授会では以下のような「改革の柱」が提示され承認された。

1. 基本認識

次期中期目標に予想される課題を実行するためには、着実に組織の「教育研究成果」を出すしかつ「明示的に示す」ことができる体制を整える必要がある(博士号授与率の向上、FDなどの活性化、学生に対する教育ケアの質的評価など、とくに教育に関する課題、分野融合や学際性の展開、研究成果の教育へのフィードバック、情報公開など組織としてのアカウンタビリティへの対応など)。そのためには、有限な人的資源を有効に活用すべく、組織運営ロードの削減によってえられたマンパワーを、教育および研究展開のソフト面の充実へとシフトさせ、着実に成果を示すことができる体制を整備する以外にない。組織改革にとって、スケジュール的に急ぐ改革作業から列挙する。

(1) 入試の改革

入試委員会と入試実施委員会との統合。

入試の共通化と入試実施体制の単純化。

GREなど、世界標準の採用。

入試実施時期の再検討、など。

(2) 学府委員会の改革

学府委員会の「委員」規定の規則変更をおこなう（「専攻会議」と「学府委員会」という構成へ）

(3) 人事管理委員会の整備

流動教員および特任教員の人事のための委員会をあらたに設け、人事案件処理の作業を合理化する。

(4) 運営体制とスケジュールの ordering

100 におよぶ組織運営のための「委員会」を「系統化」し、教授会開催日を基本にして、会議日を規則づける(ordering)するなどして、合理的な運営をはかる。

(5) 教務の改革

カリキュラムをコース間で部分的に「共通化」「大綱化」「モデル化」する。（「必修科目」「選択必修科目」以外に「プロジェクト科目」など新カテゴリを導入する。コース横断型の「プログラム」などの導入による「分野横断」性の確立と「履修モデル」の明示化、など。）

(6) 博士課程教育の改革

博士号授与率の向上をはかるために、博士課程院生ひとりひとりについて、博士号取得にいたる「メニュー」を作成し、優秀な者には新 RA 制度を活用するなどして研究を支援する。

(7) FD および組織内分野交流の活性化

運営ロードを下げることにより、教育と研究の平面で、教員同士、学生・教員同士が、「交流」できる体制をめざす。「運営」の作業を通じた「交流」というモデルを、「教育・研究」の作業をとおした「交流」へと変容させる道をひらく。

(8) 情報公開への対応

上記 1 とも関わるが、迅速に対応できる体制を用意しておく。

III. 「改革の提案」（その 1）学府委員会および人事管理委員会

9 月の教授会で了承を得た「改革の柱」（2008.09.19 文書）および 10 月総務委員会（10 月 10 日）を踏まえ、次の制度改革「改革の提案」（その 1）が 10 月教授会で提案され承認された。

1. 「学際情報学府委員会」の改革に関して

学府委員会の構成を、以下の「規則」改正および「内規」改正によって、変更する。

<現行>

学環・学府組織運営規則第 6 条（学府委員会）

- 3 学府委員会は、学府の課程担当教員により構成する。
- 4 学府委員会の組織運営その他必要な事項については、別に定める。
- 5 第 1 項に定める学府委員会の・・・略・・・することができる。

<改正案>

学環・学府組織運営規則第6条（学府委員会）

- 3 学府委員会の組織運営その他必要な事項については、別に定める。
- 4 第1項に定める学府委員会の・・・略・・・することができる。

<内規案>

大学院学際情報学府委員会組織運営内規（仮称）

第4条 学府委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学府長
 - (2) 情報学環・学際情報学府に所属する課程担当教員（常勤の特任教員を含む。次号において同じ。）
 - (3) 学際情報学府に所属する課程担当教員（前号の者を除く。）（「若干名」or「のうち学府長が指名する者若干名」）
 - (4) その他学府長が必要と認めた者
- 2 前項第3号及び第4号の委員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 3 補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

この改正にともなって、別途「専攻会議」、「専攻長」について議論されねばならない。

2 「人事管理委員会」の整備

人事管理委員会に、担当副学環長を長とする、流動教員および特任教員の人事選考のための「流動教員人事選考委員会」、「特任教員人事選考委員会」を設ける。

上記の人事委員会は、学環長の委嘱を受けて人事選考を行い、総務委員会および教授会に対して人事の提案を行う。

IV 「改革の提案」（その2）入試実施体制の改革

平成20年11月の教授会において、以下の「改革の提案」（その2）が提案され承認された。

入試の確実な実施と作業の合理化のために、入試実施体制の「共通フォーマット化」、「合理的分担化」、「決定と実行の一元化」を促進する。さらに、「入試時期」、「外国人受験者」、「社会人特別選抜」、「教員と事務との連携」の諸点に関して引き続き検討する。

A 「共通フォーマット化」：作問、実施要領の作成、面接、採点のそれぞれの作業においてコース間で共通化しうる部分の最大限の共通フォーマット化を行う（例えば、作問、採点における、社情と文人の乗り入れ、理数と分析の乗り入れなどの可能性、設問形式の標準化の可能性などを検討し実行可能なものは、全体の合理化を極力推し進める。入試実施要領に記載するルールを厳選し極力統一する）。

B 「合理的分担化」：全体の作業の共通フォーマット化を行ったうえで、各コース単位で面接、採点教員を絞りこむなどして、最小限の教員ユニットで迅速かつ的確な判断を下しうよう入試実施体制の「合理的分担化」を行う。

C 「決定と実行の一元化」：全学規則等に定められた監督責任体制を確実に担保したうえで、入試実施委員会と入試委員会の意思決定プロセスを統合し、入試実施委員会の決定がスムーズに実行に移されるように一元化する。

D 「入試時期」、「外国人受験者」、「社会人特別選抜」、「教員と事務との連携」の諸点に関して引き続き検討する。

以上の方針が承認された段階で、入試カリ制度検討委員長は、入試実施関係者による実施案作成WGを立ち上げ具体案づくりに着手することとし、入試実施委員会より以下の提案がなされ、平成21年2月教授会において方針が了承された。

付録：入試実施体制の改革の具体化：

2008年11月28日教授会提案、「改革の提案（その2）」が承認されたことを受けて、その中に挙げられた諸点につき、以下のような方向で、改革の具体化の作業をすすめていく予定である。

A 「共通フォーマット化」：

【入試説明会は、毎年日程を固定する（6月第3土曜日？）】

【共通の問題を利用する場合、採点は、各コースで行う（問題を作成したコースに依頼しない）。採点に当たっては、出題者が示した基準に沿って行うこと。】

【（継続審議）副問題の活用方法を検討する。】

【（継続審議）外部試験の利用の可能性を検討する（導入については、コースごとに判断を行う）。】

B 「合理的分担化」：

【陪席制度は廃止する（廃止による得失は、夏入試終了後、学環長・専攻長・入試実施委員長が検証する）。】

【入試関連行事へ教員が欠席した場合の対応は、入試実施委員会に一任する。】

【（継続審議？）特別な事情がない限り、学際情報学府外の教員に審査を依頼しない（依頼する場合は、依頼した教員が責任をもって、試問の方法の説明、スケジュールの調整を行うこと）。】

【入試関連行事は、特別な事情がない限り、平日に行うことにする。】

【入試業務を補助する非常勤職員を採用する。】

C 「決定と実行の一元化」：入試実施担当者との協議をおこない、次期学環長が来年度からの委員会の構成に反映させる。

D 「入試時期」：

【(継続審議(10年度夏に判断)) 修論審査と博士入試の分離について検討する(内部生、外部生が条件に差がでないことを配慮する)。】

【(継続審議(10年度夏に判断)) 英語試験と筆記試験を同一日に実施することを検討する。】

【(継続審議) コースの状況に応じて、入試の回数、時期を選択する可能性を検討する(10月入学も視野に入れる)。】

・「教員と事務との連携」

【B項にともない採用した入試業務補助非常勤職員を介して改善を図る。】

V 「改革の提案」(その3) カリキュラムの改革

「改革の提案」(その3)が平成21年2月の教授会において承認された。

A. コースによる「専担/兼担」の廃止：教員は「コース」に所属しているわけではなく、「コース」は学生の「教育コース」であるという認識を徹底する。

1 「授業科目」に関して、ひとりの教員の担当科目が複数のコースにまたがる開講科目として設置されうること(いわゆる「科目の読み合い」の関係をつくりうること)を原則とする。ただし、コースの担当科目に関してはコース会議が決定する。

2 「研究指導」に関して、合理的な理由があれば、ひとりの教官に関して複数のコースの院生の指導(現状の「コース間兼担」)が可能であること。ただし、コースの学生に対する研究指導が可能かどうかはコース会議が決定する。また、一人の教員の指導可能数については、基幹・流動等の教員の条件に応じて上限を設定するという原則は変わらない。

B. コース科目の体系性を十分に確保したうえで、コース間で重複する科目の整理統合と共通化を進める。コースの教務担当者間で協議して実現可能なものから実施する。

C. それぞれのコースから読み込める「横断プログラム」科目設置の可能性を検討する。設置のイニシアティブがあるようなので、構想案を出してもらって検討を開始する。

D. 「履修モデル」を明示し、一人一人の学生の「履修メニュー」を明確化して管理する。博士号授与率の向上という課題(別項)、「休学者」の問題、「新 RA 制度」の運用とも連動するので、教務委員会を中心として具体案づくりをおこなう。

E. 「英語科目」の必修単位化を検討する。当面、博士課程において2コマ程度の英語必修クラスを実施する方向で検討する。「アジア情報社会コース」の担当教員にその可能性について基礎検討作業を依頼する。

F. 「選択必修科目」「選択科目」以外に「プロジェクト科目」(仮称)を設置して、特任教員の教育参加への道を開く。具体的イニシアティブを募る。

G. 「学際入門科目」の再配置を検討する。4月の「ガイダンス週間講義」を来学年度から実施する。通年の「学際情報学概論」については、ガイダンス講義によって代替する方向で検討する。

H. 学期中間発表および学位論文審査のあり方を検討する。現在の学期ごとの学生の間発表やコロキアムのあり方、修士論文・博士論文審査の公開可能性などを検討する。

別項 博士課程教育の改革

「博士課程教育の改革」は特に喫緊に取り組むべき課題であることから、カリキュラム改革の検討においても別項として独立されて検討を行う。

博士号授与率の向上をはかるために、博士課程院生ひとりひとりについて、博士号取得にいたる「研究メニュー」を作成し、優秀な者には新 RA 制度を活用するなどして研究を支援する。

1.6.6 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積が確保されていないという認識のもと、なんとか教育研究に必要な施設を確保することにある。これまで、護国寺にある東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルーム、第二本部棟の3階のフロアの一部を確保した上に、更に、平成20年3月には、以前より建設を進めていた福武ホールが竣工し、これらのスペースを有効に使って研究教育が実施できるようになった。しかしながらこれでもまだ、情報学環所属教員と学際情報学府の所属院生に十分な基準面積を準備できておらず、また確保されたスペースは小刻みに様々な場所に分散しており、教育・研究の活動に支障をきたしている。したがって、施設整備委員会としては、今後も教育・研究に必要な施設を確保できるように、引き続き努力する。

1.6.7 福武ホール管理運営委員会

福武ホール運営委員会の最大のミッションは、2008年3月に竣工した情報学環・福武ホールを有効活用し、教育研究活動を支援することである。2009年度、当該ホール地下2Fのラーニングシアターとラーニングスタジオを利用して開催されたシンポジウムやワークショップは計89件であり、情報学環内部のみならず外部に対しても、開かれた学びの施設となっている。特にラーニングスタジオ、1F会議室、1F学環 commons は、情報学環教員・学生に対して、授業、ミーティング、授業外学習の場として活用されている。また、当該ホール1Fに併設されている UT Cafe においては、様々な領域で活躍

している本学の教員をゲストとして招き、毎月開催するイベントである「UTalk (ユートーク)」を継続的に実施してきた。毎回の定員は 15 名であるが、情報学環の教員・学生のみならず、他大学の教員や学生、企業人など多様な参加者が多数集まり、定刻を過ぎても議論が続く盛況ぶりを見せている。情報学環・福武ホールが今後も学内外に開かれた学習空間となるよう、引き続き努力する。

表 2009 年度 UTalk 実施テーマ一覧

実施月	タイトル	ゲスト所属	ゲスト氏名
2009・4	編み物のための読み書き-ボリビアの開発問題への取り組み-	人文社会系研究科	中村雄祐
5	私たちは「手」で何ができればよいのか?-環境に適応する義手の開発に向けて-	工学系研究科	横井浩史
6	メディアが大学を開く-IT を活用した社会とのつながりのデザイン-	大学総合教育研究センター	重田勝介
7	似てる? 違う? 建築のデザインと都市のデザイン	柏の葉アーバンデザインセンターディレクター	丹羽由佳理
8	童話作家を夢見た少女が『Newton』に出会った時	理学系研究科	横山広美
9	夢のエネルギーに託す夢:「核融合」の技術と社会	工学系研究科	小田卓司
10	正しく使って上手に育てる-お薬の情報学-	情報学環・薬学系研究科	堀里子
11	中世人の肉声をきく: 日常の手紙や文書を手がかりに	史料編纂所	本郷恵子
12	大学ってなに?: メディア学者が考える知識の未来	情報学環	吉見俊哉
2010・1	世論調査から見えるもの: 「政権交代」を読み解く	情報学環・社会科学研究所	前田幸男
2	バイオインフォマティクスって何?: 生命とコンピュータの出会い	新領域創成科学研究科	岩崎渉
3	動物の死体と語る	総合研究博物館	遠藤秀紀

1.6.8 情報セキュリティ委員会

2006 年 3 月に東京大学情報セキュリティ委員会が、東京大学保有情報資産のセキュリティを確保することを目的として「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの基本方針」とともに定めた「東京大学情報

セキュリティ・ポリシーの対策基準」は、部局情報セキュリティ責任者（部局長もしくは部局長を補佐する役職に相当する職務の者）を委員長とする部局情報セキュリティ委員会の設置を求めていた。これらの全学方針に基づいて 2006 年 9 月に各部局に依頼のあった情報セキュリティ調査への対応を機に、吉見学環長を部局情報セキュリティ責任者・委員長として情報学環情報セキュリティ委員会が組織され、10 月から事実上活動を開始して部局調査のとりまとめを行うとともに、11 月の教授会で承認され正式に発足した。

2007 年 12 月 20 日の部局への説明会とその後の意見聴取を経て、2008 年 4 月 9 日、全学の最高情報セキュリティ責任者（CISO）名で、「東京大学情報セキュリティ・ポリシー実施手順の作成について（依頼）」が発出され、情報学環情報セキュリティ委員会は、情報学環情報ネットワーク委員長でもある原田委員を実務担当として、要請された部局規則等を整備する作業に当たることとなった。ただ、ここで提示された雛型には、部局の観点から見ると、2008 年 1 月 18 日に提出した部局意見でも指摘した必ずしも実効性につながらない過度の厳格さや形式主義に加え、業務実態との不整合や手順の実施に必要な設備整備等に伴う部局の財政負担など、適用に当たって検討を要する点が多数含まれており、部局において実効性と意義のある体制を構築する作業は難航した。部局内および全学側との様々な調整を経て、年度末までに関連内規等の修正・制定を終えることができたが、その過程で全学枠組みの変更が望ましいと思われる点も具体的に明らかになっており、部局における体制の運用と並行して全学体制の見直しを働きかけることも今後取り組むべき課題として認識された。

1.6.9 情報ネットワーク委員会

2000 年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内 LAN、学内 LAN である UTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWW サーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002 年 6 月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が設置された。さらに、2004 年 4 月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに本委員会が設置された。本委員会は、2002 年 11 月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査等や、学生・留学生委員会その他が管理する個別端末、さらに 2006 年に設置された情報セキュリティ委員会の担当範囲等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を、関係委員会等と協力しつつ、全般的に担当してきた。

具体的には、2005 年度以降、情報ネットワーク運営管理体制の明確化・強化、基幹ネットワークの更新・整備、サーバ室の環境改善、基幹サーバの更新、諸規則の整備、iii-PKI(Public Key Infrastructure)に基づく安全な通信・情報共有のための基盤形成および VPN・会議資料オンライン閲覧システムの構築・運用などを順次進めてきた。

2009年度は、従来からの日常業務に加えて、全学および部局における情報セキュリティ確保のための取り組み強化に対応することが大きな課題となった。前年度に情報セキュリティ委員会主導で成立した情報セキュリティ・ポリシーの実施手順に相当する諸内規等を受け、新たな情報安全区域の要件を満たす基幹サーバ室の整備を進める一方、日常業務の諸局面で情報セキュリティをより一層考慮した運用を進めた。ただ、そのような観点の重要性が関係者に十分浸透しているとは言えず、諸施策の実施に困難を伴う局面もあり、今後の推進体制の課題も浮上した1年であった。

1.6.10 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学の情報倫理委員会が定める情報倫理規則にもとづき、主査と委員3名において、情報倫理の遵守のための審査をおこなっている。2003年度の新情報学環の発足以来、構成員への連絡通知のためのMLをつうじてネットワーク利用者への注意喚起などをおこなってきた。2008度は幸い情報倫理案件はなく、通常通り情報学環・学祭情報学府構成員へのMLをつうじた注意喚起をおこなうにとどまった。

1.6.11 業績評価委員会

業績評価委員会は、情報学環・学府の研究・教育活動に対して行われる、学内外の様々な評価に関連する業務を遂行することが任務である。

1.6.12 企画広報委員会

本委員会は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（大学院入試説明会、シンポジウム、ワークショップ、教員研修会など）を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うために設置されている。さらに、よりインフォーマルな連携や情報共有のためのサポート、教員・学生の萌芽的な活動を支援することも進みはじめている。またそうした企画の実施に伴い、学環・学府内の多くのメーリングリストへの配信管理や、福武ホールや工学部2号館9階などの施設の利用管理なども行う。

1.6.13 図書出版委員会

2007年度から図書委員会と出版編集委員会が統合されて、図書出版委員会となった。

1. 図書室関係

情報学環図書室は、新聞研究所、社会情報研究所以来のマス・メディア、ジャーナリズム研究の資料に加えて、2004年度の情報学環との統合以降は、文系・理系を問わず、情報の学際的な研究に関する資料を幅広く収集し、利用に供している。

2009年度は前年度作成した図書購入方針案にもとづいて、①見計らいによる推薦、②基幹教員による推薦、③授業用図書の推薦、の3方式で図書を購入した。見計らい図書選定については、選定リストの改善によって選定参加教員が文系・理系双方で大幅に増えて、各分野の基本図書が選定されるなど機能し始めている。新たな予算措置に基づく大型資料費については、基幹教員の推薦によって主に複製版の資料集等の高額資料を購入した。

そのほか、ITアジアコースの教科書・参考書類の整備を行った。

表 1：2009 年度図書受入冊数

	購入	寄贈	計
和書	226	141	367
洋書	338	58	396
計	564	199	763

表 2：貸出冊数の年度推移

年度	2007	2008	2009
図書	5,332	5,601	5,765
雑誌	448	712	747
計	5,780	6,313	6,512

2. 出版関係

(4. 5 出版活動を参照されたい)

1.6.14 国際活動委員会

情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可することが委員会の役目である。最近の受け入れ総数を見ると、平成 17 年度 13 名、平成 18 年度 15 名、平成 19 年度 15 名、平成 20 年度 14 名、平成 21 年度 27 名で、21 年には大幅に増加した。情報学環の多様な研究背景を生かし、今後ともさまざまな教員を受け入れていくことがこれからの課題であろう。

1.6.15 産学連携委員会

産学連携委員会は、情報学環・学際情報学府における研究・教育活動を、産業界との連携を通して社会還元をすることを目的として設置されている。2009 年度の産学連携委員会の活動は、職務発明特許やそれに類する著作権等の知財に関する規定の策定に関して、東京大学産学連携委員会を通して参加をしている。また、東京大学産学連携協議会に参加し産業界との交流も行っている。学環・学府において、寄付講座・社会連携講座・受託研究などを通じて産業界と連携するケースが増加しているが、そのために必要な内部の制度づくりや、連携する上で生じた様々な課題に対応していきたい。

1.6.16 ヒトを対象とした実験および調査研究に関する倫理審査委員会

ヒトを対象とした実験および調査研究に関する倫理審査委員会では、情報学環の教員や学生がこれらの実験・調査をおこなう際に、事前に倫理審査をおこなうものであり、平成 21 年度に設置された。情報学環は教員・学生とも研究領域が多様であるため、どのような倫理審査が適しているのか、まだ手探りの段階であるが、学祭組織での研究倫理のあり方を確立することを目標に活動している。平成 21 年度は 3 件の審査をおこなった。

1.6.17 知的財産室

知的財産室では、情報学環・学際情報学府の教職員が発明したり、著作物を作成した際に、届け出をもらうところである。ここで、それらの発明や著作物が、職務上のものであるか、そうでないかを、届け出の内容から判断する。

1.6.18 利益相反アドバイザー

現在、東京大学の教職員は、東京大学が定める規定の範囲内で、様々な立場を学外において持つことが可能である。例えば、学会の役員や政府委員、他大学の非常勤講師、産学連携のための民間企業の兼

職などがある。こうした立場に立って、様々な活動を行うと、東京大学の構成員としての利害と、学外の立場における利害がぶつかる場合がある。そのようなケースを利益相反と呼ぶが、利益相反アドバイザーは、情報学環内において、利益相反が心配されるときに相談を受け、本部事務とも連絡を取りながら、利益相反に関する対応をアドバイスする役割を担っている。今後、産学連携が進む上で、起こることが予想される利益相反の問題に対して適切に対応していきたい。

1.6.19 ハラスメント予防担当者

ハラスメント相談員は、アカデミック・ハラスメントあるいはセクシャル・ハラスメントなどの問題に対応するために設置され、引き続き活動を行っている。ハラスメントに関するパンフレット等を配布し、ハラスメント予防について教員および学生への周知を行っている。また、ハラスメントに関する相談に対して、ハラスメント相談所や男女共同参画室と連携を取り合いながら、具体的な相談を受けた場合の対応体制の整備を順次行っている。

1.6.20 社会情報研究資料センター

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整理し、それらの資料を学内外の研究者に提供することを目的としている。現在、本センターの所蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。

本センターの沿革は、1964 年に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が 1967 年、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992 年 4 月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称された。その後、2004 年 4 月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合にともなって、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあたっており、2007 年度からは新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」を推進している。

なお、本センターの現在の年間利用者数は 2,000 人を越えており、2009 度における月別利用者数は、下記の通りである。

表 1-6-20 社会情報研究資料センター月別利用者数 (2009 年度)

開室日数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学内	85	92	135	124	173	163	263	223	199	210	173	191	2,031
学外	35	55	96	146	43	62	101	95	85	62	37	67	884
不明	0	3	0	1	0	1	0	1	1	3	0	0	10
合計	120	150	231	271	216	226	364	319	285	275	210	258	2,925

1.6.20.1 情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構

情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構は、2009年9月、情報学環におけるメディア・コンテンツ分野の研究開発や教育推進、産・官・学の連携の発展、国際的な人材養成の展開のために設置されたネットワーク型の機構である。組織としては、情報学環附属研究施設の社会情報研究資料センターの下に置かれている。

情報学環は、「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」（2004年度～2008年度）や「コンテンツ創造教育研究コア」（2005年度～2009年度）をはじめとして、メディア・コンテンツ分野での研究教育に取り組んできた。本機構は、それらのメディア・コンテンツ研究をアカデミックに発展・深化させ、教育を根付かせ、国際的な研究協働と人材育成を支援するための体制の確立を目指している。産・官・学を結ぶ「知のトライアングル」の構造化、研究・教育・国際連携のための戦略的組織である。

本機構は、研究教育の軸として、デジタル・テクノロジーを共通の基盤に、1) クリエーション、2) プロデュース、3) アーカイブ、4) アナリシス、5) リテラシーの5つの柱を立て、それを円環のプロセスで連結し組織化することをめざしている。

1.6.21 総合防災情報研究センター

総合防災情報研究センターは、2008年4月1日に、情報を核に災害の被害軽減を目指す文理融合型の研究センターとして設立された。分野を超えた社会情報学、地震火山学、防災工学の協働により、防災情報研究における新しい地平を切り開くとともに、東京大学の理学、工学、社会学、法学、経済学、医学など様々な分野の防災関係研究者をネットワークし、行政、マスコミ、企業、NPOとも連携することにより、防災に関する知の結節点として機能する新しいタイプの研究機関を目指している。

情報学環附属のセンターであるが、地震研究所、生産技術研究所と連携して運営されており、本センター運営委員会も3部局長および各部局から選出された委員各1名の合計6名から構成される。平成20年度は2回の運営委員会を開催しており、第1回は平成20年5月12日（月）に開催し、6月2日に開催された開設記念式典の進行の確認、外部資金獲得状況ならびに人事案件1件を審議、了承した。

第2回運営委員会は、平成21年3月17日に開催し、平成20年度の活動報告を受け、平成21年度の事業計画について審議、了承した。下表に示した記念式典出席者の期待等も踏まえ、学内防災への貢献、共同研究の推進や国際的な展開、センターの人員の整備などセンター運営に関する基本方向について議論した。

今後の総合防災情報研究センターの活動に期待すること（複数回答）

	人数（人）	全体（％）
1) 理学、工学、社会学、医学、経済学など多様な研究領域との連携	40	60.6
2) マスコミ、民間企業、NPO など社会との連携	38	57.6
3) 災害情報の利用についての情報発信	41	62.1
4) 防災制度についての情報発信	21	31.8
5) その他（以下にお書き下さい）	6	9.1

1.6.22 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」(平成16～20年度)の研究成果を引き継ぎ、総合分析情報学コースの教育と連携して、ユビキタスコンピューティング、ネットワーキングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うことを目的として、平成21年4月1日に設立された。現在7名の東京大学情報学環の教員がユビキタス情報社会基盤研究センターの教員を兼務している。

1.6.23 駒場カリキュラム連携運営委員会

駒場カリキュラム連携運営委員会は、総合文化研究科・教養学部における、大学学部前期、学部後期の教育と情報学環・学際情報学府の教育に関する連携を協議し、連携に関わる授業科目を円滑に運営する目的で平成20年度から設置された。平成21年度は、教養学部前期課程で情報学環教員が担当する科目に関する調整のために定例委員会が開催された。

1.6.24 学生・留学生委員会

学生・留学生委員会では、大学院生全般を対象としたサービスに関して、学際情報学府に在籍する大学院生(留学生を含む)の福利厚生に関する以下の業務を担当してきた。

- (1) 大学院生の勉強・研究用スペースの整備、維持
- (2) 大学院生用備品の購入、管理
- (3) 大学院生と教職員スタッフとのコミュニケーションの維持
- (4) 大学院生向け情報の提供
- (5) 大学院生奨学金および研究支援経費関係

これらのうち、(1)については、本郷キャンパス情報学環本部棟4階に加えて、工学部2号館9階に大学院生室を設け、共用の机を配置して提供している。また福武ホール学環コモンズにおいて勉強する環境を用意している。

(2)については適宜学生の希望を募り、必要と認められた場合には、共通予算で備品購入をおこなっている。特に今年度は、工学部2号館9階の備品を整備した。

(3)については、年に2～3回、院生向けの連絡会を開催し、情報の相互流通をはかるとともに、年度はじめの新生歓迎会、留学生懇親会、留学生旅行、年度末の謝恩会を開催している(新生歓迎会は在校生が、謝恩会は当該年度の修了生が企画実施)。

(4)については、教務関係の情報は上記(3)のルートのほか、適宜掲示板、学務係メールニュースでの情報配信をおこなっている。また、大学院生向けの奨学金・就職・住宅などの情報を、学務係横のスペースで閲覧できるようにしている。

(5)については、各種奨学金の付与に関して希望者を募り、適宜順位付けをして申請している。

留学生を対象としたサービスの現状に関しては、2008年度に留学生専用の窓口となる留学生支援室が設置され、2名の選任の学務担当者が配置された。この支援室を通じて積極的な留学生支援が可能となっている。さらに学生・留学生委員会と留学生の対話も「学環・学府」の企画として行われ、より具体

的な要望の把握を行うことができた。IT-ASIA コースの新設に伴い留学生が増加しており、今後も支援の強化を行う予定としている。

次に課題についてであるが、大学院生全般を対象としたサービスに関しては、学際情報学府全体としてスペースはかなり充足したものの、そのスペースが全学に点在しており、大学院生と教員・スタッフおよび大学院生間のコミュニケーションのさらなる充実が望まれる。

留学生を対象としたサービスも留学生支援室の稼働によりかなり改善はされたが、留学生が飛躍的に増加しており、きめ細やかな留学生の要望の把握と必要な対策を迅速に実施することが求められている。このためには学生・留学生委員会自体の強化も検討されるべきであろう。

1.6.25 教育部委員会

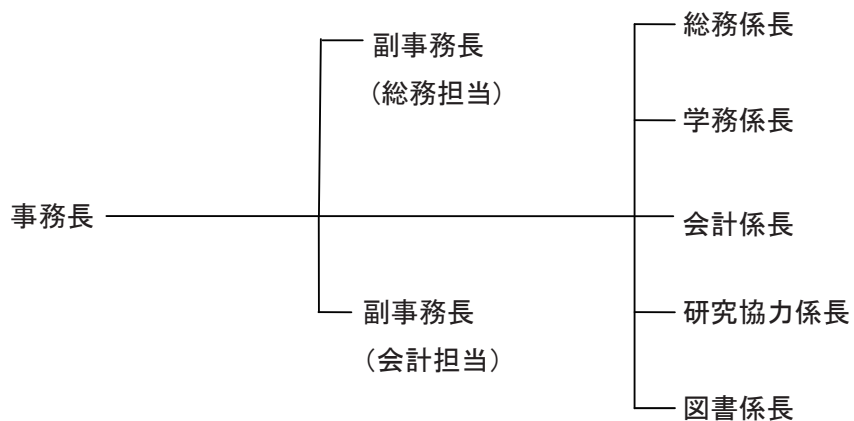
情報学環教育部は、情報やメディアやコミュニケーションについて学びたい人々のために、あるいは新聞や放送や出版などのジャーナリズムの諸分野で活動することを志す人々のために、情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。修業年限 2 年。大学 2 年生以上であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験することができる。1949 年（昭和 24 年）に新聞研究所教育部として設置され、2004 年度（平成 16 年度）には社会情報研究所（元新聞研究所）との組織統合によって情報学環に引き継がれ、60 年を越える歴史を有している。

2006 年度（平成 18 年度）には組織統合に対応した大幅なカリキュラムの拡充・改訂を実施した。その後、2007 年度から 08 年度にかけて、研究生へのアンケート調査、年に数回の教育部懇談会でのディスカッションなどで得られた知見をもとにして、基本的な理念からカリキュラム（時間割の変更、大学院との合併授業の導入など）、メディア編集室の設置、入学試験改革など、本格的な改革プランの策定に取り組んだ。

その成果もあり、研究生たちは「ジャーナリズム、マスメディアをめぐる実践知」「情報コミュニケーション（ICT）技術、産業をめぐる実践知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる文系知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる理系知」をめぐる、きわめてユニークな教育を受けつつ、大変活発に、自主的な学習活動を展開している。

1.7 事務組織

図 1-7-1 事務部組織図(平成 21 年 4 月 1 日現在)



事務長	副事務長	係長	主任	係員	計
1	2	5	2	4	14

2 教育活動

2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生というところに目標を据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたって、3コース制が導入された。これは、修士課程学生定員70名という規模に適合するためと、ディシプリン基礎をもった学際性への教育効果のためと、2つの理由から導入された構成であった。現在は、2006年4月に総合分析情報学コース、2008年4月（学生受入れは同年10月）にアジア情報社会コースが設立され、5コース（修士課程学生定員100名）となっている。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学力の品質管理をするためにコースごとの修了試験を行う。しかし、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられているし、また入学後の学生はミニマムな選択必修科目のほかは全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組み上げることが可能となっている。

コースはあくまで学府学生が帰属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに決して教員が帰属しているわけではない。教員はあくまで学環に帰属しているのであって、コースとの関わりはどのコースの学生を主として指導するかという点である。コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを構築しつつ、同時に学際性へと越境していくための、バランスのよい舞台を提供しようとしているのである。

2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1) コース共通必修科目、(2) コース別選択必修科目、(3) コース共通選択科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学の様々なアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、情報学環のほぼすべての基幹・流動教員が関与し、学生はe-learningシステムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年ではWeb発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では修士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野の基礎的方法論についてのトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示されるカリキュラム編成になっている。

第3の共通選択科目群は、学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院のゼミ科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、数理言語、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、ネットワーク経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報造形、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラム編成においては、①情報・言語・行動系科目、②社会・制度系科目、③メディア・文化系科目、④表現・リテラシー系科目、⑤数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。

2.3 カリキュラム支援体制

大学院学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、これまでもそれぞれの院生の視野を広くし、より柔軟な学問的展開を可能にする点で、有益な効果を挙げてきた。

2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、自分の研究計画書を作成して学府に提出する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、おおよその研究視角を示す概要的なものであり、提出された計画書は、修士1年生全員がお互いの研究テーマについての

認識を共有するための冊子にまとめられる。博士 2 年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一歩となる。

2.3.3 ウェブ発表

ウェブ発表は、学際情報学府修士 1 年生が、その年度の末から翌年度初めにかけて、それまでの約 1 年間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約 1 年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表するものである。この発表は、学際情報学府に所属する教員と学生に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をウェブページにまとめて学府サーバに掲載するオンライン発表会と、それを踏まえてポスター発表形式で行うオフライン発表会から成る。

オンライン発表会は年度末から約 2 週間続くが、発表者は 1 週間の間に自分以外の発表を閲覧し、アイデアの面白さ・斬新さ、進捗度合い、プレゼンテーションの良さ等の観点から良いと思うものに投票する相互評価を行い、各項目の上位の発表は公表される。

オフライン発表会は新年度に入ってから 1 日を数セッションに分けて行われ、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り 1 年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新入生もオンライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスについて具体的なイメージをつかむことができる。

2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士 2 年の学生が修士論文執筆に本格的に取り組む 7 月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出するすべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90 名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができるので、修士 1 年の院生たちにとっては、先輩たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年 11 月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程 3 年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての研究の進捗状況を発表しなければならない。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90 名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織する。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.6 E-learning 授業 (iii online)

2.3.6.1 iii online の目標

iii online は 2002 年 4 月に始まった学際情報学府の e ラーニングサイトである。iii online は、学部・研究科レベルでは東京大学初の e ラーニングサービスである。

e ラーニングを開始した最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003 年度までは、実践情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の 2 割程度が社会人という状況であった。学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマースの撮影などで 1 ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2 回、3 回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持つことは、非現実的であった。

2.3.6.2 iii online の概要



図 2-3-1 : iii online の画面

iii online はこのような問題を解決するために、ビデオのストリーミングと掲示板を組み合わせたサービスを提供している。ビデオのアイコンを押すと、およそ 15 分×6 つにカットされた授業の映像を見ることができる。ストリーミングは FlashVideo 形式 500kbps エンコーディングで行っている。FlashVideo 形式を選んだのは、利用者として Windows ユーザー、Mac ユーザー、Linux ユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15 分にカットしたのは、90 分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝 30 分、会社の休憩時間に 30 分、夜帰ってから 30 分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHP を使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、e ラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的に e ラーニングを展開する場合には、「e ラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることができる。資料はすべて PDF ファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、この PDF ファイルを印刷し、それをノートとして使いながら授業を聞いている。

表 2-3-1 : iii online で閲覧可能な授業の一覧

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井潤一
	コミュニケーション・システム	原島博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
	学際情報学概論	オムニバス
2003	情報リテラシー論	山内祐平
	情報記号論	石田英敬
	情報進化論	佐倉統
	シミュレーション・システム	荒川忠一
2004	学際情報学概論	オムニバス
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平
	医療福祉情報学	山本隆一
	社会情報システム	松浦幹太

2005	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 II	田中秀幸
	学際理数情報学概論 VI	鈴木高宏
2006	学際情報学概論	オムニバス
	身体行動情報論	深代千之
	能動情報論	奈良高明
2007	学際情報学概論	オムニバス
	学習環境デザイン論	山内祐平
	歴史情報論	本郷和人
2008	学際情報学概論	オムニバス
	学際理数情報学特論 IX	大島まり
	文化・人間情報学特論 V	前田幸男
2009	学際情報学概論	オムニバス
	組織学習システム論 II	中原淳
	科学技術コミュニケーション論	鈴木高宏・大島まり 佐倉統 ・丹羽美之

2.3.6.3 iii online の評価

利用動向を確認するために、2002 年夏学期授業終了後に、iii online に利用者登録した全学生（大学院生） 130 名に対してアンケート調査を実施した。有効回答数は 62（有効回答率 47.7%）であった。このうち社会人学生の回答者は 16 名（有効回答数に占める割合 25.8%）である。

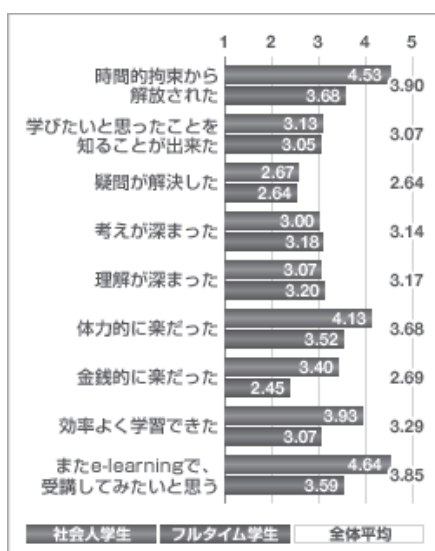


図 2-3-2 : iii online のメリット

iii online のメリットは「時間的拘束からの解放」、「体力的に楽であること」、そして「効率のよい学習」である。社会人学生にとくにこの傾向が強くみられたことが特徴的である。特に e-learning で受講してみたいという総合評価項目では、5段階スケールで 4.64 という好成績をマークしている。この調査から、iii online が当所の目的としていた「社会人大学院生の学習機会」という目標はほぼ達成できているものと考えられる。

2.3.7 ソウル大学大学院との大学院国際共同演習授業

学際情報学府では、大学院授業の一環として、ソウル大学との間でインターネット回線とビデオ会議システムを用いた日韓国際協同演習授業－East Asia Media Study を実施している。これは、これまでの東京大学社会情報研究所とソウル大学言論情報研究所との長年の学術交流を基礎に、双方の会場をビデオ会議システムでつなぎ、両大学の教員、大学院生が、毎週、越境的に議論を重ねる授業をしていこうという試みで、8週間から11週間にわたり継続的に授業を行ってきている。また、授業のうちの1回は、毎年開催されるソウル大－東大合同シンポジウムに接続する形で、ソウル大学でゼミ生が一堂に会し、合同授業が行われている。

授業の進め方としては、両大学をビデオ会議でつなぎ、毎回、それぞれの大学から講師が報告をし、院生が参加した討論で進行させている。原則として英語の教材を使うが、講義は英語、日本語、韓国語で行われる。担当講師や大学院生たちの発表を通じて、日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、政治、社会の変化の対する認識を共有、討論している。

初年度の平成17年度は、情報学環本館6階実験室を使い、東アジアの構造変動の中で行われる日本、韓国のメディアと文化政治の変化に対して理論的、実証的に探求することを目的として、双方の大学の教員の講義を中心に授業を行った。東アジアの人々がどのように閉鎖的な民族主義から抜け出し、自己中心的な理解を越えて人間らしい社会共同体を目指して連帯できるのかということ、メディアと文化政治の歴史のおよび共時的観点から学び、探求した。

平成18年度は、工学部2号館9階の教室を使用し、ビデオ会議システムの性能も向上して各回支障なく授業運営をすることができた。また、授業専用のBBSを設けることによって、事前情報や知識の共有、学生同士のオンライン上の交流もスムーズに行き、授業の運営の円滑化は格段に進んだ。

同年度の授業では、前半は、ソウル大側と東大側の教員の講義を中心とし、各講義後にディスカッションを行なった。授業の後半では、ソウル大大大学院生と東大大大学院生の混合グループを編成し、各グループがオンライン上でディスカッションしながら、共同研究計画書をつくり、発表する時間に充てた。各グループのテーマは、「公共圏」「大衆文化」「文化政治の歴史認識」「社会と技術」であった。授業には、英語、日本語、韓国語が使われ、活発な討議の中から日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、政治、社会の変化の対する認識を共有することができたと言えよう。

平成19年度は、本学から姜尚中教授が、ソウル大からは姜明求教授が授業を担当した。本年は、とくにビデオ授業に加えて姜尚中教授は9月にソウル大学で集中講義を、姜明求教授は1月に東京大学で集中講義を行い、学生との交流を深めつつ共同授業にも専門性をもたせることを重視し、内容を一層充実させた。「交流」を目的化する授業から、相互の研究成果に基いた「専門性の交換」という方向へ大きく飛躍した年となったと言える。

平成 20 年度は、"International Seminar in Interdisciplinary Information Studies : Sociopsychological Changes in Japan and Korea in the Information Age"と題し、10月6日から12月にかけて8回にわたり、同学科とのビデオ会議システムによる、両大学の教員によるオムニバス形式の講義を行なった。東大側からは、橋元良明、田中淳の両教授、ソウル大学からはイ・ジュンシク、ユン・ソクミン、カン・ナムジュンの3教授が講義を担当し、教員、学生を交え活発な討論が展開された。この共同演習により、日韓両社会の理解が深まると共に、今後の共同研究のあり方についても有益な意見が交わされた。

平成 21 年度には、カン・ミュンク、吉見俊哉の2人が担当教員となり、近年のグローバリゼーションと東アジアの大きな変化のなかで、東アジア諸国のメディア文化を分析することを試みた。東大側からは、メディアと空間の関係に焦点を当て、都市空間のなかでメディアのあり方がどのように変容しているかを論じ、ソウル大学の側からは、日韓中のテレビドラマが表象した家族関係や冷戦と韓国テレビ、消費文化の形成などについて講義が展開されていった。

2.4 学際情報学府への進学

2000年度に設立されて以来、2003年度まで、大学院学際情報学府は毎年、修士課程約50人、博士課程約20人の大学院生を受け入れてきた。2004年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会科学系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程14人、博士課程7人が統合され、2006年度からは総合分析情報学コース、2008年度からはアジア情報社会コースが新設されたため、学際情報学府の入学定員はさらに拡大し、現在では修士課程定員が100人、博士課程定員が44人となっている（詳しくは巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000年度の修士52人（修士）から出発して、01年度が102人（修士）、02年度が139人（修士113人、博士26人）、03年度が169人（修士128人、博士41人）、04年度が205人（修士136人、博士69人）、05年度が234人（修士151人、博士83人）、06年度が279人（修士166人、博士113人）、07年度が307人（修士177人、博士130人）、08年度が335人（修士191人、博士144人）、09年度が354人（修士202人、博士152人）と増加し続けてきた。現在、東京大学のなかで大学院情報学環・学際情報学府は、大学院生数においては教育学研究科、経済学研究科、薬学系研究科などとほぼ同じ規模の組織となっている。

また、本学際情報学府の大学院生の構成についてみると、(1) 東京大学以外の他大学出身者の割合が高いこと、(2) 実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会人の割合が高いこと、(3) 外国人学生の割合が相対的に高いこと、(4) 入学者の男女比も、全体の30～50%程度が女性とほぼ均衡がとれていることなど、きわめてハイブリッドな特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても東京大学のなかできわめて新しい可能性をもった大学院組織であることを示している。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の最近5年間では、修士課程の受入予定人員70人（～2005年度）、90人（2006年度～2007年度）、105人（2008年度～2009年度）に対し、2005年度入学試験が志願者178人（2.54倍）、06年度入学試験が225人（2.5倍）、07年度入学試験が

148人（1.64倍）、08年度入学試験が230人（2.19倍）、09年度入学試験が238人（2.27倍）の志願者が応募している。しかも合併後では、本大学院への志願者が増加傾向にあり、今日、大学院重点化のなかで大学院生数の枠が急速に広がったために大学院入試への競争倍率が低下してきている全般的な傾向からすれば、顕著に異なる人気の高さを保っている。

2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001年度が38人、02年度が40人、03年度が51人、04年度が57人、05年度が62人、06年度が59人、07年度が61人、08年度が71人と徐々に増え、09年度に至っては82人の修士修了者を輩出している。

また、博士課程の修了者についてみるならば、学際情報学府では、設立されたのが2000年度なので、最初の入学者が博士3年に達する2004年度に初めて4人の博士号取得者を輩出することになった。05年度は1名だったが、06年度は7人、07年度は3人(他に論文博士1人)、08年度は13人(他に論文博士1人)、09年度は8人の博士号取得者を輩出するに至っている。

大学院学際情報学府では、新しい学生が修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでの丁寧な指導、M2の先輩たちによるWeb発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業、Web発表会の実施、修士論文中間発表会というように、修士論文完成に至る個々の段階で学生の研究をサポートしていく体制が完備している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの毎年の実施、主指導・副指導による指導というように日本の大学院教育としては珍しいほどに修士論文、博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてきており、その一例は、別表のようなリストに示される。

(別表)

2009年度修士論文タイトル

- ・社会問題解決システムの全体像とその問題点と解決策の提案－ソーシャルイノベーションの事例研究をもとに
- ・想定読者がブログ上の自己開示に与える影響
- ・複合メディア環境での情報流通－犯罪事件をめぐる情報を中心に－
- ・日中における新聞と相互理解の仕方の問題点－日中の新聞における冷凍ギョーザ事件報道を手がかりに
- ・ICT産業におけるプラットフォーム間ネットワーク効果に関する考察
- ・身体変工に関する考察－いれずみを女性のかかわりを中心として－
- ・「格差社会」観に関する新聞の内容分析－格差の主観的現実構成
- ・19世紀イギリスにおけるスタティスティクスの誕生と中央統計局
- ・地域医療を支える公立病院の取り組みとその可能性－福島県須賀川市公立岩瀬病院を事例として－
- ・インタラクションとしての通訳行為－規範と実践の観点から－

- ・日本における eParticipation に関する考察
- ・コピーをコントロールするアーキテクチャについての社会学的研究
- ・行政部門における医療情報化についての考察－電子カルテシステムに関する比較研究－
- ・日本人の「中国」イメージ形成に関する一考察－直接接、メディア、ネットの影響
- ・韓国における〈中国朝鮮族〉のアンビバレントな位置
- ・オープンイノベーション環境における移動通信産業の発展と経済活性化への影響－日韓モバイルペイメント比較分析－
- ・尖閣諸島（釣魚島）問題に対する中国民衆の意識とその形成過程の分析－遼寧省における調査を基礎として
- ・中国における「三網融合」の実現に向けた制度整備のあり方を巡って
- ・台湾における通信・放送の融合に向けた法体系・監理機関に関する考察
- ・Interdisciplinary Study for Game Player's Benefits ゲームの「面白さ」の学際的研究
- ・デジタル「音楽」と手－デジタル・アート－のメディアロジー的考察－
- ・文化経済学に基づく我が国コンテンツ振興政策に対する評価研究－杉並区によるアニメ振興政策の取り組みを中心に－
- ・ジュークボックスの社会史 盛り場における音楽受容の戦後
- ・快・不快の軸における気分情報の自動抽出と体験共有の場への提示によるコミュニケーションへの影響に関する一検討
- ・プレイヤー評価に基づくデジタルゲーム分類手法の開発
- ・ノンテリトリアルオフィスにおける席提案システムの開発と評価
- ・ゲームの評価に関する研究－日常場面における QOL 評価に基づいて－
- ・小・中学校における組織開発の実施と評価
- ・歴史の因果関係を現代に応用する力を育成するカードゲーム教材のデザインと評価
- ・BMI(Brain-Machine Interface)と社会の関係を構築する－市民認識と専門家認識からの考察－
- ・日本における「多文化共生社会」の再考－静岡県磐田市を事例として－
- ・カーデザインのアートエスノグラフィ
- ・講義における外的関連付けを支援する協同ノートテイキング方法の提案と評価
- ・わが国における治験に対するイメージの受容とその改善
- ・学習環境としての工学系研究室の運営に関する探索的調査研究
- ・オンラインゲーム体験を用いた小学校における情報モラル教育の実践研究
- ・「意味」とオートポイエティック・システム～観察概念の批判的意義に着目して～
- ・「ハッカブル」な場－デジタルメディア時代の「人びとの表現」の批判的再検討
- ・それは宇宙芸術－アート・コミュニケーション空間の変容と新たな可能性
- ・D・W・グリフィス『国民の創生』(1915)論－表象から情動へ
- ・ガーナ社会における kiva.org のオンライン・マイクロファイナンス－インターネットを通じた社会開発の事例研究－

- ・本を回覧する母親たちの 60 年ー長野県 PTA 母親文庫の事例からー
- ・服薬に関するインシデント・アクシデント事例のカテゴリーと分析法の確立に関する研究
- ・「もの」としてのケータイ：東京におけるエスノグラフィーを通じたメディア論
- ・日本のメディア融合社会における参加型文化の研究：コミティア・スタッフのフィールドワーク
- ・現代台湾における日本風広告ー「日本語」および「日本イメージ」の使用現象研究ー
- ・新聞言説からみる日本における国際結婚のメディア表象ージェンダーの視点からみた外国人妻たちー
- ・ブログにおける自己表現ー日本と台湾の人気ブロガーを例として
- ・中国における日本大衆文化のローカリゼーションー「ドラえもん」が語る文化受容
- ・伝統技能継承のための主観視点を含んだ支援映像の生成
- ・リアルタイムアプリケーションのための階層的空間分割手法に関する研究
- ・可視光通信プロジェクトを用いた空間拡張型ディスプレイの研究
- ・日常生活で使用するための公共交通アニメーショントレインマップの提案
- ・単画像からの光源環境推定とその屋外複合現実感システムへの応用
- ・人の視覚特性に基づく大型ディスプレイによる複数人物への選択的情報提示
- ・嗜癖誘発の要素抽出に関する研究
- ・球形劣駆動システムの姿勢制御法単純化のための身体設計に関する研究
- ・ネットワーク構造を利用した Wikipedia からの意外性のある情報の抽出
- ・複数の車載カメラ映像の自動統合による広域な立体市街地図モデリング
- ・受動歩行を題材としたインタラクティブ・コンテンツと出張授業モデルの開発
- ・遮蔽計算に基づく頑健な線画生成手法
- ・ポイントベースアニメーションの効率化に関する研究
- ・複合現実展示のための多方向から鑑賞可能な空間立像ディスプレイの研究
- ・ヒューマノイドによる調理支援行動における認識行動実現法に関する研究
- ・Research and Development of a Kanji Learning Game for Japanese Schoolchildren
- ・Automatic Dictionary Construction Using a Chinese-Japanese Parallel Corpus
- ・PHYSICALLY BASED ANIMATION OF BUBBLE RING: AUGMENTING THE REALISM OF UNDERWATER SCENE
- ・Improving efficiency in P4P file sharing through random linear network coding
- ・都市環境に適したロバストな歩行者状態推定方法
- ・リアルタイム検索・チャットシステム「コミルバ」
- ・非言語情報を用いたインタラクション技術に関する研究 Interaction Techniques Using Nonverbal Information
- ・マーカレス拡張現実世界実現のための画像認識アルゴリズムに関する研究 A Research of Real Time Marker-less Augmented Reality
- ・指向性無線情報を用いた位置推定手法に関する研究 Location Estimation Using Angle-of-Emission
- ・都市環境における視覚障害者のための移動支援ガイドライン

- ・パケットキャッシュを用いた P2P 冗長トラフィックの抑制手法
- ・プッシュ型サービスにおけるユーザプロファイルを利用したキャンセル操作の低減手法
- ・携帯端末上の組込み DB に適したグラフ格納手法
- ・利用者の匿名性を保証する情報推薦システム
- ・マルチメディア向けのデバイス内通信プラットフォームの提案
- ・Human-Animal Interaction のためのウェアラブルセンシングに関する研究 Wearable Sensing for Supporting Human-Animal Interaction
- ・Synchronaized Active Illuminations for Robust Human Hand Gesture Recognition
- ・Heart activity analysis based on Empirical Mode Decomposition

2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の 35~40%程度である。したがって、修士課程を修了した者の 6 割以上が就職することになる。一般に、理系では修士修了後に就職をするケースが多く、文系では博士課程に進学するケースが多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（別表 修士修了者の進路状況）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

2.7 学際情報学府以外の教育活動

大学院情報学環では、大学院教育組織である学際情報学府と密接に連携しながら、教育部、ベネッセ先端教育技術学講座、電通コミュニケーション・ダイナミクス寄付講座、OKI ユビキタスサービス学寄付講座、ユビキタス情報社会基盤学寄付講座、「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座でも教育活動を行っている。

2.7.1 教育部

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、2年間にわたって情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。講義は、各自が所属する学部や大学院の授業などと両立できるように、おおむね夕刻（14:45 分以降）から夜間にかけて開講されている。学部、研究科という「タテ糸」で成り立つ東京大学のなかに、情報というキーワードをめぐる教育研究を「ヨコ糸」で縫い合わせてできた情報学環。教育部は、その情報学環という斬新な組織の特性を活かした、魅力的な教育研究活動の場となっている。

情報学環教育部では、毎年、前年度後期に入学試験をおこない、一学年約 50 名の教育部研究生を選抜している。大学 2 年生以上（4 月以降大学 2 年生になる見込みの人を含む）であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験をすることができる。

情報学環教育部の歴史は古く、その起源は、1929年（昭和4年）の文学部新聞研究室にまでさかのぼる。小さな組織だった新聞研究室は、戦後まもない1949年（昭和24年）に、文系の学際的研究組織である新聞研究所へと発展した。新聞研究所は、その名のとおり、新聞をはじめとするマスメディアが巻き起こす社会情報現象やコミュニケーション変容を体系的に研究することを目的として設立されたが、同時に、マスメディアで働く記者などの実務家を育成することも目的としていた。

1992年（平成4年）、新聞研究所は社会情報研究所として改組され、マスメディアに限定しない、情報に関わるあらゆる社会現象の研究を総合的に進めていくことになった。2004年（平成16年）には、大学院情報学環と合併し、今日まで情報学の伝統を脈々と引き継ぎながら、文理融合の最先端の研究を推進し、また教育活動にも力を注いでいる。

参考として平成21年度開講科目を以下に示す。

（夏学期）

	4限 14:45～16:15	5限 16:30～18:00	6限 18:15～19:45
月	実践メディア産業論 III （新聞）		
火	総合分析情報学基礎 C （隔週）		
水	文化・人間情報学基礎 I （モバイルの比較文化的 メディア論）	実践メディア産業論 I （出版）	実践情報社会論 II （ソーシャルメディア論）
木		文化・人間情報学基礎 XI （戦後日本をカルチュラル・ スタディーズ化する）	先端表現情報学基礎 A （先進モビリティ 都市設計演習）
金			実践情報社会論 I （ICT 産業論）

（冬学期）

	4限 14:45～16:15	5限 16:30～18:00	6限 18:15～19:45
月	社会情報学基礎 III	先端表現情報学基礎 C	文化・人間情報学基礎 II （ワークショップの ファシリテーション）
火		実践メディア産業論 IX （放送）	
水		特別講義 I （アートプロジェクトの 設計）	

木	社会情報学基礎Ⅰ (情報行動論の現在)	特別講義Ⅲ (日本中世史を素材として歴史情報を考える)	特別講義Ⅰ (コンテンツ・サービス論)
	社会情報学基礎Ⅱ (医療・健康情報の取り扱いを例として)		
金	実践メディア産業論Ⅳ (広告)		特別演習Ⅰ

なお、2004年から2009年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数については巻末参考資料を参照していただきたい。

2.7.2 コンテンツ創造教育研究コア

コンテンツ創造教育研究コアは、文部科学省特別教育研究経費（教育改革）のもとで平成17年度から5年間の計画として実施されてきたものであって、東京大学としてのコンテンツ創造に関する教育モデルを構築し、横断型連携をおこなう教育研究体制を整備することを目的していた。具体的には、上記の「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」における教育実践、ならびに学内外のコンテンツ関係者とも連携して、①コンテンツ創造へ向けた学部教育のありかた、②コンテンツ創造へ向けた大学院教育のありかた、③コンテンツ創造教育研究拠点の整備、の3項目について検討を進めた。

①の学部レベルのコンテンツ創造教育に関しては、新学科設立を含むさまざまな可能性について検討した結果、本学としては、従来の教育の枠組みに拘ることなく総合大学としての特色を生かした全学レベルでの横断型、開放型教育を目指すことが適当であるとの結論が得られた。この立場から、平成18年度より「コンテンツ創造学部横断型教育プログラム」の試行を開始し、これが全学授業カタログで新たな教育の仕組みとして紹介されるなど、学内的にも注目される試みとなった。この実績を基礎に全学的なレベルで横断型教育プログラムの取り組みが進み、平成21年度からは東京大学全学としての学部横断型教育プログラムが制度化され、全学的な教育体制の整備が進んでいる。

②の大学院教育についても、コンテンツ創造分野の特質を活かした学際的な教育体制の整備を目指して、コンテンツ創造情報学教育へ向けたカリキュラムの詳細な設計が進められてきた。すなわち、わが国のコンテンツ産業界が必要とする人材は、知識・技能だけでなく、みずからコンテンツ産業界を先導し、コンテンツイノベーションを実現する人材、創造力に富んだコンテンツをプロデュースし世界的に活躍する人材、独創的なデジタル先端技術を開発する人材であるとする立場から、その教育カリキュラムの設計をおこない、学際情報学府における横断的な教育カリキュラムとして実現すべく、既存教育コースとの連携や外部資金の導入も視野にいれた検討が進められた。平成22年度は、これまでの取り組みの成果を生かし、コンテンツ教育研究の国際的な展開を目指す発展的な取り組みが構想されている。

③の教育研究環境の整備は、産学・地域・大学間連携、および学内連携によって教育研究を戦略的に行うための物理的な建物拠点の整備を目指すものであり、拠点となる建物建設に向けて学内の関連部局

と連携した推進が模索された。また本事業では、関連して「文の京・大いなる学びシリーズ」を発足させ、地域連携の新たな可能性も追求した。

2.7.3 ベネッセ先端教育技術学講座（寄付講座）

ベネッセ先端教育技術学講座では、教育活動として以下の2点に力を入れている。

- ・学際情報学府の教育活動との有機的連携

ベネッセ先端教育技術学講座（BEAT）で行われている研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動（公開講座、メールマガジン発行、Web サイト運用）に対する学際情報学府の大学院生の参加を奨励し、研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動がそのままプロジェクト学習の基盤になるような工夫をしている。その中で特に研究プロジェクトに関心を持った学生については、研究プロジェクトの中で修士研究を行うなどの配慮をすることにより、先端教育技術に関する教育活動の拠点になっている。

- ・公開講座による社会還元的教育活動

一般社会に対して、先端教育技術に関する知見やノウハウの教育活動を行うため、3ヶ月に1回のペースで公開研究会 BEAT セミナーを開催している。昨年度開催された公開研究会は、以下の通りである。

第1回：2015年の学習環境を考えるー（2009年6月6日）

第2回：日本の教育×オープンイノベーション：世界に貢献できる人財づくりと教育富国を目指して（2009年9月5日）

第3回：モバイルARが拓く Place Based Learning の世界（2009年12月5日）

第4回：BEAT 特別セミナー 学習環境のソーシャルイノベーション（2009年3月27日）

2009年度はのべ400名を超える参加者が公開研究会に参加している。この中には、学生・大学教員に加え、教材開発を行っている社会人も数多く含まれており、デジタル時代の学習コンテンツ・システムに関する最新の知見を伝える機能を果たしている。

2.7.4 電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座

情報学環では、株式会社電通からの寄付を受け、2007年度から2009年度の予定で、電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座を設置し、研究を行っている。寄付金額は3年間で5千万円である。

研究目的は、急速に大きな構造変化を遂げつつあるメディア環境・コミュニケーション環境を背景に、メディアや広告が担う経済価値の変化、人々のコミュニケーション行動やメディア文化の変容、メディア制度の変化、さらに、情報発信の倫理やジャーナリズム、情報通信技術と社会の関係のあり方などを、総合的な視野にたって研究することにある。メンバーは、情報学環の常勤教員のほか、外部の特任研究員から構成されている（II 資料16 表16-1）。

2009 年度には、成果の報告（論文 6 本、外部発表 2 回、セミナー 2 回、シンポジウム 1 回）や授業を行うなど、着実に研究を進めた。研究活動については、ウェブサイト(<http://dcom.iii.u-tokyo.ac.jp/>)を通じて積極的に公開している。2010 年度以降に成果をさらに広く公開するために、書籍の出版を計画している。

2.7.5 OKI ユビキタスサービス学寄付講座

「OKI ユビキタスサービス学」寄付講座は、沖電気工業株式会社（以下 OKI）の寄付により平成 19 年 4 月に情報学環に開設された。情報学環では、ユビキタス情報社会基盤研究センターを設置して、ユビキタス情報分野の世界的な研究教育拠点となっている。一方、OKI は企業ビジョンとして「ユビキタスサービスにあふれる e 社会」を掲げており、東京大学大学院情報学環における取り組みにご賛同いただき、相互に協力して本寄付講座を開設している。

本講座の目的は、体系的な調査・分析および実践を通して、ユビキタスサービスに関する知見を深め、その実現に向けた研究開発を行うことで社会貢献を果たすことにある。そして、本講座で追求するユビキタスサービスに関する学問体系をユビキタスサービス学と呼び、本講座名に冠した。

本講座は、坂村健教授と数名の若手教員が中核となり、ユビキタス情報社会基盤研究センターや大学院学際情報学府総合分析情報学コースと連携して、研究教育活動を推進している。

2.7.6 ユビキタス情報社会基盤学寄付講座

「ユビキタス情報社会基盤学」寄付講座は、凸版印刷株式会社の寄付により、東京大学大学院情報学環に平成 19 年 10 月 1 日に開設した。本寄付講座は、ユビキタスコンピューティングの基盤技術と、それを核とした社会イノベーションに関する研究教育の実施することを目的とし、ユビキタスコンピューティングシステムの基盤技術や、それが社会に与えるインパクトや影響の分析に取り組む。それによって、ユビキタス情報社会の基盤となる基礎学問分野を確立したいと考えている。その研究活動は、ユビキタス情報社会基盤研究センターと、更に教育活動においては、大学院学際情報学府総合分析情報学コースと密な連携をして進めている。

2.7.7 「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座

「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座は、首都高速道路株式会社、東京電力株式会社、東京地下鉄株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、株式会社日立製作所と東京大学大学院学際情報学府総合分析情報学コースにより、平成 21 年 4 月 1 日に開設された。また、ユビキタス情報社会基盤研究センターも協力している。本講座は、情報技術を活用した施設管理等に関するマネジメントを高度化するとともに、新たな情報基盤を活用した新たなビジネスを創出し、インフラ・イノベーションの実現を目指す。また、こうした目的を達成するため、シーズとニーズ、技術と運用、理論と実践といった様々な知識や経験を結合し、新しい価値を生み出す実践的な研究プラットフォームの確立を目指す。平成 21 年度は、本講座のキックオフを記念する設立シンポジウムを平成 21 年 4 月に開催した。

3. 研究活動

3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。同じ学問領域の研究者が集まり、その集積性によってその学問領域の体系化を図り、またそれまで解決できなかった問題に突破口を開こうとする目標の立て方とやり方が存在する。しかし、情報学環は違う目標をもっており、違うアプローチを採っている。情報学環は学際情報学という新しい学問を創出するという目標をもっており、異なった学問領域の研究者に出会いの場を提供し、異種交配と相互越境というやり方によって、それを達成しようとしている。そのような研究組織は規模においてそれほど大きいものである必要はないが、しかし特有の研究組織論が必要とされる。

3.1.1 文理の相互作用と連携

伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたし、現在もそれが生きている。新しい分野、とりわけ学際情報学にとっては、その区分けを乗り越えて、文理連携、文理越境、文理相互浸透が必要であり、それなくして発展の展望はない。情報学環は最初からそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されたものである。しかも、その文理の比重がどちらかに大きく偏ることなく、バランスを取っているのが大きな特色である。

現在、情報学環では大小合わせてさまざまな文理連携型の研究プロジェクトが実施されている。競争的政府予算に基づく大型の研究プロジェクトとして、進行中の文部科学省特別教育研究経費（教育改革）「コンテンツ創造教育研究コア」があげられる。情報学環のスタッフ体勢は、文理連携の大型研究プロジェクトを自前でカバーしていくことができる。

文理連携は、組織の財政上、情報学環ならではの効用とメリットを発揮することに結びつく。国立大学に対する現在の財政政策の仕組みでは、文系の資金獲得には限界があり、困難が伴う。理系が必要とするような大きな額ではないにも関わらず、文系が運営費交付金や競争的資金を新たに得るのは容易なことではない。しかし、文理連携の研究計画のもとに競争的資金が獲得できることによって、結果的に文系の研究分野へ資金が流れ、これまで経済的な理由からできなかった研究活動を展開できるようになるのである。これは、文理連携で情報学を構築していくという組織論が、財務上も有益な影響を生み出していることを物語っている。こうした研究資金状況の改善によって、文系は文系の側から文理連携の企てを積極的に展開していくことが可能になるのである。

3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みとして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出されたものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の2種類が存在する。

基幹教員は、情報学環に固有のポスト、すなわち基幹教員枠（部局の「採用可能数」として割り当てられているポスト）で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされている。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動教員枠を使

って、流動元の部局よりやはり時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。その教員スペースは現状では情報学環として手当ですることができず、流動元部局のスペースをそのまま使用している。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来の枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

3.2 大型研究プロジェクト（1,000万円以上規模）

各教員が中心となって行う研究プロジェクトでも、以下の例（事業規模1千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展開している。（すべての外部資金による研究の状況は、Ⅳ．外部資金獲得状況を参照のこと）

<科学研究費補助金(金額は直接経費分)、学環教員が研究代表者となっているもの>

馬場 章 2004-2009 特定領域研究 「わが国における火山罹災地の複合的資料による歴史的
文化・自然景観の復元研究」（馬場章） 54,800 千円

須藤 修 2006-2010 特定領域研究 「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに
関する研究」（須藤修、田中秀幸、後藤玲子、中島直樹） 67,500 千円

辻井 潤一 2006-2010 特別推進研究 「高度言語理解のための意味・知識処理の基礎技術に関する
研究」（辻井潤一） 499,330 千円

河口洋一郎 2008-2010 基盤研究(A) 「デジタル茶室の花鳥風月的な時空間創出技術」（河口洋一郎、
堀聖司、米倉将吾） 30,160 千円

岡田 猛 2008-2010 基盤研究(A) 「美術創作プロセスの解明に基づく創造性教育支援」（岡田
猛） 31,720 千円

相澤清晴 2009-2011 基盤研究(A) 「ライフログ情報処理基盤の構築：取得、処理、共有へ向け
て」（相澤清晴） 35,230 千円

馬場 章 2009-2011 基盤研究(A)「歴史情報学に基づく明治期社会モデルの研究—写真資料を用いた華族社会構造の解析—」(馬場章、吉見俊哉、佐藤健二、五百旗頭 薫、添野 勉、研谷 紀夫) 47,190 千円

田中 明彦 2009-2011 基盤研究(A)「東アジアにおける地域協力枠組み発展の政治過程」(田中明彦) 30,030 千円

溝口 勝 2006-2009 基盤研究(B)「センサネット技術を利用した寒冷地土壌表層における面的な水循環変動プロセスの解明」(溝口勝、沖一雄、登尾 浩助、西村 拓) 18,370 千円

佐藤 洋一 2006-2008 基盤研究(B)「混雑状況下における人物追跡にもとづく行動解析」(佐藤洋一、杉本 晃宏、岡部孝弘) 13,650 千円

石田 英敬 2008-2010 基盤研究(B)「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究と批評プラットフォームの制作」(石田英敬、吉見俊哉) 19,500 千円

山内 祐平 2009-2011 基盤研究(B)「自己調整学習を支援する協調フィルタリングを用いた英語学習環境の構築と評価」(山内祐平、山田雅寛、松河秀哉、北村 智) 19,370 千円

佐倉 統 2009-2012 基盤研究(B)「脳神経科学と社会の相互作用——事例研究と枠組み構築——」(佐倉統、入来篤史、後藤弘子、高木美也子) 14,950 千円

林 香里 2009-2011 基盤研究(B)「メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について：8カ国国際比較研究」(林香里、丹羽美之、カーリン) 18,720 千円

園田 茂人 2009-2012 基盤研究(B)「中国」と向き合って：日韓台対中進出企業の現地化プロセスに関する比較社会学的研究」(園田 茂人) 13,260 千円

<その他外部資金関係>

池内 克史 2007-2009 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「油絵描画ロボットに関する研究」 34,892 千円

馬場 章 2007-2010 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」 57,239 千円

河口 洋一郎 2007-2011 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術」 589,875 千円

古村 孝志 2007-2010 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「地震波動伝播と津波発生伝播のシミュレーション」 41,210 千円

水越 伸 2007-2010 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「メディアを活用した市民芸術に関する俯瞰的理論と実践プログラムの研究・開発」 60,970 千円

相澤 清晴 2007-2010 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「広域・集団センシングに関する研究」 32,110 千円

相澤 清晴 2009-2011 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「食、健康に関わるライフログ取得とコミュニティ創成」 41,335 千円

佐藤 洋一 2009-2011 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「注視推定技術および注視誘導技術の開発」 49,400 千円

大島 まり 2007-2009 科学技術振興機構 社会技術研究開発事業 「先端研究者による青少年の科学技術リテラシー向上」 41,025 千円

田中 淳 2009 国土交通省 「首都圏大規模水害における住民行動と情報戦略に関する調査研究」 25,179 千円

石川 雅章 2009 国土技術政策総合研究所 「ITを活用した合理的な事業マネジメントシステムに関する研究開発」 187,000 千円

大島 まり 2008-2010 文部科学省 科学技術試験研究費 「次世代生命体統合シミュレーションソフトウェアの研究開発」 42,725 千円

古村 孝志 2008-2009 文部科学省 科学技術試験研究費 「「連動性を考慮した強震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究」99,999 千円

池内 克史 2008-2011 (独) 新エネルギー・産業技術総合開発機構 エネルギー I T S 推進事業 「全方位センサによる車両位置認識技術の開発」 53,428 千円

相澤 清晴 2009-2011 (独) 情報通信研究機構 「革新的三次元映像技術による超臨場感コミュニケーション技術の研究開発」35,295 千円

中尾 彰宏 2009-2010 (独) 情報通信研究機構 「新サービス創造のためのネットワーク基盤を実現するためのルータモジュールの研究開発」 22,998 千円

中尾 彰宏 2009 総務省 「セキュアクラウドネットワーキング技術の研究開発」 68,252 千円

辻井 潤一 2006-2010 文部科学省 科学技術振興調整費 「日中・中日言語処理技術の開発研究」 204,303 千円

3.3 付属センターの役割

3.3.1 社会情報研究資料センター

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964 年 1 月、当時の新聞研究所内に開室された「プレスセンター」が 1967 年 6 月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992 年 4 月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称されたものである。2004 年 4 月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。

本センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、学内外の研究者の利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、本センターの収蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。これらの新聞資料は情報学環書庫のほかに、駒場キャンパス内の旧宇宙航空研究所跡地などに別置されている。

センターの閲覧室には、利用者のために各種データベース閲覧用 PC3 台とマイクロフィルムのデジタルデータ変換機能をもつマイクロリーダーを本年度新規に設置して利用者の便宜を図ると共に、従来のマイクロリーダーも継続利用して需要に応じている。また、本センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

3.3.2 総合防災情報研究センター

総合防災情報研究センターは、平成 20 年 4 月 1 日に、東京大学の大学院情報学環、地震研究所、生産技術研究所の連携により、情報の概念を核とした文理融合型の総合的な防災研究機関として設立された。分野を超えた社会情報学、地震火山学、防災工学の協働により、防災情報研究における新しい地平を切り開くとともに、東京大学の理学、工学、社会学、法学、経済学、医学など様々な分野の防災関係研究者をネットワークし、行政、マスコミ、企業、NPOとも連携することにより、防災に関する知の結節点として機能する新しいタイプの研究機関を目指している。

日本は、地理的特徴からこれからも地震、風水害、火山などあらゆる災害に襲われることは避けられない。しかも、日本列島は地震学的な活動期に入っている、あるいは地球温暖化の影響により巨大台風

の発生が増加する、との指摘もある。なかでも、予想される首都直下地震や東南海・南海地震の被害は、国レベルに影響が波及しかねない。

大規模な自然災害による人的ならびに経済的な被害を軽減するために、災害危険度の判定や周知、事前の予測、災害からの避難、復旧・復興の体制作りなど「情報」のもつ役割の重要性は高まっている。総合防災情報研究センターでは、研究活動を通じて災害による被災の軽減に役立つ成果を挙げ、社会に貢献して行きたいと考えている。「情報」を核に「減災」をめざす、これが総合防災情報研究センターのミッションである。

総合防災情報研究センターのミッションは、①災害情報が活用される条件を提示する、②災害リスクと対応指示を伝える手段を開発する、③あるべき災害対策を具体的に提言する、④首都直下地震が、日本社会にもたらす全体像を把握する、⑤若人を守り、研究を守る大学のサービス継続管理（SCM）を構築することにある。

まだ設立 1 年目の平成 20 年度であるが、この目標に向かって、活動を開始した。その主な内容は以下の通りである。

3.3.2.1 災害情報研究の発信

総合防災情報研究センターの 1 年目の活動目標のひとつでもあった「廣井アーカイブス」の開発を平成 20 年度に行った。本ウェブサイトは、平成 18 年 4 月に逝去した故廣井脩教授が収集された膨大な災害に関する文献と調査・研究資料（廣井文庫）、廣井教授の論文や記事・談話、廣井先生も中核の一人であり多くの研究者が携わってきた東京大学大学院情報学環「災害と情報」研究会（旧新聞研究所・旧社会情報研究所「災害と情報」研究会）の調査研究報告書をまとめたデジタルアーカイブスである。アーカイブスは平成 21 年 4 月から一般公開しており、URL は <http://cidir-db.iii.u-tokyo.ac.jp/hiroi/index.html> である。

メニューボタンの選択により、これらの資料の閲覧・検索ができるよう設計されている。具体的には、調査・研究資料については、地図上から調査対象地域をクリックすることで調査の概要や方法、集計結果データ等の詳細情報を閲覧することもできる。また、報告書リストをタイトル・年代等により検索する選択方式も用意されている。

3.3.2.2 災害情報教育プログラムの実施と社会連携

災害は、国レベルで見れば数多く発生しているが、一人一人の市民から見れば、ほとんど経験せずに済む希な現象である。それだけに災害対応を経験的に身につけることは難しい。まして、災害の規模や推移は多様であり、そのすべてを経験することはできない。このこと自体は幸いなことではあるが、災害に対する基本的知識や対応行動のあり方を知ることなく、災害事態に直面することを迫られる。

科学的な知見に基づく正しい災害とその被害について学ぶ必要があるとともに、現在の科学技術の限界についても理解をしておく必要がある。適切な準備と対応を行うためには、防災教育は不可欠である。

本センターでは、これまで数多く試みられてきた防災教育の実践例を批判的に踏まえ、最先端の科学的知見に裏付けられた正確で有効な災害情報教育プログラムの開発と実施を行うことをミッションと

している。しかし、標準的な災害情報防災教育プログラムと一口で言っても、地域や地形、年齢、職種によって、その適切な内容は変わる。

本センターでは、高度な専門知識を防災に応用しうる潜在力を秘めた大学院生から、将来の日本社会を支えるトップランナーとなる学部学生、現場で災害対応に当たる防災担当者、住宅の耐震化や避難の最終的な判断主体である一般市民まで、多様なプログラムを開発、実施していく計画であるが、1年目の今年度は、災害対応の第一線にいる、ライフライン、マスコミならびに行政を対象としたライフライン・マスコミ連携講座を開始した。具体的には、首都直下地震を対象とした一連の講座を実施し、最先端の科学的知見の共有とそれに応じた具体的な防災対策を議論した。

- 第1回ライフライン・マスコミ連携講座 「緊急地震速報」
- 第2回ライフライン・マスコミ連携講座 「首都直下地震」
- 第3回ライフライン・マスコミ連携講座 「首都直下地震と火災被害の様相」
- 第4回ライフライン・マスコミ連携講座 「長周期地震動に対する超高層ビルの揺れと対策」

ライフライン・マスコミ連携講座は、防災機関相互の横の連携を強めることを主目的としているが、同時に災害情報教育プログラムの内容を幅広くするコンテンツの充実と講師を活動に巻き込むことを通じた研究者のネットワークの形成にも資する役割も果たしている。平成21年度から開始することに決まっている情報学環各コース横断型の教育プログラムである「災害情報論」ならびに防災研究者ネットワークの立ち上げに直接結びつく活動を展開することが出来た。

3.3.2.3 災害情報研究の推進と研究拠点としての活動

平成20年4月に始めて一般提供された緊急地震速報や「ゲリラ豪雨」と称された集中豪雨時の災害情報を対象とした災害情報研究を進めた。緊急地震速報に関しては、TBSと宮古島沖地震、茨城沖地震、岩手・宮城内陸地震を対象とした一連の共同調査を行い、認知率の変化や情報の有効性、課題を明らかにした。また、J-Alertの活用可能性と課題についての山形県庄内町をフィールドにした研究を実施した。

集中豪雨に関しては、岡崎市や金沢市などの被災地を対象にした諸機関の聞き取り調査と住民調査を行った。このほか、ミサイル誤報事例や病院機能維持のための訓練のあり方についての研究も実施した。主な研究活動は、以下の通り。

- 四川地震現地調査
- 岩手宮城内陸地震調査（科学研究費）
- 緊急地震速報に関する研究（TBSとの共同研究）
- 地震一津波連成シミュレーション（科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業）
- 南海・東南海・東海地震連動性評価研究（受託研究費）
- J-ALERTによる緊急地震速報放送に関する調査研究

2008年8月末豪雨等に関する調査（日本災害情報学会共同調査）
首都圏大規模水害における洪水避難と情報戦略に関する調査研究(受託研究費)
水害時の適切な避難につながる情報提供のあり方の検討（受託研究費）
美浜町 J-ALERT 誤報調査（人と防災未来センターとの共同研究）
IT 強震計に関する研究（IT 強震計コンソーシアム）

また研究拠点活動のひとつとして、災害関連学会のうち日本災害情報学会および日本災害復興学会を開催校として企画、運営した。また、日本社会情報学会の公開ワークショップ「総合防災情報研究と事業・業務継続計画」を共催した。

国際的な研究拠点へと展開するために第6回 APEC 地震シミュレーション会議（オーストラリア）など国際学会への参加に加えて、海外の有力校との交流を図った。とくに、今年度は5月に中国四川省で死者6万9197人、負傷者37万4176人、行方不明1万8379人（新華社通信：7月9日時点）という大規模地震が発生したこともあり、中国研究機関との交流が多かった。上海交通大学にて「Global Communication Forum, 2nd in Shanghai」にてキーノート・スピーチを行ったほか、台湾精華大学や中国共産党中央党校が当センターを訪問し、意見交換を行った。

3.3.3 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、ユビキタスコンピューティング、ネットワーキングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うという目的を達成するため、以下のような研究を実施している。

（1）ユビキタス情報基盤技術の研究

これまでの COE プログラムで確立した、ユビキタスコンピューティング分野の基盤技術である、ユビキタス ID 技術や T-Engine/T-Kernel、eTRON を用いた、インターネットの次の新世代の情報インフラを確立する。具体的には、「国際ユビキタス ID センター」を世界各地に立ち上げ、本研究センターがこれらの連携の中核となる。

（2）ユビキタス情報社会研究

ユビキタス情報インフラの普及とともに、社会がどのように変化するかということ、実証的に研究し、かつそのために必要な新しい社会システムや制度、法律、ビジネスモデルを考案し、積極的に提案していく。

ユビキタスコンピューティング技術は、ICT 分野において、我が国がリーダーシップをとって普及を進めている技術である。本センターにおける研究を推進することによって、情報科学、情報社会学等の、学術的な分野の成果を輩出することはもちろん、更にそれを社会基盤として実社会に普及させ、顕在化している様々な社会問題を解決することが期待される。

4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE 等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

相澤 清晴	Editorial Board	Journal of Visual Communication and Image Representation
相澤 清晴	Editorial Board	Advances in Multimedia
相澤 清晴	Associate Editor	IEEE Trans. Image Processing
相澤 清晴	Board of Governors	APSIPA
相澤 清晴	Tutorial Chair	IEEE ICASSP 2009
相澤 清晴	Associate Editor	ACM Transactions on Multimedia Computing Communications and Applications
相澤 清晴	Panel Chair	APSIPA Summit and Conference 2009
相澤 清晴	Workshop Co-Chair	ACM Multimedia 2009
相澤 清晴	local arrangement co-chair	International Symposium on Universal Communication (IUCS) 2009
相澤 清晴	Special Session Co-Chair	ACM CIVR2010
相澤 清晴	Demo Session Co-Chair	IEEE ICME 2010
相澤 清晴	Program Committee Member	ACM Multimedia 2009
相澤 清晴	Program Committee Member	IEEE ICME2009
相澤 清晴	Program Committee Member	IEEE ICIP2009
相澤 清晴	Program Committee Member	ICCV Workshop Human Computer Interaction 2009
相澤 清晴	Program Committee Member	MMM2010
池内 克史	Conference Advisory Board Member	MVA2009
池内 克史	Area Chair Asia	ICCV2009
池内 克史	General Chair Technical Program Committee	6th IEEE International Workshop on Object Tracking and Classification Beyond and in Visible Spectrum
池内 克史	Organizing Committee Honorary Chairs	ACCV2009
池内 克史	Advisory Chair	IEEE Workshop on eHeritage and Digital Art Preservation 2009
池内 克史	Program Committee	Search in 3D and Video(S3DV)2009
池内 克史	program chair	ICRA2009

池内 克史 編集委員 『Special Section on Machine Vision and its Applications』英文論文小特集編集委員会

池内 克史 Editor-in-Chief (編集長) International Journal of Computer Vision

池内 克史 Editor Board International Journal of ITS Research

池内 克史 Fellow 2010 IEEE Fellow Committee

池内 克史 Board of Governors IEEE ITS Society

石川 徹 Reviewer Spatial Cognition and Computation

石川 徹 Reviewer Journal of Environmental Psychology

石川 徹 Reviewer Cartographica

大石 岳史 Workshop Scientific Committee 3rd International Workshop, 3D Virtual Reconstruction and Visualization of Complex Architectures (3D-ARCH)

大石 岳史 Program Committee The 2009 International Workshop on 3-D Digital Imaging and Modeling (3DIM) held in conjunction with ICCV 2009

大石 岳史 Program Committee The Twelfth IEEE International Conference on Computer Vision (ICCV 2009)

岡崎 直観 Program committee The Joint Conference of the 47th Annual Meeting of the ACL and the 4th International Joint Conference on Natural Language Processing of the AFNLP (ACL-IJCNLP 2009)

狩野 芳伸 Co-organizer BioNLP

狩野 芳伸 UIMA Technical Committee Member OASIS

倉田 博史 reviewer Mathematical Reviews

倉田 博史 associate editor Annals of Institute of Statistical Mathematics

越塚 登 Program Committee Internet of things 2010 Tokyo

越塚 登 “H.IDscheme: ID schemes for multimedia information access triggered by tag-based identification”, Co-Editor ITU-T SG16

越塚 登 “H.IRP: ID resolution protocols for multimedia information access triggered by tag-based identification”, Co-Editor ITU-T SG16

越塚 登 SG16 Liason Officer International Telecommunication Union, Telecommunication, Joint Coordination Activity on Network Aspect of Identification Including RFID and Ubiquitous Sensor Network

佐藤 洋一 Editor IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications

佐藤 洋一 Editor IEEE Transactions on Pattern Analysis and Machine Intelligence

佐藤 洋一 Editor International Journal of Computer Vision

佐藤 洋一 Program Committee Member IEEE International Conference on Computer Vision (ICCV2009)

佐藤 洋一	Program Committee Member	IEEE CS Conference on Computer Vision and Pattern Recognition (CVPR2009)
佐藤 洋一	Program Committee Member	IEEE International Workshop on Projector-Camera System (PROCAMS2009)
佐藤 洋一	Program Committee Member	IEEE International Workshop on 3-D Digital Imaging and Modeling (3DIM2009)
佐藤 洋一	Program Committee Member	IAPR Conference on Machine Vision Applications (MVA2009)
佐藤 洋一	Program Committee Member	IEEE and ACM International Symposium on Mixed and Augmented Reality (ISMAR2009)
佐藤 洋一	Program Committee Member	International Conference on Multimodal Interfaces (ICMI-MLMI2009)
佐藤 洋一	Program Committee Member	ACM International Conference on Interactive Tabletops and Surfaces (Tabletop 2009)
佐藤 洋一	Program Committee Member	International Conference on Imaging for Crime Detection and Prevention (ICDP 2009)
須藤 修	Member	13th German-Japanese Symposium Program Committee (IECE Communications Society and Munchner Kreis Org.)
須藤 修	Associate Editor	Environmental Economics and Policy Studies (the official journal of the Society for Environmental Economics and Policy Studies), Springer-Verlag
須藤 修	Member	Special Section Editorial [Info-Plosion] Committee of IEICE journal
須藤 修	Chair	International CIO Academy
須藤 修	Member	The Heidelberg Club International (HCI) organized by the Mayor of Heidelberg City (Germany)
田中 秀幸	編集委員会委員	Journal of Socio-Informatics
中尾 彰宏	TPC	IEEE TridentCom
中尾 彰宏	TPC	ACM SIGCOMM VISA
中尾 彰宏	TPC	IEEE FutureNet II
中尾 彰宏	TPC	IEEE GreenCom I
中尾 彰宏	TPC	IEEE GreenCom II
中尾 彰宏	TPC	IEICE Journal NwGN Special Issue
中尾 彰宏	TPC	AINTEC
中尾 彰宏	TPC	ACM ReArch 2009
中尾 彰宏	TPC	ITC-SS
中尾 彰宏	TPC	IEEE International Performance Computing and Communication Conference 2009 (IPCCC)

中尾 彰宏	TPC	ITC 21
中尾 彰宏	TPC	ITC 21: First Workshop on Data Center - Converged and Virtual Ethernet Switching (DC CAVES)
中尾 彰宏	Steering Committee	ACM ROADS 2009
山口 いつ子	Advisory Board Member of "SCRIPT-ed" Journal	The AHRB Research Centre for Studies in Intellectual Property and Technology Law, The University of Edinburgh
暦本 純一	Program Committee	ACM Symposium on User Interface Software & Technologies
暦本 純一	Program Committee	ACM SIGGRAPH ASIA 2009 Emerging Technologies

4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している（政府委員会委員数 57 件、地方自治体委員会委員数 11 件）。

<政府>

相澤 清晴	内閣府	内閣府総合科学技術会議 情報通信 PT 委員 及び ヒューマンインターフェース・コンテンツ WG 主査
相澤 清晴	総務省	産学官連携強化委員会 委員
相澤 清晴	総務省	産学官連携強化委員会 推進戦略WG 主査
相澤 清晴	総務省	ICT 標準化・知財センター 標準化戦略評議会 委員
池内 克史	総務省	独立法人評価委員会 情報通信・宇宙開発分科会情報通信研究機構部会 評価委員
池内 克史	文部科学省	科学技術政策研究所 科学技術動向研究センター 専門調査員
池内 克史	内閣府	地理空間情報戦略勉強会 委員
石上 英一	宮内庁書陵部	陵墓管理委員
石上 英一	文化庁	中世城館遺跡・近世大名等墓所保存検討委員会委員
石上 英一	文化庁	文化審議会文化財分科会専門委員（史跡）
石上 英一	文化庁	文化審議会委員（文化財分科会）
石川 雄章	経済産業省	クラウドコンピューティングと日本の競争力に関する研究会委員
石川 雄章	総務省	スマートクラウド研究会
石川 雄章	経済産業省	ITとサービスの融合による新市場創出研究会
石川 雄章	経済産業省	行政 CIO フォーラム
大島 まり	文部科学省	新学術領域研究専門委員会 委員
越塚 登	総務省	ICT 国際競争力会議、「基本戦略分科会」委員
越塚 登	国土交通省	「モビリティサポートモデル事業」・委員
越塚 登	総務省消防庁	「J-ALERT の改善に関する調査検討業務」有識者会合・委員

越塚 登	総務省 「コンテンツ将来像検討会議」、コンテンツ振興検討チーム委員
越塚 登	経済産業省 「新需要開拓・雇用創出に向けた意見交換会」委員
越塚 登	国土交通省 「歩行者ネットワークデータ委員会」委員
坂村 健	総務省 「日印 ICT 成長戦略委員会」委員
坂村 健	国土交通省 成長戦略会議委員
坂村 健	文部科学省 平成 22 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰審査委員会 科学技術賞審査部会 委員
坂村 健	文部科学省 科学技術政策研究所客員研究官
坂村 健	文部科学省 平成 21 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰審査委員会 科学技術賞審査部会 委員
須藤 修	内閣官房 「IT 戦略の今後の在り方に関する専門調査会」委員
須藤 修	内閣官房 「IT 戦略本部評価専門委員会」座長代理
須藤 修	内閣官房 「電子政府評価委員会」座長
須藤 修	内閣官房 「次世代電子行政サービス基盤等検討プロジェクトチーム」座長
須藤 修	内閣官房 「情報セキュリティ政策会議・技術戦略専門委員会」委員
須藤 修	内閣官房 「電子政府ガイドライン作成検討会」座長
須藤 修	内閣府 「国民生活審議会」委員
須藤 修	内閣府 「国民生活審議会個人情報保護検討部会」委員
須藤 修	内閣府 「総合科学技術会議」情報通信分野推進戦略プロジェクトチーム委員
須藤 修	内閣府 「総合科学技術会議」評価助言外部専門家
須藤 修	総務省 ICT 政策タスクフォース 委員
須藤 修	総務省 ICT 政策タスクフォース 「地球的課題検討部会」委員
須藤 修	総務省 「電子自治体の推進に関する懇談会」座長
須藤 修	総務省 「地方公共団体 ASP・SaaS 活用推進会議」委員長
須藤 修	総務省 「地域 ICT 利活用モデル構築事業評価会」委員
須藤 修	総務省 「地域情報化評価会」構成員
須藤 修	総務省 「ふるさとケイタイ創出推進事業評価会」委員
須藤 修	総務省 「ユビキタスタウン構想推進事業評価会」委員
須藤 修	総務省 「地球温暖化対応 ICT イノベーション推進事業」専門評価委員
須藤 修	総務省 「公的個人認証サービス普及拡大検討会」委員
須藤 修	厚生労働省 「最適化計画策定評価委員会」委員
須藤 修	経済産業省 「CIO 戦略フォーラム」委員
須藤 修	経済産業省 「IT とサービス融合による新市場創出促進事業」全体会議委員長
須藤 修	経済産業省 産業構造審議会 「情報サービス・ソフトウェア小委員会」委員
須藤 修	文部科学省 「科学技術・学術審議会」専門委員
須藤 修	文部科学省 「先進的情報セキュリティ人材育成推進委員会」委員

須見 徹太郎 内閣府 中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」小委員会、「カスリーン台風」分科会委員
 古村 孝志 経済産業省 総合資源エネルギー調査会原子力安全・保安部地震・津波委員
 山本 隆一 内閣府 内閣官房 I T 推進本部評価専門調査会医療評価委員会座長
 山本 隆一 内閣府 高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部評価専門調査会委員

<自治体>

石上 英一 鹿児島県奄美市 文化財総合的把握モデル事業奄美市・宇検村・伊仙町歴史文化基本構想等策定専門委員会委員
 石上 英一 静岡県磐田市 磐田市教育委員会遠江国国分寺整備委員会委員
 石上 英一 鹿児島県喜界町 喜界町城久遺跡群調査委員会委員
 須藤 修 高知県「電子自治体推進協議会」顧問
 須藤 修 福島県 IT 推進アドバイザー
 須藤 修 甲府市「甲府 PMO 委員会」副委員長
 須藤 修 文京区 専門委員
 須見 徹太郎 滋賀県 「統合的流域管理ワーキンググループ会議」、アドバイザー
 水越 伸 文京区 文京区アカデミー推進計画策定協議会委員
 山本 隆一 茨城県 茨城県立中央病院総合医療情報システム総合評価審査委員会特別委員
 山本 隆一 南砺市 南砺市遠隔医療推進協議会委員

4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長など、学会の要職等を通じて学協会活動に貢献している。

相澤 清晴 超臨場感コミュニケーションフォーラム 映像分科会 超高精細 WG 委員長
 相澤 清晴 浜松地域知的クラスター 外部研究評価委員
 相澤 清晴 NHK 放送技術研究所 NHK 放送技術研究委員会委員
 相澤 清晴 日本工業技術振興協会 次世代画像入力ビジョンシステム部会 委員長
 相澤 清晴 電子情報通信学会 出版委員会 幹事
 相澤 清晴 電子情報通信学会 ハンドブック/知識ベース委員会 幹事長
 相澤 清晴 電子情報通信学会 マルチメディア情報ハイディング第 2 種研究専門委員会 委員
 相澤 清晴 電子情報通信学会 料理メディア第 3 種研究専門委員会 委員
 相澤 清晴 デジタルコンテンツシンポジウム 実行委員長
 相澤 清晴 画像符号化シンポジウム・映像メディアシンポジウム 幹事
 相澤 清晴 電子情報通信学会 マルチメディアと仮想環境基礎研究専門委員会 委員
 相澤 清晴 映像メディア学会 編集長

相澤 清晴	電子情報通信学会 画像工学研究専門委員会 顧問
相澤 清晴	電子情報通信学会 論文誌 画像符号化・映像メディア処理レター特集号委員
池内 克史	株式会社アスカラボ 取締役
池内 克史	独立行政法人産業技術総合研究所 研究ユニット評価委員会 委員
池内 克史	特定非営利活動法人 ITS Japan 理事
池内 克史	第 15 回画像センシングシンポジウム 組織委員
池内 克史	第 8 回 ITS シンポジウム 2009 運営委員会
池内 克史	3 次元映像のフォーラム(3D フォーラム) 代表幹事
池内 克史	縄文遺跡の価値表現に関する有識者会議 委員
石上 英一	朝日新聞社 書評委員
石上 英一	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 理事(非常勤)
石川 徹	ユビキタス空間基盤推進協議会 会員
石川 徹	社団法人都市住宅学会 編集委員会委員
石川 徹	地理情報システム学会 論文査読者
石川 雄章	情報システム調達研究会 事務局代表
石川 雄章	特定非営利活動法人ピーアイ・フォーラム 理事
石川 雄章	土木学会土木計画学研究委員会 委員
石川 雄章	情報大航海プロジェクト e 空間実証事業ステアリングコミッティ 座長
石崎 雅人	人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 連絡委員
石崎 雅人	社会言語科学会 発表賞選考委員
石崎 雅人	言語資源協会 委員
石崎 雅人	国際標準化規格委員会 (TC37/SC4) 国内対策委員
石田 英敬	日本記号学会 理事
大石 岳史	情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究会 運営委員
大谷 智子	JST 戦略的創造研究推進事業「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」領域 情報メディア技術と文化の融合領域の将来構想ワーキンググループ 幹事
大谷 智子	日本バーチャルリアリティ学会 情報技術と文化の融合調査研究委員 幹事
大原 美保	日本地震工学会 会誌編集委員会委員
大原 美保	日本地震工学会 事業企画委員会委員
大原 美保	日本地震工学シンポジウム 日本地震工学シンポジウム運営委員会委員
岡崎 直観	NLP 若手の会第 3 回シンポジウム プログラム委員
岡崎 直観	第 16 回言語処理学会年次大会 実行委員
小笠原 盛浩	日本社会情報学会 (JASI) 評議員
小笠原 盛浩	日本社会情報学会(JASI) JASI/JSIS 大会合同企画委員会委員
倉田 博史	日本統計学会 理事
倉田 博史	日本統計学会 評議員

越塚 登 独立行政法人宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究本部宇宙情報, エネルギー工学研究系, 客員教授

越塚 登 次世代電子商取引推進協議会 (ECOM) 「近未来バリューチェーン研究会」委員

越塚 登 サトー国際奨学財団 奨学金審査委員

越塚 登 財団法人ベターリビング 「住宅履歴情報整備意見等委員会共通の仕組み検討部会・共通ID検討WG」・顧問

越塚 登 社団法人新都市ハウジング協会 「集合住宅等のRFID活用建設共通パス」研究開発委員会、副委員長

越塚 登 ユビキタス空間情報基盤協議会 審議委員

越塚 登 (独) 情報処理推進機構 (IPA) 「オープンソフトウェア利用推進事業」審議委員

越塚 登 社団法人トロン協会 「TRON 教育普及グループ主査」・主査

越塚 登 社団法人トロン協会 「プロジェクト推進委員会」・委員

越塚 登 株式会社横須賀テレコムリサーチパーク YRP ユビキタス・ネットワーキング研究所・副所長

越塚 登 T-Engine フォーラム 「ユビキタス ID 部会」主査

小林 真輔 情報処理学会 組み込みシステムシンポジウム 2009 プログラム委員

小林 真輔 情報処理学会 論文誌編集委員 (TSLDM)

坂村 健 T-Engine フォーラム 会長

坂村 健 (株)横須賀テレコムリサーチパーク YRP ユビキタス・ネットワーキング研究所所長

坂村 健 財団法人九州先端科学技術研究所 「『科学へジャンプ』視覚障害者全国ネットワークの構築」事業 外部評価委員

坂村 健 財団法人国土技術研究センター 研究顧問

坂村 健 財団法人情報科学国際交流財団 評議員

坂村 健 社団法人日本プロジェクト産業協議会 アドバイザー

坂村 健 財団法人ひょうご情報教育機構 カーネギーメロン大学日本校アドバイザー

坂村 健 財団法人本田財団 評議員

坂村 健 公益財団法人サトー国際奨学財団 運営諮問委員

坂村 健 (独)科学技術振興機構 社会技術研究開発センター領域アドバイザー

坂村 健 社団法人トロン協会 プロジェクト推進委員会委員

坂村 健 財団法人河川情報センター 理事

坂村 健 社団法人日本プロジェクト産業協議会 アドバイザー

坂村 健 日本放送協会 国際放送番組審議会委員

坂村 健 財団法人セコム科学技術振興財団 評議員

佐藤 洋一 日本バーチャルリアリティ学会複合現実感研究委員会 専門委員

佐藤 洋一 電子情報通信学会パターン認識とメディア理解研究会 副委員長

佐藤 洋一 電子情報通信学会論文誌 ED 「マシンビジョンとその応用」特集号 編集委員

佐藤 洋一 電子情報通信学会和文論文誌 D「画像の認識・理解」特集号 編集委員

須藤 修 国立情報学研究所 客員教授

須藤 修 情報セキュリティ大学院大学 アドバイザリーボード委員

須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省 新世代ネットワーク推進フォーラム 推進委員

須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」幹事

須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」アセスメントワーキンググループ主査

須藤 修 独立行政法人科学技術振興機構「科学技術連携施策群研究者ワーキンググループ」委員

須藤 修 独立行政法人科学技術振興機構「科学技術振興調整費ワーキンググループ」委員

須藤 修 独立行政法人科学技術振興機構「社会技術研究開発センター評価分科会」専門委員

須藤 修 独立行政法人科学技術振興機構「ユビキタスネットワーク研究評価作業部会」主査代理

須藤 修 財団法人自治体衛星通信機構 理事会評議員

須藤 修 財団法人国際 I T 財団 評議員

須藤 修 N P O「高度 I T 人材育成アカデミー」(福岡県) 副理事長

須藤 修 N P O「セキュア社会を推進する会」 代表理事

須藤 修 N P O「市民が主役の地域情報化推進協議会」 理事長

須藤 修 東京電力株式会社 顧問

須藤 修 セコム科学技術振興財団 評議員

須藤 修 全国地域情報化推進協議会「技術専門委員会」(総務省) アドバイザー

須藤 修 OpenID ファウンデーション・ジャパン アドバイザー

須藤 修 日本学術会議連携会員(経済学) 会員

須藤 修 電気通信情報学会 情報・システムソサイエティ論文誌「情報爆発」特集号編集委員
会委員

須藤 修 日本社会情報学会 (JASI) 会長

須藤 修 日本社会情報学会 (JASI) 学術委員会 委員

須藤 修 情報文化学会 会長

須藤 修 日本社会情報学会 (JSIS) 理事

須藤 修 情報社会学会 理事

須藤 修 情報処理学会 創立 50 周年記念大会実行委員会副委員長

須藤 修 日本社会情報学会 (JASI&JSIS) 2009 年合同研究発表大会企画委員会委員

須藤 修 日本社会情報学会 (JASI&JSIS) 2009 年合同研究発表大会デジタルコンテンツ部
会座長

須藤 修 国際 C I O 学会 2009 年度秋季発表大会プログラム委員会委員

須藤 修 情報文化学会 第17回全国大会実行委員長 (2009年11月21日)
 須藤 修 情報文化学会 第15回情報文化学会賞選考委員会委員
 須藤 修 社会情報システム学シンポジウム 第16回社会情報システム学シンポジウム・プログラム委員
 須藤 修 情報処理学会 第72回全国大会「情報爆発時代におけるライフログ・センサー処理」セッション座長 (2010年3月10日)
 須藤 修 国際CIO学会 2009年度春季発表大会実行委員長 (2010年3月29日)
 須見 徹太郎 財団法人消防科学総合センター 平成21年度地域防災データ総覧「岩手・宮城内陸地震・平成20年8月末豪雨災害編」編集委員会委員
 須見 徹太郎 日本災害情報学会 企画委員会委員
 園田 茂人 松下国際財団 国際スカラシップ審査委員会委員
 園田 茂人 中国社会文化学会 大会担当理事
 園田 茂人 アジア政経学会 総務担当理事
 園田 茂人 日本現代中国学会 理事
 園田 茂人 日本学術会議社会学部会 連携会員
 鷹野 澄 IT強震計研究会 代表
 鷹野 澄 IT強震計コンソーシアム 代表
 鷹野 澄 日本地震学会 代議員
 鷹野 澄 日本災害情報学会 広報委員会副委員長
 鷹野 澄 日本災害情報学会 デジタル放送研究会 委員
 田中 淳 日本災害情報学会 理事
 田中 秀幸 総務省情報通信政策研究所 特別研究員
 田中 秀幸 国立民族学博物館 非常勤研究員
 田中 秀幸 日本社会情報学会(JASI) 編集専門委員会委員
 田中 秀幸 日本社会情報学会(JASI) 理事
 田中 秀幸 日本社会情報学会(JASI) 学術委員会委員張
 田中 秀幸 日本社会情報学会(JASI&JSIS0)合同研究大会 合同研究大会企画委員会委員
 田中 秀幸 社会・経済システム学会 理事
 辻本 篤 情報文化学会 総務委員会・委員
 辻本 篤 情報文化学会 データベース委員会・委員
 辻本 篤 情報メディア学会 編集委員会・委員
 辻本 篤 情報メディア学会 企画委員会・委員
 辻本 篤 日本危機管理学会 理事
 辻本 篤 情報文化学会 編集委員会・委員
 辻本 篤 情報文化学会 ニューズレター編集委員会・委員長
 辻本 篤 日本危機管理学会 編集委員会・委員

辻本 篤	情報文化学会 理事
辻本 篤	情報文化学会 大会実行委員会・委員
碓谷 紀夫	アートドキュメンテーション学会 役員
碓谷 紀夫	情報知識学会 理事
中尾 彰宏	NICT 新世代ネットワークセンター・ネットワークアーキテクチャグループ 客員研究員・プロジェクトリーダー
中尾 彰宏	新世代ネットワーク推進フォーラム アセスメントワーキンググループ副主査
中尾 彰宏	電子情報通信学会 CQ 研究会 専門委員
中尾 彰宏	電子情報通信学会 NS 研究会 専門委員
中尾 彰宏	情報処理学会 OS 研究会 専門委員
西垣 通	パリ日本文化会館 運営審議会委員
西垣 通	本田財団 評議員
西垣 通	朝日新聞文化財団 評議員
西垣 通	情報メディア学会 会長
西垣 通	情報文化学会 理事
丹羽 美之	社団法人日本民間放送連盟 日本民間放送連盟賞番組部門中央審査委員
丹羽 美之	特定非営利活動法人放送批評懇談会 理事
丹羽 美之	財団法人放送文化基金 放送文化基金賞専門委員
丹羽 美之	財団法人日本科学技術振興財団 科学技術映像祭審査委員
丹羽 美之	日本マス・コミュニケーション学会 放送部会委員
橋元 良明	日本マス・コミュニケーション学会 理事
橋元 良明	日本社会情報学会 理事
林 香里	NTT 持株会社「コンテンツ流通研究会」アドバイザー
林 香里	日本マス・コミュニケーション学会 理事
林 香里	世界調査「メディアにおける女性の地位」日本委員会 共同代表
藤原 正仁	財団法人デジタルコンテンツ協会 平成 21 年度「デジタルコンテンツ制作の先端技術応用に関する調査研究委員会」委員
古村 孝志	日本地球惑星科学連合 理事
古村 孝志	日本地震学会 常務理事
堀 里子	独立行政法人医薬品医療機器総合機構 独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員
堀 里子	特定非営利活動法人 医薬品ライフタイムマネジメントセンター 理事
水越 伸	日本民間放送連盟「メディアリテラシー実践プロジェクト」有識者委員（副主査）
山内 祐平	日本教育工学会 編集担当理事
山口 いつ子	日本学術会議 特任連携会員（日本の展望委員会情報社会分科会）

山口 いつ子	一般社団法人 モバイルコンテンツ審査・運用監視機構 (EMA)	審査・運用監視委員会委員
山本 隆一	独立行政法人医薬品医療機器総合機構	独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員
山本 隆一	財団法人医療情報システム開発センター (MEDIS)	プライバシーマーク審査委員会委員長
山本 隆一	(財) 全国地域情報化推進協会 (APPLIC)	APPLIC アプリケーション委員会委員
山本 隆一	一般社団法人日本医療情報学会	日本医療情報学会理事長・学会長

4.4 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の研究・教育活動の成果を公表するとともに、その環を広げるために、下記に示すようなさまざまな公開の催しを実施した。入試説明会はたんなる入試事項の説明にとどまらないかたちで、過去の学環・学府シンポジウムの成果を引き継ぎつつ、学環・学府の全体像を示す機会となっている。概要説明から、院生紹介、主要プロジェクト紹介、鼎談などとともに、本年度も研究室や研究プロジェクトを紹介する熱帯雨林的な知識交換、共有の場「学環・学府めぐり」なども開催された。

この他、別表で一覧されているとおり、COEシンポジウムをはじめ、内外の関係者を集めた先端的な研究成果の披露の機会があった。学環の特徴でもあるさまざまなプロジェクトは、公開研究会、シンポジウムなどを通して学際情報学の研究情報を発信している。下記がその一覧（現在稼働しているもの）である。いずれも学際的なチャレンジをしている営みだといえる（学環ホームページ上に公開されたプロジェクトのみで、全てを網羅していないことを申し添えておく）。

【シンポジウム】	
2009. 5. 31 福武ホール ラーニングシアター	先端表現情報学シンポジウム 2009 「先端表現情報学の教育・研究とは？」 鈴木高宏（東京大学大学院情報学環准教授・先端表現情報学コース長）
2009. 7. 25 福武ホール ラーニングシアター	東京大学大学院情報学環×東京藝術大学大学院映像研究科 シンポジウム「第1回 メディア・アートとは何か？ 藤幡正樹著『不完全な現実』をめぐって」 藤幡正樹（東京藝術大学大学院映像研究科長） 建畠哲（美術批評家・詩人・国立国際美術館館長） 石田英敬（東京大学大学院情報学環教授・学環長）

<p>2009. 9. 26 東京藝術大学大 学院映像研究科 馬車道校舎</p>	<p>東京大学大学院情報学環×東京藝術大学大学院映像研究科 シンポジウム「第2回 メディア・アートとは何か？ メディア・ア ートという前衛」 藤幡正樹（東京藝術大学大学院映像研究科長） 三輪眞弘（情報科学芸術大学院大学教授） 佐近田展康（名古屋学芸大学メディア造形学部准教授） 石田英敬（東京大学大学院情報学環教授・学環長）</p>
<p>2009. 10. 10 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>東京大学大学院情報学環×東京藝術大学大学院映像研究科 シンポジウム「第3回 メディア・アートとは何か？ クリエイターの 再生のために」 藤幡正樹（東京藝術大学大学院映像研究科長） 吉岡洋（京都大学大学院文学研究科） 北野圭介（立命館大学映像学部教授） 石田英敬（東京大学大学院情報学環教授・学環長）</p>
<p>2009. 10. 29-30 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>UT-SNU-CUHK-ANU Symposium MAPPING THE SPACES OF MEDIA CULTURE IN ASIA: INFORMATION, COMMUNICATION AND POLITICS Hidetaka ISHIDA, Dean of the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, University of Tokyo</p>
<p>2009. 11. 3 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>東京大学大学院情報学環×朝日新聞社シンポジウム 「筑紫哲也との対話——没後1周年」 立花隆（ジャーナリスト、評論家） 田中秀征（元衆議院議員） 外岡秀俊（朝日新聞編集委員） 石田英敬（東京大学大学院情報学環教授・学環長） 筑紫ゆうな 白石順子（筑紫事務所スタッフ） 姜尚中（東京大学大学院情報学環教授） 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環教授・前学環長） 林香里（東京大学大学院情報学環教授）</p>
<p>2009. 11. 14 福武ホール ラーニングシアター</p>	<p>東京大学大学院情報学環（社会情報研究所・新聞研究所）ホームカミ ングデー公開講演 石田英敬（東京大学大学院情報学環教授・学環長） 前田幸男（東京大学大学院情報学環准教授） 神谷説子（ジャパントイムズ記者・教育部1998年度修了）</p>

2009. 11. 27 福武ホール ラーニングシアター	シンポジウム 「ケータイの未来モード：文化と技術の新たな関係性を求めて」 水越伸（東京大学大学院情報学環准教授） 山内祐平（東京大学大学院情報学環准教授） 平川秀幸（大阪大学） 新井田統（KDDI 研究所）
2009. 11. 28 東京オペラシティ タワー	東京大学大学院情報学環×東京藝術大学大学院映像研究科 シンポジウム「第4回 メディア・アートとは何か？ 記号論で読み 解くメディア・アート入門」 藤幡正樹（東京藝術大学大学院映像研究科長） 石田英敬（東京大学大学院情報学環教授・学環長） 西兼志（東京大学大学院情報学環助教） クワクボリョウタ（アーティスト） 畠中実（ICC）
2009. 12. 14 福武ホール ラーニングシアター	シンポジウム「闘いとしての政治／信念としての政治」 野中広務（元自由民主党幹事長） 森達也（ドキュメンタリー作家） 姜尚中（東京大学大学院情報学環教授） 林香里（東京大学大学院情報学環教授） 北田暁大（東京大学大学院情報学環准教授）
2009. 12. 19 福武ホール ラーニングシアター	東京大学大学院情報学環×東京藝術大学大学院映像研究科×仏ポン ピドゥー・センターIRI 国際シンポジウム「第5回 メディア・アートとは何か？ ハイパー 産業時代のクリエイションとクリティーク」 ベルナル・スティグレル（ポンピドゥー・センター文化開発部 長 IRI 所長） 藤幡正樹（東京藝術大学大学院映像研究科長） 石田英敬（東京大学大学院情報学環教授・学環長）
2010. 2. 20 福武ホール ラーニングシアター	『しかし、それだけではない。 加藤周一 幽霊と語る』公開記念シ ンポジウム 桜井均（映画プロデューサー） 石田英敬（東京大学大学院情報学環教授・学環長）
2010. 2. 22 福武ホール ラーニングシアター	建築系連続トークイベント「建築の際」第6回「生命の際」 伊東豊雄（建築家） 福岡伸一（青山学院大学理工学部化学・生命科学科教授） 佐倉統（東京大学大学院情報学環教授）

2010. 3. 5-7 福武ホール ラーニングシアター	MELL EXPO 2010 李鳳宇（シネカノン代表） 小林弘人（インフォバーン CEO） 水越伸（東京大学大学院情報学環教授） 本橋春紀（メルプラッツ・オーガナイザー、BPO）
2010. 3. 23 福武ホール ラーニングシアター	大学研究室運営ワーキンググループ・ベネッセ先端教育技術学講座共催フォーラム 「研究推進と人材育成のポジティブな関係を考えるフォーラム」 佐倉統（東京大学大学院情報学環教授） 鈴木真二（東京大学工学研究科教授 兼 工学教育推進機構機構長） 小山清人（山形大学副学長・理事 兼 理工学研究科） 高橋真吾（早稲田大学大学院創造理工学研究科教授） 北村智（東京大学大学院情報学環特任助教） 宮野公樹（京都大学工学研究科マイクロエンジニアリング専攻特任講師）
2010. 3. 28 福武ホール ラーニングシアター	シンポジウム 高齢者介護施設におけるコミュニケーション・デザイン ー老年学、介護者の経験知、メディエーションが交差するところー 石崎 雅人（東京大学大学院情報学環教授） 秋山 弘子（東京大学高齢社会総合研究機構） ペート・バックハウス（日本ドイツ研究所） 田中 圭子（NPO日本メディエーションセンター） 渡辺 進一郎（明治安田生活福祉研究所）

【セミナー・講演会】	
2009. 5. 25 情報学環本館 2階教室	石崎研究室公開セミナー 「談話におけるジェスチャーと詩的特性」 片岡 邦好（愛知大学教授）
2009. 5. 28 情報学環本館 2階教室	石崎研究室公開セミナー 「インタビューと離見の見ーインタビューーとの間に、化学反応を起こすインタビュー術ー」 竹林 篤実（コミュニケーション研究所代表）

2009. 5. 29 福武ホール ラニングシアター	社会情報学基礎Ⅰ公開授業 「『光州5・18』上映会－韓国の「過去」と「現在」、そしてメディアを語る」 林香里（東京大学大学院情報学環教授） 真鍋祐子（東京大学大学院情報学環教授）
2009. 5. 30 せんだいメディア アテーク	第12回メル・プラッツ公開研究会 「地域を育む：地域のメディアと大学の役割」 関本英太郎（東北大学大学院情報科学研究科） 北村順生（新潟大学、メル・プラッツ運営メンバー） 佐藤和文（河北新報メディア局、地域SNS「ふらっと」運営） 水島久光（東海大学、メル・プラッツ運営メンバー）
2009. 6. 12 情報学環本館 2階教室	石崎研究室公開セミナー 「変化の形－ジェスチャーの時間構造を捉える－」 細馬 宏通（滋賀県立大学教授）
2009. 6. 27 工学部2号館 9階93室	第13回メル・プラッツ公開研究会 「ところ変われば品変わる！：ケータイの比較文化論」 ラリッサ・ヒョース（オーストラリア）、 金ヨニ（韓国）、 ミネルバ・テラデス（カタロニア）、 キム・ジリク（オーストラリア）、 水越伸（東京大学大学院情報学環教授）ほか
2009. 7. 6 情報学環本館 2階教室	石崎研究室公開セミナー 『「言語コミュニケーションデータ」を分析する』 熊谷 智子（国立国語研究所）
2009. 7. 31 関西大学 心斎橋オフィス	第14回メル・プラッツ公開研究会 「協働的メディア・リテラシーの可能性と課題：民放連メディアリテラシープロジェクト・セミナー2009」 村田麻里子（関西大学） 山内千代子（青森放送） 服部寿人（チューリップテレビ） 砂川浩慶（立教大学） 境真理子（桃山学院大学） 水越伸（東京大学大学院情報学環教授） ソフィア・ウー（吳翠珍：台湾政治大學）

2009. 10. 3 工学部 2 号館 9 階 93 室	第 15 回メル・プラッツ公開研究会 メディア・エキスポリモ シンポジウム 2009 : 『「情報があふれかえる社会」から「表現が編みあがる社会」へ』 須永剛司（多摩美術大学） 西村拓一（産業技術総合研究所）、 堀浩一（東京大学） 水越伸（東京大学大学院情報学環教授） 境真理子（桃山学院大学） 本橋春紀（BPO 放送倫理・番組向上機構）
2009. 10. 5 情報学環本館 2 階教室	堀研究室・石崎研究室共催博士トーク（公開） 「医療従事者を核として健康食品の安全な使用を実現するシステム の実証と考察」 朝比奈 泰子（東京大学大学院 学際情報学府 博士課程）
2009. 10. 8 福武ホール ラーニングシアター	大学院情報学環教育部「コンテンツサービス論」公開授業 「コンテンツ産業のプラットフォーム構造と超多様性市場」 出口弘（東京工業大学教授）
2009. 10. 13 福武ホール ラーニングスタジオ3	石崎研究室公開セミナー 「対人支援による紛争解決 —メディアーションにおけるコミュニ ケーション—」 田中 圭子（日本メディアーションセンター）
2009. 10. 19 情報学環本館 2 階教室	石崎研究室公開セミナー 「司法コンテクトにおける言語運用の課題」 首藤 佐智子（早稲田大学法学部）
2009. 10. 24 工学部 2 号館 9 階 93 室	第 16 回メル・プラッツ公開研究会 「デジタルメディアと遊び：放送、そしてミュージアム」 中谷日出（NHK 解説委員） 高宮由美子（子ども文化コミュニティ） 村田麻里子（関西大学） 加島卓（東京大学大学院情報学環助教）
2009. 10. 29 情報学環本館 2 階教室	石崎研究室公開セミナー 「裁判員裁判における評議コミュニケーション・デザインの試み」 高木 光太郎（青山学院大学社会情報学部）
2009. 11. 11 工学部 2 号館 9 階 93 室	林研究室「メディアと多元性（ダイバーシティ）」プロジェクト公開 講座 「私が見た被差別部落、メディア、日本」 角岡伸彦（ノンフィクションライター）

2009. 11. 16 情報学環本館 2階教室	石崎研究室・岡田研究室共催セミナー（公開） 「市民と大学をつなぐ：阪大サイエンスショップの挑戦」 山内 保典（大阪大学コミュニケーション・デザイン・センター）
2009. 11. 24 福武ホール ラウンジスタジオ3	石崎研究室・堀研究室共催セミナー（公開） 「医療従事者・患者は「医薬品情報」とどのようにつきあえば良いか？」 堀 里子（東京大学大学院情報学環／大学院薬学系研究科准教授）
2009. 12. 1・15・22 工学部2号館 9階93室ほか	石崎研究室 医療コミュニケーション連続セミナー 12. 1「診療場面での医師－患者コミュニケーション」 野呂 幾久子（慈恵医科大学医学部） 12. 15「DIPEX（ディペックス）：健康と病いの語りデータベース」 佐久間 りか（DIPEX-Japan 事務局） 12. 22「医療におけるコミュニケーションの課題」 吉岡 泰夫（別府大学大学院文学研究科）
2009. 12. 8 福武ホール ラウンジスタジオ3	石崎研究室・田中秀幸研究室共催セミナー 「行政におけるコミュニケーション～市民とのいい距離感を求めて～」 中村 俊二（宇治市役所 総務課）
2009. 12. 19 広島経済大学 立町キャンパス	第17回メル・プラッツ公開研究会 「地域文化とメディア実践～瀬戸内で育まれる協働コミュニティ～」 小笠原由季恵（子どもコミュニティネットひろしま代表理事） 飯田豊（福山大学専任講師） 土屋祐子（広島経済大学専任講師）
2010. 1. 30 神田外語大学ミ レニアムハウス	第18回メル・プラッツ公開研究会 メル・プラッツ&d' CATCH シンポジウム 「アジアの大学、リテラシーの環：d' CATCH 2010 シンポジウム」 ナナタン・ウォンバンデュ（タイ、チュラロンコン大学） フェイ・マテル（フィリピン、サント・トマス大学） ゼン・ジュンヤオ（中国、伝媒大学・南京校） ペク・ソンス（神田外語大学） 宇治橋祐之（NHK） 水越伸（東京大学大学院情報学環教授）

2010. 3. 5 福武ホール ラウンジシアター	ろっぽんプロジェクト活動報告会 「テレビは視聴者と協働できるのか」 水越伸（東京大学大学院情報学環教授） 鈴木裕美子（テレビ朝日お客様フロント部部长） 駒谷真美（昭和女子大学人間社会学部准教授） 境真理子（桃山学院大学国際教養学部教授） 水島久光（東海大学文学部教授） 古川柳子（テレビ朝日コンテンツビジネス局&東京大学大学院博士課程）
2010. 3. 9 工学部 2号館 9階 93室	メディア学フロンティア・芽の会 第3回公開研究会 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環教授） 里見 脩（四天王寺大学人文社会学部教授） 周東美材（東京大学大学院学際情報学府博士課程） 塚原康子（東京藝術大学音楽学部教授）
2010. 3. 15 千代田放送会館	ワークショップ 「始動するアーカイブ研究—テレビ・ドキュメンタリー史研究からの展望」 原由美子（NHK放送文化研究所） 東野真（NHK放送文化研究所） 東野真（NHK放送文化研究所） 丹羽美之（東京大学大学院情報学環准教授） 伊藤守（早稲田大学）ほか

【プロジェクト関連】	
「制作展」	
2009. 6. 11-16 工学部 2号館	東京大学大学院学際情報学府 制作展 「iii Exhibition Extra 2009」
2009. 12. 3-8 工学部 2号館 福武ホール	第11回東京大学大学院学際情報学府 制作展 「iii Exhibition 11」
「BEAT」ベネッセ先端教育技術学講座〔公開研究会〕	
2009. 6. 6 福武ホール ラウンジシアター	第1回 「2015年の学習環境を考える」

2009. 9. 5 福武ホール ラーニングシアター	第 2 回 「日本の教育×オープン・イノベーション：世界に貢献できる人財づくりと教育富国を目指して」
2009. 12. 5 福武ホール ラーニングシアター	第 3 回 「モバイル AR が拓く Place Based Learning の世界」
2010. 3. 27 福武ホール ラーニングシアター	第 4 回 「学習環境のソーシャルイノベーション：未来を拓く自律的人材の育成」
電通コミュニケーション・ダイナミクス寄付講座	
2009. 5. 27 工学部 2 号館 9 階 92 室	メディア研究のつどい 「ビジネスとしての Yahoo! ニュース」
2009. 10. 7 工学部 2 号館 9 階 93 室	メディア研究のつどい 「新聞社×NPO～『協働』の可能性」
記録映画アーカイブ・プロジェクト	
2009. 10. 18 福武ホール ラーニングシアター	第 2 回ワークショップ 「たのしい科学—岩波映画の理科教室—」
2010. 3. 14 福武ホール ラーニングシアター	第 3 回ワークショップ 「おかあさんの民主主義—岩波映画に見る昭和 30 年代の暮らし」

4.5 出版活動

2004 年の社会情報研究所との統合後は、社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな出版体制を整備しつつある。その中心となるのは、以下の 5 つの刊行物である。

- (1) 研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』（年 2 回刊）
- (2) 調査実験紀要『同 情報学研究・調査研究編』（年 1 回刊）
- (3) 英文紀要（オンライン論文サイト"iii Online Research Journal"への移行を検討中）
- (4) 年報『東京大学大学院情報学環年報』（年 1 回刊）
- (5) ニュースレター『学環 学府』

これらはいずれも、情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

表 4-5-1 情報学研究/同調査研究編の発行状況

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	
70号	2006年1月
71号	2006年3月
72号	2007年5月
73号	2008年1月
74号	2008年3月
75号	2008年8月
76号	2009年3月
77号	2009年8月
78号	2010年3月
情報学研究・調査研究編	
23号	2005年3月
24号	2007年3月
25号	2009年3月
26号	2010年3月

4.5.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

『情報学環紀要 情報学研究』は、2004年の情報学環と社会情報研究所との統合により、旧社会情報研究所の『社会情報研究所紀要』を改称したものである。

同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、新聞学、世論研究、マス・コミュニケーション論、ジャーナリズム、メディア史、マス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載し、半世紀以上にわたって国内外の専門研究者や学生に多くの影響を及ぼしてきた。

社会情報研究所と情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、情報学環での教育研究基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。このような視点から、『情報学環紀要 情報学研究』を、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公刊されていく場として位置づけた。

そのために、本紀要は、巻頭エッセイの「思考の環」、巻末の「フィールド・レビュー」をはじめ、情報学環教員の研究論文や学際情報学府博士課程院生の査読論文（博士課程在籍者の投稿論文は、外部査読者を含む複数の審査員による審査の上、掲載を許可している）などさまざまなセクションから複層的に構成されている。大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要は内外から高い評価を得ている。

4.5.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』

『情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』は、1992年から刊行されてきた『社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。

『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所におけるさまざまな社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。これらの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環と社会情報研究所との統合後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害行動の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果、文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育分野での実験、デジタル・アーカイブに関する諸実践、デザイン表現論などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表される媒体となっている。

2010年3月に刊行されたNo.26には、「ネット動画視聴、周囲のネット利用者環境、ワンセグテレビがテレビ視聴時間に及ぼす影響」「インターネット利用に伴う被害と不安」「廣井アーカイブスの開発研究」の3本の論文が掲載された。

4.5.3 『英文紀要』

『情報学環英文紀要』は、前記の『社会情報研究所紀要』が発展していく中で研究の国際化、グローバル化に対応して独立したものであった。『英文紀要』は、基本的には研究者の個人研究論文とともに、社会情報研究所で開催された国際的なシンポジウムなどの記録を収録していた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環・社会情報研究所の統合後は、情報、メディア、コミュニケーションをめぐるより広い学問分野の知見が掲載できるように体裁をあらため、和文紀要の一部に英語論文を掲載するとともに、英語のウェブサイトにも英語論文および和文論文の英訳を掲載している。

4.6 定期刊行物・ホームページ

4.6.1 定期刊行物

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に広く知ってもらうため、ニューズレター『学環学府』を年4回発行している。『学環学府』は、情報学環教職員や学生だけでなく、学内他部局や本部役員をはじめ、学環にゆかりのある学外教員、そのほか広報用として入試説明会、ホームカミングデー、学環来訪者などに随時配布している。内容は、教員へのインタビュー、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、各教員の書籍刊行情報など。2002年冬号から始まり、2009年度末までに通算29回発行した。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現しており、各方面から好評を得ている。ちなみに2009年度の表紙は、前年度までの多様な要素が混在した中間的色彩の柔らかなイメージを一新。毎回、強い印象を持つポップな一色によるベタ塗りの中に、『知恵の樹』など、この年から学環長に就任した石田英敬教授の研究に由来する素材をモチーフ

として墨一色で配した。濃いピンクの春号、青の夏号、黄色の秋号、そして黄緑の冬号まで、季刊の4号が並ぶと一層人々の目を惹きつける華やいだものとなった。

4.6.2 ホームページ

情報学環・学際情報学府では、主に教育・研究における活動を広く国内外に周知するために、ホームページを開設し非常に理解しやすい構造で情報を発信している。情報は、総合案内、教員・研究員、研究、教育、入学案内、刊行物・アーカイブ、附属研究施設、内部向け情報、などの項目に分け掲載されている。(URL アドレスは <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>)

まず、「総合案内」項目では、学環長からのメッセージとして、様々な学問分野を統合しく学びの環を構造的に組み込んだ学際的な大学院組織である情報学環のミッションを紹介し、また組織や沿革などの情報を案内している。

「教員・研究員」項目では、所属する教員の専門分野、メッセージ、各個人のホームページへのリンク、メールアドレスなどが記載されている。

「研究」項目では、各教員がリードする研究プロジェクトの概要と詳細な情報へのリンクと、また情報学環の教員が主催するシンポジウムへのリンク、および、旧社会情報研究所部門研究へのリンクが掲載され、研究内容・成果に関する情報が入手できるようになっている。

「教育」項目では、学際情報学府における5つの教育コースである、社会情報学コース、文化・人間情報学コース、学際理数情報学コース、総合分析情報学コース、アジア情報社会コースの紹介に加えて、情報学環教育部の紹介、授業一覧と時間割、また、オンライン遠隔教育の一環として **iii-online** という新しい試み、そして、過去の修士論文・博士論文のリストを掲載している。**iii-online** では、企画された **e-learning** のシリーズ講義をこのホームページから聴講することができる。

「入学案内」では、修士課程、博士課程、教育部学生、外国人研究生のそれぞれについての入学・入試情報が掲載されている。

「刊行物・アーカイブ」では、情報学環で発行しているニューズレター、年報・紀要、研究叢書、デジタル・アーカイブへのリンクを提供している。刊行物のデジタル・アーカイブや、ニューズレター『学環学府』のPDFファイルをダウンロードすることもできるようになっている。

この他、「附属研究施設」や「内部向けの情報」の項目もありそれぞれの内容を記載している。

また、これらの項目に含まれる各最新情報をショートカットでアクセスするためや、あるいは、情報学環関連のイベント情報、ニュース、などを紹介する **News & Events** のリンク、そして、入試などの重要情報へのショートカットを提供する **Hot Topics** のリンクなどをトップページに備え、迅速に利用者が最新情報へアクセスできることを可能にしている。

このように、「情報」を軸に連環している「百学連携」の情報学環にふさわしい情報の発信をめざすために、インターネットという普遍的な情報通信メディアを通じた種々の研究教育活動の紹介は、我々がもっとも力を入れて推進している広報活動の一つである。

4.7 国際交流

10月29日、30日に本校にてソウル大学言論情報研究所と合同で“Mapping the Spaces of Media Culture in Asia: Information, Communication and Politics”というテーマで国際シンポジウムを開催した。今年は6人の教員のほかに、ソウル大と東大の大学院生18人も発表を行った。発表や質疑応答はすべて英語で行い、全般的に大変刺激的な学術交流の場となった。さらに、オーストラリア国立大学からテッサ・モリス・スズキ教授、香港城市大学から李金銓教授もゲストスピーカーとして参加した。この両校とは、これを機に学術交流協定も取り交わした。また、ソウル大側とは今後一層の研究・教育協力関係の強化を約束するとともに、来年以降も引き続き両校の関係を軸としつつ多国間交流へと発展させていくことを合意した。

さらに、国際活動委員会は、本年度、東大全学国際化推進長期構想作成の一環として、情報学環も部局として「アジア情報社会のリーダー養成に向けて」というタイトルで国際化推進長期構想をまとめ、今後の国際化の長期的指針を策定した。

このほか、学環の教員はそれぞれに積極的に海外で研究調査活動を行ったり、学会やシンポジウムに参加したりしている。また、海外からの研究者を招聘して共同研究に取り組み、多彩なシンポジウムを主催している。今後とも、組織としても、また教員個人としても、多様な国々の多様な研究機関やその他の社会における交流を深めることが課題である。

II. 資料

1 沿革

(旧社会情報研究所)

1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室

1949年 東京大学新聞研究所

1992年 東京大学社会情報研究所に改組

東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

(大学院情報学環)

2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合

文化・人間情報学コース、社会情報学コース、学際理数情報学コース設置
社会情報研究資料センター設置

2006年 総合分析情報学コース設置

2008年 アジア情報社会コース設置

総合防災情報研究センター設置

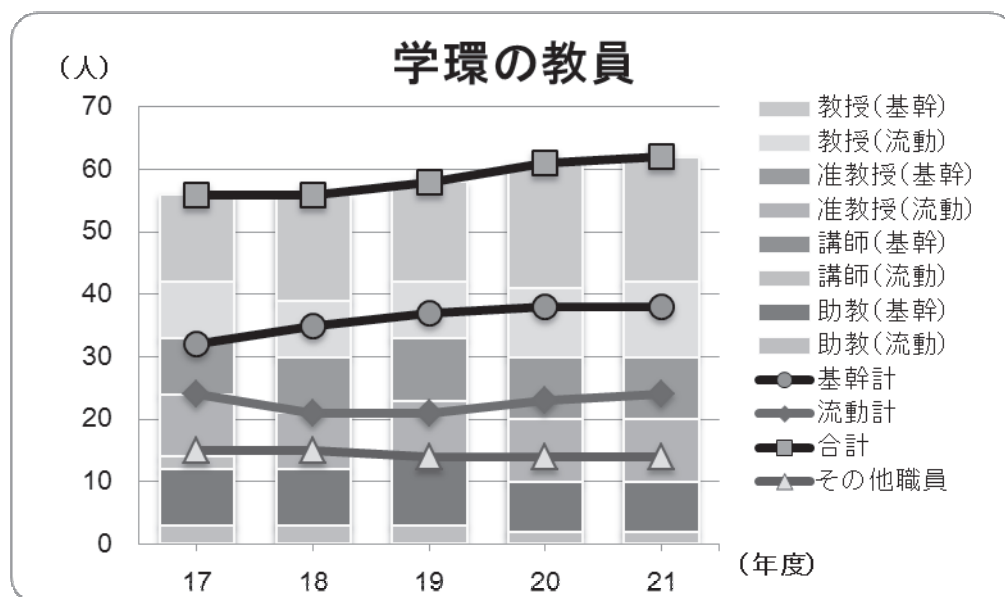
2009年 学際理数情報学コースが先端表現情報学コースへ変更

ユビキタス情報社会基盤研究センター設置

2 学環の教員（定員）

・情報学環(平成16年4月 社会情報研究所と合併)

年度	教授		准教授 (助教授)		講師		助教 (助手)		計		その他 の職員	
	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動		
17	14	9	9	10	0	2	9	3	32	24	56	15
18	17	9	9	9	0	0	9	3	35	21	56	15
19	16	9	10	9	0	0	11	3	37	21	58	14
20	20	11	10	10	0	0	8	2	38	23	61	14
21	20	12	10	10	0	0	8	2	38	24	62	14

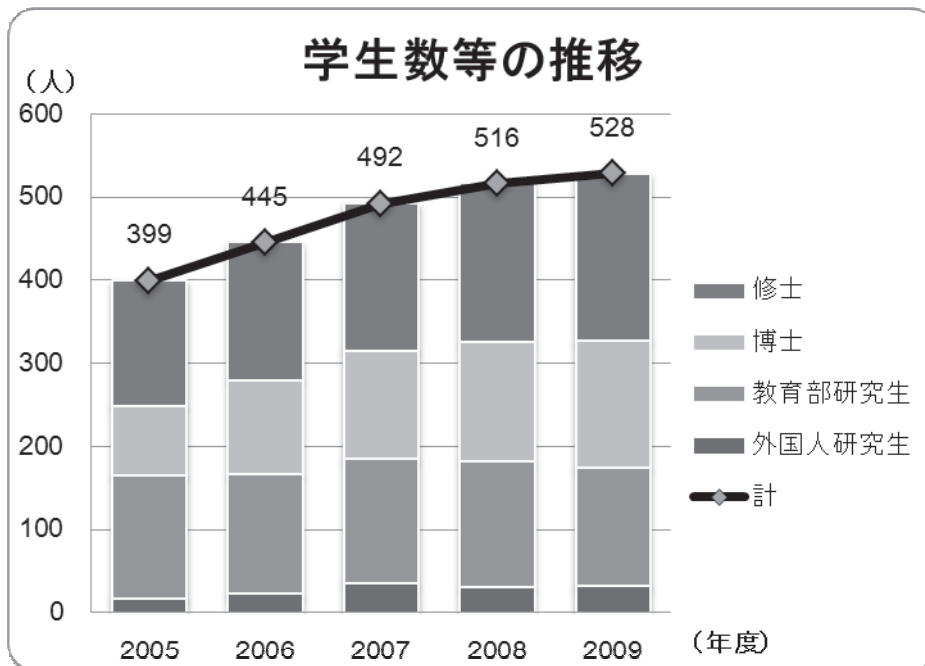


客員教員の状況

年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成 17	客員教授	フリアン クルマス	社会情報学特論Ⅱ	ドイツー日本研究所
	客員助教授	深尾 葉子	文化・人間情報学特論Ⅴ	大阪外国語大学外国語学部
	客員助教授	宇治橋 祐之		NHKエディケーション
平成 18	客員教授	佐藤 哲	文化・人間情報学特論Ⅷ	長野大学産業社会学部
	客員助教授	魏 晶玄	文化・人間情報学特論Ⅸ	ソウル(社)コンテンツ経営研究所
平成 19	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	奈良 高明		電気通信大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	大場 光太郎		産業技術総合研究所
	客員准教授	下畑 光夫	総合分析情報学特論Ⅸ	沖電気
	客員准教授	荒牧 浩二		(株)日立製作所中央研究所
平成 20	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
平成 21	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所

3 学府の学生数

	2005	2006	2007	2008	2009
修士	151	166	177	191	202
博士	83	113	130	144	152
教育部研究生	148	144	150	151	142
外国人研究生	17	22	35	30	32
計	399	445	492	516	528



4 教育部

教育部入学試験

平成 17(2005)年度から平成 21(2009)年度入学志願者数・受験者数・合格者数

年度	受入 予定 人員	日本人/ 外国人	志願者			受験者			合格者		
			本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計
平成 17(2005) 年度	約 50	日本人	90	47	137	79	46	125	43	12	55
		外国人	1	3	4	1	3	4	0	1	1
		計	91	50	141	80	49	129	43	13	56
平成 18(2006) 年度	約 50	日本人	81	32	113	79	30	109	47	8	55
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	81	33	114	79	31	110	47	8	55
平成 19(2007) 年度	約 50	日本人	74	36	110	72	35	107	34	16	50
		外国人	1	1	2	1	1	2	1	1	2
		計	75	37	112	73	36	109	35	17	52
平成 20(2008) 年度	約 50	日本人	55	45	100	54	44	98	40	17	57
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	55	46	101	54	45	99	40	17	57
平成 21(2009) 年度	約 50	日本人	69	50	119	67	49	116	42	9	51
		外国人	0	2	2	0	2	2	0	0	0
		計	69	52	121	67	51	118	42	9	51

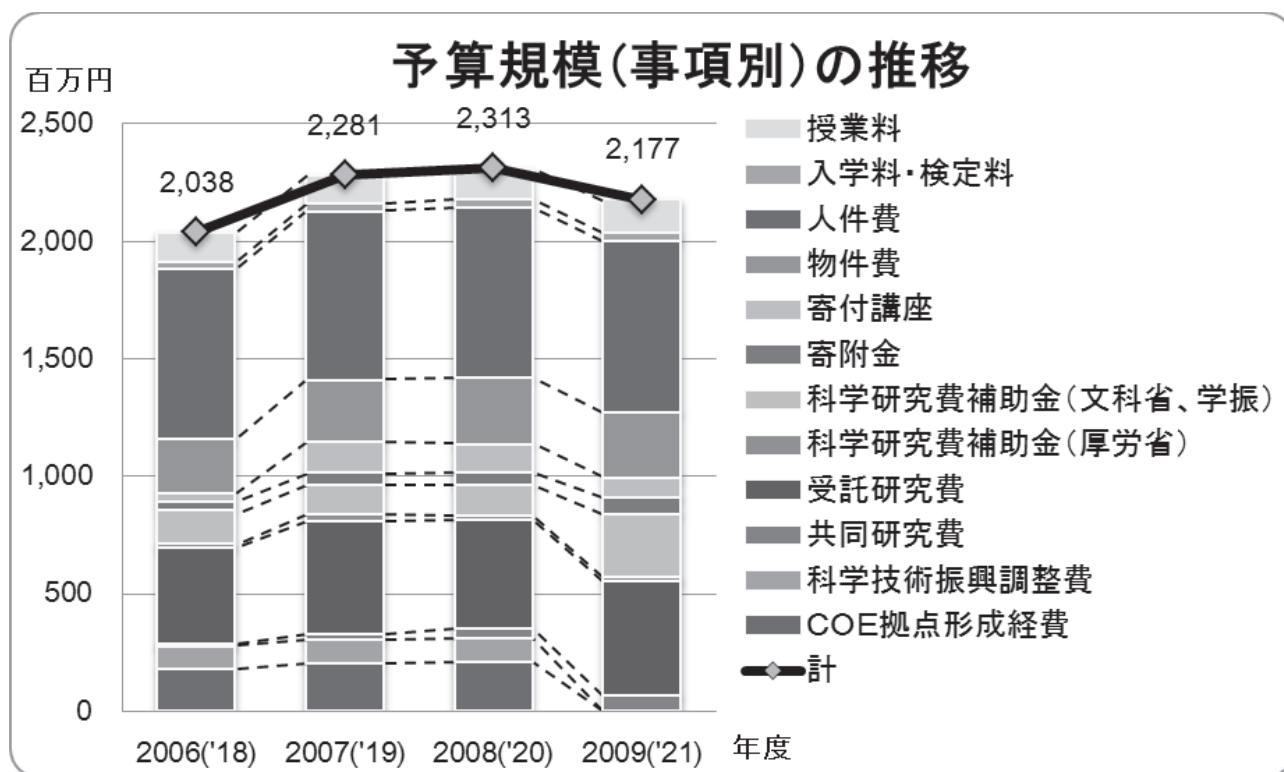
5 予算

・情報学環

	2006('18)		2007('19)		2008('20)		2009('21)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料	—	126,550,530	—	121,873,050	—	133,786,450	—	138,515,946
入学料・検定料	—	30,227,200	—	31,936,600	—	37,380,400	—	36,296,200
人件費	—	722,514,839	—	716,814,000	—	722,395,394	—	729,703,012
物件費	—	228,921,285	—	266,379,000	—	282,180,320	—	277,805,902
寄付講座	1	40,000,000	4	129,000,000	4	129,000,000	3	84,000,000
奨学寄附金	34	35,269,141	43	51,906,345	48	53,304,328	30	70,204,659
科学研究費補助金 (文科省、学振)*	36	142,525,000	30	122,820,000	29	132,484,000	40	271,080,000
科学研究費補助金 (厚生省)	5	17,000,000	4	33,800,000	5	17,700,000	5	17,200,000
受託研究費	16	407,165,816	17	477,480,000	20	461,522,898	27	486,887,690
共同研究費	7	10,985,000	13	26,671,000	23	44,918,683	41	64,951,858
科学技術振興調整費	1	99,998,000	1	97,999,605	1	99,499,848		
COE 拠点形成経費	1	177,180,000	1	204,600,000	1	208,890,000		

* 特別研究員奨励費は除く

(H19、20、21 物件費については、追加配分及び前年度からの目的積立金分を含む)



6 土地・建物面積

・建物

建物名	建築年度	面積（延㎡）
学環本館	S.27	472
	S.29	26
	S.33	360
	S.58	4,171
	計	5,029
暫定アネックス	H.13	1,013
工学部 2 号館	*H18	*500
目白台西 1 号館	*H18	*492
目白台西 2 号館	*H18	*545
第 2 本部棟	*H18	*548
福武ホール	H19	*3,241

*=使用年度・使用㎡数

（福武ホール面積については全学共用スペース分を除く）

・学外スペース

文京区本郷(フローラビル)	117.71 ㎡
---------------	----------

7 入試定数と受入数

	修士		博士	
	入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員
平成 17 (2005)	70	70	30	30
平成 18 (2006)	85	90	36	38
平成 19 (2007)	85	90	36	38
平成 20 (2008)	100	105	44	46
平成 21 (2009)	100	105	44	46

8 年度別入試データ詳細

修士

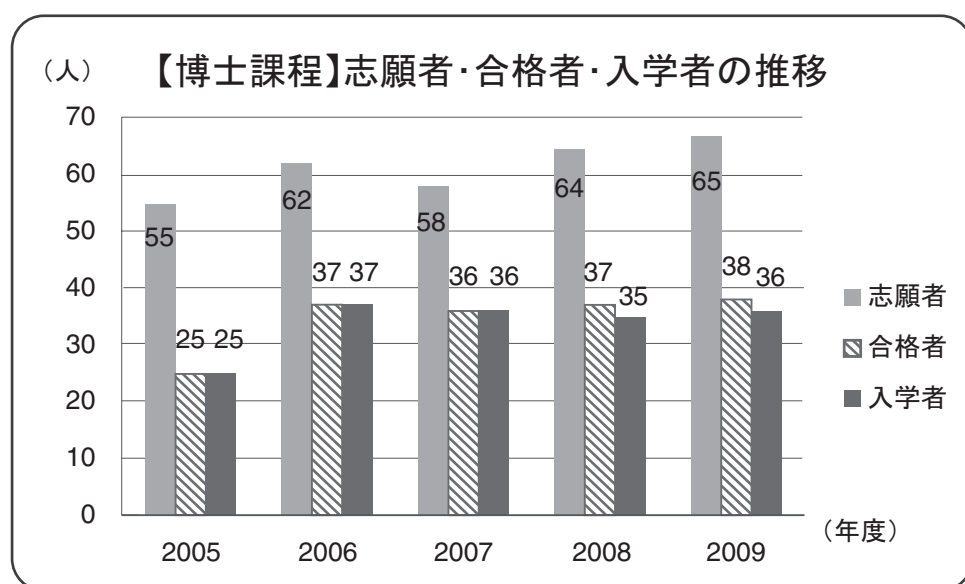
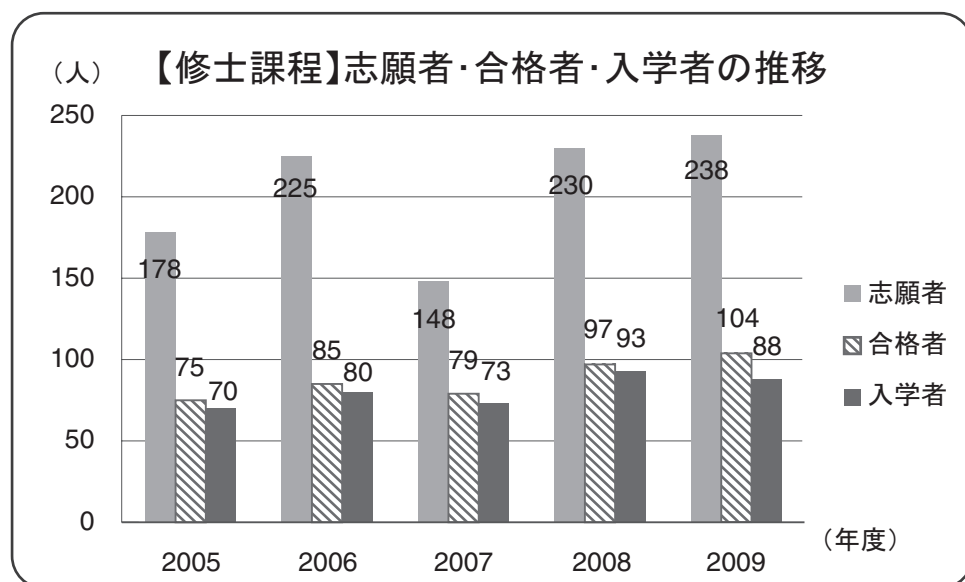
	2005	2006	2007	2008	2009
志願者	178	225	148	230	238
合格者	75	85	79	97	104
入学者	70	80	73	93	88

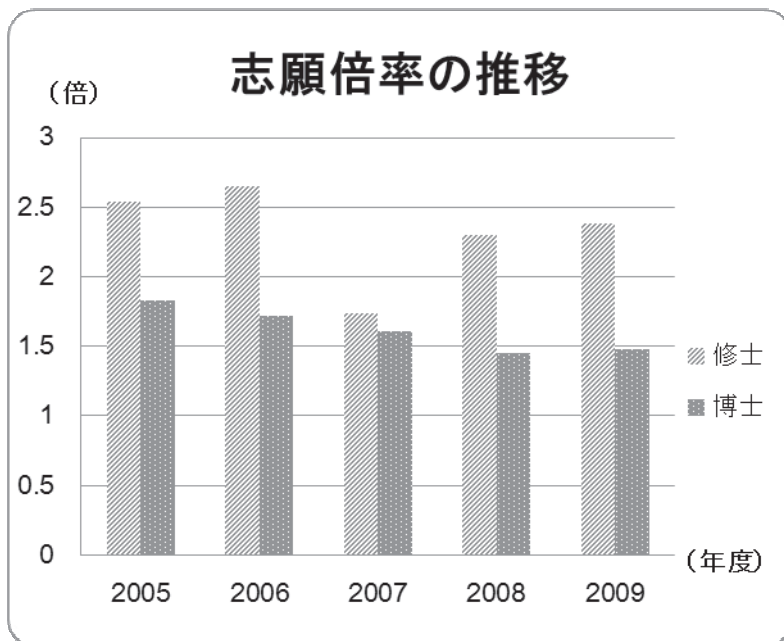
博士

	2005	2006	2007	2008	2009
志願者	55	62	58	64	65
合格者	25	37	36	37	38
入学者	25	37	36	35	36

志願倍率（志願者／入学定員）

	2005	2006	2007	2008	2009
修士	2.54	2.65	1.74	2.30	2.38
博士	1.83	1.72	1.61	1.45	1.48





2009 年度修士入学試験詳細

志願者

本学	43
他大学	195
238	

合格者

本学	29
他大学	75
104	

入学者

本学	23
他大学	65
88	

志願者

日本人	181
外国人	57
238	

合格者

日本人	73
外国人	31
104	

入学者

日本人	65
外国人	23
88	

志願者

男	158
女	80
238	

合格者

男	64
女	40
104	

入学者

男	54
女	34
88	

志願者

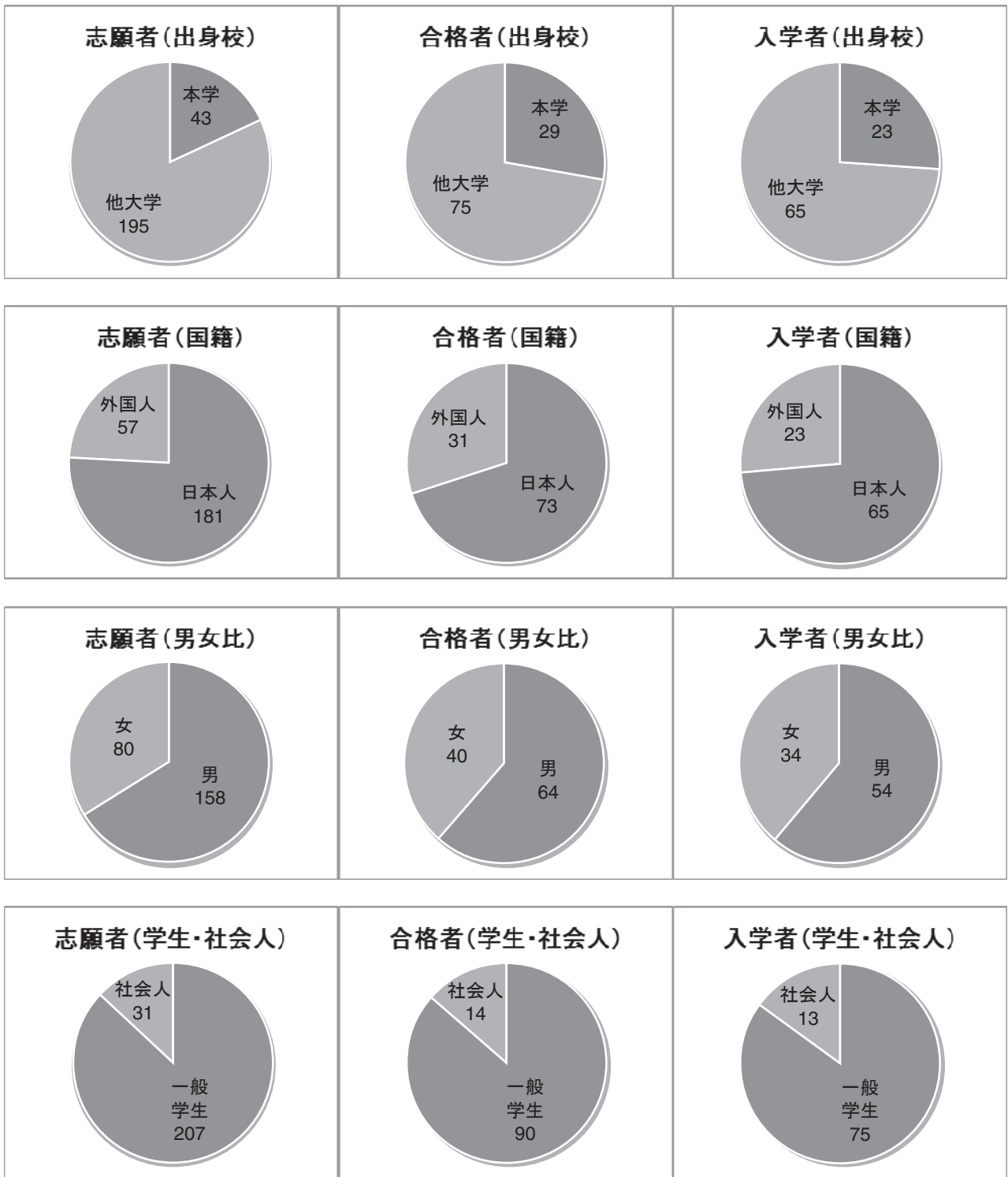
一般学生	207
社会人	31
238	

合格者

一般学生	90
社会人	14
104	

入学者

一般学生	75
社会人	13
88	



2009 年度博士入学試験詳細

志願者

本学府	34
他大学院	31
65	

合格者

本学府	25
他大学院	13
38	

入学者

本学府	25
他大学院	11
36	

志願者

日本人	37
外国人	28
65	

合格者

日本人	21
外国人	17
38	

入学者

日本人	21
外国人	15
36	

志願者

男	36
女	29
65	

合格者

男	17
女	21
38	

入学者

男	16
女	20
36	

志願者

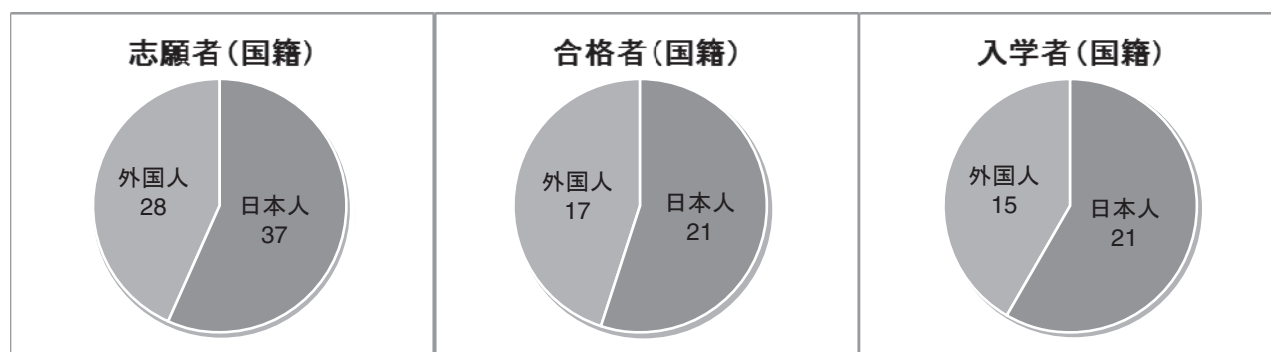
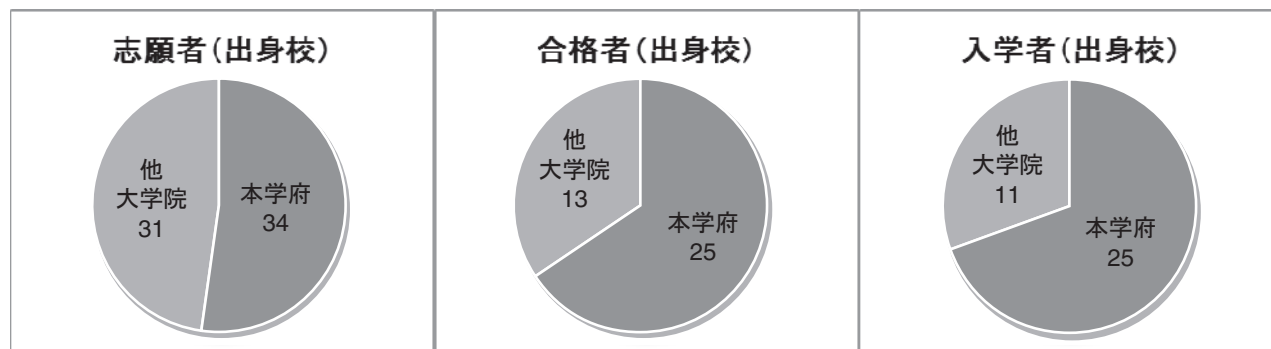
一般学生	56
社会人	9
65	

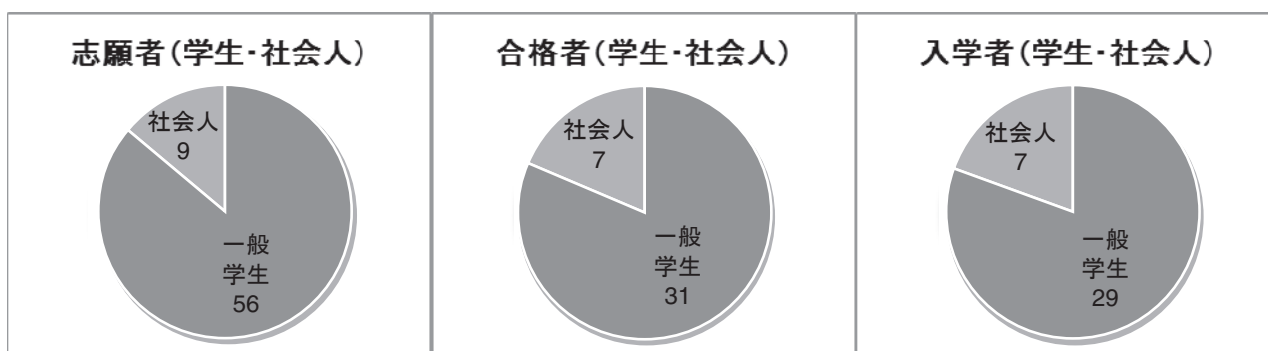
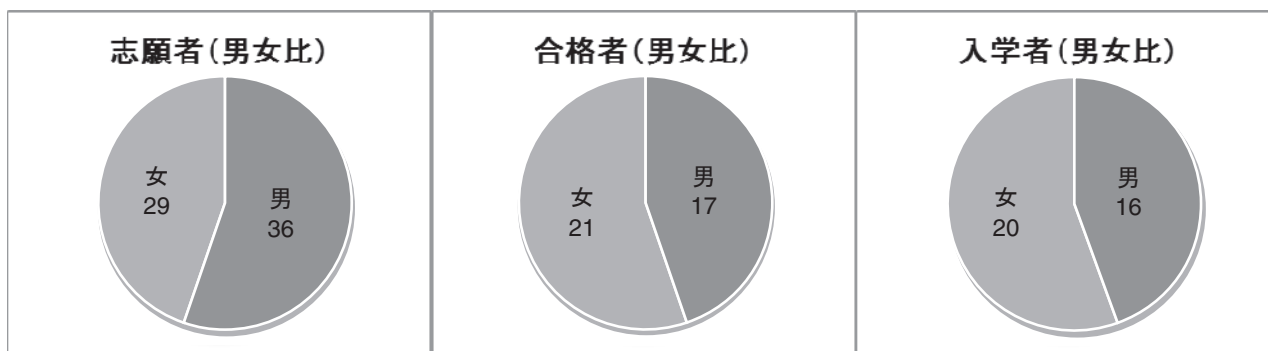
合格者

一般学生	31
社会人	7
38	

入学者

一般学生	29
社会人	7
36	



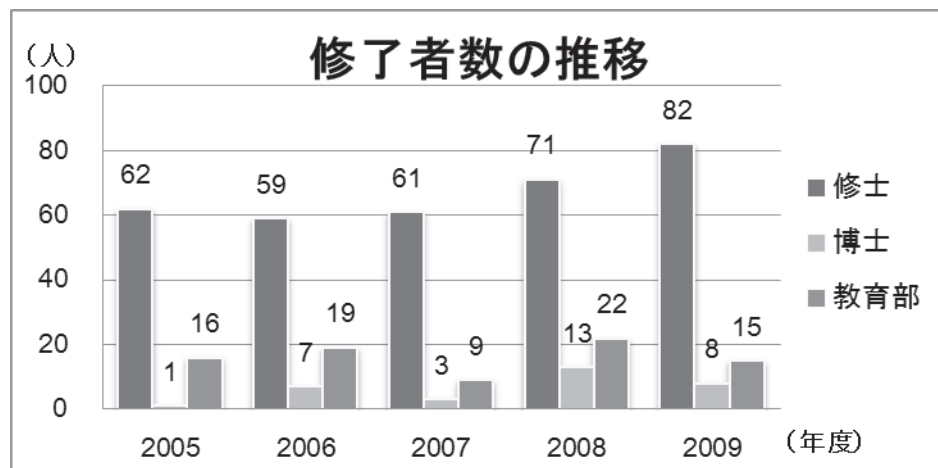


9 修了者数の推移

平成 17(2005)年度から平成 21(2009)年度修了者数(教育部研究生)

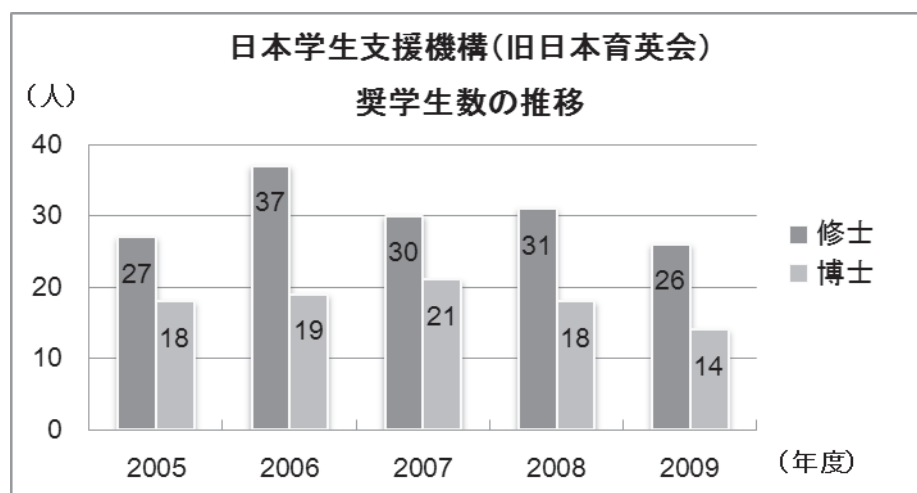
年度		修了者		
		本学	他大学	計
平成 17(2005)年度	日本人	5	11	16
	外国人	0	0	0
	計	5	11	16
平成 18(2006)年度	日本人	8	10	18
	外国人	0	1	1
	計	8	11	19
平成 19(2007)年度	日本人	3	6	9
	外国人	0	0	0
	計	3	6	9
平成 20(2008)年度	日本人	17	5	22
	外国人	0	0	0
	計	17	5	22
平成 21(2009)年度	日本人	9	6	15
	外国人	0	0	0
	計	9	6	15

	2005	2006	2007	2008	2009
修士	62	59	61	71	82
博士	1	7	3	13	8
教育部	16	19	9	22	15



10 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種		第二種		合計	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2005	16	17	11	1	27	18
2006	21	18	16	1	37	19
2007	20	15	10	6	30	21
2008	21	15	10	3	31	18
2009	20	13	6	1	26	14

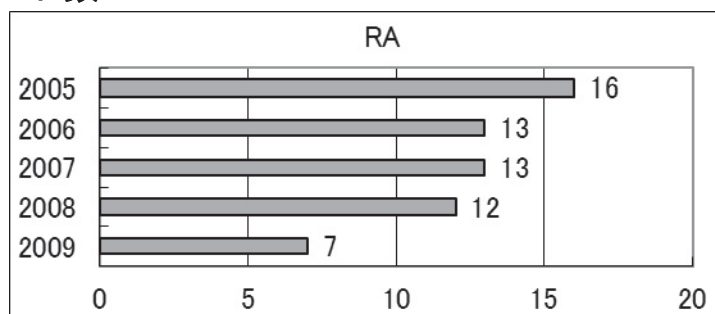


11 日本学術振興会特別研究員数

	DC 1	DC 2	合計
2005	1	0	1
2006	4	2	6
2007	1	10	11
2008	5	8	13
2009	5	12	17

12 リサーチアシスタント数

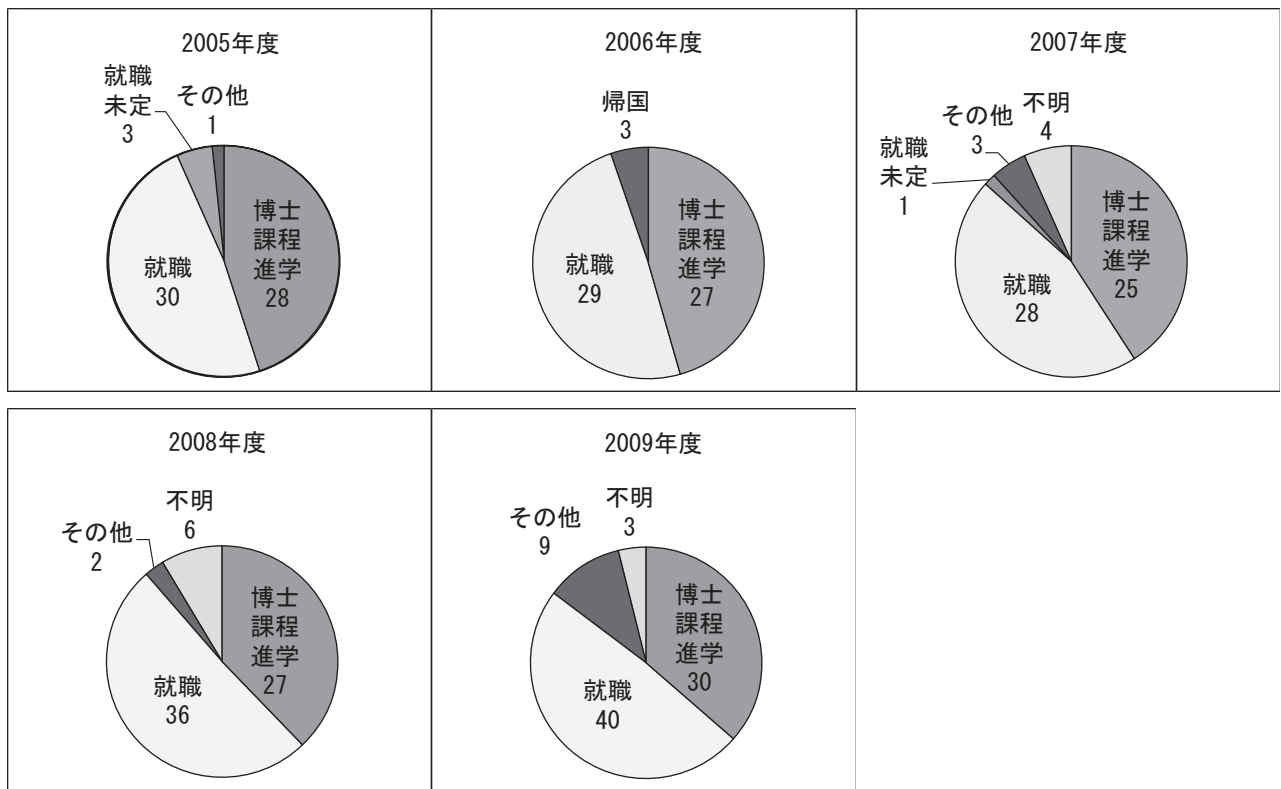
	RA
2005	16
2006	13
2007	13
2008	12
2009	7



13 就職状況

学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料 (2005年度～2009年度)

区分		2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度
博士課程進学	学際情報学府	27	25	22	25	27
	学内他研究科	1		2	1	1
	学外		2	1	1	2
海外留学						
就職		30	29	28	36	40
大学院研究生	学際情報学府					
	学内他研究科					
帰国(外国人留学生)			3			
就職未定		3		1		
その他		1		3	2	9
不明				4	6	3
合計		62	59	61	71	82



<就職先一覧>

2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度
(株)三菱総合研究所	(株)電通	(株)野村総合研究所	(株)日本アイ・ビー・エム	(株)電通
(株)ワークスアプリケーションズ	(株)リクルート	(株)三菱東京UFJ銀行	(株)マイクロソフト	(株)NTT データ
(株)ビービット	倉敷市立短期大学	(株)日本電信電話	(株)IBM ビジネスコンサルティングサービス	(株)ソニー
(株)takibi	(株)フロム・ソフトウェア	(株)リード エグジビション ジャパン	(株)NEC エンジニアリング	東京大学
(株)東日本旅客鉄道	(株)コスモスペース	(株)IBM ビジネスコンサルティングサービス	(株)NTT ソフトウェア	(株)任天堂
(株)スタジオジブリ	(株)日本アイ・ビー・エム・サービス	(株)ツアイト・フォート	(株)NTT 東日本	(株)Buffer Renaissance
(株)ソニー・エリクソン・モバイルコミュニケーションズ	(株)アイ・ビー・エム・システムズ・エンジニアリング	(株)JM	(株)アクセンチュア・テクノロジー・ソリューションズ	(株)NTT ソフトウェア
(株)日立製作所	(株)モルガン・スタンレー証券	(株)中日新聞社	(株)ソフトバンク	(株)Sight Entertainment Japan

(株)楽天	1	(株)沖電気工業	1	(株)思文閣	1	(株)テレビ朝日	1	(株)シリコンスタ ジオ	1
(株)ベネッセコー ポレーション	1	(株)凸版印刷	1	(株)いまじん	1	(株)日本技芸	1	(株)りそな銀行	1
(株)竹中工務店	1	(株)インフォバー ン	1	(株)松下電器産 業	1	(株)ベネッセコー ポレーション	1	(株)楽天	1
(株)日本テレビ 放送網	1	(株)プラップジャ パン	1	(株)ソニー	1	(株)ミキハウス	1	(株)ACCESS	1
(株)アクセンチュ ア	1	(株)ヒューマンル ネッサンス研究 所	1	(株)日立システ ム アンド サー ビス	1	(株)モリサワ	1	(株)NTTドコモ	1
学校法人駿河 台学園	1	(株)野村総合研 究所	1	(株)グーグル	1	(株)リサ・パート ナーズ	1	(株)アクセンチュ ア	1
(株)アイ・ティ・フ ロンティア	1	(株)セイコーイン スツル	1	(株)ソネットエン タテイメント	1	(株)ソラン	1	(株)サイバーエ ージェント	1
(社)共同通信社	1	(株)日本総合研 究所	1	(株)三菱総合研 究所	1	(株)大和証券 SMBC	1	(株)シオン	1
(株)ソフトバンク クリエイティブ	1	(株)日本電信電 話	1	(株)内田洋行	1	台湾銀行	1	(株)シグマクス ス	1
(株)日経ホーム 出版社	1	(株)ゴールドマン・ サックス証券	1	(株)任天堂	1	立川市役所	1	(株)スクウェア・ エニックス	1
淑徳与野高等 学校	1	(株)名古屋鉄道	1	(株)富士通	1	(株)テックファー ム	1	(株)チャイナ・コ ンシエルジュ	1
(株)東芝	1	(株)NTT コミュニ ケーションズ	1	(株)ナブテスコ	1	東京藝術大学 教育研究助手	1	(株)日本政策金 融公庫	1
(株)三井物産	1	日本生命保険 相互会社	1	(株)d Space Japan	1	徳島文理大学	1	(株)三菱総研 DCS	1
(株)野村アセット マネジメント	1	(株)アイ・エム・ ジェイ	1	(株)TBS テレビ	1	(株)日本航空イ ンターナシヨナ ル	1	(株)三菱電機	1
(株)読売新聞	1	(株)ACCESS	1	(株)NTT コミュニ ケーションズ	1	日本放送協会	1	(株)新日本製鉄	1
(株)博報堂DYメ ディアパートナ ーズ	1	(株)BOSCH	1	(株)トヨタ自動車	1	(株)根本特殊化 学	1	(株)直島福武美 術館財団	1
(株)電通	1	フリープランナ ー・ライター	1	(株)パスコ	1	(株)ブーズ・アン ド・カンパニー	1	(株)日本アイ・ビ ーエム	1
自由業	2	NPO 法人日本 臨床研究支援 ユニット	1			(株)フォスター電 機	1	(株)日本テレビ	1
特定非営利活 動法人役員 その他(就職先 不明)	1	日本放送協会	1			(株)丸善	1	日本放送協会	1
						(株)朝日新聞社	1	農林中央金庫	1
						(株)かんぼ生命 保険	1	(株)博報堂アイ スタジオ	1
						(株)新潮社	1	(株)富士通	1

			(株)電通レイザーフィッシュ	1	(株)豊田中央研究所	1
			(株)日本経済新聞社	1	(株)野村総合研究所	1
			(株)野村総合研究所	1	福山大学	1
					(株)エリプスガイド	1

14 研究員（客員）等

情報学環

事項／年度	17	18	19	20	21
受託研究員	2	2	0	0	0
中国政府派遣研究員	1	1	0	1	0
客員研究員	1	3	6	7	22
外国人研究員	4	7	5	5	7
内地研究員	0	0	0	0	0
外国人研修員	9	8	10	9	4
交流研究員	4	4	2	2	3
私学研修員	0	1	1	0	0

15 学会賞など受賞者リスト

- ・河口洋一郎「CG JAPAN AWARD」芸術科学会
- ・大島まり「可視化情報の科学・技術に関する学術集会・事業遂行ならびに学術の向上への多大な貢献」可視化情報学会設立 20 周年功労賞、社団法人 可視化情報学会
- ・越塚登「国際活動奨励賞」日本 ITU 協会賞、日本 ITU 協会
- ・暦本純一「Temporal Phase Shift: 時間位相差を持つプロジェクションシステムによる錯視現象とそのモデル化」WISS2009 発表賞、日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェア研究会
- ・加島卓「「デザインを語ることは不可能なのか」、祖父江慎・藤田重信・加島卓・鈴木広光『文字のデザイン、書体のフシギ』左右社、2008 年、pp.88-131」第 7 回竹尾賞（デザイン評論部門）、株式会社竹尾
- ・辻本篤「情報文化学における人間系分野の組織文化の研究」情報文化学会 学会賞、情報文化学会
- ・Makoto Miwa「Honorable Mention Award」3rd International Symposium on Languages in Biology and Medicine (LBM 2009)
- ・MOCHIZUKI,T., OURA,H., SATO,T., NISHIMORI,T., TSUBAKIMOTO,M., NAKAHARA,J., YAMAUCHI,Y., HENRIK,J., MATSUMOTO,K., WATANABE,S., and MIYATANI,T. 「eJournalPlus: Development of a Collaborative Learning System for Constructive and Critical Reading Skills」Awarded Paper(ベストテクノロジーデザイン賞)、CSCL09

- ・大谷智子「色誘導の空間的波及効果に関する一実験－視覚的注意の空間的波及効果を考慮して－」第13回日本色彩学会論文奨励賞、日本色彩学会
- ・岡崎直観「高速な類似文字列検索アルゴリズムと自然言語処理への応用」奨励賞
- ・岡崎直観「高速な類似文字列検索アルゴリズム」情報処理学会第72回全国大会大会奨励賞
- ・田中翔平「Wikipedia からの要約生成パターンの抽出」情報処理学会第72回全国大会学生奨励賞
- ・唯野隆一，山崎俊彦，相澤清晴「スケルトンを用いた Time-Varing Mesh からの動き抽出と類似動作検索」映像情報メディア学会 丹羽高柳論文賞、映像情報メディア学会
- ・唯野隆一，山崎俊彦，相澤清晴「スケルトンを用いた Time-Varing Mesh からの動き抽出と類似動作検索」第25回電気通信普及財団賞（テレコムシステム技術賞）、電気通信普及財団賞
- ・和田明菜，川上玲，工藤俊亮，池内克史，小町谷圭，三浦高宏，松井茂，藤幡正樹「対象物と照明環境の実測値を用いた絵画における陰影表現の解析」最優秀賞、情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究会
- ・松久亮太，川崎洋，小野晋太郎，阪野貴彦，池内克史「複数系列の車載全方位カメラ画像の対応付けによる広域都市モデル構築」インタラクティブセッション賞、MIRU2009 第12回 画像の認識・理解シンポジウム
- ・栗林宏輔，川崎洋，小野晋太郎，池内克史「移動カメラ映像の障害物除去のための時空間画像フィルタの提案」インタラクティブセッション賞、MIRU2009 第12回 画像の認識・理解シンポジウム
- ・劉玉宇，佐藤洋一「音と映像の相関分析に基づく移動音源特定」学生優秀論文賞、画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)
- ・岡部孝弘，佐藤いまり，佐藤洋一「陰に基づく符号化による未知の反射特性・光源方向における法線推定」優秀論文賞、画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)
- ・米澤香子，味八木崇，暦本純一「Cat@Log: Human Pet Interaction のための猫ウェアラブルセンシング」WISS2009 So-net 賞、日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェア研究会
- ・Daniel Andrade Silva 「IBM Ph.D. Scholarship」 IBM Watson Research Center
- ・松崎拓也，呉先超「Semantics-Based Reordering」Microsoft 奨学寄附金、Microsoft Research Asia

16 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
1999年度以前	323	1	0
2000年度	645	48	14
2001年度	654	49	18
2002年度	916	98	53
2003年度	949	107	54
2004年度	904	122	83
2005年度	846	232	91
2006年度	982	149	24
2007年度	947	45	17
2008年度	1100	47	6
2009年度	1002	125	22
年度不明	34	0	0

注：業績 DB 入力データに基づく各年度の論文数(著書，分担著書，雑誌論文，国際会議論文，その他の論文，講演発表)

17 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2000年度	6	0
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
2005年度	1	3
2006年度	2	1
2007年度	3	1
2008年度	4	2
2009年度	5	5
合計	40	25

18 国際団体役員・委員数

	学術的な団体の役員・委員*1	その他の団体役員・委員等*2
2007年度	10	4
2008年度	13	1
2009年度	16	1

*1 「学会・会議等役職」のうち「国際性有」かつ「学会役員委員」であるもの

*2 「団体役員・委員」のうち国際的なもの

19 政府関係委員会委員数

	2007年度	2008年度	2009年度
内閣官房		10	6
内閣府	7	9	9
総務省	11	7	19
経済産業省	2	8	8
文部科学省	11	9	7
厚生労働省	1	3	1
国土交通省	6	6	3
農林水産省	0	1	0
環境省	0	1	0
宮内庁	0	1	1
文化庁	1	2	3
特許庁	2	1	0
人事院	0	1	0
日本学術会議	1	1	0
その他	3	10	0
政府全体	45	70	57

20 地方公共団体関係委員会委員数

	2007年度	2008年度	2009年度
都道府県	8	7	6
市区町村	2	7	5
地方公共団体関係全体	10	14	11

21 ジャーナル編集・会議運営

	学会誌等編集査読*1	学術大会等運営*2
件数	37	37
うち国際的なもの	27	18

注：国内外の学会活動(学術誌編集委員，会議運営委員など) 注：2009年度のみ

*1 「学会・会議等役職」のうち「ジャーナル編集査読」であるもの

*2 「学会・会議等役職」のうち「大会組織運営」であるもの

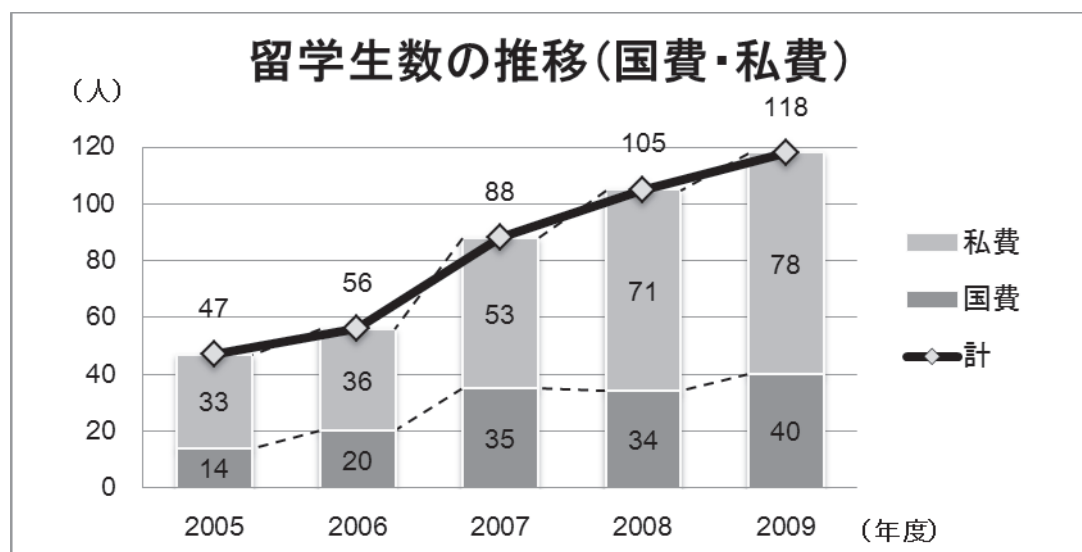
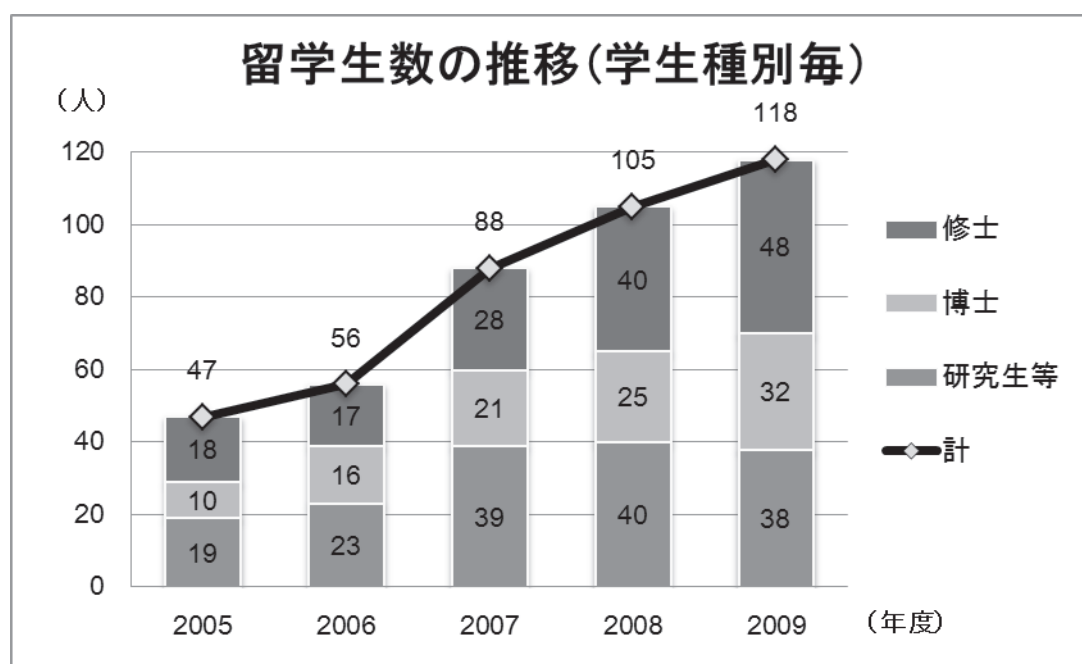
22 定期刊行物一覧

- ・『情報学研究 調査研究編』No.26 (2010年3月)
- ・『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 No.77 (2009年8月)，No.78 (2010年3月)
- ・ニューズレター『学環学府』No.25 (2009年5月)、No.26 (2009年7月)、No.27 (2009年10月)、No.28 (2010年2月)

23 留学生数の推移

各年度5月1日現在

年度	修士		博士		外国人 研究生等		教育部 研究生	合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	私費	国費	私費	
2005	5	13	3	7	6	11	2	14	33	47
2006	5	12	7	9	8	14	1	20	36	56
2007	12	16	8	13	15	23	1	35	53	88
2008	13	27	7	18	14	24	2	34	71	105
2009	15	33	13	19	12	24	2	40	78	118



24 留学生国籍別一覧

国又は地域	国費	私費	計
アジア			
パキスタン	1		1
インド	1		1
バングラデシュ	1	1	2
タイ	2	1	3
マレーシア	1	2	3
シンガポール	1		1
インドネシア		2	2
中国（香港）	1	1	2
韓国	6	18	24
中国	5	29	34
台湾		16	16
小計	19	70	89
中近東			
トルコ	2		2
小計	2	0	2
アフリカ			
チュニジア	2		2
コンゴ民主共和国		1	1
小計	2	1	3
オセアニア			
オーストラリア	4	1	5
小計	4	1	5
北米			
カナダ	1		1
アメリカ合衆国	1	1	2
小計	2	1	3
中南米			
ブラジル	4		4
アルゼンチン	1		1
ベネズエラ	1		1
小計	6	0	6
ヨーロッパ			
イギリス	1		1
ドイツ		1	1
フランス		1	1
スペイン	1		1
スイス		1	1
チェコ	1		1
ルーマニア		1	1
ブルガリア		1	1
ロシア	1		1
クロアチア	1		1
小計	5	5	10
合計	40	78	118

Ⅲ. 個人業績編

平成 22 (2010) 年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび 2009 年度の研究業績を、各自が確認したデータベースの入力内容に基づき、収録しています。教員の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の 50 音順となっています。

1. 教授
2. 准教授
3. 講師
4. 助教
5. 客員准教授
6. 特任准教授
7. 特任講師
8. 特任助教
9. 特任研究員

相澤 清晴・教授

研究テーマ(主たるもの)

ライフログ

3次元映像

研究業績(2009年度)

分担著書

相澤清晴 他:「電子情報通信分野 科学技術・研究開発の国際比較 2009年版」, 科学技術振興機構 研究開発戦略センター 編, 科学技術振興機構, 2009年.

廣瀬通孝、相澤清晴、苗村健、谷川智洋、飯田誠、鈴木康広、西村邦裕、山崎俊彦、上條桂子:「Digital Public Art Project 空気の港～テクノロジー×空」, Digital Public Art Project 編, 美術出版社, 2010年.

雑誌論文

G.C.De Silva, T.Yamasaki, K.Aiazawa: "Sketch-based Spatial Queries for the Retrieval of Human Locomotion Patterns in Smart Environments", *Advances in Multimedia*, Vol. 2009, 2009年. 【査読有】

G.C.De Silva, T.Yamasaki, K.Aiazawa: "Sketch Based Spatial Queries for Retrieving Human Locomotion Patterns from Continuously Archived GPS Data", *IEEE Trans. Multimedia*, Vol. 11, No.7, pp.1240-1253, 2009年. 【査読有】

山崎俊彦、浜崎祐樹、相澤清晴:「Time-Varying Mesh の位相変化検出とインタラクティブなメッシュ編集」, *映像情報メディア学会誌*, Vol.63, No.4, pp.516-523, 2009年. 【査読有】

相澤清晴:「メディアと人」, *映像情報メディア学会誌*, Vol. 64, No. 1, pp.17-18, 2009年.

相澤清晴:「ライフログ ～役に立つために～」, *映像情報メディア学会誌*, Vol.63, No.4, pp.445-448, 2009年.

Jianfeng Xu, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Temporal Segmentation of 3D Video By Histogram-Based Feature Vectors", *IEEE Trans. Circuit and Systems for Video Technology*, Volume 19, Issue 6, pp.870-881, 2009年. 【査読有】

相澤清晴:「実践的ライフログ:食事ログからの展開」, *情報処理学会*, Vol.50, No.7, pp.590-597, 2009年.

山崎俊彦、前田崇、中川卓、相澤清晴:「スケルトンによる Time-Varying Mesh の動き抽出と合成」, *映像情報メディア学会誌*, Vol.63, No.10, pp.1459-1466, 2009年. 【査読有】

宮脇健三郎、尾関基行、木村穰、相澤清晴、北村圭吾、山崎俊彦、森麻紀、武川直樹:「食べる」, *電子情報通信学会誌「生活に役立つメディア処理 —料理行動を科学する—」小特集*, Vol. 93, No.1, pp.48-54, 2010年.

畑田晃希, 河治寿都, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「ユーザの閲覧履歴を利用したライフログデータの要約」, 映像情報メディア学会, Vol.64, No.2, pp.237-240, 2010 年. 【査読有】

作品

オウグオストルク, 松濤智明, 富樫政徳, 大谷智子, 山崎俊彦, 相澤清晴, 鈴木康弘: 「未来の足跡」, 空気の港 (デジタルパブリックアート羽田空港展), 2009.

松村成朗, 富樫政徳, 大谷智子, 山崎俊彦, 相澤清晴, 鈴木康弘: 「自針と分針」, 空気の港 (デジタルパブリックアート羽田空港展), 2009.

相澤清晴, 北村圭吾, 丸山悠斗: 「FoodLog」, IMLオープンハウス, 2009.

松村成朗, 富樫政徳, 大谷智子, 山崎俊彦, 相澤清晴, 鈴木康弘: 「自針と分針」, 今ドキッの IT@御殿下記念館 2010、情報処理学会創立 50 周年記念 全国大会第 72 回全国大会, 2010.

相澤清晴他: 「戦略的創造研究推進事業 (CREST) 「食」に関わるライフログ共有技術基盤」, 今ドキッの IT@御殿下記念館 2010、情報処理学会創立 50 周年記念 全国大会第 72 回全国大会, 2010.

澤田耕司, 富樫政徳, 大谷智子, 山崎俊彦, 相澤清晴, 鈴木康弘: 「風見鶏」, 空気の港 (デジタルパブリックアート羽田空港展), 2010.

国際会議等

Kiyoharu Aizawa: "Compression of 3D Video: Various Approaches to Compress Time Varying Meshes (invited)", 3DSA(3D Systems and Applications), 2009. 【査読有】

Daisuke Kasai, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Retrieval of Time-Varying Mesh And Motion Capture Data Using 2D Video Queries Based on Silhouette Shape Descriptors", IEEE International Conference on Multimedia and Expo (ICME2009), 2009. 【査読有】

Go Irie, Kota Hidaka, Takashi Satou, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Affective Video Segment Retrieval For Consumer Generated Videos Based on Correlation Between Emotions And Emotional Audio Events", IEEE International Conference Multimedia and Expo (ICME2010), 2009. 【査読有】

Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "A Euclidean-Geodesic Shape Distribution For Retrieval of Time-Varying Mesh Sequences", IEEE International Conference on Multimedia and Expo (ICME2009), No.MDFS-L2.3, pp.846-849, 2009. 【査読有】

Go Irie, Kota Hidaka, Takashi Satou, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "A Degree-of-Edit Ranking For Consumer Generated Video Retrieval", IEEE International Conference on Multimedia and Expo (ICME2009), No.MA-L4.3, pp.1242-1245, 2009. 【査読有】

Gamhewage Chaminda de Silva, Kiyoharu Aizawa: "Visual Querying with Iconic Sketches for Face Image Retrieval", HCI International 2009, 2009. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa: "R&D strategies of Industry in Asia Pacific Area", APSIPA Summit and Conference 2009, 2009. 【査読有】

Toshihiko Yamasaki, Kentaro Yamada, Kiyoharu Aizawa: "Time-Varying Mesh Generation Based on Iterative Feedback between Silhouette Extraction and Geometry Modeling (invited)", APSIPA Summit and Conference 2009, 2009. 【査読有】

Go Irie, Kota Hidaka, Takashi Satou, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "Latent Topic Driving Model for Movie Affective Scene Classification", ACM Multimedia 2009, pp.565-568, 2009. 【査読有】

Gamhewage C. de Silva, Kiyoharu Aizawa: "Retrieving Multimedia Travel Stories using Location Data and Spatial Queries", ACM Multimedia 2009, pp.785-788, 2009. 【査読有】

Keigo Kitamura, Toshihiko Yamasaki, Kiyoharu Aizawa: "FoodLog: Capture, Analysis and Retrieval of Personal Food Images via Web", ACM Multimedia Workshop on Multimedia for Cooking and Eating Activities, pp.23-30, 2009. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa: "Life Log: Generic Purposes or Specific Applications? (Invited)", Int. Workshop on Advanced Multimedia Computing, 2009. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa: "Non-Conventional Media Interaction Paradigm: Content-centric or Human-centric? (invited)", ACM Multimedia Brave New Session (Panel), 2009. 【査読有】

O. Ozturk, T. Yamasaki, and K. Aizawa: "Tracking of Humans and Estimation of Body/Head Orientation from Top-view Single Camera for Visual Focus of Attention Analysis", IEEE International Workshop on Tracking Humans for the Evaluation of their Motion in Image Sequences (THEMIS2009), pp.1020-1027, 2009. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa: "Life Log Technology (invited)", Japan-Taiwan Microelectronics International Symposium -Innovations of Sensing Technologies, 2009. 【査読有】

Toshihiko Yamasaki, Yasumasa Nakai, Kiyoharu Aizawa: "An Object-Based Non-Blind Watermarking that is Robust To Non-Linear Geometrical Distortion Attacks", IEEE Int. Conf. Image Processing (ICIP2009), pp.3669-3672, 2009. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa: "Interactive Art Using Image Analysis (invited)", JSPS-DFG Round Table on Cooperative Technology in future: Cognitive Technical Systems, 2010.

Kiyoharu Aizawa, Gamhewage Chaminda De Silva, Keigo Kitamura, Yuto Maruyama: "Food Log: the Easiest Way to Capture and Archive What We Eat", Information Access for Personal Media Archives Workshop (IAPMA2010), 2010. 【査読有】

講演・口頭発表

中川卓, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「携帯端末表示のための Time-Varying Mesh の圧縮」, 映像情報メディア学会年次大会, 2009.

相澤清晴: 「役に立つライフログのために:これまでの試みから」, ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会, 2009. 【招待講演】

相澤清晴: 「ライフログの展開」, 電子情報通信学会 パターン認識とメディア理解研究会, 2009. 【招待講演】

松濤智明, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「DCT 高周波成分分析によるJPEG画像の非線形リサイズ検出」, 電子情報通信学会 画像工学研究会, 2009.

谷直紀, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「コメント数の動的な変化に基づくCGM動画要約」, デジタルコンテンツシンポジウム, 2009.

丸山悠斗, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「マイクロブログと画像の集約によるライフログとその要約」, デジタルコンテンツシンポジウム, 2009.

畑田晃希, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「ユーザの閲覧履歴を利用したライフログデータの要約」, デジタルコンテンツシンポジウム, 2009.

山田健太郎, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「シルエット抽出とモデル生成の相互フィードバックによる Time-Varying Mesh の欠損補填」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), 2009.

北村圭吾, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「FoodLog—Web 上で行う食事画像解析システム」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), 2009.

北村圭吾, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「FoodLog システムにおける食事画像分類」, 映像情報メディア学会年次大会, 2009.

畑田晃希, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「ウェアラブルカメラを利用した展示会場での見学履歴取得」, 情報科学技術フォーラム、FIT2009, 2009.

Rene Teixeira, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「Affective Analysis of Films by Low-Level Visual Features」, 情報科学技術フォーラム、FIT2009, 2009.

相澤清晴: 「ライフログ 膨大な映像コンテンツを、いかに処理して、どのように応用するのか?」, 情報科学技術フォーラム、FIT2009, 2009. 【招待講演】

G.C.De Silva: 「ライフログデータにおけるスケッチによる移動パターン検索」, 情報科学技術フォーラム、FIT2009, 2009. 【招待講演】

相澤清晴: 「デジタルパブリックアートを創出する技術 ～広域・集団の行動ログ～」, デジタルパブリックアート — 5年間の軌跡とこれから— 企画セッション 日本バーチャルリアリティ学会大会, 2009. 【招待講演】

北村 圭吾, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「食事画像における料理領域の推定」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2009), 2009.

畑田 晃希, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「ウェアラブルカメラ画像列を用いた展示会場における注目展示物の推定」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2009), 2009.

Ovgu Ozturk, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「Multiple Human Tracking and Body Orientation Estimation by Cascaded Particle Filter using a Single Camera」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2009), 2009.

富樫 政徳, 山崎 俊彦, 相澤 清晴: 「手書き入力による時系列標本点の逐次補間」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2009), 2009.

デシルヴァ ガムヘワゲチャミンダ, 相澤 清晴: 「Face Detection and Visual Querying for Editorial Photo Retrieval」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2009), 2009.

中川 卓, 山崎 俊彦, 相澤 清晴:「携帯端末表示のためのTVM表現」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2009), 2009.

羅 衛蘭, 山崎 俊彦, 相澤 清晴:「3D Human Motion Capture of Time-Varying Meshes by Tracking Kinematic Skeletons and Edge Corresponding Points」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2009), 2009.

Rene M A Teixeira, 入江 豪, 山崎 俊彦, 相澤 清晴:「User study on affective evaluation of movie clips」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2009), 2009.

中川卓, 山崎俊彦, 相澤清晴:「モバイル端末での Time-Varying Mesh 表示のためのメッシュ処理」, 映像情報メディア学会 立体映像技術研究会, 2009.

相澤清晴:「ライフログへの取り組みとその展望 (招待講演)」, 大阪電気通信大学視覚情報基礎研究施設学術講演会, 2009. 【招待講演】

相澤清晴:「FOOD LOG ～画像で分析する食事生活～」, CAMP(CREST Anti Metabolic syndrome Project) ワークショップ, 2010. 【招待講演】

畑田晃希, 河治寿都, 山崎俊彦, 相澤清晴:「全方位カメラによる参照画像群を用いた屋内位置推定 - デジタルミュージアムでの鑑賞者の行動記録に向けて-」, 電子情報通信学会 マルチメディアと仮想環境基礎研究会, 2010.

松村成朗, 富樫政徳, 大谷智子, 山崎俊彦, 相澤清晴, 鈴木康広:「自針と分針:映像からの人物抽出によるメディアアート」, 電子情報通信学会 マルチメディアと仮想環境基礎研究会, 2010.

池畑諭, 山崎俊彦, 相澤清晴:「The Shadow Man -影を用いたインタラクティブ・メディア・アート-」, 電子情報通信学会 マルチメディアと仮想環境基礎研究会, 2010.

澤田耕司, 鳴海拓志, 鈴木康広, 山崎俊彦, 相澤清晴, 廣瀬通孝:「風見鶏の視線」, インタラクシオン 2010, インタラクティブセッション, 2010.

相澤清晴:「日常の生活をログに取り込む」, 情報処理学会全国大会, 2010.

宮崎達也, 山崎俊彦, 相澤清晴:「食事ログに向けた画像処理による料理の味推定」, 情報処理学会全国大会, 2010.

山中悠歩, 山崎俊彦, 相澤清晴:「FPGA による Histogram of Oriented Gradients アルゴリズムの高速化」, 情報処理学会全国大会, 2010.

松本尚也, 山崎俊彦, 相澤清晴:「コメント解析による CGM 動画のシーン処理」, 情報処理学会全国大会, 2010.

松本洋一郎, 相澤清晴, 山崎俊彦:「汎用ライフログデータの取得のための携帯端末の開発」, 情報処理学会全国大会, 2010.

本多篤史, 山崎俊彦, 相澤清晴:「ウェアラブルカメラによる対人ログの取得と処理」, 情報処理学会全国大会, 2010.

畑田晃希, 河治寿都, 山崎俊彦, 相澤清晴:「全方位カメラによる参照画像を用いた屋内における位置推定- デジタルミュージアムでの鑑賞者の行動記録に向けて-」, 情報処理学会全国大会, 2010.

北村圭吾, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「FoodLog におけるカロリー推定補助」, 情報処理学会全国大会, 2010.

中川卓, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「スケルトンを用いた異なるメッシュモデル間の対応点抽出」, 情報処理学会全国大会, 2010.

Gamhewage de Silva, Kiyoharu Aizawa: "Multimedia Travel Story Retrieval using Location Data and Spatial Queries", 情報処理学会全国大会, 2010.

富樫政徳, 大谷智子, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「ペン入力による軌跡の平滑化処理に関するユーザビリティ評価」, 情報処理学会全国大会, 2010.

松村成朗, 富樫政徳, 大谷智子, 鈴木康広, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「デジタルパブリックアートプロジェクト作品技術紹介 自針と分針」, 情報処理学会全国大会, 2010.

オウグ オストルク, 松濤智明, 富樫政徳, 澤田耕司, 大谷智子, 鈴木康広, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「デジタルパブリックアートプロジェクト作品技術紹介 未来の足跡」, 情報処理学会全国大会, 2010.

北村圭吾, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「食事ログ利用による食生活変化」, 電子情報通信学会 総合大会, 2010.

畑田晃希, 河治寿都, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「全方位カメラ画像を用いた博物館における展示物認識」, 電子情報通信学会 総合大会, 2010.

中川卓, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「スケルトンを利用した異なるモデル間でのメッシュ変形」, 電子情報通信学会 総合大会, 2010.

富樫政徳, 大谷智子, 山崎俊彦, 相澤清晴: 「ペン入力による軌跡の平滑化処理に関するユーザビリティ評価」, 情報処理学会全国大会, 2010.

新聞・報道

相澤清晴: 「FoodLog についてインタビュー」, BBC Digital Planet, 2009.

相澤清晴 他: 「Flickr 連携の食事カレンダーやライフログカメラも」, Internet Watch, 2010.

受賞

唯野隆一, 山崎俊彦, 相澤清晴: 映像情報メディア学会 丹羽高柳論文賞「スケルトンを用いた Time-Varing Mesh からの動き抽出と類似動作検索」, 映像情報メディア学会, 2009 年.

唯野隆一, 山崎俊彦, 相澤清晴: 第 25 回電気通信普及財団賞(テレコムシステム技術賞)「スケルトンを用いた Time-Varing Mesh からの動き抽出と類似動作検索」, 電気通信普及財団賞, 2010 年.

特許

入江豪, 佐藤隆, 日高浩太, 小島明, 相澤清晴, 山崎俊彦: 「描画支援装置、描画支援プログラム」, 特願 2009-143005, 2009 年 06 月.

入江豪, 佐藤隆, 相澤清晴, 山崎俊彦: 「コミュニティ分類装置、コミュニティ分類方法およびコミュニティ分類プログラム」, 特願 2009-137101, 2009 年 06 月.

安達 裕之・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

安達 裕之:「東シナ海の航海時期」, 海事史研究, No.66, pp.19-48, 2009 年. 【査読有】

池内 克史・教授

研究テーマ(主たるもの)

文化遺産のデジタル化

世界各地の貴重な文化遺産をレーザ測定システムによって数ミリ精度で計測し、デジタルデータの形で保存するプロジェクトを進めています。これまでに鎌倉高德院の国宝阿弥陀仏像(鎌倉大仏)、奈良東大寺の国宝廬舎那仏坐像(奈良大仏)、タイ・スコタイのアチャナ仏、カンボジア・アンコールトムのバイヨン寺院などをデジタル化してきました。これらのデータは、VR(バーチャルリアリティ)のコンテンツ作成、文化遺産の破損、欠損時には修復のために、また製作当時の状態への仮想的復元といった応用など、幅広い分野での利用が期待されています。

人間行動観察学習ロボット

幼児の学習の大部分は、親の行動を見て真似ることから始まります。我々の研究室では、人間の行動を主に視覚によって観察し、これを理解して同じ行動を再現するロボットプログラムの自動生成を研究テーマとしており、主に「全身運動の獲得」と「手作業の獲得」の2つの課題について研究を進めています。

4次元仮想化都市

都市などの広域にわたる実空間の三次元モデル化を効率的に行うため、実験車両に搭載したカメラやレンジセンサおよび電子地図を利用して、要素技術となる画像・距離画像の処理手法を研究しています。また、実空間の動きを仮想空間に重畳する研究や、車両や車種を自動的に認識・判別する研究を行っています。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

大石岳史,角田哲也,池内克史:「五輪プレゼン用 MR システムの開発」, 日本バーチャルリアリティ学会誌, Vol.14, No.2, pp.46-47, 2009 年.

Daisuke Miyazaki, Mahdi Ammar, Rei Kawakami, Katsushi Ikeuchi: "Estimating Sunlight Polarization Using a Fish-eye lens", IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications, Vol.1, pp.288-300, 2009 年. 【査読有】

王金戈, 小野晋太郎, 池内克史: 「時系列高さ画像の提案とそれを用いた車載カメラ画像と建物モデル間の対応付け」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J92-D, No.8, pp.1197-1207, 2009 年.

阪野貴彦, 池内克史: 「パノラマ・ステレオを用いたロバストな三次元位置合わせによる全方向テクスチャリング」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J92-D, No.8, pp.1289-1297, 2009 年. 【査読有】

Bo Zheng, Ryo Ishikawa, Takeshi Oishi, Jun Takamatsu, Katsushi Ikeuchi: "A Fast Registration Method Using IP and Its Application to Ultrasound Image Registration", IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications, pp.209-219, 2009 年. 【査読有】

池内克史: 「時空を記す: 四次元仮想化都市空間」, 測量, Vol.59, No.10, pp.11-12, 2009 年.

池内克史: 「3D デジタルデータによる文化財の保存・分析・活用」, 月刊文化財, No.547, pp.45-47, 2009 年. 【一般向け】

国際会議等

Rei Kawakami, Katsushi Ikeuchi: "Color Estimation from a Single Surface Color", IEEE Computer Society Conference on Computer Vision and Pattern Recognition, 2009. 【査読有】

Tomoaki Higo, Yasuyuki Matsushita, Neel Josh, Katsushi Ikeuchi: "A Hand-held Photometric Stereo Camera for 3-D Modeling", International Conference on Computer Vision 2009, 2009. 【査読有】

その他論文

森本哲郎, Roby T Tan, 川上玲, 池内克史: 「層状表面におけるスパイダーモデルを用いた複雑反射の要素分解」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)」, 2009 年. 【査読有】

松久亮太, 川崎洋, 小野晋太郎, 阪野貴彦, 池内克史: 「複数系列の車載全方位カメラ画像の対応付けによる広域都市モデル構築」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)」, 2009 年. 【査読有】

和田明菜, 川上玲, 工藤俊亮, 池内克史, 小町谷圭, 三浦高宏, 松井茂, 藤幡正樹: 「描画環境の形状と明るさの実測に基づく絵画の陰影表現の解析と再現」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)」, 最優秀賞受賞, 2009 年. 【査読有】

栗林宏輔, 川崎洋, 小野晋太郎, 池内克史: 「移動カメラ映像の障害物除去のための時空間画像フィルタの提案」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)」, 2009 年. 【査読有】

子安大士, 古屋大和, 深澤龍一郎, 川崎洋, 前川仁, 小野晋太郎, 池内克史: 「サブピクセル推定を用いた全方位ステレオ視による環境の3次元再構成」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)」, 2009 年. 【査読有】

Hongxun Zhao, Rei Kawakami, Robby T. Tan, Katsushi Ikeuchi: "Estimating basis functions for spectral sensitivity of digital cameras", 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)」, 2009 年. 【査読有】

工藤雷太, 角田哲也, 川上玲, 大石岳, 池内克史: 「屋外複合現実感における光源環境推定のための影情報抽出」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)」, 2009 年.

深澤龍一郎,子安大士,川崎洋,前川仁,小野晋太郎,池内克史:「グラフカットとサブピクセル推定による高密度・高精度な全方位ステレオ視」,第27回日本ロボット学会学術講演会,2009年.

栗林宏輔,小野晋太郎,川崎洋,池内克史:「時空間フィルタによる車載カメラ映像からの障害物の自動除去手法の提案」,第8回ITSシンポジウム 2009,2009年.【査読有】

松久亮太,小野晋太郎,川崎洋,阪野貴彦,池内克史:「一般車両の車載カメラ映像の自動統合による広域な立体市街地図の構築手法」,第8回ITSシンポジウム 2009,2009年.【査読有】

講演・口頭発表

Katsushi Ikeuchi: "Learning-from-Observation: from assembly plan through dancing humanoid", 2009 CACS International Automatic Control Conference, 2009. 【招待講演】

池内克史: "Multispectral Imaging for Reflectance Analysis: Classification of microorganisms at the Inner Gallery of Bayon Temple", 「文化財保全技術」に関する先導的研究開発委員会, 2009. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "Photometric Issues in E-heritage", IEEE Color and Reflectance in Imaging and Computer Vision Workshop(CRICV 2009), 2009. 【招待講演】

Shirmila Mohottala, Shintaro Ono, Masataka Kagesawa, Katsushi Ikeuchi: "Fusion of a Camera and a Laser Range Sensor for Vehicle Recognition", 6th IEEE Workshop on Object Tracking and Classification Beyond and in the Visible Spectrum (OTCBVS), in conjunction with IEEE CVPR 2009, 2009.

Bo Zheng, Jun Takamatsu, Katsushi Ikeuchi: "Multilevel Algebraic Invariants Extraction by Incremental Fitting Scheme", Asian Conference on Computer Vision (ACCV 2009), 2009.

Katsushi Ikeuchi, Masataka Kagesawa: "Four-dimensional virtual Cities for ITS", Intelligent Transport Systems Symposium, 2009.

Tetsuro Morimoto, Katsushi Ikeuchi: "Multispectral Imaging for Material Analysis in an Outdoor Environment Using Normalized Cuts", IEEE Color and Reflectance in Imaging and Computer Vision Workshop(CRICV 2009), 2009.

Tetsuro Morimoto, Katsushi Ikeuchi: "Multispectral Imaging for Material Analysis in an Outdoor Environment Using Normalized Cuts", Digital Documentaion, Interoretation & Cultural Heritage (CIPA Symposium), 2009.

森本哲郎,池内克史:「反射率解析のためのマルチスペクトル画像計測 -バイオン寺院内回廊における着生物の分類-」, 日本学術振興会-国際高等研究所 国際シンポジウム「文化遺産保全技術」, 2009.

Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "Disparity Map Refinement and 3D Surface Smoothing via Directed Anisotropic Diffusion", 3-D Digital Imaging and Modeling, 2009.

Yasuhide Okamoto, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: "Image-based Network Rendering System for Large Sized Meshes", International Conference on Computer Vision 2009, 2009.

Tomoaki Higo, Yasuyuki Matsushita, Neel Joshi, Katsushi Ikeuchi: "A Hand-held Photometric Stereo Camera for 3-D Modeling", KAIST/UT Workshop 2009, 2009.

Phongtharin Vinayavekhin, Shunsuke Kudoh, Katsushi Ikeuchi: "Hand Movement Segmentation for Re-grasp Planning", KAIST/UT Workshop 2009, 2009.

Bjoern Rennhak, Shunsuke Kudoh, Katsushi Ikeuchi: "Extracting Elliptical Motions for Dance Structure Detection", KAIST/UT Workshop 2009, 2009.

Tetsuya Kakuta, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: "高速陰影表現とオクルージョン処理を用いた飛鳥京複合現実感コンテンツの開発とその評価", 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2009.

Bo Zheng, Jun Takamatsuy, Katsushi Ikeuchi: "Improvements of IP Representation, Fitting and Registration", 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2009.

Manoj Perera, Shunsuke Kudoh, Katsushi Ikeuchi: "Keypose and Style Analysis Based on Low-dimensional Representation", 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2009.

和田明菜, 川上玲, 工藤俊亮, 池内克史, 小町谷圭, 三浦高宏, 松井茂, 藤幡正樹: 「対象物と照明環境の実測値を用いた絵画における陰影表現の解析」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2009.

佐藤亮, 小野晋太郎, 永塚遼, 川崎洋, 池内克史: 「車載全方位ビデオ映像を用いたイメージベースレンダリングによるドライビングシミュレータの提案」, パターン認識・メディア理解研究会(PRMU), 2009.

藤原研人, 高松淳, 池内克史: 「多対多同時非剛体位置合わせ」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), 2009.

大石岳史, 大藏苑子, 川上玲, 阪野貴彦, 池内克史: 「全方位カメラを用いた光源環境と対象物の同時撮影法に基づく人物モデルのMRシステムへの重畳」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), 2009.

Katsushi Ikeuchi, Takeshi Oishi, Shunsuke Kudoh: 「E-monumentalization of Bayon Temple」, 3次元映像のフォーラム第88回研究会, 2009. 【招待講演】

高松淳, 松下康之, 小笠原司, 池内克史: 「」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), 2009.

池内克史: 「ITS 情報空間(現在、過去、未来)」, ITS セミナー in 東北, 2009. 【招待講演】

Phongtharin Vinayavekhin, Shunsuke Kudoh, Katsushi Ikeuchi: "Contact States Detection for Dexterous Manipulation in Low-Dimensional Joint Space", 第27回日本ロボット学会学術講演会, 2009.

池内克史: 「浮き彫り着生物のスペクトル解析」, アンコール遺跡・バイオン寺院を護る, 2009.

角田哲也, 大石岳史, 牧野浩志, 池内克史: 「スマートツーリズム: 明日香村における複合現実感技術を」, 第8回ITSシンポジウム 2009, 2009.

池内克史: 「4次元仮想化都市空間」, 地理空間情報フォーラム 2009, 2009. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "Art and Robotics", ISA Graduate seminar, 2009.

Katsushi Ikeuchi: "e-Heritage Projects", CS Graduate Seminar, 2009.

小野晋太郎, 佐藤亮, 松久亮太, 川崎洋, 池内克史: 「車載カメラ映像の再構成による都市空間の自由視点レンダリング- 高現実感ドライビングシミュレータへの応用 - 」, 動体計測研究会, 2009.

Katsushi Ikeuchi: "Computer Vision, Robotics and Art", Some of EE student, 2009.

池内克史:「ロボティクス、芸術、ロボット魂」, 神戸市市民セミナー, 2009. 【招待講演】

池内克史:「ITS 情報空間(現在、未来、過去)」, ITS セミナー in 熊本, 2009. 【招待講演】

池内克史:「4次元仮想化都市空間に関する研究開発」, 東京大学生産技術研究所 先進モビリティ研究センター (ITS センター) 設立記念シンポジウム, 2009. 【招待講演】

池内克史:「ITS 情報空間(現在、未来、過去)」, ITS セミナー in 柏, 2009. 【招待講演】

K. Ikeuchi, S. Ono, R. Kawakami: "e-Heritage Projects in Italy, Cambodia, and Japan", International Italy - Japan Symposium, 2009. 【招待講演】

池内克史:「踊りとお絵かき」, ロボットエデュケーションセミナー, 2009. 【招待講演】

池内克史:「4次元仮想化都市とITS」, 平成21年度愛知県ITS推進協議会総会, 2009. 【招待講演】

池内克史:「文化遺産の屋外展示とそれをささえるアーカイブ技術」, 「複合現実感、超臨場感インターフェース」, 2009. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "半導体の応用分野としてのバーチャルリアリティ", アプライド マテリアルズ 『エグゼクティブ フォーラム』, 2009. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "4 dimensional Virtual Cities and ITS", SEMICIN Japan2009, 2009. 【招待講演】

池内克史:「文化遺産の3次元デジタルアーカイブ」, 第15回 ビジュアライゼーションカンファレンス, 2009. 【招待講演】

池内克史:「人間行動観察学習システム」, ICRA, 2009. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "Digital Bayon Project", Microsoft Research Asia eHeritage Workshop 2009, 2009. 【招待講演】

新聞・報道

池内克史:「複合現実感 影・光駆使 映像 3D しのご」, 日刊工業新聞(朝刊)14面, 2009.

池内克史:「ロボット 30体展示 神戸市 16日、市民イベント」, 日刊工業新聞(朝刊)31面, 2009.

池内克史:「東大に五重塔!? 仮装映像を現実と合体」, 読売新聞(朝刊)29面, 2009.

池内克史:「CGを実風景に投影 東大が技術開発 5年後めどに実用化」, 日刊工業新聞(朝刊)20面, 2009.

池内克史:「「あのGoogle」に脚光 東京五輪 PR IOC委員が着用」, 朝日新聞(朝刊)22面, 2009.

池内克史:「17~19日に横浜で地理空間情報フォーラム 日本測量協会らシステム展も」, 日刊建設工業新聞(朝刊)2面, 2009.

池内克史:「NJレポート “オールジャパン”で ITS の進化と普及を加速 東京大学が先進モビリティ研究センター新設 メーカー、行政関係者シンポジウム」, 日刊自動車新聞(朝刊)10 面, 2009.

池内克史:「31 日に総会・講演会 愛知県 ITS 推進協」, 建設通信新聞(朝刊)9 面, 2009.

池内克史:「マイクロマシンセンター「MEMS 講習会」最先端技術を紹介 立命館大学杉山進教授「新産業創出に期待」」, 電波新聞(朝刊)5 面, 2009.

池内克史:「遺跡保存シンポ「バイオン寺院を護る」 21 日、国土舘大世田谷キャンパスで」, 朝日新聞(朝刊)18 面, 2009.

池内克史:「飛鳥美人とバーチャルデート 21 日から明日香で体験会 特殊ゴーグル、風景・CG 合成」, 朝日新聞(大阪)(夕刊)10 面, 2009.

池内克史:「高松塚古墳内をバーチャル体験 奈良・明日香で 21～23 日」, 朝日新聞(朝刊)26 面, 2009.

池内克史:「気分は飛鳥人 川原寺など仮想鑑賞 東大が CG で再現 21 日から実証実験」, 奈良新聞(朝刊)1 面, 2009.

池内克史:「窓 [高松塚古墳を眺めると、石室が浮かび「飛鳥美人」が現れる]」, 日本経済新聞(朝刊)39 面, 2009.

池内克史:「高松塚古墳 CG で映像再現 飛鳥美人にも会えます」, 大阪日日新聞(朝刊)22 面, 2009.

池内克史:「3D デジタルデータによる文化財の保存・分析・活用」, 月刊文化財, 2009.

池内克史:「AR…現実とバーチャル融合 レンズのぞくと…未来見えた」, 産経新聞, 2009.

池内克史:「行ってきます！ 45 日間 奈良時代一周」, NHK BS, 2009.

池内克史:「鎌倉大仏の CG 映像」, NHK 総合テレビ「生活ほっとモーニング」, 2009.

池内克史:「現実と仮想重ね合わせる AR 技術」, 朝日新聞, 2009.

池内克史:「世の中 可視化バラエティ マルミセ！百聞一見録」, テレビ朝日, 2009.

受賞

和田明菜,川上玲,工藤俊亮,池内克史,小町谷圭,三浦高宏,松井茂,藤幡正樹: 最優秀賞「対象物と照明環境の実測値を用いた絵画における陰影表現の解析」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2009 年.

松久亮太, 川崎洋, 小野晋太郎, 阪野貴彦, 池内克史: インタラクティブセッション賞「複数系列の車載全方位カメラ画像の対応付けによる広域都市モデル構築」, MIRU2009 第 12 回 画像の認識・理解シンポジウム, 2009 年.

栗林宏輔, 川崎洋, 小野晋太郎, 池内克史: インタラクティブセッション賞「移動カメラ映像の障害物除去のための時空間画像フィルタの提案」, MIRU2009 第 12 回 画像の認識・理解シンポジウム, 2009 年.

石上 英一・教授

研究テーマ(主たるもの)

歴史情報論

日本古代史料研究を基礎に、歴史情報と搬送体からなる史料体として史料を認識し、発信者と受信者が史料体を授受する歴史情報伝達行動、歴史情報の構造を分析する歴史情報テキスト構造論、史料体の階層的構成を分析する史料群論、個別史料の書誌研究などを行う。石上『日本古代史料学』(1997年)参照。

奄美諸島画像史料情報研究

中世並行期から近世期における奄美諸島史の編年史料整理の一環として、幕末の奄美大島の民俗誌である『南島雑話』を中心に、奄美諸島に関わる画像史料を分析する。石上「南島雑話とその周辺」『画像史料解析センター通信』(史料編纂所)一～一八参照。

研究業績(2009年度)

雑誌論文

Eiichi Ishigami: "Tôdajji Temple and the Shôsôin Documents in the 8th Century Japan", edited by Kamal Sheel, Kalji 'shiravak' and Charles Willemen, Buddhist World Press, Delhi, 2009年.

Eiichi Ishigami: "The World of Ancient Japanese Documents", "Centrality and Marginality of Ancient Documents", edited by Satoshi Urano and Yukinori Fukatsu, Seikokai-Shuppan, Tokyo, p.41-p.66, 2009年.

石上 英一:「南島雑話とその周辺 一五～一八」, 画像史料解析センター通信, No.45～48, 2009年.

石上 英一:「正倉院文書と東大寺法華堂」, ザ・グレイト・ブッダ・シンポジウム論集, No.7, pp.33-47, 2009年.

石崎 雅人・教授

研究テーマ(主たるもの)

医療コミュニケーション教育

地域医療における医療と介護の連携

司法コミュニケーション

研究業績(2009 年度)

分担著書

石崎雅人、飯田龍:「談話と計算」, 松本裕二 編, 朝倉書店, 2009 年.

雑誌論文

Y. Matsusaka, Y. Katagiri, M. Ishizaki and M. Enomoto: "Unsupervised Clustering in Multimodal Multiparty Meeting Analysis", Lecture Notes in Artificial Intelligence, Vol.5509, pp.93-108, 2009 年. 【査読有】

石田 英敬・教授

研究テーマ(主たるもの)

記号論・情報記号論の研究

記号論を情報学研究に活用する研究

言語態の研究

社会や文化の単位としての言語活動の研究

現代文学、現代思想の研究

近代ヨーロッパ文学および現代思想の研究

研究業績(2009 年度)

分担著書

Hidetaka Ishida: "Empreintes de Roland Barthes", Daniel Bounoux 編, Cécile Défaud / INA, 2009, 2009 年.

石田英敬: 『「インターネットと人権」を考える』, 部落解放・人権研究所 編, 解放出版社, 2009 年.

ベルナール・スティグレール : 「技術と時間 1 エピメテウスの過失」, 西兼志 訳 石田英敬 監修 編, 法政大学出版局, 2009 年.

石田英敬: 「高校生のための東大授業ライブ 純情編」, 東京大学教養学部 編, 東京大学出版会, 2010 年.

雑誌論文

石田英敬: 「テレビ・アーカイブ研究とは何か」, 『放送研究と調査』, July 2009, pp.32-33, 2009 年.

石田英敬: 「『生政治』からみた政権交代」, 『世界』, No.799, 臨時増刊号「大転換」, pp. 37-44, 2009 年. 【一般向け】

その他論文

ジャン=ミシェル・ロード、桜井均、藤幡正樹、石田英敬:「デジタル映像アーカイブの可能性」,『放送研究と調査』(NHK 放送文化研究所), シンポジウム報告, 2009 年. 【査読有】

石田英敬:「顔の見えない怪物はどこを通ったのか?」,『東京新聞』2009 年 9 月 1 日夕刊, 新聞記事寄稿, 2009 年. 【査読有】

石田英敬:「ベルナル・スティグラー「二〇世紀型」消費主義」が終わった:象徴的貧困と資本主義の危機」,『世界』, 岩波書店, インタビューと解説, 2010 年. 【一般向け】

新聞・報道

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター 2009 年 6 月 6 日, 2009.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター 2009 年 7 月 4 日, 2009.

石田英敬:「選挙特番」, 朝日ニュースター 2009 年 8 月 30 日, 2009.

Hidetaka Ishida: "Le moment inaugural de la philosophie japonaise", Le Monde des Livres, le 9 janvier 2009, 2009.

石田英敬: « Rencontre avec Hidetaka Ishida: Professeur à l' Université de Tokyo », OVNI, 2009.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター 2010 年 1 月 1 日, 2010.

大島 まり・教授

研究テーマ(主たるもの)

医用画像に基づく血管循環系のマルチスケール・マルチフィジックス解析

本研究は血管病変の発症, 進行に関わる流体力学的な要因を数値解析により解明することを目的としている. 実際の生体内を再現したモデルや境界条件を採用するために, ここでは CT や MRI などの医用画像から抽出した血管形状モデルを用い, 末梢血管網など循環系全体の影響を考慮した境界条件を導出・適用した大規模血流解析システムを構築している. さらに血流および血管壁内での物質輸送・透過モデルを取り入れ, 悪玉コレステロールなどの病変に関わる物質の血管壁内への蓄積についても予測を行っている.

血流と血管壁の相互作用を考慮した連成解析と in vitro モデルを用いた可視化計測

本研究では脳動脈瘤の発生・成長のメカニズムの解明を目的とし, 血流によって変形する血管壁の力学応答メカニズムを考慮した数値解析を行うとともに, in vitro モデル実験による結果と比較することで評価を行っている. 医用画像から再構築した脳動脈瘤モデルを対象として, 数値解析では血管壁を超弾性体とした流体構造連成解析を行い, 実験では速度 3 成分のデータを得られるステレオ PIV という計測手法を用い, 内部の流動構造と血管壁の挙動, およびそれらの相互作用を評価している.

共焦点 Micro PIV による微小流路内混相流の可視化計測

微小血管を流れる赤血球やマイクロ分析チップのような微小流体デバイスの内部の混相流を可視化計測するツールとして、共焦点マイクロ PIV システムを開発している。本手法は、流れの中にトレーサ粒子と呼ばれる微小な蛍光ビーズを混濁させ、共焦点スキャナ・特殊な蛍光顕微鏡・高感度高速度カメラを用いて流れを撮影し、得られた画像を PIV 解析処理を用いて速度分布を求める。共焦点マイクロ PIV を用いることで、マイクロサイズの微小領域における 3 次元的な流れの様子を定量的に知ることができる。

研究業績(2009 年度)

著書

大島まり:「図解 世の中が見えてくる 大人の科学 110」, 永岡書店, 2009 年.

雑誌論文

R.Torii, M.Oshima, T.Kobayashi, K.Takagai, Tayfun E. Tezduyar: "Fluid-Structure Interaction modeling of blood flow and Cerebral Aneurysm: Significance of Artery and Aneurysm Shapes", *Computer Methods in Applied Mechanics and Engineering*, vol.198, pp.3613-3621, 2009 年.

Ryo Torii, Marie Oshima, Toshio Kobayashi, Kiyoshi Takagi, Tayfun E. Tezduyar: "Role of 0D peripheral vasculature model in fluid-structure interaction modeling of aneurysms", *Computational Mechanics*, pp.available online, doi: 10.1007/s00466-009-0439-7, 2009 年. 【査読有】

R.Torii, M.Oshima, T.Kobayashi, K.Takagai, Tayfun E. Tezduyar: "Coupling 3D Fluid-structure Interaction Modeling of Cerebral Aneurysm with 0D Arterial Network Model as Boundary Conditions", *日本シミュレーション学会論文誌*, vol.1, No.4, pp.81-90, 2009 年. 【査読有】

大島まり:「論文特集「ライフサイエンスとシミュレーション」の発刊に際して」, *日本シミュレーション学会論文誌*, vol.11, No.4, p.49, 2009 年. 【査読有】

大島まり:「第 3 の科学シミュレーション」, *エネルギーフォーラム*, No.662, 2010 年 2 月号, p.91, 2010 年. 【一般向け】

国際会議等

Ryo Torii, Marie Oshima, Toshio Kobayashi, Kiyoshi Takagi, Tayfun E. Tezduyar: "Fluid-Structure Interaction Modeling of a Cerebral Aneurysm: Coupling 0D Arterial Network Model with 3D Computation", *15th International Conference on Finite Elements in Flow Problems*, 2009. 【査読有】

M. Oshima: "Numerical simulation of blood flow and mass transport in atherosclerotic artery", *4th Asian Pacific Conference on Biomechanics*, 2009. 【査読有】

Ryo Torii, Nigel Wood, Nearchos Hadjiloizou, Andrew Wright, Alun Hughes, Justin Davies, Darrel Francis, Jamil Mayet, Marie Oshima, Tayfun Tezduyar, Simon Thom and Yun Xu: "Coupled 3D-0D patient-specific FSI modelling of the human right coronary artery", *III International Conference on Computational Methods for Coupled Problems in Science and Engineering*, 2009. 【査読有】

M. Oshima: "Numerical simulation of blood flow and mass transport in atherosclerotic artery", *The 6th International Stent Meeting 2009*, p.34, 2009. 【査読有】

M. Oishi, H. Kinoshita, T. Fujii and M. Oshima: "Investigation of Droplet Formation Mechanism in Micro T-shaped Junction using Confocal Micro-PIV Measurement", 10th International Conference of Fluid Control, Measurements, and visualization, 2009. 【査読有】

Kenichi Shibasaki, Masato Taniguchi, Marie Oshima: "Development of Numerical Method for Coupled Simulation of Starved EHL and Macro Flow", 4th World Tribology Congress(WTC), p.597, 2009. 【査読有】

M. Oshima: "PIV applications on bio-engineering", 25 years of Particle Image Velocimetry in Aerodynamics, 2009. 【査読有】

Masamichi Oishi, Haruyuki Kinoshita, Teruo Fujii, Marie Oshima: "Three-Dimensional Reconstruction of Confocal Micro-PIV Data with Phase Adjusting Technique Using Optical Proximity Sensor", The 13th International Conference on Miniaturized Systems for Chemistry and Life Sciences, pp.749-751, 2009. 【査読有】

Ryo Torii, Nigel Wood, Nearchos Hadjiioizou, Andrew Wright, Alun Hughes, Justin Davies, Darrel Francis, Jamil Mayet, Marie Oshima, Tayfun Tezduyar, Simon Thom and Yun Xu: "Coupled 3D-0D patient-specific FSI simulation of the human right coronary artery", ASME International Mechanical Engineering Congress and Exposition, 2009. 【査読有】

その他論文

大島まり, SNGグループ: 「研究を題材とした青少年向けの科学技術教育—大学外での教育活動」, 生産研究 60周年記念特別号, 61 巻 3 号, p.244, 2009 年.

大島まり: 「大島研究室 数値流体力学」, 生産研究 60周年記念特別号, 61 巻, 3 号 p.281, 2009 年.

大島まり: 「「知の社会浸透」ユニット」, 生産研究 60周年記念特別号, 61 巻, 3 号 p.461, 2009 年.

講演・口頭発表

大島まり: 「循環器系のマルチスケール連成解析と可視化計測」, 第4回連携大学院セミナー京都「先進バイオイメージングと基盤技術」シンポジウム, 2009. 【招待講演】

大島まり, 吉尾 匡史, 湊 明彦: 「脳血管障害に関する医用画像に基づくマルチスケール・フィジックス解析」, 第32回日本バイオレオロジー学会年会, 2009.

大島まり, 本間栄男, 佐溝貴史, 坪井京子, 鈴木高宏: 「アンケートによる出張授業の効果測定」, 日本理科教育学会 第59回全国大会, 2009.

坪井京子・赤川史帆・本間栄男・大島まり・光田好孝: 「研究者による貸出教材「金属・材料を調べてみよう」の開発」, 日本科学教育学会第33回年会, 2009.

大島まり: 「東大における女性の活躍」, 高校生のための東京大学オープンキャンパス, 2009. 【招待講演】

大島まり: 「サイエンスする楽しさ、そして喜び」, 「夢のたまご塾」飛騨アカデミー, 2009. 【招待講演】【一般向け】

吉尾 匡史, 湊 明彦, 大島まり: 「生体流体統合解析ソフトウェア M-SPhyR の開発経緯と特徴」, 日本機械学会 2009年度年次大会, 2009.

大島まり: 「シミュレーションの新たな挑戦」, 次世代スーパーコンピュータセミナー(国際フロンティア産業メッセ 2009 併設セミナー), 2009. 【招待講演】

大島まり:「血流シミュレーションと生体力学情報の可視化」,「生命をはかる」研究会 第 27 回研究会, 2009.【招待講演】

大島まり:「血流シミュレーションの最前線と臨床応用への試み」, 第 12 回日本栓子検出と治療学会, 2009.【招待講演】

大石正道, 大島まり, 木下晴之, 藤井輝夫, 小林敏雄:「多波長共焦点マイクロ PIV によるマイクロ T 字ジャンクションにおける液滴生成機構の解明」, 可視化情報学会全国講演会, 2009.

大島まり:「東大の魅力を探る!」, 駿台予備学校 東大教授講演会, 2009.【招待講演】【一般向け】

大島まり:「予測する生命科学・医療および創薬基盤」, 次世代スーパーコンピュータシンポジウム 2009, 2009.【招待講演】

大島まり:「シミュレーションの世界」, 東京西北ロータリークラブ講演会, 2009.【招待講演】【一般向け】

M. Oshima: "Promotion of Gender Equality at The University of Tokyo", The 2nd Japan-China-Korea Woman Leaders Forum for Science & Technology, 2009.【招待講演】

大島まり:「血流シミュレーションを活用した Surgical Planning システム開発にむけて」, 第 18 回日本コンピュータ外科学会ランチョンセミナー, 2009.【招待講演】

大島まり:「機械工学の新しいパラダイム - 医工連携について -」, 北海道札幌西高校講演会(河合塾主催), 2009.【招待講演】【一般向け】

大島まり:「循環器系のマルチスケール流体構造連成解析」, 第 16 回中部 CAE 懇話会, 2009.【招待講演】

大島まり:「女子中高生の皆さんに知ってほしいこと・考えてほしいこと」, 総括シンポジウム「東京大学で考える女子中高生の未来 家族でナットク! 理系最前線～見えないものを見てみよう! あなたも未来の女性研究者に～」, 2009.【招待講演】【一般向け】

大島まり:「高度医療への新しいパラダイムを築くバイオエンジニアリング」, 第 22 回バイオエンジニアリング講演会 青少年公開講座 いのちを支えるエンジニアリング - 生体医工学, 2010.【招待講演】【一般向け】

大島まり:「循環器系疾患に対する血管壁 - 血流連成シミュレーションの果たす役割」, 東海医学会講演会, 2010.【招待講演】

大島まり:「東京大学における男女共同参画活動」, 平成 21 年度 女性職員の採用・登用拡大推進会議(人事院), 2010.【招待講演】【一般向け】

大島まり:「体の中の血液の流れを見る」, 可視化情報学会 市民フォーラム, 2010.【招待講演】【一般向け】

大島まり:「広がるエンジニアとエンジニアリングの裾野」, 東京大学 産学連携協議会年次総会, 2010.【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

大島まり:「大学を歩く 東京大学 女性活躍「お堅い」返上へ」, 読売新聞 2009.4.10(金)20 面, 2009.

大島まり:「Vivid Voice 女子でも科学研究にチャレンジ!」, 駿台予備校 SUNDAI ADVANCE 2009, 2009.

大島まり:「正平調」, 神戸新聞 2009.10.4(日)朝刊 1面, 2009.

受賞

大島まり: 可視化情報学会設立 20 周年功労賞「可視化情報の科学・技術に関する学術集会・事業遂行ならびに学術の向上への多大な貢献」, 社団法人 可視化情報学会, 2009 年.

特許

アドバンスソフト株式会社:「血流シミュレーションの最適計算格子」, 特願 2009-181031, 2009 年 07 月.

岡田 猛・教授

研究テーマ(主たるもの)

創造性の認知科学

芸術創作や科学的発見などの創造的認知プロセスの解明

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

縣拓充, 岡田猛:「美術創作へのイメージや態度を変える展示方法の提案とその効果の検討」, 美術教育学, Vol.30, pp.1-14, 2009 年. 【査読有】

Okada, T., Yokochi, S., Ishibashi, K., & Ueda, K.: "Analogical modification in the creation of contemporary art.", Cognitive Systems Research, Vol.10, pp.189-203, 2009 年. 【査読有】

縣拓充・岡田猛:「教養教育における「創造活動に関する知」を提供する授業の提案:「創作プロセスに触れること」の教育的効果」, 教育心理学研究, Vol.57, No.4, pp.503-517, 2009 年. 【査読有】

岡田猛・縣拓充:「創造的表現を促進するための美術館展示の開発とその効果の検討」, マツダ財団研究報告書(青少年健全育成関係), Vol.21, pp.61-68, 2009 年. 【査読有】

講演・口頭発表

青木淳, 菊地成孔, 岡田猛:「第3回 形式の際」, 東京大学大学院 情報学環・学際情報学府主催建築系連続トークイベント『建築の際』, 2009. 【一般向け】

濱田純一, 岡本拓司, 井上達夫, 岡田猛 他:「特異」, 第110回 東京大学公開講座, 2009. 【一般向け】

河口 洋一郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

CG によるメカニック造形研究

生き物のように反応するメカニックな立体造形ロボット技術ならびに新伝統芸能を演出しロボティックに凹凸する映像ディスプレイの造形研究

情感的なジェモーション(Gemotion)によるインタラクション研究

伝統芸能との融合によるパフォーマンスアートとして、人にインタラクティブに反応する情感的な CG 映像空間の創出、および生き物のように映像に凸凹反応するジェモーション・ディスプレイの研究

自己増殖する複雑系のグロースモデル(Growth Model)による超高精細 CG 映像研究

スーパーハイビジョン(8K×4K)による超高精細の CG 生物・物理シミュレーションによる映像生成研究

研究業績(2009 年度)

作品

河口洋一郎: 「河口洋一郎の CG 宇宙」展, 会場: 種子島宇宙センター宇宙科学技術館, 2009 年 7 月 19 日～9 月 10 日, 2009.

河口洋一郎: 「河口洋一郎の CG 立体」展, 会場: 種子島開発総合センター, 2009 年 7 月 19 日～9 月 10 日, 2009.

K.Kotani, S.Sasada, S.Ikeda, Y.Ogawa and Y.Kawaguchi: 「Virtual creature “JECCO” given life by viewer’s vital sign」, ASIAGRAPH 2009 in Tokyo, 2009.

Y.Kawaguchi, S.Yonekura and S.Hori: 「Bumpy Hydrodynamics Butterflies」, ASIAGRAPH 2009 in Tokyo, 2009.

河口洋一郎: 「海とおりょうとピストラル」(舞台衣装としての CG 着物実演発表), エンジン01オープンカレッジ in 高知, 2009.

河口洋一郎: 「驚異の 8K 超高精細 CG 映像の表現世界」, 日本映像学会デジタルメディア研究会, 2009.

Yoichiro Kawaguchi: 「Bucco - Multi-Dimensional Butterflies」, SIGGRAPH ASIA 2009, 2009.

河口洋一郎: 「Gemotion Dance for 「散華の瞬間」-“飛天”プロジェクトファイナル-」, 新国立劇場 (イシグロダンスシアターとのコラボレーション), 2009.

河口洋一郎: 「映像作品: 「Flora」, 「Eggy」, 「Recent Works 2009-2010」ほか、立体造形作品: 「Neural Ficco」, 「Self-organized Bucco」ほか」, 「サイバーアーツジャパン -アルスエレクトロニカの 30 年」展 【企画展招待出品】、2009.

河口洋一郎:「Gemotion Dance -和・洋・CG 今昔時の融合-」, 和・洋・CG 今昔時の融合 (藤間信乃輔氏の日本舞踊との共演, 高崎シティギャラリーコアホール), 2009.

河口洋一郎:「Gemotion Dance for 「化身」」, 第 36 回現代舞踊展 (舞踏家石黒節子氏との共演, メルパルクホール), 2009.

Yoichiro Kawaguchi: 「Hydrodynamic Butterflies」, SIGGRAPH 2009 (Computer Animation Festival) 【審査】, 2009.

国際会議等

S.Yonekura, Y.Kuniyoshi, and Y.Kawaguchi: "Development of emotional tremor-based vision system", IROS' 09, pp.2677 - 2682, 2009. 【査読有】

M.Emoto, H.Matsubara, M.Kanazawa and Y.Kawaguchi: "High quality computer graphics as an application of a high resolution television system", ASIAGRAPH 2009 in Tokyo, Vol.3, No.1, pp.58-62, 2009. 【査読有】

R.Sejuti and Y.Kawaguchi: "Simulation of natural bubble ring phenomenon using particle level set method", ASIAGRAPH 2009 in Tokyo, Vol.3, No.1, pp.116-119, 2009. 【査読有】

S.Ichihashi, S.Yonekura and Y.Kawaguchi: "Simulation of Swarm Preservation -Boids as Preservation System of Swarm Behavior", ASIAGRAPH 2009 in Tokyo, Vol.3, No.1, pp.124-125, 2009. 【査読有】

Y.Tanahashi, J.Tatsumi and Y.Kawaguchi: "Complex organic motion based on a simple power source", ASIAGRAPH 2009 in Tokyo, Vol.3, No.1, pp.136-138, 2009. 【査読有】

YoichiroKawaguchi: "The Spherical Gemotion Display -Interactive bumpy display reacts like living things real timely", ASIAGRAPH 2009 in Tokyo, Vol.3, No.1, pp.5-10, 2009. 【査読有】

講演・口頭発表

豊泉徹平、米倉将吾、河口洋一郎、神村明哉、多田隈理一郎:「1 自由度球体ロボットの開発」, 第 27 回日本ロボット学会学術講演会, 2009.

米倉将吾、國吉康夫、河口洋一郎:「震動型情動ロボットの開発: 身体の震えによる知覚機能の亢進」, 第 27 回日本ロボット学会学術講演会, 2009.

豊泉徹平、米倉将吾、河口洋一郎、神村明哉、多田隈理一郎:「1 自由度アクチュエータによる移動球体ロボットの開発」, 第 67 回形の科学シンポジウム予稿集, 2009.

河口洋一郎:「Art of Computer Creature」, 中国吉林国際アニメ漫画ゲームフォーラム, 2009. 【招待講演】

河口洋一郎:「Artistic CG and Computer Creature」, 21CTIS2009 (21c Transmedia Innovation Symposium 2009), 2009. 【招待講演】

河口洋一郎:「Computer Creatures for Animation」, 第一回中国鄭州国際アニメーションフォーラム 2009, 2009. 【招待講演】

河口洋一郎:「Bio-Machine Art 生命機械体」, The Council for Cultural Affairs Taiwan(CCA Taiwan), 2009. 【招待講演】

新聞・報道

河口洋一郎:「河口氏 CG 薩摩切子で表現」, 南日本新聞, 2009.

河口洋一郎:「生き物のように動く球面型凹凸ディスプレイが世界初公開」, ロボコンマガジン, 2009.

河口洋一郎:「世の中進歩堂 #59「デジタルコンテンツエキスポ 2009」内での報道」, BS ジャパン, 2009.

河口洋一郎:「日本 3D 動画教父 河口洋一郎:找出自己特色」, 文化新聞(中華人民共和国), 2009.

河口洋一郎:「アートが生み出すサバイバル・ロボット ー河口洋一郎アート@湯島聖堂」, ロボコンマガジン, 2009.

河口洋一郎:「画面が凹凸 3D 表現」, 日本経済新聞, 2009.

河口洋一郎:「立体映像ディスプレイ」, 毎日新聞, 2009.

受賞

河口洋一郎: CG JAPAN AWARD「CG JAPAN AWARD」, 芸術科学会, 2009 年.

姜 尚中・教授

研究テーマ(主たるもの)

東北アジアにおけるコリアンネットワークの形成

東北アジアにはこの地域を覆った植民地支配と戦争、さらに内戦と冷戦構造のために、数百万人に及ぶコリアン系マイノリティが散在し、言語、文化、社会、経済、アイデンティティなどの違いがありながらも、コリアンネットワークとも言える越境的(トランスナショナル)な移動、連鎖、交流の歴史が続いてきた。本研究は、このようなコリアンネットワークの形成とその歴史を辿りつつ、それが分断された朝鮮半島の平和的な共存と統一にどのような影響を与えることになるのか、その展望を明らかにすることにある。

東北アジア共同体形成の可能性とその展望

グローバル化の進展とともに、世界の多極化が進み、地域統合や地域主義の動きが顕著になりつつあるが、本研究では、このようなリージョナリズムの可能性と展望を、東北アジア地域に即して明らかにしようとするものである。具体的には、地政学的に東北アジア地域の中心に位置する朝鮮半島の共存と統一の問題を視野に、この地域の冷戦構造の終結と冷戦以後の地域秩序の構築がどのようにしたら可能になるのか、その条件と展望を地域主義の構想を通じて明らかにすることにある。

近代日本の国民意識の形成とアジア認識

東アジアにおいて早熟的に国民国家の形成に成功し、日清戦争、日露戦争を通じて近隣アジア諸国との支配・従属関係を築いていくことになる近代日本は、その過程を通じて「日本型オリエンタリズム」ともいうべき特異なアジア認識、アジア・イメージを形成していくことになった。本研究は、そのような近代日本のアジア認識の理念型的な構造とその歴史を、学問的な言説や論説、ジャーナリズムなどを素材に浮き彫りしようとするものである。

研究業績(2009 年度)

著書

姜尚中:「希望と絆 : いま、日本を問う 岩波ブックレット」, 岩波書店, 2009 年.

姜尚中:「リーダーは半歩前を歩け——金大中というヒント」, 集英社, 2009 年.

分担著書

C・ダグラス・ラミス, 姜尚中, 萱野稔人:「国家とアイデンティティを問う」, 岩波書店 編, 岩波書店, 2009 年.

姜尚中, 臼杵陽, 高橋哲哉, 上野成利, 杉田敦, 守中高明, 竹村和子, 齋藤純一, 金子勝:「思考のフロンティア 壊れゆく世界と時代の課題」, 岩波書店 編, 岩波書店, 2009 年.

大澤真幸, 姜尚中:「ナショナリズム論・入門」, 大澤真幸, 姜尚中 編, 有斐閣, 2009 年.

雑誌論文

姜尚中, 武川 正吾, 上野谷 加代子:「ウオッチング 2009 これからの日本をみる—地域社会の崩壊と再生」, 月刊福祉, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中:「オモニ—母(第 15 回)悩みの海」, 青春と読書 集英社, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中:「オモニ—母(第 14 回)祭祀」, 青春と読書 集英社, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中 広瀬隆:「世界の中のニッポン 2009 姜尚中 VS 広瀬隆 特別対論 日本は米国金融泥棒(オバマ政権)の ATM(現金自動支払機)になるな」, 週刊ポスト 小学館, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中 勝間和代:「対談 変革の人(最終回・特別編)不安時代をどう生きる 断る力と悩む力」, アエラ 朝日新聞出版, 2009 年. 【査読有】【一般向け】

姜尚中:「いまこそ「希望」を探すべき時。(乱世の時代—どう生きるか)」, 潮 潮出版社, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中:「急がば回れ、古典のススメ 漱石やウェーバーの「悩み」に学ぶ (特集 先の見えない時代の勉強術)」, 中央公論 中央公論新社, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中:「政治 姜尚中「小沢代表お辞めなさい」—独占 60 分「検察と戦うなら無所属でおやりなさい」」, アエラ 朝日新聞出版, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中:「決定的な年 (特集 オバマは何を変えるか—新-新世界秩序)」, 現代思想 青土社, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中:「オモニ—母(第 13 回)肩やさん」, 青春と読書 集英社, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中:「対談 いまこそ日中韓共同プロジェクトを立ち上げるチャンスだ! (世界経済危機と東アジア) — (経済危機に立ち向かう東アジア)」, 世界 岩波書店, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中:「政治学者 姜尚中氏インタビュー 「教科書なき時代」に古典は唯一の羅針盤だ (特集 不安の時代の道しるべ 60 冊の読み方 今こそ名著・古典に学ぼう!)」, 日経ビジネス associe 日経BP社, 2009 年. 【一般向け】

- 姜尚中:「オモニ―母(第12回)母の嘆き」, 青春と読書 集英社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「ニュースな人たち 姜尚中―虚無感を醸成するTV」, ぎゃらく 放送批評懇談会, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「オモニ―母(第11回)きずな」, 青春と読書 集英社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中 高樹のぶ子:「“夫婦の愛”を深めていますか。」, 潮 潮出版社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中 武川正吾 上野谷加代子:「ウオッチング 2009 これからの日本をみる―地域社会の崩壊と再生」, 月刊福祉 全国社会福祉協議会, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「思想の言葉 (特集 思想史のなかのアントニオ・ネグリ)」, 思想 岩波書店, 2009年.
- 姜尚中:「オモニ―母(第16回)再びの故郷の海」, 青春と読書 集英社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「オモニ―母(第17回)思い出は遠く」, 青春と読書 集英社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「オモニ―母(第18回)再会」, 青春と読書 集英社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「オモニ―母(第19回)悲哀」, 青春と読書 集英社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「オバマの「プラハ宣言」に日本はどう応えるか。(「核のない世界」へ)」, 潮 潮出版社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中 池明観 和田春樹:「「和解の政治家」金大中氏を送る」, 世界 岩波書店, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「歴史と勝負した指導者 (「和解の政治家」金大中氏を送る)」, 世界 岩波書店, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「毎年三万人が自殺する国で 日本に取り戻したい「希望」」, 中央公論 中央公論新社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中 佐藤学:「100号記念対談 新自由主義への対抗軸―教育・地域に絆と信頼をとり戻すために (特集 [クレスコ]100号記念 CHANGE! 日本の教育―いま、教育に必要なこと)」, クレスコ 大月書店, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「姜尚中が鳩山新首相の「宰相力」を7つの指標で問う! (誰にこの国を託すのか?)」, 週刊ポスト 小学館, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「政治は復権するか (特集 政権交代―私たちは何を選択したのか)」, 現代思想 青土社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中 上野千鶴子:「対談 一夜干しの「中古典」が今おもしろい」, 図書 岩波書店, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「姜尚中連続対談(1)姜尚中×清水康之 理想を実現するための決断」, 青春と読書 集英社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中:「オモニ―母(第20回)わだかまり」, 青春と読書 集英社, 2009年.【一般向け】
- 姜尚中 湯浅誠:「姜尚中連続対談(2)姜尚中×湯浅誠 問題を解決していくための“離合解散”」, 青春と読書, 2009年.【一般向け】

姜尚中:「オモニ一母(第 21 回)憂愁」, 青春と読書 集英社, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中:「オモニ一母(第 22 回)離別の秋(とき)」, 青春と読書, 2009 年. 【一般向け】

姜尚中 竹信三恵子 的場昭弘:「巻頭座談会 日本社会の希望学—現状から未来へ (特集 日本社会の希望学—未来を見つめて)」, 神奈川大学評論 神奈川大学広報委員会, 2009 年. 【一般向け】

越塚 登・教授

研究テーマ(主たるもの)

Ubiquitous Computing

Sensor Network

Operarting System

研究業績(2009 年度)

分担著書

越塚登:「ユビキタス ID センターの技術と活動(RFID タグの開発技術場 K(普及版))」, シーエムシー出版 編, シーエムシー出版, 2009 年.

雑誌論文

別所正博, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「ユビキタスコンピューティングと屋内環境の位置認識[招待論文]」, 電子情報通信学会誌, 小特集「ユビキタス時代の屋内位置検知技術」, Vol.92, No.4, pp.249-255, 2009 年.

越塚登:「ユビキタス社会の技術と人と社会」, 日本建築学会誌, 2009 年.

宮崎真悟, 石川千秋, 越塚登, 坂村健:「切替自在な暗号アーキテクチャ」, 情報処理学会論文誌, Vol.50, No.9, 2009 年. 【査読有】

Takahide Nakagawa, Ryosuke Fujiwara, Goichi Ono, Takayasu Norimatsu, Tatsuo Nakagawa, Masayuki Miyazaki, Kei Suzuki, Kazuo Yano, Akira Maeki, Yuji Ogata, Shunsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Intermittent Operation Control Scheme for Reducing Power Consumption of UWB-IR Receiver", IEEE Journal of Solid-State Circuits, Vol.44, No.10, pp.2702-2712, 2009 年. 【査読有】

国際会議等

Masato Kamio, Keiichi Nakamura, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura: "μT-Kernel: A Low Power and Small Footprint RTOS for Networked Tiny Devices", 6th International Conference on Information Technology : New Generations: ITNG 2009, 2009. 【査読有】

Mitsuo Shimohata, Hiroyuki Miki, Naotsune Hosono, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "User Interface of Mobile Tourist Information for Aging People", The 25th Annual International Technology & Persons with Disabilities Conference (CSUN), 2009. 【査読有】

その他論文

田島剛之, 石川徹, 越塚登: 「共通識別子『Uコード』を用いた、公物管理の情報化におけるデータモデルの提案とシステム事例」, 日本土木学会, 2009 年.

下畑光夫, 三樹弘之, 細野直恒, 越塚登, 坂村健: 「シニア向けモバイル観光情報サービスにおけるインタフェースの設計」, モバイル, pp. 47-50, 2009 年.

下畑光夫, 三樹弘之, 細野直恒, 越塚登, 坂村健: 「モバイル機器での音声情報における発話スタイルと情報重要度の分析」, 日本人間工学会関東支部第 39 回大会, pp. 122-123, 2009 年.

講演・口頭発表

Noboru Koshizuka: "Ubiquitous ID Technology: The Internet of things and places of the Future", JBCE Information Society Committee Meeting, Brussel, 2009. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組込みリアルタイム OS 入門」, 第 31 回『組込み型リアルタイム OS 実技コース: ITRON 初級編』, 2009. 【招待講演】【一般向け】

Noboru Koshizuka: "Ubiquitous ID Technologies", 2009 China Smart Card & RFID Expo, 2009. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組込みリアルタイム OS 入門」, 第 32 回『組込み型リアルタイム OS 実技コース: T-Kernel 初級編』, 2009. 【招待講演】【一般向け】

Noboru Koshizuka: "Internet of things and places: ubiquitous computing applications and services in Japan", FuturICT 2009: Hungarian-Japanese Joint Conference on Future Information and Communication Technologies, 2009. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイム OS 入門」, 第 33 回『組込み型リアルタイム OS 実技コース: ITRON 中級編』, 2009. 【招待講演】【一般向け】

Noboru Koshizuka: "Proliferation of Ubiquitous ID Technologies in the World", 2nd EU-Japan Cooperation Forum on ICT Research, 2009. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイム OS 入門」, 第 34 回『組込み型リアルタイム OS 実技コース』, 2009. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「ucode: 技術と応用」, 高度測位社会基盤研究フォーラム、第一回ワークショップ, 2009. 【招待講演】

越塚登:「組み込みリアルタイム OS 入門」, 八戸地域雇用機会増大促進協議会, 2009. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「組み込みシステムの現状と展望」, 国立東京工業高等専門学校教員研修会, 2009. 【招待講演】

越塚登:「ucode: 技術と応用」, MTI 官民サロン, 2009. 【招待講演】

越塚登:「ucode を用いた食品トレーサビリティシステムの実習」, 食品トレーサビリティ公開講座, 2009. 【招待講演】
【一般向け】

越塚登:「組み込みリアルタイム OS 入門」, 第 36 回『組み込み型リアルタイム OS 実技コース: ITRON 中級編』, 2009.
【招待講演】【一般向け】

越塚登:「TRON を用いた組み込みリアルタイムソフトウェア」, 第 2 回 日本スペースワイヤ ユーザー会, 2009. 【招待講演】

越塚登:「宇宙で使う TRON」, TRONSHOW 2010, 2009. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「ユビキタスで地域活性化(各論)」, TRONSHOW 2010, 2009. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「組み込み産業の活性化に向けて」, TRONSHOW 2010, 2009. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「イネーブルウェアの 20 年」, TEPS 2010, 2009. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「空間情報サービスのサービス面からの知見」, OKI ユビキタスサービス学」寄付講座シンポジウム, 2010.
【招待講演】

越塚登:「建設共通パス:テクノロジーがかえる身近な未来サービス」, 経済産業省 新需要開拓・雇用創出に向けた意見交換会 第 5 回会合, 2010. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「組み込みの明るい未来にむけて」, 東京高等専門学校 組み込みマイスター最終報告会, 2010. 【招待講演】

受賞

越塚登: 日本 ITU 協会賞「国際活動奨励賞」, 日本 ITU 協会, 2009 年.

坂村 健・教授

研究テーマ(主たるもの)

TRON (The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOS の基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOS の開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980 年から 20 年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRON は現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメ

ラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われている。基本哲学はオープンアーキテクチャで、誰でもフリーでソースコードまで含み利用できる。2010年6月に7年かけて地球に帰還した宇宙航空研究開発機構(JAXA)の小惑星探査機「はやぶさ」の制御にも TRON が使われている。

Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を1980年初頭に提唱し、研究を進めてきた。これは、現在ではユビキタスコンピューティングやIoT(Internet of Things)と呼ばれている分野である。研究室では、Context-aware Computing や超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行っている。最近では、uID アーキテクチャの研究に力を入れており、すでに火災報知器等長期にわたりメンテナンスを要する製品のトレーサビリティシステムなどに、数百万のuコードが使われている。

Digital Museum

高度なデジタル技術を博物館や美術館に活用することで、新しいミュージアムの確立を提唱し「デジタルミュージアム」と名づけた。デジタル技術を駆使した、資料の収集、保存、修復、展示などの研究を行い、その成果をいかして構築した情報システムや展示システムは、1990年代初めに提唱され、以後多くの研究に影響を与えた。この研究では複数のユーザが同時に共有できる三次元仮想空間システム:MMUD(Multi-Media Multi-User Dungeon)の研究開発やユビキタスコンピューティング技術に基づくユビキタスミュージアム等があり、東京都の東京ユビキタス計画銀座・浜離宮や都庁の空間情報システム・東京ミッドタウンユビキタスアートツアー等で実システムとして運用されている。漢字のような大規模文字セットを使用する国において技術的な限界による文化制限を行わないですむ多言語コンピュータの研究も進め、その成果をふまえて17万字以上の文字を扱えるシステムの構築にも成功している。

研究業績(2009年度)

雑誌論文

別所正博, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「ユビキタスコンピューティングと屋内環境の位置認識」, 電子情報通信学会誌, <小特集>ユビキタス時代の屋内位置検知技術, 電子情報通信学会, 2009年4月, Vol.92, No.4, pp.249-255, 2009年。【査読有】

宮崎真悟, 石川千秋, 越塚登, 坂村健: 「切替自在な暗号アーキテクチャ」, 情報処理学会論文誌, <特集>社会を活性化するコンピュータセキュリティ技術, 情報処理学会, 2009年9月, Vol.50, No.9, pp.2218-2227, 2009年。【査読有】

Takahide Terada, Ryosuke Fujiwara, Goichi Ono, Takayasu Norimatsu, Tatsuo Nakagawa, Masayuki Miyazaki, Kei Suzuki, Kazuo Yano, Akira Maeki, Yuji Ogata, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Intermittent Operation Control Scheme for Reducing Power Consumption of UWB-IR Receiver", IEEE Journal of Solid-State Circuits, IEEE, October 2009, Vol.44, No.10, pp.2702-2710, 2009年。【査読有】

国際会議等

Masato Kamio, Keiichi Nakamura, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Micro T-Kernel: A Low Power and Small Footprint RTOS for Networked Tiny Devices", 6th International Conference on Information Technology: New Generations, IEEE Computer Society, April 2009, pp.587-594, 2009。【査読有】

M. Fahim Ferdous Khan, Takeshi Yashiro, Ito So, Masahiro Bessho, Ken Sakamura: "A Secure and Flexible Electronic -Ticket System", 33rd IEEE International Computer Software and Applications Conference, IEEE, July 2009, pp.421-426, 2009. 【査読有】

Takeshi Ogasawara, Ken Sakamura: "How Lock Contention Affects Energy Use in a CMP Server", the 24th ACM SIGPLAN Conference on Object-Oriented Programming, Systems, Languages and Applications, ACM SIGPLAN, October 2009, pp.765-766, 2009. 【査読有】

Mitsuo Shimohata, Hiroyuki Miki, Naotsune Hosono, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "User Interface of Mobile Tourist Information for Aging People", The 25th Annual International Technology & Persons with Disabilities Conference, March 2010, online, 2010.

その他論文

坂村健: 「はじめに: 発展への期待」, 電子情報通信学会誌, <小特集>ユビキタス時代の屋内位置検知技術, 電子情報通信学会, 2009年4月, Vol. 92, No. 4, p. 248, 2009年.

坂村健: 「ユビキタス社会と観光振興」, 観光とまちづくり, 日本観光協会, 2009年4月, Vol. 495, pp. 21-23, 2009年.

高島健, 高橋忠幸, 国分紀秀, 能町正治, 坂村健, 檜原弘樹, 久保山智司: 「SDS-1 に搭載したスペースワイヤー実証モジュール(SWIM)」, 電子情報通信学会技術研究報告, SANE, 宇宙・航行エレクトロニクス, 電子情報通信学会, 2009年6月, Vol. 109, No. 101, pp.53-58, 2009年.

君島健之, 坂村健: 「電脳コンクリートの展開」, セメント・コンクリート, セメント協会, 2009年7月, Vol. 749, pp. 39-43, 2009年.

下畑光夫, 三樹弘之, 細野直恒, 越塚登, 坂村健: 「モバイル音声情報サービスにおける発話スタイルと情報受容度の分析」, 日本人間工学会関東支部第39回大会, 日本人間工学会関東支部, 2009年12月, pp. 122-123, 2009年.

坂村健: 「総合論文誌第8号の刊行にあたって(ユビキタス社会と建築・都市のフロンティア)」, 日本建築学会総合論文誌, 日本建築学会, 2010年1月, Vol. 8, p. 1, 2010年.

下畑光夫, 三樹弘之, 細野直恒, 越塚登, 坂村健: 「シニア向けモバイル観光情報サービスにおけるインタフェースの設計」, モバイル'10, モバイル学会, 2010年3月, pp. 47-50, 2010年.

講演・口頭発表

坂村健: 「情報技術によるインフラ高度化」, 「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座設立シンポジウム, 2009年4月15日, 2009. 【基調講演】

坂村健: 「ユビキタス空間情報社会基盤の構築」, 「ユビキタス空間情報社会基盤の構築」シンポジウム, 2009年4月22日, 2009. 【基調講演】

Ken Sakamura: "Japan's UID strategy and international cooperation possibilities", Internet of Things Workshop An early reality of the Future Internet, May 10 2009, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「トロン生みの親が語る! オープン×オープン=∞(無限大)」, 第12回組込みシステム開発技術展, 2009年5月15日, 2009. 【招待講演】

Ken Sakamura: "Human-centric designs in TRON Project - TRON House and beyond", IEEE International Symposium on Circuits and Systems, May 26 2009, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「トロンプロジェクトの進捗状況と2009年の展望」, トロンプロジェクト特別講演会, 2009年6月3日, 2009.

坂村健: 「建築・都市分野における情報インフラ構築」, 第1回日本建築学会建築・都市分野における情報インフラ構築特別研究委員会, 2009年6月5日, 2009. 【基調講演】

坂村健: 「次世代インフラとしてのユビキタスと組込み技術」, 情報処理学会連続セミナー2009 第1回「組込みシステムの現状」, 2009年6月8日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「特別講演」, 第7回ITRON/T-Kernelオープンセミナー, 2009年7月22日, 2009. 【基調講演】

坂村健: 「さまざまな情報媒体とユビキタス」, 食品トレーサビリティ講習会, 2009年7月23日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「ユビキタス・コンピューティングーどこでもコンピュータの世界」, 創造性の育成塾, 2009年8月5日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「さまざまな情報媒体とユビキタス」, 食品トレーサビリティ講習会, 2009年10月6日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「イノベーションとユビキタス」, 産学官連携フェア2009みやぎ, 2009年10月14日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「新しい防災通信技術ーユビキタスコンピューティングと地域の安心・安全」, 第18回地理情報システム学会研究発表大会, 2009年10月15日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「ユビキタスと宇宙」, ETS-8「きく8号」成果・利用シンポジウム, 2009年10月20日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「イノベーションとユビキタス」, 第6回ICTユビキタス・フェア2009 in あおもり, 2009年11月4日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「組込み技術をとりまく環境変化とT-Engine/T-Kernel」, Embedded Technology 2009, 2009年11月18日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「TRONハウス-uIDアーキテクチャに基づくユビキタスコンピューティングのアプリケーション」, 情報通信とワイヤレス技術に関するセミナー, 2009年11月25日, 2009. 【招待講演】

坂村健: 「ユビキタス社会の発展と地域」, u-K協フォーラム2010, 2010年2月1日, 2010. 【招待講演】

坂村健: 「パネル討論「30年後の未来予想としての情報分野ロードマップ」」, 第3回情報学シンポジウム, 2010年3月6日, 2010. 【招待講演】

坂村健: 「パネル討論「情報処理グランドチャレンジ」」, 情報処理学会創立50周年記念全国大会, 2010年3月11日, 2010. 【招待講演】

坂村健: 「ユビキタス技術と建築生産の将来」, 建設共通パス研究開発委員会および就労履歴管理制度研究会シンポジウム, 2010年3月19日, 2010. 【招待講演】

新聞・報道

坂村健:「時代の風: つながる世界 感動の輪 見ましたか 47歳の歌声」, 毎日新聞, 2009年4月26日, 2009.

坂村健:「日曜フォーラム「どう進むIT社会～暮らしの中の情報システム～」」, NHK 教育テレビ, 2009年5月24日, 2009.

坂村健:「時代の風: 新型インフル騒ぎ-必要な多様性得られる」, 毎日新聞, 2009年5月31日, 2009.

坂村健:「ロボつく「暮らしを便利にするユビキタスって何! ? <前編>」」, テレビ東京, 2009年6月14日, 2009.

坂村健:「ロボつく「暮らしを便利にするユビキタスって何! ? <後編>」」, テレビ東京, 2009年6月21日, 2009.

坂村健:「【正論】多様性こそが究極の安全保障」, 産経新聞, 2009年6月24日, 2009.

坂村健:「時代の風: プロジェクトの進め方 欧州「カメ型」の長所発見」, 毎日新聞, 2009年7月5日, 2009.

坂村健:「特報首都圏「急拡大する“投稿動画パワー”」」, NHK 総合テレビ, 2009年7月24日, 2009.

坂村健:「時代の風: カードサービス多様化 「公共系」もポイント制に」, 毎日新聞, 2009年8月9日, 2009.

坂村健:「時代の風: 「田名部まつり」の今日性 「筋の通ったゆるさ」に共感」, 毎日新聞, 2009年9月13日, 2009.

坂村健:「NHK ニュース おはよう日本「電子政府について」」, NHK 総合テレビ, 2009年9月19日, 2009.

坂村健:「時代の風: 高速道路のあり方 環境保護に ETC 活用を」, 毎日新聞, 2009年10月18日, 2009.

坂村健:「NHK ニュース「成長・戦略会議」初会合開く-観光・空港など国際競争力強化へ議論」」, NHK 総合テレビ, 2009年10月27日, 2009.

坂村健:「時代の風: ネット接続権 電子的社会へ参加義務」, 毎日新聞, 2009年11月22日, 2009.

坂村健:「ワールドビジネスサテライト」, テレビ東京, 2009年11月25日, 2009.

坂村健:「時代の風: ツイッター ブログと違う、規則設計」, 毎日新聞, 2009年12月27日, 2009.

坂村健:「時代の風: マイケルの「キレ」」, 毎日新聞, 2010年2月7日, 2010.

坂村健:「BSフジ LIVE PRIME NEWS「コンピュータ革新で世界を変えた東大教授」」, BSフジ, 2010年2月18日, 2010.

坂村健:「時代の風: 3D 映画「アバター」感情移入の新たな段階」, 毎日新聞, 2010年3月14日, 2010.

佐倉 統・教授

研究テーマ(主たるもの)

科学技術コミュニケーション

科学技術の専門家と非専門家間のコミュニケーションを、円滑化、活性化するための方法論や制度策定および科学的・文明論的な理論枠組みの構築。

脳神経倫理(ニューロエシックス)

脳神経科学の倫理的、社会的、哲学的諸問題を考察し、教育現場や社会とのコミュニケーションなどにおける実際の問題の解決をめざす。

進化生物学史、動物行動学史

とくに日本における進化生物学、動物行動学の歴史を、諸外国の事例と比較しつつ、特徴を抽出する。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

安藤寿康・福士珠美・佐倉統:「人を対象とした研究の倫理」, 日本音響学会誌, Vol.65, No.6, pp.324-330, 2009 年.

佐倉統:「ヒトが人である理由——「進化論」から得られる俯瞰の眼差し【インタビュー】」, MOKU, Vol.213, pp.062-069, 2009 年. 【一般向け】

佐倉統:「ノーベル賞と十七条の憲法」, 化学, Vol.64, No.10, pp.11, 2009 年. 【一般向け】

Seki A., Uchiyama H., Fukushi T., Sakura O., Koeda T., and Japan Children: "Incidental Findings of Brain Magnetic Resonance Imaging Study in a Pediatric Cohort in Japan and Recommendation for a Model Management Protocol.", *Journal of Epidemiology*, Vol.20, No.Suppl 2, pp.S498-S504, 2010 年. 【査読有】

佐倉統:「日本の社会にとってダーウィンとは何なのか?」, 学術の動向, Vol.15, No.3, pp.71-73, 2010 年.

国際会議等

Kevin chien-chang Wu, Terrence Hua Tai, Ishihara, K., Fukushi, T. and Sakura, O.: "Neuroethics in Asia: Current situation and future views.", *BRAIN matters—New Directions in Neuroethics*, Halifax, Canada., 2009. 【査読有】

Isobe, T., Mizushima, N. and Sakura, O.: "Toward effective communication between neuroscience and society: A case of BMI (Brain-machine interface)[Poster Presentation]", *BRAIN matters—New Directions in Neuroethics*, Halifax, Canada., 2009. 【査読有】

Mizushima, N., Isobe, T. and Sakura, O.: "Research Ethics Consultation as a Method for Scientific Governance.", *Society for Social Studies of Science(4S) Annual Meeting*, Washington, DC., U.S.A., 2009. 【査読有】

Isobe, T., Mizushima, N. and Sakura, O.: "Toward Effective Communication between Neuroscience and Society: A Case of BMI (Brain-Machine Interface).", Society for Social Studies of Science(4S) Annual Meeting, Washington, DC., U.S.A., 2009. 【査読有】

その他論文

佐倉統:「科学と技術と生命観」, ヒトと動物の関係学 第1巻 動物観と表象, 奥野卓司・秋篠宮文仁(編著), 2009年.

Iriki A., Yamazaki Y., and Sakura, O.: "Evolution of an Intellectual Mind in the Primate Brain.", In: Michael L. Platt and Asif A. Ghazanfar(eds.) Primate Neuroethology, pp. 615-631., 2009年.

佐倉統:「生物の進化から見た人間観」, 桐光学園中学校・高等学校(編)『13歳からの大学授業——学問のツバサ——桐光学園特別授業 II』, 2009年. 【一般向け】

講演・口頭発表

佐倉統(演者):「脳科学と社会をつなぐ」, シンポジウム“神経科学リテラシー”, 2009. 【招待講演】

佐倉統:「脳科学と社会をつなぐ」, 神経科学入門 2009, 2009. 【招待講演】

石田東生・小林傳司・佐倉統・佐藤浩章・渡邊博子(パネリスト)大塚裕子(司会):「自律型対話プログラムによる科学技術リテラシーの育成(パネルディスカッション)」, 対話のススメ～自律型対話の実践力を育む～, 2009. 【招待講演】

水島希・磯部太一・佐倉統:「ベンチサイドの脳神経倫理——BMI研究を対象とした研究倫理コンサルテーションの試み」, 第32回日本神経科学大会(Neuroscience 2009), 2009.

Sakura, O.: "Brain-Machine Interface and society: designing a system of ethics and governance.", Neuroscience 2009(The 32nd Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society), 2009.

鎌田恭輔・牛場潤一(座長)鎌田恭輔・松本理器・牛場潤一・吉峰俊樹・佐倉統(演者):「シンポジウム「ヒト脳機能の理解と活用—その技術と倫理—」」, 第32回日本神経科学大会(Neuroscience 2009), 2009.

東京大学脳神経倫理研究連携ユニット・脳を活かす研究会(主催)脳科学若手の会(共催)戸田山和久・吉峰俊樹(登壇)・佐倉統(ファシリテータ)・牛場潤一(登壇)・福士珠美(グループディスカッションファシリテータ):「脳を知ることの、その先へ」, Neuroscience2009 サテライト SOCIAL, 2009.

佐倉統:「ダーウィン進化論と現代——知の巨人たちに未来を学ぶ」, 朝日カルチャーセンター, 2009. 【招待講演】
【一般向け】

佐倉統(コーディネーター)牧衷・岡田秀則・長谷川智子(パネリスト):「討論:映画がつなぐ科学と社会」, 記録映画アーカイブ・プロジェクト第2回ワークショップ「たのしい科学-岩波映画の理科教室」, 2009. 【一般向け】

佐倉統:「総合的な学習の時間」, 東京都立日比谷高等学校, 2009. 【招待講演】【一般向け】

黒田佑次郎・岩瀬哲・佐倉統:「緩和医療における生存期間の正確な予測と、患者と家族に与える影響について——大学病院の事例から——」, 第21回日本生命倫理学会年次大会, 2009.

佐倉統(オーガナイザ)・山口富子・加藤和人・三上直之・水島希・他(演者):「シンポジウム「萌芽的技術(emerging technology)の参加型技術評価デザイン」」, 科学技術社会論学会第8回年次研究大会, 2009.

Sakura, O.: "Bridging Neuroscience and Society.", The 3rd Neuroethics Forum – Korean & Japanese Experience, 2009. 【招待講演】

佐倉統(司会)西田豊明・美馬のゆり・森川博之(パネル):「パネル討論「情報技術と情報文化の未来」」, シンポジウム「情報技術を文化へ——その可能性——」, 2009. 【招待講演】

伊東豊雄・福岡伸一・佐倉統:「第6回生命の際」, 建築の際, 2010. 【一般向け】

佐倉統:「開会挨拶」, 「研究推進と人材育成のポジティブな関係を考えるフォーラム」, 2010.

須藤 修・教授

研究テーマ(主たるもの)

ICTの発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、中国、日本という21世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム(Regional Economic System)の動向を比較検討しながら、ICTの発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係について、またICTの発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。

センサーネットワークを用いた予防医療システムに関する研究

産・官・学の連携を促しながら、センサーネットワーク、高度データマイニング、グリッド・コンピューティングを組み合わせたICT基盤を用いて、糖尿病を中心とした生活習慣病の予防に関する実証実験を推進し、その実験と連動させて、産・官・学・民の共創を活性化させるセンサーネットワーク基盤地域コミュニティの形成とそのガバナンスに関する制度構想の研究を進めたいと考えている。そして、電子行政および医療情報基盤について、社会基盤としてのICTプラットフォームに関する政策科学的研究を推進する。

地球環境問題と持続可能な発展に関する研究

深刻化している地球環境破壊について検討するとともに、IT及びバイオテックの動向とネットワークを基盤にした経済活動の動向を関連させながら、環境保全型(循環型)の持続可能な地域経済発展について研究を行う。

研究業績(2009年度)

分担著書

須藤修:「次世代電子行政サービス基盤等検討プロジェクトチーム(座長:須藤修)編『次世代電子行政サービス基盤等検討プロジェクトチーム中間報告』(政府IT戦略本部、2009年10月26日)1-148ページ」, 次世代電子行政サービス基盤等検討プロジェクトチーム 編, 政府IT戦略本部, 2009年.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造、竹田正幸:「『情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究<平成21年度>』(国立情報学研究所、2010年3月)1-77ページ【須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造、竹田正幸「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」分担執筆】72ページ」、喜連川優・安達淳 編、国立情報学研究所、2010年。

須藤修:「須藤修「情報爆発時代の知識社会形成ガバナンス」喜連川優・安達淳 編『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成20年度成果報告書・情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究』(国立情報研究所、2010年)B01、1-7ページ」、喜連川優・安達淳 編、国立情報研究所、2010年。

須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造・竹田正幸:「須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造・竹田正幸「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」喜連川優・安達淳 編『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成20年度成果報告書・情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究』(国立情報研究所、2010年)B01-00-01、1-14ページ」、喜連川優・安達淳 編、国立情報研究所、2010年。

雑誌論文

須藤修:「電子行政サービスによるイノベーション」、『経済Trend』(日本経済団体連合会、2009年4月)第57巻第4号、35-37ページ、2009年。【一般向け】

井上創造、竹森正起、鶴田紘子、中島直樹、須藤修:「特定健診効率化のための加速度センサによる行動判別」、『情報処理学会DICOM2009論文集』(情報処理学会、2009年7月)、pp.1370-1379、2009年。【査読有】

須藤修:「ユビキタス社会におけるイノベーションとガバナンス」、『日本建築学会総合論文誌・ユビキタス社会と建築・都市のフロンティア』(日本建築学会、2010年1月)第8号、5-8ページ、2010年。【招待論文】

中島直樹、井上創造、須藤修:「生体情報ライフログを用いた生活習慣病医療システムの設計」、『情報処理学会編『情報処理学会第72回全国大会講演論文集(5)』(情報処理学会、2010年3月8日)67-68ページ、2010年。

井上創造、鶴田紘子、中島直樹、須藤修:「生活習慣病保健指導のための生体情報ライフログ取得実験」、『情報処理学会編『情報処理学会第72回全国大会講演論文集(5)』(情報処理学会、2010年3月8日)71-72ページ、2010年。

井上創造、末永俊一郎、千田廉、中島直樹、須藤修:「生体情報ライフログネットワーク構築のケーススタディ」、『情報処理学会編『情報処理学会第72回全国大会講演論文集(5)』(情報処理学会、2010年3月8日)69-70ページ、2010年。

須藤修・木下裕美子:「e-Serviceにおけるデータ連携と行政イノベーション」、『情報処理学会編『情報処理学会第72回全国大会講演論文集(5)』(情報処理学会、2010年3月8日)9-10ページ、2010年。【査読有】

国際会議等

N. Nakashima, S. Inoue, H. Tsuruta, O. Sudoh, K. Kobayashi, T. Inoguchi,: "Info-Medicine Concept : information can be a medicine if it is provided in a timely and appropriate manner," , Proceedings of the 12nd China-Japan-Korea Medical Informatics Conference, pp.22-25, 2009. 【査読有】

その他論文

須藤修:「分水嶺に立つ日本の電子政府—このままでは世界に取り残される」、『日経BPガバメントテクノロジー』(日経BP社、2009年4月1日)第19号、59-62ページ、2009年。【一般向け】

須藤修:「動く!次世代電子行政サービス」、『新風』,TKC、2009年9月1日、第72号、2-7ページ、2009年。

講演・口頭発表

須藤修:「世界に見る新たな時代の兆し—Toward The Next Stage of Society」, 三菱総合研究所・東京大学産学連携本部主催『希望ある未来社会実現のために今、何をすべきか』(東京大学弥生講堂・一条ホール、2009年4月15日), 2009. 【招待講演】

須藤修、太田与洋、本田由紀、玄田有史、村上清明:「希望ある未来社会実現のために今、何をすべきか」, 三菱総合研究所・東京大学産学連携本部主催『希望ある未来社会実現のために今、何をすべきか』(東京大学弥生講堂・一条ホール、2009年4月15日), 2009.

須藤修:「アセスメントワーキンググループ活動報告」, 新世代ネットワーク推進フォーラム総会(六本木ヒルズアカデミーヒルズ、2009年4月14日), 2009.

須藤修:「知識社会経済システムの競争的発展とそのガバナンスに関する研究」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『平成21年度文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」領域全体会議』(東京大学医学部鉄門講堂、2009年5月14日), 2009.

須藤修:「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『平成21年度文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」領域全体会議』(東京大学医学部鉄門講堂、2009年5月13日), 2009.

須藤修:「新IT戦略と電子行政サービスの刷新」, 地方自治体情報システム研究会平成21年度総会(東京コンファレンスセンター品川、2009年5月21日), 2009. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「新IT戦略における電子行政サービスと医療高度化」, 福島県高度情報化推進協議会主催『情報通信月間特別講演会』(ホテルサンルートプラザ福島、2009年6月3日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

福田豊、芝田晃、青山友紀、清原慶子、太田敏澄、遠藤薫、須藤修:「IT社会の進化とIT関連学会の役割」, 日本社会情報学会(JASI)主催『ICTフォーラム2009』(東京国際フォーラム、2009年6月6日), 2009. 【招待講演】

須藤修:「ICTと社会情報学会」, 日本社会情報学会(JASI)主催『ICTフォーラム2009』(東京国際フォーラム、2009年6月6日), 2009. 【招待講演】

須藤修:「次世代電子政府と情報セキュリティ」, RSA主催『RSA Conference Japan 2009』(幕張メッセ国際会議場、2009年6月10日), 2009. 【招待講演】

井上創造、鶴田紘子、中島直樹、須藤修:「情報爆発プロジェクトにおける医療情報活用事例」, 『第13回医療情報学会春季学術度全国大会』(長崎大学医学部、2009年6月13日), 2009.

須藤修:「Next Stage of e-Gov and IT Security」, 日本ICカード利用促進協議会主催『日本ICカード利用促進協議会講演会』(プラットフォームスクエア、2009年6月24日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政サービスの構想」, マイクロソフト株式会社主催『電子自治体戦略会議』(東京国際フォーラム、2009年7月2日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代電子サービスと情報セキュリティ」, 日本メーリングサービス協会主催『日本メーリングサービス協会講演会』(メルパルク東京、2009年7月3日), 2009. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「新 IT 戦略と空間情報」, 株式会社インフォマティクス主催『空間情報シンポジウム 2009』(東京コンファレンスセンター品川、2009 年 7 月 7 日), 2009. 【基調講演】【招待講演】

井上創造、竹森正起、鶴田紘子、中島直樹、須藤修:「特定健診効率化のための加速度センサによる行動判別」, 情報処理学会主催『情報処理学会 DICOMO2009』(別府温泉杉乃井ホテル、2009 年 7 月 9 日), 2009.

須藤修:「新 IT 戦略と空間情報」, 株式会社インフォマティクス主催『空間情報シンポジウム 2009』(名古屋大学豊田ホール、2009 年 7 月 15 日), 2009. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「次世代電子行政サービスにおける ID 管理とプライバシー」, 『第 10 回 ISS スクエア水平ワークショップ』(情報セキュリティ大学院大学、2009 年 7 月 16 日), 2009. 【招待講演】

須藤修、秋草直之、児玉幸治、藤縄善朗、村上誠一郎:「討論・利用者ニーズに応える便利で効率的で安心な電子行政の推進を!」, 財団法人日本生産性本部主催『情報化シンポジウム・イン・東京』(グランドアーク半蔵門、2009 年 7 月 22 日), 2009. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「IT 基盤の刷新と電子行政サービスイノベーション」, 富士通主催『ソフトウェア開発技術フォーラム』(富士通本社、2009 年 7 月 23 日), 2009. 【招待講演】

須藤修:「次世代電子行政基盤の構築と官民によるサービスの創造」, Open Government Cloud Consortium 主催『OGC 創設記念公開シンポジウム』(都市センターホテル、2009 年 7 月 28 日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「センサーネットワークと予防医療に関する研究」, 東京大学産学連携本部主催『第 1 回 UCR コミュニティ』(東京大学総合図書館大会議室、2009 年 7 月 29 日), 2009.

須藤修:「私の考える電子自治体—電子政府・電子自治体・官民連携・地域発展」, 財団法人地方自治情報センター主催『電子自治体推進セミナー』(海運クラブ、2009 年 7 月 31 日), 2009. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開:次世代電子行政基盤と地域発展」, 総務省自治大学校主催『自治体職員研修第 1 部課程第 112 期』(総務省自治大学校、2009 年 8 月 5 日・6 日), 2009. 【一般向け】

須藤修:「データ連携とサービスの革新」, 情報通信政策フォーラム主催『日本の情報通信政策——電子政府に関する動向』(TKP 虎ノ門ビジネスセンター、2009 年 8 月 7 日), 2009. 【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政サービスが目指すもの」, 日立製作所主催『次世代電子行政サービスの実現に向けて』(日立ソリューションコミュニティ関西、2009 年 9 月 4 日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「我が国の情報技術活用への展望:次世代電子行政サービスのグランドデザイン」, UML モデリング推進協議会主催『Modeling Forum2009』(東京ミッドタウン・ホールA、2009 年 9 月 11 日), 2009. 【基調講演】【招待講演】

須藤修:「次世代電子行政サービスとクラウドコンピューティング」, Sun Microsystems『SUN Government & Education Conference 2009』(ベルサール八重洲、2009 年 9 月 11 日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政サービスの構想」, 財団法人地方自治情報センター『地方自治情報化推進フェア 2009』(東京ビッグサイト、2009 年 9 月 28 日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政サービスとクラウドコンピューティング」, 沖縄県ソフトウェア事業組合・オープンガバメントクラウド・コンソーシアム主催『クラウドコンピューティング・セミナー沖縄』(パシフィックホテル沖縄、2009年10月2日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代電子政府基盤の構築—データ連携とクラウドコンピューティング」, Internet Initiative Japan (IIJ) 主催『IIJビジネスフォーラム—クラウドコンピューティングへの展望』(経団連会館国際会議場、2009年10月6日), 2009. 【招待講演】【一般向け】

Osamu Sudoh: “The Next Generation e-Service by Public Sector and The Quality of Network, ”, NICT and European Commission org., 2nd Japan-EU Symposium on the Next Generation Network and Future Internet, Bellesalle Kudan, Tokyo, Oct. 14, 2009. 【招待講演】

須藤修:「次世代電子政府基盤の構築—データ連携とクラウドコンピューティング」, Internet Initiative Japan (IIJ) 主催『IIJビジネスフォーラム—クラウドコンピューティングへの展望』(大阪国際会議場、2009年10月21日), 2009. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政基盤の取り組み:データ連携とクラウドコンピューティング」, NTT 主催『次世代電子行政サービス講演会』(通信パーク、2009年10月23日), 2009. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代公共サービスと新世代ネットワーク:大量データ転送とクラウドコンピューティング」, CIAJ主催『新世代ネットワーク・セミナー』(浜松町東京會館、2009年10月26日), 2009. 【招待講演】

須藤修:「次世代電子行政サービスの構想」, マイクロソフト主催『電子自治体戦略会議』(国際フォーラム、2009年10月28日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政サービス構想と自治体」, 文京区主催『管理職員講演会』(文京シビックセンター、2009年10月29日), 2009. 【一般向け】

須藤修・森武俊・山本隆一・後藤玲子:「新世代ネットワークの社会経済的側面」, 新世代ネットワーク推進フォーラム主催『研究開発戦略・アセスメントワーキンググループシンポジウム』(三田共用会議所講堂、2009年11月11日), 2009.

齊藤忠夫・須藤修・村田正幸・沖中秀夫・長島哲也:「将来のわが国における新世代ネットワークビジョン」, 新世代ネットワーク推進フォーラム主催『研究開発戦略・アセスメントワーキンググループシンポジウム』(三田共用会議所講堂、2009年11月11日), 2009.

小尾敏夫・須藤修・国領二郎・大山永昭:「電子政府・自治体の将来像」, 早稲田大学アジア太平洋研究センター・国際CIO学会他共催『第8回ワセダCIOフォーラム:未来社会へのガバナンス』(早稲田大学小野記念講堂、2009年11月17日), 2009.

須藤修:「電子自治体の構築と今後の展望」, 市町村職員中央研修所主催『電子自治体の推進と地域における情報政策』(市町村アカデミー、2009年11月19日), 2009. 【一般向け】

須藤修:「電子行政とこれからのデジタル社会」, 富士通主催『公共ソリューション研究会』(汐留シティセンター、2009年11月25日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「電子政府の動向と社会保険労務士への期待」, 全国社会保険労務士会連合会主催『電子申請フェア』(東京會館、2009年12月3日), 2009. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

Osamu Sudoh: "The Next Generation of e-Service by Public Sector", City Government of Bellevue org., Cloud Computing : eCityGov. Private Cloud, at Bellevue City Hall, Dec. 8th, 2009. 【一般向け】

山口英、国領二郎、須藤修、林紘一郎、林春男:「企業・自治体の組織経営とリスク管理」, 独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター主催『<情報と社会>研究開発領域シンポジウム・ユビキタス社会のガバナンス』(富士ソフトアキバプラザ、2010年1月19日), 2010.

須藤修、齊藤忠夫、後藤玲子、横尾俊彦、吉田稔:「討論・地域情報プラットフォームを活用したシステム改革・業務改革」, 総務省主催『地域情報化トップセミナー』(全国都市会館、2010年1月26日), 2010. 【一般向け】

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開」, 総務省自治大学校主催『自治体職員研修第1部課程第113期』(総務省自治大学校、2010年2月23日-24日), 2010. 【一般向け】

須藤修:「2010年ICT未来予測」, 新社会システム研究所主催『2010年ICT業界が変わる』(明治記念館、2010年2月3日), 2010. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「ICTイノベーションと社会システム」, 北陸先端科学技術大学院大学・安心電子社会教育研究センター主催『安心電子社会教育研究講演会』(2010年2月8日), 2010. 【招待講演】

須藤修:「ICT Innovation and Data-Intensive」, LCDM推進フォーラム主催『LCDM活動成果報告会』(都市センターホテル、2010年2月10日), 2010. 【基調講演】

須藤修:「次世代電子政府の動向」, マイクロソフト主催『第6回電子自治体戦略会議』(マイクロソフト大手町テクノロジーセンター、2010年2月17日), 2010. 【基調講演】【一般向け】

須藤修、原田要之助、吉濱佐知子、木原洋一、有吉純、大井正浩:「討論・クラウドコンピューティングのガバナンス」, 日本セキュリティ・マネジメント学会主催『第4回JSSMセキュリティ公開討論会』(東京電機大学神田キャンパス7号館丹羽ホール、2010年2月19日), 2010. 【招待講演】

須藤修:「目指すべき電子行政サービス」, 総務省主催『地域情報化トップセミナー』(全国都市会館、2010年1月26日), 2010. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

須藤修:「ICT利活用の展望」, 経済団体連合会情報通信委員会主催『経団連情報通信委員会講演会』(経団連会館、2010年3月5日), 2010. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「新世代ネットワークの戦略的活用」, 情報処理学会創立50周年記念全国大会企画セミナー「我が国における新世代ネットワーク」(東京大学法文1号館21教室、2010年3月9日), 2010.

須藤修・木下裕美子:「e-Serviceにおけるデータ連携とイノベーション」, 情報処理学会創立50周年記念全国大会(東京大学、2010年3月11日), 2010.

須藤修:「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『文部科学省科学研究費特定領域研究・平成21年度「情報爆発IT基盤」プロジェクトシンポジウム』(東京大学工学部新2号館、2010年3月12日), 2010.

須藤修:「ブロードバンド・ネットワークと情報サービスの進化」, 読売新聞社主催『読売ICTフォーラム2010』(グランドプリンスホテル赤坂、2010年3月15日), 2010. 【基調講演】【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

須藤修・藤本正代:「情報セキュリティ最前線」, セキュリティ産業新聞 2009年10月25日号, 2009.

須藤修・国領二郎・大山永昭・小尾敏夫:「電子政府・自治体の将来像」, 『日本経済新聞』2009年12月16日付け朝刊, 2009.

須藤修:「産学民で<共創社会>」, 『読売新聞』2010年3月30日付け朝刊, 2010.

須藤修:「ブロードバンド・ネットワークと情報サービスの進化」, 『ヨミウリオンライン』(<http://www.yomiuri.co.jp/ictforum>), 2010.

園田 茂人・教授

研究テーマ(主たるもの)

変動するアジアの比較社会学

アジア、とりわけ中国系社会を対象に、アジア・バロメーターや中国四都市調査のデータを用い、その変化の諸層をひかくの視野から実証的に研究している。最近は、特に新中間層の台頭を視野に、その社会・文化的特徴や政治的な特徴から、どのようにアジアの変化をもたらすかについて考察を深めている。

日系企業のアジア進出への社会学的アプローチ

1991年から、日系企業のアジア進出をテーマに、社会学的調査を積み重ねている。2006年から07年にかけて、15年前に調査した日系企業(台湾、中国、タイ、マレーシア、インドネシア)を訪問し、その時系列的変化を追いかけて、2005年にはインドの日系企業調査を実施し、現地従業員の日系企業評価の比較を試みている。2009年からは、2001年に調査した中国の日系、韓国系、台湾系企業を対象に時系列調査を実施する計画をたてている。

研究業績(2009年度)

分担著書

園田茂人:「比較視野下的中産階級形成:過程、影響、以及社会経済後果」, 李春玲 編, 社会科学文献出版社, 2009年.

園田茂人:「ナショナリズム論・入門」, 大澤真幸・姜尚中 編, 有斐閣, 2009年.

園田茂人:「アジアバロメーター」, 猪口孝(関淑訳) 編, 小花, 2009年.

園田茂人:「アジアの頭脳を獲得するために何をすべきか:2008年アジア学生調査からの戦略的知見」, 竹内宏・末廣昭・藤村博之 編, 学生社, 2009年.

雑誌論文

園田茂人:「中国社会における流動性の高まりとその国内／国際的インパクト」, アジア研究, Vol.55, No.2, pp.10-22, 2009 年.【査読有】

Shigeto Sonoda: “Emergence of Homogeneous Social Class?: Commonalities and Differences of the New Middle Class in Globalizing East Asia”, Journal of Contemporary Eastern Asia, Vol.8, No.2, pp.1-14, 2009 年.【査読有】

園田茂人:「食文化の変化にみる東アジアのグローバル化:アジアバロメーターのデータ分析から」, 社会学評論, Vol.60, No.3, pp.396-414, 2009 年.【査読有】

園田茂人:「「階級政治」なき格差拡大という逆説」, 毛里和子編『NIHU現代中国早稲田大学拠点WICCS研究シリーズ1 日中学術討論会:中国ポスト改革開放 30 年を考える』, pp.59-70, 2009 年.

園田茂人:「格差問題の影が忍び寄る都市中間層の憂鬱」, 中央公論, No.6 月, pp.46-53, 2009 年.【一般向け】

国際会議等

園田茂人:“城市環境と人口増長の”令人棘手的関係”:以天津城市調査(2004-09)為例”, 中国的城市化進程与環境問題, 2009.

Shigeto Sonoda: “Different Perceptions of Social Inequality in China, India, and Russia: A Comparative Analysis of AsiaBarometer 2008”, International Symposium “Comparing the Politics of the Euroasian Regional Powers: China, Russia, India, and Turkey”, 2009.

Shigeto Sonoda: ““Emergence of Homogeneous Social Groups?: Convergence and Divergence among Middle Classes in Globalizing East Asia”, International Trading and Financial Hubs in East and Southeast Asia: Rivalry and Completeness, 2009.【査読有】

Shigeto Sonoda: “Emergence of “Class Conscious” Society in Urban China?”, 中国社会学会 2009 年学術年次大会, 2009.【査読有】

講演・口頭発表

園田茂人:「中国社会の変化と今後の行方」, S&A フォーラム講演会, 2009.【招待講演】【一般向け】

園田茂人:「「階級政治」なき格差拡大という逆説」, 中国・ポスト改革開放 30 年を考える, 2009.【招待講演】

Shigeto Sonoda: 「Changing Dietary Cultures and Impacts of Globalizations in East Asia: Some Research Findings of AsiaBarometer」, 2009 Mapping the Spaces of Media Cultures in Asia: Information, Communication and Politics, 2009.

園田茂人:「アジアの新中間層」, 東方学会第 59 回全国会員総会・シンポジウムⅢ, 2009.

園田茂人:「多面体としてのアジア? ——アジアバロメーターにみる結婚・幸福」, 東文研シンポジウム『結婚と幸福にみるアジアのカたち』, 2009.【一般向け】

園田茂人:「中国社会の構造と行動様式:中国市場における事業展開に向けて」, 日本監査役協会定例講演会, 2009.【一般向け】

園田茂人:「グローバル化するアジアにおける教育へのまなざし:アジア・バロメーターとアジア学生調査の知見から」, 日本比較教育学会第45回大会課題研究Ⅰ「グローバリゼーションの中の『格差社会』と教育」, 2009.【招待講演】

園田茂人:「現代中国における「格差」の位相」, 中国社会文化学会2009年度シンポジウム, 2009.【招待講演】

新聞・報道

園田茂人、他:「徹底検証!!!「ポスト改革開放30年」の中国」, アジア時報12月号, 2009.

園田茂人:「現代中国の階層変動を追いかけて」, 『科研費NEWS』No.4, 2009.

園田茂人:「ソフトパワー:日中韓は互いを結ぶ努力を」, 朝日新聞2009年7月23日, 2009.

鷹野 澄・教授

研究テーマ(主たるもの)

ITを活用し情報で人の命と暮らしを守るという研究

地震災害など大規模災害に対して、情報通信技術(IT)を活用して情報を適切に提供して、人々の命と暮らしを守ることについて研究します。

建物や大型構造物の構造物ヘルスマonitoringの研究

建物や大型構造物の劣化などの健康診断(ヘルスマonitoring)のために、IT強震計などのセンサーを活用して技術開発や応用の研究を進めています。

緊急地震速報などの即時的地震情報システムに関する研究

気象庁の緊急地震速報を活用するためには、利用者側でどのような対策をしたらいいのか、そのハード面での対策の研究からソフト面での取り組みなどについて研究します。

研究業績(2009年度)

その他論文

大原美保・関谷直也・地引泰人・須見徹太郎・古村孝志・鷹野澄・田中淳:「廣井アーカイブスの開発研究」, 東京大学大学院情報学環情報学研究調査研究編, 26, 81-90, 2009年.

沼田宗純・野村浩司・大原美保・目黒公郎・鷹野澄:「2009年8月11日の駿河湾を震源とする地震による生研の観測記録」, 生産研究, 61, 6, 90-94, 2009年.【査読有】

講演・口頭発表

伊藤貴盛・鷹野澄:「IT 強震計を利用した地域地震情報ネットの提案」, 日本地球惑星科学連合2009年大会, 2009.

鷹野澄, 烏海哲史:「複数オンサイト指標による統合的早期地震警報:IT 強震計への応用に向けて」, 日本地球惑星科学連合2009年大会, 2009.

鷹野澄, 池田泰久:「建物用 IT 強震計による建築物の地震時応答解析: 構造物ヘルスマニタリングへの応用に向けて」, 日本地球惑星科学連合2009年大会, 2009.

鷹野澄:「SINET3 広域 L2 網による次世代全国地震データ流通基盤システムの構築」, 国立情報学研究所平成 20 年度 CSI 委託事業報告交流会(ネットワーク・e-Science 系), 2009.

伊藤貴盛・鷹野澄:「IT 強震計を利用した地震情報ネットワーク」, 日本地震学会2009年秋季大会, 2009.

鷹野澄:「直下型地震対応のオンサイト地震警報システムの現状と課題」, 日本災害情報学会第 11 回学会大会, 2009.

鷹野澄・伊藤貴盛:「IT 強震計でみた地震時の複数建物の揺れの比較」, 日本地震学会2009年秋季大会, 2009.

鷹野澄・伊藤貴盛:「新型 IT 強震計のセンサー性能と応用可能性」, 日本地震学会2009年秋季大会, 2009.

K. Takano: "IT-Kyoshin Seismometer : It's Potential For Seismic Diagnosis For Buildings and Seismic Intensity Network", INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON JISNET WORKSHOP, Bukittinggi, West Sumatra, Indonesia, 2009. 【招待講演】

鷹野澄:「IT 強震計のネットワーク—災害軽減を目指すセンサーネットワーク—」, 第 1 回 StarBED/IT 強震計研究ユニットワークショップ, 2009. 【招待講演】

新聞・報道

鷹野澄(取材):「震度 1 の揺れで耐震診断」, 日経新聞, 2009.

田中 明彦・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

田中明彦:「『第 21 回アジア・太平洋賞』受賞作の講評 大賞『竹島密約』」, アジア時報, No.11 月, pp.7-8 頁, 2009 年. 【査読有】【一般向け】

田中明彦:「多極時代という新たな混迷の始まり」, エコノミスト, No.2009年12月29日・1月5日合併号, pp.22頁, 2010年。【一般向け】

Akihiko Tanaka: "Hatoyama's International Policy, From Confusion to New Strategies?", Japanese Spotlight, pp.17-19頁, 2010年。

その他論文

Akihiko Tanaka: "TREND IN JAPAN AND THEIR IMPACT ON JAPAN", Japanese Relations with ASEAN since the Fukuda Doctrine, 2009年。

新聞・報道

田中明彦:「北朝鮮ミサイル発射 -識者に聞く 対話路線に冷や水」, 毎日新聞, 2009。

田中明彦:「対談 日本国際政治学会[編]『日本の国際政治』全四巻 を語る」, 書齋の窓, 2009。

田中明彦:「総選挙が問うもの3「外交・安保」政策の「基本」明確に語れ」, 共同通信, 2009。

田中明彦:「09衆院選 包括的な対外戦略必要」, 読売新聞, 2009。

田中明彦:「ポスト・クライシスの国際政治に向けて」, 学士会会報 No878, 2009。

田中明彦:「中国建国60周年シンポ 世界経済のエンジンに」, 日本経済新聞, 2009。

田中明彦:「経済教室 鳩山外交 存在感発揮の好機 優先順位を間違うな」, 日本経済新聞, 2009。

田中明彦:「中国建国60周年シンポ パネル討論 -- 政治」, 民主化一歩ずつ確実に, 2009。

田中明彦:「「核不拡散と原子力の平和利用」シンポ 日本の技術貢献重要」, 読売新聞, 2009。

田中明彦:「不正直さ今も教訓」, 毎日新聞, 2010。

田中 淳・教授

研究テーマ(主たるもの)

災害情報論

災害による被害を軽減するために求められる災害情報の要件を、住民や市町村等利用者側の意志決定過程に関する実証研究の知見に基づき、実証的・理論的に解明し、具体的な提言に結び付けている。災害期の警報や避難勧告等、復旧・復興期の生活再建情報、事前の防災意識向上や防災教育など、各段階での課題を対象とする。

災害弱者対策

阪神・淡路大震災で高齢者や障害者に被害が大きかったことやハリケーン・カトリーナにおける人種や所得によって被害が異なったように、災害による影響は社会集団によって差違が生じる。この際は、地震や火山噴火、あるいは爆発と行った外力による被害の程度に留まらず、避難のしやすさや生活再建の円滑さなど長期的な側面を持つ。災害の過程で生じる社会格差の視座から、研究を進めている。

集合行動論

20世紀初頭に誕生した集合行動論は、パニックや都市暴動、社会運動など多様な創発的社会行動を理論的に分析してきた。ある意味、災害の社会学的研究もまたその流れをくんでいる。日常の制度や組織、役割など社会秩序が、災害により修正を余儀なくされるためである。災害研究の理論的バックグラウンドとして、集合行動論ならびにその批判的研究として登場した集合行為論の研究を行っている。

研究業績(2009年度)

分担著書

田中 淳:「火山工学入門」, 火山工学研究小委員会 編, 土木学会, 2009年.

雑誌論文

田中 淳:「災害情報から見た治水の論点」, 河川, Vol.66, No.1, pp.17-19, 2009年. 【一般向け】

国際会議等

Atsushi Tanaka: "Social work and Psychology", Symposium on Emergency Response and Disaster Recovery, 2009.

田中 秀幸・教授

研究テーマ(主たるもの)

産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が全般的に弱いために、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

情報セキュリティの経済的相互依存関係に関する分析

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなるインセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあった主体との関係にも大きな変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNPOとの相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する地域情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。

研究業績(2009年度)

著書

出口弘,田中秀幸,小山友介:「コンテンツ産業論:混淆と伝播の日本型モデル」, 東京大学出版会, 2009年.

雑誌論文

杉山幹夫,田中秀幸:「自治体のブランディング政策と地域企業ネットワークの比較研究」, 社会・経済システム, No.30, pp.27-33, 2009年. 【査読有】

岡本健志,田中秀幸:「地域 SNS のユーザー同士のつながり方に着目したネットワーク分析」, 日本社会情報学会誌, Vol.21, No.1, pp.45-55, 2009年. 【査読有】

田中秀幸,杉山幹夫:「自治体のブランディング政策と地域企業ネットワーク」, 経済政策ジャーナル, Vol.6, No.2, pp.72-75, 2009年. 【査読有】

岡本健志,田中秀幸:「情報サービス業の立地と産業集積に関する実証研究」, 経済政策ジャーナル, Vol.6, No.2, pp.44-47, 2009年. 【査読有】

田中秀幸:「広告が企業価値に与える影響: 広告の投資的効果に関する計量的実証分析」, 日経広告研究所報, No.249, pp.14-22, 2010年.

国際会議等

Tanaka, Hideyuki: "Quantitative Analysis of Information Security Interdependency Between Industrial Sectors", 3rd International Symposium on Empirical Software Engineering and Measurement, pp.574-584, 2009. 【査読有】

その他論文

佐藤訓,馬渡一浩,井出智明,榊原理恵,豊田優美子,豊田正史,田中秀幸,喜連川優:「レピュテーションと広告や企業価値との関係性分析」, 日本広報学会第15回研究発表大会予稿集, pp.44-47, 2009年.

中野邦彦,田中秀幸:「施政方針演説に着目した自治体情報化施策の研究」, 社会・経済システム学会第28回大会
予稿集, pp.25-28, 2009 年.

中野邦彦,田中秀幸:「地域 SNS のユーザー間インタラクションに関する実証分析」, 2009 年日本社会情報学会
(JSIS&JASI)合同研究大会研究発表論文集, pp.86-89, 2009 年.

杉山幹夫,田中秀幸:「地域ブランド形成とオープンな中小企業ネットワークに関する研究」, 2009 年日本社会情報学
会(JSIS&JASI)合同研究大会研究発表論文集, pp.200-203, 2009 年.

田中秀幸,馬渡一浩:「広告と企業価値に関する実証研究」, 2009 年日本社会情報学会(JSIS&JASI)合同研究大会
研究発表論文集, pp.284-289, 2009 年.

田中秀幸:「内発的動機付けプラットフォームとしての地域 SNS の可能性」, 第3回横幹連合コンファレンス, 2009 年
12 月 3 日-12 月 5 日,東北大学,CD-ROM 所収, 2009 年.

田中秀幸:「地域幸福度と住民参加:地域ソーシャルメディアを用いた実証分析」, 情報処理学会創立 50 周年(第 72
回)全国大会・講演論文集(5), pp.5-5 5-6, 2010 年.

田中秀幸,藤原正弘:「日本の通信産業の BOP 戦略に関する考察」, 情報処理学会創立 50 周年(第 72 回)全国大
会・講演論文集(5), pp.5-7 5-8, 2010 年.

講演・口頭発表

Tanaka, Hideyuki: "Innovation System for the New Generation Network in Japan ", NTVA Technology Forum 2009, 7
September 2009, Trondheim, Norway, 2009. 【招待講演】

田中秀幸:「情報セキュリティの相互依存性に関する研究:産業連関表を用いた定量的分析手法の提案」, 日本経済
政策学会第 66 回全国大会, 仙台:東北学院大学, 2009 年 5 月 30-31 日, 2009.

田中秀幸:「電子自治体の推進」, 財団法人 全国市町村研修財団 市町村職員中央研修所 ブラッシュアップ女性
リーダー研修, 2009. 【一般向け】

田中秀幸:「地域 SNS とコミュニティガバナンス」, デジタル・コミュニティガバナンス第 3 回研究会,2010 年 1 月 24 日,
同志社大学,京都, 2010. 【招待講演】

田中秀幸:「R&D と企業価値」, 第 3 回技術革新とサービス創造研究会, 2010. 【一般向け】

田中秀幸:「地域情報化の推進」, 財団法人 全国市町村研修財団 市町村職員中央研修所 ブラッシュアップ女性
リーダー研修, 2010. 【招待講演】【一般向け】

田中秀幸:「情報通信技術と企業立地・相互依存関係の変容」, 第 3 回 IT サービス産業のグローバル化と産業政策
に関する研究会, 2010. 【一般向け】

田中秀幸:「人が中心の地域情報化」, 掛川市主催掛川のここがいいじゃん! シンポジウム,掛川グランドホテ
ル,2010 年 3 月 13 日., 2010. 【招待講演】【一般向け】

辻井 潤一・教授

研究テーマ(主たるもの)

Grammar Formalisms, Multi-Lingual NLP

Information Extraction and Exploitation, Language Acquisition

Text Mining for Biology

研究業績(2009 年度)

分担著書

Matsuzaki, Takuya, Yusuke Miyao, Jun: "Probabilistic Context-Free Grammars with Latent Annotations. In "Supertagging - Using Complex Lexical Descriptions in Natural Language Processing.""", Srinivas Bangalore and Aravind K. Joshi 編, MIT Press, 2009 年.

雑誌論文

Miyao, Yusuke, Kenji Sagae, Rune Sætre, Takuya Matsuzaki and Junichi Tsujii: "Evaluating Contributions of Natural Language Parsers to Protein-Protein Interaction Extraction. ", *Bioinformatics*, Vol.25, No.3, pp.394-400,, 2009 年. 【査読有】

Wang, Yue, Jin-Dong Kim, Rune Sætre, Sampo Pyysalo and Jun: "Investigating heterogeneous protein annotations toward cross-corpora utilization. ", *BMC Bioinformatics*, Vol.10, pp.403, 2009 年. 【査読有】

Kano, Yoshinobu, William A. Baumgartner Jr, Luke McCrohon, Sophia Ananiadou, K. Bretonnel Cohen, Lawrence Hunter and Jun: "U-Compare: share and compare text mining tools with UIMA.", *Bioinformatics*, Vol.25, No.15, pp.1997-1998, 2009 年. 【査読有】

Miwa, Makoto, Rune Sætre, Yusuke Miyao, and Jun: "Protein-Protein Interaction Extraction by Leveraging Multiple Kernels and Parsers.", *International Journal of Medical Informatics*, Vol.78, No.12, pp.e39--e46, 2009 年. 【査読有】

Hatori, Jun, Yusuke Miyao, and Jun: "On Contribution of Sense Dependencies to Word Sense Disambiguation. ", *Journal of Natural Language Processing*, Vol.16, No.5, pp.51-77, 2009 年. 【査読有】

Tsunakawa, Takashi, Naoaki Okazaki, Xiao Liu and Junichi Tsujii: "A Chinese-Japanese Lexical Machine Translation through a Pivot Language. ", *ACM Transactions on Asian Language Information Processing*, Vol.8, No.2, pp.9:1-9:21, 2009 年. 【査読有】

国際会議等

Sun, Xu and Junichi Tsujii: "Sequential Labeling with Latent Variables: An Exact Inference Algorithm and An Efficient Approximation.", the 12th Conference of the European Chapter of the Association for Computational Linguistics (EACL 2009), pp.772-780, 2009. 【査読有】

Yu, Kun and Junichi Tsujii: "Bilingual Dictionary Extraction from Wikipedia.", Proceedings of Machine Translation Summit XII, 2009.

Matsuoka, Yukiko, Samik Ghosh, Norihiko Kikuchi, Rune Sætre, Brian Kemper, Naoaki Okazaki, Sophia Ananiadou, Jun: "Community Platform for Pathway Model Building.", the 10th International Conference on Systems Biology, pp.139-140, 2009. 【査読有】

Matsubayashi, Yuichiroh, Naoaki Okazaki and Jun: "Accurate and Robust Semantic Role Labeling using Multiple Generalization Criteria in PropBank. ", the 5th International Conference on Generative Approaches to the Lexicon, pp.97-104, 2009. 【査読有】

Wu, Xianchao, Takuya Matsuzaki, Naoaki Okazaki, Yusuke Miyao, Jun: "The UOT System: Improve String-to-Tree Translation Using Head-Driven Phrase Structure Grammar and Predicate-Argument Structures.", the IWSLT 2009, pp.99-106, 2009. 【査読有】

Okanohara, Daisuke, and Junichi Tsujii: "Text Categorization with All Substring Features.", SIAM International Conference on Data Mining (SDM), pp.838-846, 2009. 【査読有】

Yao-zhong Zhang, Takuya Matsuzaki, Jun: "HPSG Supertagging: A Sequence Labeling View.", the 11th International Conference on Parsing Technology (IWPT), 2009. 【査読有】

Tsuruoka, Yoshimasa, Jun: "Stochastic Gradient Descent Training for L1-regularized Log-linear.", ACL-IJCNLP, pp.477-485, 2009. 【査読有】

Tsuruoka, Yoshimasa, Jun: "Fast Full Parsing by Linear-Chain Conditional Random Fields.", EACL, pp.790-798, 2009. 【査読有】

Miyao, Yusuke and Jun: "Supervised Learning of a Probabilistic Lexicon of Verb Semantic Classes. ", EMNLP 2009, pp.1328-1337, 2009. 【査読有】

Ohta, Tomoko, Jin-Dong Kim, Sampo Pyysalo, Yue Wang and Jun: "Incorporating GENETAG-style annotation to GENIA corpus.", Natural Language Processing in Biomedicine (BioNLP) NAACL 2009 Workshop. , pp.106-107, 2009. 【査読有】

Hara, Tadayoshi, Yusuke Miyao and Jun: "Effective Analysis of Causes and Inter-dependencies of Parsing Errors.", the 11th International Conference on Parsing Technologies (IWPT-09), pp.180-191, 2009. 【査読有】

Uematsu, Sumire, and Jun: "Evaluating Contribution of Deep Syntactic Information to Shallow Semantic Analysis.", the 11th International Conference on Parsing Technologies (IWPT' 09), pp.85-88, 2009. 【査読有】

Miwa, Makoto, Rune Sætre, Yusuke Miyao, and Jun: "A Rich Feature Vector for Protein-Protein Interaction Extraction from Multiple Corpora.", the 2009 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing, pp.121-130, 2009. 【査読有】

Hara, Tadayoshi, Yusuke Miyao and Jun: "Descriptive and Empirical Approaches to Capturing Underlying Dependencies among Parsing Errors.", the 2009 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing (EMNLP 2009), pp.1162-1171, 2009. 【査読有】

Wang, Yue, Jin-Dong Kim, Rune Sætre, Sampo Pyysalo, Tomoko Ohta and Jun: "Demystifying protein annotations: toward increasing the compatibility of different corpora.", the 3rd International Symposium on Languages in Biology and Medicine (LBM 2009), pp.103-108, 2009. 【査読有】

Cho, Han-Cheol, Do-Gil Lee, Jung-Tae Lee, Pontus Stenetorp, Jun'ichi Tsujii and Hae-Chang Rim: "A Novel Word Segmentation Approach for Written Languages with Word Boundary Markers.", the ACL-IJCNLP 2009, pp.29-32, 2009. 【査読有】

Wang, Xiangli, Shunya Iwasawa, Yusuke Miyao, Takuya Matsuzaki and Jun: "Design of Chinese HPSG Framework for Data-driven Parsing.", the 23rd Pacific Asia Conference on Language, 2009. 【査読有】

Miwa, Makoto, Rune Sætre, Jin-Dong Kim, and Jun: "Event Extraction with Complex Event Classification using Rich Features.", the 3rd International Symposium on Languages in Biology and Medicine (LBM 2009), pp.11-19, 2009. 【査読有】

Okanojima, Daisuke, and Junichi Tsujii: "Learning Combination Features with L1 Regularization.", NAACL-HLT 2009, pp.97-100, 2009. 【査読有】

Sun, Xu, Yaozhong Zhang, Takuya Matsuzaki, Yoshimasa Tsuruoka and Junichi Tsujii: "A Discriminative Latent Variable Chinese Segmenter with Hybrid Word/Character Information.", NAACL-HLT2009, pp.56-64, 2009. 【査読有】

Yu, Kun and Junichi Tsujii: "Extracting Bilingual Dictionary from Comparable Corpora with Dependency Heterogeneity.", NAACL-HLT 2009, pp.121-124, 2009. 【査読有】

Uematsu, Sumire, Jin-Dong Kim and Junichi Tsujii: "Bridging the Gap between Domain-Oriented and Linguistically-Oriented Semantics.", Natural Language Processing in Biomedicine (BioNLP) NAACL 2009 Workshop, pp.162-170, 2009. 【査読有】

Sætre, Rune, Makoto Miwa, Kazuhiro Yoshida and Junichi Tsujii: "From Protein-Protein Interaction to Molecular Event Extraction.", Natural Language Processing in Biomedicine (BioNLP) NAACL 2009 Workshop, pp.103-106, 2009. 【査読有】

Pyysalo, Sampo, Tomoko Ohta, Jin-Dong Kim and Jun: "Static Relations: a Piece in the Biomedical Information Extraction Puzzle.", Natural Language Processing in Biomedicine (BioNLP) NAACL 2009 Workshop, pp.1-9, 2009. 【査読有】

Kim, Jin-Dong, Tomoko Ohta, Sampo Pyysalo, Yoshinobu Kano and Junichi Tsujii: "Overview of BioNLP", Natural Language Processing in Biomedicine (BioNLP) NAACL 2009 Workshop, pp.1-9, 2009. 【査読有】

Kano, Yoshinobu, Luke McCrohon, Sophia Ananiadou, and Junichi Tsujii: "Integrated NLP evaluation system for pluggable evaluation metrics with extensive interoperable toolkit.", Software engineering, testing, and quality assurance for natural language processing workshop (SETQA-NLP), NAACL-HLT 2009, pp.22-30, 2009. 【査読有】

Wu, Xianchao, Naoaki Okazaki and Junichi Tsujii: "Semi-Supervised Lexicon Mining from Parenthetical Expressions in Monolingual Web Pages.", NAACL-HLT 2009, pp.424-432, 2009. 【査読有】

Sun, Xu, Takuya Matsuzaki, Daisuke Okanohara, and Junichi Tsujii: "Latent Variable Perceptron Algorithm for Structured Classification.", International Joint Conferences on Artificial Intelligence (IJCAI) 2009, pp.1236-1242, 2009. 【査読有】

Matsubayashi, Yuichiroh, Naoaki Okazaki and Junichi Tsujii: "A Comparative Study on Generalization of Semantic Roles in FrameNet.", ACL-IJCNLP, pp.19-27, 2009. 【査読有】

Sun, Xu, Naoaki Okazaki, and Junichi Tsujii: "Robust Approach to Abbreviating Terms: A Discriminative Latent Variable Model with Global Information.", ACL-IJCNLP 2009, pp.905-913, 2009. 【査読有】

講演・口頭発表

Junichi Tsujii: "Linking Text with Knowledge", Microsoft Research Asia, Beijing, 2009. 【招待講演】

受賞

Daniel Andrade Silva: IBM Ph.D. Scholarship「IBM Ph.D. Scholarship」, IBM Watson Research Center , 2009 年.

松崎拓也・呉先超: Microsoft 奨学寄附金「Semantics-Based Reordering」, Microsoft Research Asia, 2009 年.

西垣 通・教授

研究テーマ(主たるもの)

基礎情報学

生命情報から社会情報、機械情報にわたる情報学の基礎的な検討。マトウラーナ／ヴァレラのオートポイエーシス論、ホフマイヤーの生命記号論、ルーマンの理論社会学、グレイザーズフェルドのラディカル構成主義などを批判的に摂取しつつ、情報メディア思想を理論的に検討する。これは、文理融合の学際的研究分野「ネオ・サイバネティクス」の一環をなす。

インターネット社会論

基礎情報学の応用として、21世紀インターネット社会における諸問題(企業組織、オンライン共同体、情報倫理、サイバースペース心理など)を理論的かつ実践的に検討する。

研究業績(2009 年度)

著書

西垣通: 「ネットとリアルのあいだ」, ちくまプリマー新書, 2009 年.

雑誌論文

西垣通:「デジタル・ニヒリズムの時代」, 大航海, No.71, pp.130-136, 2009 年. 【一般向け】

西垣通:「文化と文明、そして情報」, 情報文化学会誌, Vol.16, No.1, pp.3-6, 2009 年.

Toru Nishigaki, Tadashi Takenouchi: "The Informatic Turn -- Who Observe the "Infosphere"?", Journal of Socio-Informatics, Vol.2, No.1, pp.81-90, 2009 年. 【査読有】

講演・口頭発表

西垣通:「基礎情報学から見たネット社会」, 情報システム学会大会, 2009. 【招待講演】

西垣通:「こころの時代のコンピュータをもとめて」, 情報処理学会ソフトウェア・エンジニアリング・シンポジウム 2009, 2009. 【招待講演】

西垣通:「ITの未来」, 電子情報通信学会コンピュータ・システム研究会, 2009. 【招待講演】

新聞・報道

西垣通:「欲望を諦める:衣食住の細部に価値」, 朝日新聞夕刊, 2009.

西垣通:「メガ銀行は人知で制御可能か」, 産経新聞, 2009.

西垣通:「視点論点「デジタル化と欲望」」, NHK教育テレビ, 2009.

西垣通:「左脳社会の落とし穴」, 日経新聞夕刊, 2009.

西垣通:「情報洪水は危険・多様な交流期待」, 朝日新聞, 2009.

西垣通:「視点論点「ネットとリアルのあいだ」」, NHK教育テレビ, 2010.

橋元 良明・教授

研究テーマ(主たるもの)

情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している。

メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようにかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

研究業績(2009 年度)

著書

橋元良明・電通総研:「ネオ・デジタルネイティブの誕生」,ダイヤモンド社,2010年。

雑誌論文

橋元良明:「“デジタルネイティブ”はテレビをどうみているか?—番組視聴実態 300人調査から」,月刊民放, Vol.2009年, No.11月号, pp.36-40, 2009年。

橋元良明:「「デジタル・ネイティブ」のテレビの見方」,調査情報, Vol.2010.1-2, No.492, pp.20-24, 2009年。

橋元良明、北村智、吉田暁生:「ネット動画視聴、周囲のネット利用者環境、ワンセグテレビがテレビ視聴時間及ぼす影響—2009年全国情報行動調査より」,東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編, No.26, pp.1-26, 2010年。【査読有】

橋元良明、中村功、関谷直也、小笠原盛浩:「インターネット利用に伴う被害と不安」,東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編, No.26, pp.27-80, 2010年。【査読有】

橋元良明:「中学生のメディア利用と親子関係」,チャイルド・サイエンス 子ども学(日本子ども学会), Vol.Vol.6, pp.20-23, 2010年。【査読有】

その他論文

橋元良明:「ネットワークユーザーの心理」,広報会議, 2009年。【一般向け】

橋元良明編:「“デジタルネイティブ”はテレビをどう見ているか?—番組視聴実態 300人調査」,BPO 青少年委員会 報告書, 2009年。

橋元良明編:「インターネット利用への不安に関する実態調査—2009年東京 23区調査」,NTT との共同研究成果報告, 2009年。

講演・口頭発表

橋元良明:「基調報告「デジタルネイティブの実態」、パネラー」,BPOシンポジウム『デジタルネイティブがテレビを変える!—テレビ近未来への提言』, 2009。

橋元良明:「デジタル・ネイティブのテレビ視聴」,情報通信学会 情報行動研究会, 2009。【招待講演】

橋元良明:“変化するメディアとテレビジョン視聴者(招待講演)”,国際学術シンポジウム Global Media(韓国東国大学校・韓国メディア経営学会主催), 2009。【招待講演】

新聞・報道

橋元良明:「デジタルネイティブシンポジウム開催」, 東京新聞, 2009.

橋元良明:「若者世代のテレビ視聴」, 産経新聞, 2009.

橋元良明:「BPO デジタルネイティブシンポジウム」, 『民間放送』(業界紙), 2009.

橋元良明:「デジタルネイティブとテレビの今とこれから」, NHK 教育テレビ『日曜フォーラム』, 2009.

林 香里・教授

研究テーマ(主たるもの)

ジャーナリズムの自由主義イデオロギーについて、フェミニズムからの批判的検討

ジャーナリズムは 17 世紀より自由主義イデオロギーとともに発展してきた。それはマスメディアというシステムとともに自由市場で拡大することによって、そのイデオロギーを一層先鋭化させてきた。しかし、今日の情報化とグローバル化状況において、自由主義思想も再検討を迫られており、ジャーナリズムにおいても自由主義的発想の対案を考えていかななくてはならない。こうした新しいジャーナリズムの倫理について、とくにフェミニズムの立場から研究をしている。

各国のジャーナリズム制度ならびに言説の国際的比較分析

欧米や東アジア諸国のジャーナリズム研究者と共同で、ジャーナリズムの制度および言説の比較研究を行っている。

- 1) 日本と韓国における公共放送の役割、イメージ、ニュース番組の比較
- 2) メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について: 8カ国国際比較研究(科学研究費補助金 B)

メディア産業における非正規雇用、フリーランスの労働環境について

近年のネット産業の台頭、ならびに経済環境の悪化による広告収入の減少という二つの波の中で、マスメディア産業はさまざまな側面からコストカットを余儀なくされている。こうした経済環境および技術環境の変動のなかで、各企業は人件費の削減を進めている。激動するマスメディア産業を取り巻く環境においてもっとも弱い立場の非正規雇用者、派遣技能労働者、フリーランスの処遇について実態を調査するとともに、制度的整備の可能性を研究する。

研究業績(2009 年度)

分担著書

林香里:「『よくわかるメディア・スタディーズ』伊藤守編, ミネルヴァ書房, 2009 年。「ジャーナリズムの実践」(166-167 頁)、「ニコラス・ルーマン」(212-213 頁)」, 伊藤守 編, ミネルヴァ書房, 2009 年.

林香里: 「日本における「新聞」家庭面ジャーナリズム」(『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』より再録) 『新編 日本のフェミニズム7 表現とメディア』, 井上輝子 編, 岩波書店, 2009年.

林香里: 「フェミニズム、ジェンダーと新聞」『新訂 新聞学』, 浜田純一・桂敬一・田島泰彦 編, 日本評論社, 2009年.

雑誌論文

林香里: 「政治報道に求めるもの—政治的想像力と論争力を生む報道を」, 『aura』No.194, pp.2-6, 2009年.

林香里: 「「偏向報道」と「ケア」」, 『現代用語の基礎知識2010年版』(自由国民社), pp.16, 2009年. 【一般向け】

その他論文

林香里: 「「経済優先・男性中心」意識の絶望工場 ニュースメタボ診断」, GALAC3月号、2010年. 【一般向け】

林香里: 「政治ニュースと人間ドラマ ニュースメタボ診断」, GALAC2月号、2010年. 【一般向け】

林香里: 「「問い直された通念」論壇を読む 12月」, 毎日新聞朝刊 2009年12月24日21面. 【一般向け】

林香里: 「注目浴びた雇用・貧困と人権問題 雑誌に続き新聞も危機の時代に」, 毎日新聞夕刊 2009年12月21日4面. 【一般向け】

林香里: 「容疑者「ボカシ」から見える報道の思考停止状態 ニュースメタボ診断」, GALAC1月号、2010年. 【一般向け】

林香里: 「のりピー報道 「女のやらせ」を信じたくない!? ニュースメタボ診断」, GALAC12月号、2009年. 【一般向け】

林香里: 「「政権交代の陰で」論壇をよむ 10月」, 毎日新聞 2009年10月29日、23面. 【一般向け】

林香里: 「テレビの政治報道も改革したら? ニュースメタボ診断」, GALAC11月号、2009年, 新聞週刊特集. 【査読有】【一般向け】

林香里: 「メディア時評: 選挙情報管理に透明性を メディアに求められるルール作り」, 『民間放送』2009年9月23日号、日本民間放送連盟. 【一般向け】

林香里: 「幸せの多用が示した風景」, 毎日新聞 2009年9月2日朝刊. 【一般向け】

林香里: 「民主国家を蝕む? 「出口調査メタボ」 ニュースメタボ診断」, GALAC10月号、2009年. 【一般向け】

林香里: 「朝、メタボの意味を問い直す ニュースメタボ診断」, GALAC9月号、2009年. 【一般向け】

林香里: 「新型ウイルスに感染したテレビ ニュースメタボ診断」, GALAC8月号、2009年.

林香里: 「論壇を読む 「事実の決定者は?」」, 毎日新聞 2009年6月25日 文化面. 【一般向け】

林香里: 「THE NEWS のゴールデン・コンビと放送の公平性(ジェンダーバランス) ニュースメタボ診断」, GALAC7月号、p50. 2009年. 【一般向け】

林香里: 「「テポドン」に占拠された報道 ニュースメタボ診断」, GALAC6月号、p50. 2009年. 【一般向け】

林香里: 「論壇を読む — 知の持続可能性の危機」, 毎日新聞 2009年4月23日 文化面. 【査読有】【一般向け】

林香里: 「夕方の報道番組と夜の報道番組: どう違う? ニュースメタボ診断」, GALAC5月号、p50. 2009年. 【一般向け】

林香里: 「「オバマ大統領就任式」報道 ニュースメタボ診断」, GALAC4月号、p50. 2009年. 【一般向け】

講演・口頭発表

Kaori Hayashi: "On Journalism and the Ethics of Care", "Feministische Ethik mit dem Schwerpunkt: das Konzept Menschenwuerde oder Zwischen Sorge und Autonomie" 3.9.2009, Nanzan Universitaet, Nagoya., 2009. 【招待講演】

林香里: 「独立系メディアがマスメディアを変える!」, TOKYO メディフェス2009 パネリスト 2009年9月21日、東京ウイメンズ・プラザにて, 2009. 【一般向け】

Hayashi Kaori, Manabe Yuko, Makoto Inoue, Lee Misook: "The Gwangju Uprising in Korea: Rethinking the Role and Efficacy of the Transnational Advocacy Network in East Asia", Presentation at the Annual Symposium by Seoul National University–University of Tokyo, together with Australian National University and City University of Hong Kong: "Mapping the Spaces of Media Culture in Asia: Information, Communication and Politics". October 30, 2009. Together with Manabe Yuko, Lee Misook, Inoue Makoto, 2009.

林香里: 「意見の「多元性」と自由競争の狭間で 近年の欧州プレス動向について」, 朝日新聞ジャーナリスト学校研究会, 2009. 【招待講演】

講師 鈴木隆彦(公正取引委員会企業取引課課長補佐)パネラー: 林香里、岩崎貞明(「放送レポート」編集長)、青嶋ひろの(出版ネッツ): 「出版業のフリーランスの現状」, 出版労連主催・出版研究集会・分科会「下請法を使って権利を守る」, 2009. 【招待講演】【一般向け】

林香里: 「「専門職」概念が提起する労働の未来—「自営労働」「Flexicurity」概念からの検討」, ソフトウェアシンポジウム 2009—SS2009にてクローキング・キーノート講演、ソフトウェア技術者協会(SEA)主催、日本ソフトウェア科学会 情報処理学会、電子情報通信学会(ソフトウェアサイエンス研究会 知能ソフトウェア工学研究会)情報サービス産業協会ほか協賛、経済産業省北海道経済産業局札幌市、さっぽろ産業振興財団 北海道IT推進協会 北海道経済連合会、北海道大学大学院情報科学研究科、小樽商科大学 後援, 2009. 【招待講演】【一般向け】

問題提起者: 大井眞二(日本大学教授)瀬川至朗(早稲田大学教授)五十嵐浩司(朝日新聞ジャーナリスト学校事務局長)、討論者: 野中章弘(アジアプレス代表/立教大学教授)、林香里: 「「ジャーナリズム教育の今日的展開の可能性と課題」」, 日本マス・コミュニケーション学会 2009年度春季研究発表会シンポジウム, 2009.

林香里: 「報道にとって『人権』とは何か—「ケアの倫理」から検討する現代社会におけるマスメディアの使命と課題」, 共同通信社 2009年5月27日、「報道と読者」連絡協議会・第9回総会, 2009. 【招待講演】【一般向け】

パネリスト 東海林智(毎日新聞)日比野敏陽(京都新聞労組) 林香里、コーディネーター 小平哲章(新聞労連本部副委員長): 「「労働組合再生へ—今、私たちは何をすべきか 労働条件の切り下げ、非正規拡大の嵐の中で」座談会「すべての働く者の連帯のために」」, 新聞労連・東京地連 2010春闘勝利をめざす東京総行動, 2009. 【一般向け】

新聞・報道

竹信三恵子(朝日新聞編集委員)、東海林智(毎日新聞記者)、豊秀一(新聞労連委員長)、林香里:「新春座談会 新聞はどこに行くのか」,『新聞労連』2010年1月1日.

中村高寛(映画監督)、林香里:「特集 「描く新聞の未来図 神奈川新聞創業120年」」,『神奈川新聞』2010年1月31日.

林香里:「「で、あなたたちは、どうするの?」新聞週間特集」,『朝日新聞』2009年10月11日朝刊、p.23.

馬場 章・教授

研究テーマ(主たるもの)

日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

デジタルアーカイブズ科学

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

コンテンツ創造科学

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

研究業績(2009年度)

講演・口頭発表

馬場章:「大判座後藤家の三家業と協業体制」, 20th TOKYO INTERNATIONAL COIN CONVENTION, 2009. 【招待講演】【一般向け】

Masahito Fujihara, Akira Baba: "Learning Process through Internship in the Japanese Content Industry", 16th World Conference on Cooperative Education and Work Integrated Learning: An International Dialogue in Vancouver, 2009.

開 一夫・教授

研究テーマ(主たるもの)

発達認知神経科学:乳幼児を対象とした脳機能計測

人間の認知活動の根源的部分を解明するため、近赤外分光法(NIRS)や高密度脳波計(HD-EEG)を用いて、安全かつ低拘束で、乳幼児の脳活動を計測している。これらの脳活動計測によって得られたデータを、視線計測や行動実験を重ね合わせることで生後間もない乳児の脳機能がどのように発達していくのかを分析する。

さらに、ヒト乳児で得られた脳活動計測の結果を、チンパンジー等大型霊長類での脳活動計測結果と比較する研究にも着手している。

人工物・メディアの発達の認識過程に関する研究

TVやゲームが若年齢の子どもにどういった影響を与えるのか(与えないのか)を明確にするため、行動実験・質問紙調査・脳活動計測実験を行っている。

アンドロイドロボットの認知科学

外見が人間と酷似したロボットを、人間がどのように認知するのかという疑問に答えるため、認知科学的手法を用いた実証的研究を行っている。なお、本研究は、大阪大学・ATRとの共同研究として実施している。

研究業績(2009 年度)

古村 孝志・教授

研究テーマ(主たるもの)

地震とその揺れの可視化

大地震による強い揺れの発生と、平野での揺れの増幅を高密度地震観測データ解析と、地震波伝播のコンピュータシミュレーションをもとに調べている。地震波伝播の可視化技法の開発と、地球シミュレータおよび次世代スパコンを用いた大規模並列シミュレーションの開発も進めている。

研究業績(2009 年度)

分担著書

Furumura, T: "Visualization of seismic wavefield and strong ground motions using data from a nationwide strong-motion network and large-scale computer simulation, The 1755 Lisbon Earthquake: ", Revisited, Geological, and Earthquake Engineering 編, Springer Science + Business Media, 2009 年.

雑誌論文

Cruz-Jimenez,H., F.J. Chavez-Garcia and Furumura : "Differences in Attenuation of Ground Motion Perpendicular to the Mexican Subduction Zone between Colima and Guerrero: An Explanation Based on Numerical Modeling", Bull. Seism. Soc. Am, Vol.99, No.1, pp.400-406, 2009 年. 【査読有】

Takemura, S., T. Furumura and T. Saito: "Distortion of the apparent S-wave radiation pattern in the high-frequency wavefield: Tottori-ken Seibu, Japan, earthquake of 2000", Geophys. J. Int., Vol.178, pp.950-961, 2009 年. 【査読有】

古村孝志:「差分法による3次元不均質場での地震波伝播の大規模計算」, 地震 2, Vol.61, pp.S82-93, 2009 年. 【査読有】

Furumura, T. and T. Saito: "An integrated simulation of ground motion and tsunami for the 1944 Tonankai earthquake using high-performance super computers, Journal of Disaster Research", Journal of Disaster Research, Vol.4, No.2, pp.118-126, 2009 年. 【査読有】

今井健太郎・佐竹健治・古村孝志:「南海トラフで発生する地震による四国南部沿岸での津波継続時間」, 土木学会論文集, Vol.B2-65, pp.281-285, 2009 年. 【査読有】

Saito, T. and T. Furumura: "Scattering of linear long-wave tsunamis due to randomly fluctuating sea-bottom topography: coda excitation and scattering attenuation", Geophys. J. Int., pp.idoi:10.11, 2009 年. 【査読有】

Saito, T. and T. Furumura: "Three-dimensional simulation of tsunami generation and propagation: application to intraplate events", J. Geophys. Res., Vol.114, pp.doi:10.102, 2009 年. 【査読有】

Saito, T., K. Satake and T. Furumura: "Tsunami waveform inversion including dispersive waves: the 2004 off Kii Peninsula earthquake", J. Geophys. Res., pp.2009JB006, 2009 年. 【査読有】

Sokolov, V., F. Wenzel and T. Furumura: "On estimation of earthquake magnitude in Earthquake EarlyWarning systems", Earth Planets Space, Vol.61, pp.1275-1285, 2009 年. 【査読有】

古村孝志・今井健太郎・齊藤竜彦:「南海トラフ連動型巨大地震による地震動と津波の予測」, 月刊地球, pp.300-308, 2009 年. 【査読有】

古村孝志:「地震波伝播と強震動の大規模並列 FDM シミュレーション」, 東京大学情報基盤センター、スーパーコンピューティングニュース, Vol.10, pp.35-63, 2009 年.

齋藤竜彦・古村孝志・片桐孝洋・中島研吾:「津波発生伝播の大規模3次元シミュレーション」, 東京大学情報基盤センター、スーパーコンピューティングニュース, Vol.12, pp.1-14, 2009 年.

国際会議等

Furumura, T.: "Large-scale parallel simulation of strong ground motion using the Earth Simulator", 1999 Chi-Chi, Taiwan, Earthquake Symposium, 2009.

Furumura, T.: "Strong ground motion and Tsunami Simulation for the Nankai-Trough Mega-thrust Earthquake Using Supercomputers", 10th Memorial Chi-Chi, Taiwan, Earthquak, 2009.

Furumura, T.: "Large-scale parallel simulation of strong ground motion and tsunami due to the Nankai-Trough megathrust earthquakes using the Earth Simulator", Tera FLOP Workshop, 2009.

講演・口頭発表

古村孝志:「高密度地震観測網と大規模数値シミュレーションで見る大地震の揺れの伝播」, 計測制御工学会講演会, 2009. 【招待講演】

古村孝志:「地球シミュレータで予測する東海・東南海・南海地震の強い揺れと津波」, 第7回地球シミュレータシンポジウム」, 第7回地球シミュレータシンポジウム, 2009. 【招待講演】

古村孝志:「東南海・南海地震の連動発生による地震と津波の評価」, 日本機械学会関西支部フォーラム, 2009. 【招待講演】

古村孝志:「東海・東南海・南海地震の連動発生による地震と津波の予測」, 損害保険算出機構、2009年災害研究フォーラム, 2009. 【招待講演】

古村孝志:「東海地震による強震動と津波の予測」, 2009年震災対策技術展セミナー, 2009. 【招待講演】

古村孝志:「地震と津波の大規模数値シミュレーション」, T2K シンポジウム 09 in Tsukuba, 2009. 【招待講演】

古村孝志:「関東で起きる大地震とその強い揺れに備えて」, 板橋区高島第一小学校, 2009. 【招待講演】【一般向け】

古村孝志:「首都直下地震とその強い揺れに備えて」, 地震講演会, 2009. 【招待講演】【一般向け】

古村孝志:「観測とコンピュータシミュレーションで見る地震の強い揺れ」, 第46回名古屋大学防災アカデミー, 2009. 【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

古村孝志:「短周期の地震波 倒壊至らず 大地震で家に致命的打撃「キラーパルス」発生せず」, 東京新聞, 2009.

古村孝志:「静岡・震度6弱「東海地震に結びつかず」観測、通常レベルに 東海地震は250倍規模」, 日刊工業新聞, 2009.

古村孝志:「核心 静岡・震度6 “本番”減災の教訓に 揺れ周期短く 倒壊ゼロ」, 中日新聞, 2009.

古村孝志:「クローズアップ2009:静岡で震度6弱「東海の前兆」否定 プレートの内部で発生 短周期波 住宅全半壊なし」, 毎日新聞, 2009.

古村孝志:「駿河湾地震の揺れは短周期 震度の割に被害小さく「東海へ危機感を」」, 静岡新聞, 2009.

古村孝志：「静岡沖地震 半壊2棟 全壊なし 短周期「プレート内型」要因？」, 読売新聞, 2009.

古村孝志：「東海・東南海・南海 3地震連動なら 日向灘まで震源域に 東大など」, 読売新聞, 2009.

古村孝志：「「単位」の世界 マグニチュード 阪神・淡路大震災は 7.3 東海地震、最大で 8.6 想定 エネルギーは 100 倍に」, 日刊工業新聞, 2009.

古村孝志：「備える:地震の基礎知識④ 揺れの周期」, 毎日新聞, 2009.

古村孝志：「伊中部で死者 200 人超・予知！？も政府が削除を…」, 報道ステーション, テレビ朝日, 2009.

古村孝志：「3つの巨大地震 最新研究」, おはよう日本, NHK, 2009.

古村孝志：「「6 弱」と東海地震の関連は “誘発あるか” 気象庁は否定」, 報道ステーション, テレビ朝日, 2009.

古村孝志：「震度6で全半壊なし 地震被害少ない理由は？」, FNNスピーク, フジテレビ, 2009.

古村孝志：「6級地震“1 日おき”の怪 関連性は… 気になる今後」, 報道ステーション, テレビ朝日, 2009.

古村孝志：「駿河湾の地震の検証」, ニュースJAPAN, 静岡朝日テレビ, 2009.

古村孝志：「発生直後”映像入手”街ががれきの山に… スマトラで生き埋め数千人」, スーパーニュース, フジテレビ, 2009.

古村孝志：「スマトラ島沖地震 現地は 揺れ 2 分間「死者数千人」」, 報道ステーション, テレビ朝日, 2009.

古村孝志：「東海・東南海・南海 震源域 拡大か」, ニュース 7, NHK, 2009.

古村孝志：「耐震補強が命を守る 迫り来る首都直下地震」, ガリレオチャンネル, Tokyo MX, 2009.

古村孝志：「大地が揺れる M 8 の恐怖」, 静岡放送, 2009.

古村孝志：「伊豆半島東方沖の地震」, 報道ステーション, テレビ朝日, 2009.

古村孝志：「チリ地震津波」, ニュースJAPAN, フジテレビ, 2009.

古村孝志：「東海・東南海・南海地震 15～30 分差で地震→津波の高さ2倍」, 朝日新聞, 2009.

古村孝志：「遠隔地で発生長周期地震動 首都圏北西部地下で増幅」, 日本経済新聞, 2009.

真鍋 祐子・教授

研究テーマ(主たるもの)

現代韓国におけるナショナリズムとツーリズム

メディア研究の視座より韓国民主化運動を読み直す

朝鮮民族統一観の構築に関する宗教社会学的研究

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

真鍋祐子:「アイデンティティ・ポリティクスとしてのツーリズムー中国東北部における韓国のパッケージ・ツアーの事例から」, 文化人類学(旧 民族学研究), Vol.74, No.1, pp.26-47, 2009 年. 【査読有】

真鍋祐子:「韓国において「正しく」死者を送ることー80 年代の記憶と記録より」, アジア遊学, No.124, pp.74-83, 2009 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

Manabe Yuko: "Living through the Hot and Cold War Periods:Representation of the Korean Democratization Movement by the Korean Residents in Japan in the 80th", 東文研・ロンドン大学ゴールドスミス校共催ワークショップ "Trauma,Memory,History", 2009. 【招待講演】

水越 伸・教授

研究テーマ(主たるもの)

ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのために「批判的メディア実践」という方法論を生み出しつつある。

メディア史

19 世紀後半から 20 世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

研究業績(2009 年度)

著書

水越伸(共編著):「メディアリテラシー・ワークショップ——情報社会を学ぶ・遊ぶ・表現する」, 東京大学出版会, 2009 年.

分担著書

水越伸:「ラジオの過去と未来(『社会学事典』所収)」, 日本社会学会社会学事典刊行委員会 編, 丸善, 2009 年.

水越伸:「メディア—新たなメディアは、いつも周縁からあらわれる(『TAKEO PAPER SHOW 2009—言葉のペーパーショウ SUPER HEADS'』所収)」, 株式会社竹尾・原 研哉 編, 朝日新聞出版, 2009 年.

雑誌論文

水越伸:「放送を市民的に『新生』させるために」, 月刊民放, Vol.2009 年 9 月号, pp.pp.6-9, 2009 年. 【一般向け】

水越伸:「家庭で取り組めるメディアリテラシー教育」, キッズリーダー, Vol.2009 年 11 月号, pp.pp.2-7, 2009 年. 【一般向け】

福井信蔵・水越伸:「共有と広がり ~テクノロジーが生んだ新しいメディア芸術」, ウェブ企画展「日本のメディア芸術」変わる・超える・表現の未来, pp.http://plaza.bunka.go.jp/museum/archives/webmuseum/index.php, 2009 年. 【一般向け】

水越伸:「書評『フリー:〈無料〉からお金を生み出す新戦略』」, 中央公論, Vol.2010 年 3 月号, 2010 年. 【一般向け】

水越伸:「メディア論の困難を超えるために メディアリテラシー・ワークショップの可能性」, UP, Vol.2010 年 3 月号, 2010 年. 【一般向け】

作品

Shin Mizukoshi: 「Denmark-Japan Workshop」, Denmark-Japan, 2009.

水越伸、テレビ朝日ほか:「大人のためのメディアリテラシー入門」, ろっぽんプロジェクト, 2009.

水越伸(コーディネーター):「親子ワークショップ ~テレビ・パズルで遊ぼう! ~」, ろっぽんプロジェクト「ろっぽん夏休み」, 2009.

水越伸:「みんなでつくるテレビ・パズル」, ろっぽんプロジェクト「ろっぽんワークショップ」, 2010.

講演・口頭発表

水越伸:「メディア・ビオトープ戦略:MELL の 10 年を踏まえて」, 国際シンポジウム『持続可能なアジア まちづくりと建築』, 2009. 【招待講演】

水越伸:「メディアとしての紙」, TAKEO PAPER SHOW 2009, 2009. 【招待講演】

水越伸:「批判的メディア実践の構図:市民の表現活動をめぐる文理越境型メディア論の方法的検討」, 第23回人工知能学会 オーガナイズドセッション「市民の表現活動を編みあげる情報技術」, 2009.

水越伸(司会)、金ヨニ、キム・ジリク、周倩、ミネルバ・テラデス・オリベラス:「世界のモバイル・シティ」, 第13回メル・プラッツ公開研究会, 2009.

水越伸:「漢方的な、循環的な・・・:メディア・リテラシー、メディア表現と新しい放送局の相貌」, テレビ神奈川アドバイザー・ミーティング, 2009. 【招待講演】【一般向け】

水越伸:「なんのための協働的メディア・リテラシーか:民放連プロジェクトの全体像」, 第14回メル・プラッツ公開研究会, 2009. 【一般向け】

ソフィア・ウー、水越伸:「構造的崩壊と市民的新生」, 第14回メル・プラッツ公開研究会, 2009. 【一般向け】

水越伸:「メディア論「メディア・リテラシー:市民とメディアをつなぐ回路作り」」, 東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム, 2009. 【一般向け】

水越伸(報告):「ケータイをめぐる文化とリテラシー研究の概要」, シンポジウム「ケータイの未来モード:文化と技術の新たな関係性を求めて」, 2009. 【一般向け】

水越伸(パネリスト):「(参加型パネルディスカッション)」, シンポジウム「ケータイの未来モード:文化と技術の新たな関係性を求めて」, 2009. 【一般向け】

水越伸・山内祐平:「ケータイをめぐる文化とリテラシー研究の概要」, ケータイの未来モード:文化と技術の新たな関係性を求めて, 2009. 【一般向け】

水越伸:「メディア論にとって実践とはなにか」, 第11回 情報メディア学会, 2009. 【招待講演】

水越伸(コーディネーター):「いま、テレビに求められているもの:新たな循環を求めて」, ろっぽんプロジェクト公開シンポジウム, 2009. 【一般向け】

水越伸:「日本のケータイ・コミュニケーションを編みかえる～モバイル文化とリテラシーのデザイン論」, 第16回日本教育メディア学会, 2009. 【招待講演】

水越伸(司会ほか):「ワークショップ「青春6コマ劇場」ほか」, 青森放送メディアリテラシー実践報告会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

水越伸、鳥海希世子、阿部純、服部寿人:「高校生のメディア・リテラシー育成プロジェクト」, 情報コミュニケーション教育研究会 富山支部第9回教科「情報」研修会, 2010. 【招待講演】

岡崎乾二郎・水越伸・森達也:「メディアとは? 芸術とは?」, 平成21年度文化庁メディア芸術祭, 2010. 【招待講演】【一般向け】

水越伸(パネリスト):「今年度の総括と今後の展望」, 民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告会, 2010. 【招待講演】【一般向け】

水越伸(企画、コーディネート):「メルエクスポ2010」, メルエクスポ2010, 2010. 【一般向け】

李鳳宇、小林弘人、水越伸、本橋春紀(司会):「21世紀メディア論:日本型メディアの乗り超え方」,メルエキスポ 2010, 2010.【一般向け】

水越伸(パネリスト、コーディネーター):「再検討:デジタル表現と授業デザイン」, D-Project2 公開研究会, 2010.【招待講演】【一般向け】

水越伸:「自治体職員とメディア・リテラシー」, 総務省自治大学校講義, 2010.【招待講演】【一般向け】

水越伸(企画、司会ほか):「テレビは視聴者と協働できるのか」, ろっぽんプロジェクト活動報告会, 2010.【一般向け】

水越伸(司会):「アジアの大学、リテラシーの環:d」, 第18回メル・プラッツ公開研究会, 2010.【一般向け】

新聞・報道

水越伸(コメント):「筑紫哲也というメディア」, 朝日新聞, 2009.

水越伸:「なごやを語る 開府400年」, 毎日新聞, 2009.

溝口 勝・教授

研究テーマ(主たるもの)

農地情報のリアルタイムモニタリングによる安全な食料供給システムの開発

フィールドサーバと呼ばれるセンシングロボットを世界の農地に設置し、リアルタイムで農作物生産現場の画像や気象・土壌データをインターネット経由で集めています。これらのデータを利用して、生産者と消費者をつなぐ安全な食料の安定供給システムを開発したいと考えています。

節水型農業技術の開発

稲作には水田が必須とされていますが、最近東南アジアでは間断灌漑(適度に水田を乾燥させたり、水を張ったりすること)により、イネの大幅な単収増加をもたらす低投入持続的稲作技術:SRI(System of Rice Intensification)が注目されています。この技術のポイントは土壌水分のモニタリングです。フィールドサーバと組み合わせて、間断灌漑のタイミングを解明し、水資源節約とイネ生産量向上を狙っています。

ジャスインタイム農業システムの開発

自動車業界では、必要な物を必要な時に必要なだけ適切に生産するカンバン方式と呼ばれる生産システム(Just In Time:JIT)が世界を制覇しています。しかし、農業分野ではこの生産方式がありません。地上観測・気象予測・作物栽培データなどの農業情報を縦横無尽に活用して、生産性・安全性・収益性に留意した農作物生産方式を目指しています。

研究業績(2009年度)

吉見 俊哉・教授

研究テーマ(主たるもの)

戦争とメディア：両世界大戦期におけるプロパガンダと情報流通に関する歴史社会学的研究

本研究は、20世紀における戦争とメディアの緊密な関係を視野に収めつつ、情報学環が社会情報研究所の時代から受け継いできた重要な2つの戦時プロパガンダ関係の資料のコレクションについてのデジタル・アーカイブの構築を大きな目的としている。これらの2つのコレクションとは、①第一次大戦宣伝ポスター約660枚、及び、②内閣情報部の満州・フィリピンにおける宣伝資料の2つであり、いずれも日本国内では例を見ない貴重なものである。吉見研究室において組織された研究チームは、社会情報研究所時代から、これらの資料の修復と保存状態の改善に努め、上記資料を広く公開すべくデジタル・アーカイブの構築を進めてきた。このような基礎作業の上に立って、本研究では、これらの資料を関連諸資料と結びつけ、それらについて総合的に分析する学際的研究を、アーカイブそのものに組み込む仕方で展開している。

20世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反発

本研究は、冷戦期を通じた東アジアでのアメリカ的価値の受容や反発について、文化的な次元から比較歴史研究を進めるものである。その際、とりわけ米国の軍事的・経済的・文化的影響が大きな意味を持った日本本土、沖縄、韓国、台湾、フィリピンなどに焦点を当て、映画、テレビ、マンガ、音楽などから都市空間や基地文化までの大衆文化のレベルでの変化を、一方では政治的な次元と文化・メディア的次元の関係を精密に見据えながら、他方では東アジア全域を射程に収めて明らかにする。とりわけ本研究では、戦後日本及び東アジアの大衆意識のなかでの「アメリカ」の存在、アメリカ的文化商品の受容の過程を、韓国、台湾、フィリピンなどを中心に東南アジアまでの横断的な広がりの中で、また文化と軍事・経済的な覇権の構造を結びつけて明らかにしようとしている。

多言語対話型のデジタル百科全書の構築を通じた情報知の構造化

本研究は、デジタル・アーカイブの諸技術を基盤にしつつ、情報知を中核にした新しい多言語対話型の百科全書の構築とその大学教育のなかでの応用的展開を目指している。すなわちまず、情報学環教員が中核的に関与してきた『情報学事典』(弘文堂)、『社会情報学ハンドブック』(東京大学出版会)などの出版物のデジタルデータを、百科全書構築の実験素材として利用し、これらのデータを基礎にユビキタス社会における大学教育のモデルを示す知識形成実験を進めている。同時に、英国の Theory, Culture and Society 誌を中心とした New Encyclopedia Project、及び National Singapore 大学、Seoul National 大学などと協力しつつ、情報・言語の基礎理論、知覚情報、ジャーナリズム、メディア文化、情報行動、情報経済、情報法・政策などの中核的な諸領域についての知の対話的形成とその構造化を可能にするプラットフォーム作りを進めている。

研究業績(2009年度)

暦本 純一・教授

研究テーマ(主たるもの)

Human Computer Interaction

Ubiquitous Computing

Reality Sensing

研究業績(2009 年度)

分担著書

暦本純一:「オープンシステムサイエンス—原理解明の科学から問題解決の科学へ」, 所眞理雄 編, エヌティティ出版, 2009 年.

雑誌論文

玉城絵美, 味八木崇, 暦本純一:「インタラクションシステムのための高精度な 3 次元ハンドジェスチャ認識手法」, 情報処理学会論文誌, Vol.5, No.2, pp.229-239, 2009 年. 【査読有】

国際会議等

Ken Iwasaki, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Expressive Typing: A New Way to Sense Typing Pressure and Its Applications", ACM CHI2009, 2009. 【査読有】

Emi Tamaki, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Brainy Hand: An Ear-worn Hand Gesture Interaction Device", ACM CHI2009, 2009. 【査読有】

Jun Rekimoto: "SenseableRays: Opto-Haptic Substitution for Touch-Enhanced Interactive Spaces", ACM CHI2009, 2009. 【査読有】

Kensaku Kawauchi, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Directional Beaconing for Robust Wi-Fi Positioning", The 4th International Symposium on Location and Context Awareness (LoCA 2009), 2009. 【査読有】

Koh Sueda, Koji Ishii, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "Communication Grill/Salon: Hybrid Physical/Digital Artifacts for Stimulating Spontaneous Real World Communication", HCI International, 2009. 【査読有】

Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "GraspZoom: zooming and scrolling control model for single-handed mobile interaction", MobileHCI 2009, 2009. 【査読有】

Kyoko Yonezawa, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Cat@Log: Sensing Device Attachable to Pet Cats for Supporting Human-Pet Interaction", Int. Conf. on Advances in Computer Entertainment Technology, 2009. 【査読有】

講演・口頭発表

Jun Rekimoto: "Sensonomy: Large-Scale Integration of Real and Digital", ID-KAIST 2009 Sprint Seminar "CATCH THE FUTURE", 2009. 【招待講演】

Jun Rekimoto: "Sensonomy: intelligence penetrating into the real space", ACM International Conference on Intelligent User Interfaces (IUI 2009), 2009. 【招待講演】

米澤香子, 味八木崇, 暦本純一: 「Cat@Log: Human Pet Interactionのための猫ウェアラブルセンシング」, 第17回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ(WISS2009), 2009.

暦本純一: 「Temporal Phase Shift: 時間位相差を持つプロジェクションシステムによる錯視現象とそのモデル化」, 第17回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ(WISS2009), 2009.

暦本純一: 「ARの可能性と未来」, ITpro ビジネスカンファレンス ARビジネスの最前線、基調講演, 2009. 【招待講演】【一般向け】

味八木崇: 「実世界集合知による大規模都市センシングの実現に向けて」, 電子情報通信学会ヒューマンプローブ (IEICE HPB) 第一回研究会, 2009. 【招待講演】

Jun Rekimoto: "Sensonomy: Large Scale Sensing and Integration of Real and Virtual", MobileHCI 2009 Keynote, 2009. 【招待講演】

暦本純一: 「ARがもたらす未来」, 3D Expo conference, 2009. 【招待講演】

Jun Rekimoto: "Enhanced Realities", SIGGRAPH ASIA 2009 Keynote, 2009. 【招待講演】

暦本純一: 「Cybernetic Human: 現実の拡張、人間の拡張」, 日本画像学会理事会特別講演, 2009. 【招待講演】

Jun Rekimoto: "Cybernetic Human: From human computer interaction to human computer integration", 2010 China Symposium on Human Computer Interaction, 2009. 【招待講演】

新聞・報道

建築: 「「空間の際」原広司×松本幸夫×暦本純一 (トークイベント 建築の際)」, 新建築, 2009.

技術者: 「拡張現実(AR)の実用化は既に始まっている」, ITPro, 2009.

技術者: 「[ITpro カンファレンス: 拡張現実]ARは枯れた技術, 新サービスがブレークスルー生む」, ITPro, 2009.

受賞

米澤香子, 味八木崇, 暦本純一: WISS2009 So-net 賞「Cat@Log: Human Pet Interactionのための猫ウェアラブルセンシング」, 日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェア研究会, 2009年.

暦本純一: WISS2009 発表賞「Temporal Phase Shift: 時間位相差を持つプロジェクションシステムによる錯視現象とそのモデル化」, 日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェア研究会, 2009年.

石川 徹・准教授

研究テーマ(主たるもの)

空間の認知・心理・行動

空間とは、その中で生活・行動する人間にとって、身近でありかつ欠くことのできない存在ですが、われわれはいったいどのように周りの空間をとらえているのでしょうか。私たちが周辺についての知識を獲得し、頭の中に記憶し、その知識を利用する一連のプロセスと、得られた知識(“頭の中の地図”)の構造について、とくに興味をもって研究をおこなっています。また、私たちはどのような景観・景色を好ましいと思うのかなどといった、空間における人間の心理的・感情的側面も、重要な研究課題のひとつです。

空間情報の表現と利用

視覚化という方法は、空間的(および非空間的)現象を表現するのに適した方法ですが、その一方で、地図やグラフの理解はそう単純ではないこともわかっています。また、認知や学習のスタイル・好みにも個人差があり、たとえば、視覚的な方法を好む人と、言語的な方法を好む人がいます。このような利用者の属性や目的に応じて効果的に空間の情報を提示する方法はあるのでしょうか。とくに、ユビキタスネットワークを代表とする新しい情報技術とそれを利用する人間の認知・行動の問題(ユビキタス都市における空間行動)に関心を持っています。

ユビキタス空間情報社会基盤の構築

最近の情報通信技術の発達により、いつでも・どこでも・誰でもが必要な情報を状況に応じて取得できる環境、いわゆるユビキタスネットワークが発達を遂げていますが、それと同時に、近年、地理空間情報および場所情報システムが社会的注目を集めており、ユビキタスコンピューティングの技術を空間・都市にも展開していこうという動きが盛んになりつつあります。このような背景のもと、自律移動支援や公物管理業務の情報化など、空間分野でのユビキタスの応用に関心を持っています。

研究業績(2009 年度)

著書

Yasushi Asami, Yukio Sadahiro, Toru Ishikawa (ed.): “New Frontiers in Urban Analysis”, Taylor & Francis, 2009 年.

雑誌論文

Toru Ishikawa, Tetsuo Yamazaki: “Showing where to go by maps or pictures: An empirical case study at subway exits”, Spatial Information Theory (Lecture Notes in Computer Science), Vol.5756, pp.330–341, 2009 年. 【査読有】

Toru Ishikawa, Kei Murasawa, Atsuyuki Okabe: “Wayfinding and art viewing by users of a mobile system and a guidebook”, Journal of Location Based Services, Vol.3, pp.277–293, 2009 年. 【査読有】

その他論文

石川 徹: 「ユビキタス空間情報社会基盤の構築—公物管理情報システム作成の試みを通して—」, 東京大学大学院情報学環紀要—情報学研究, 2009 年.

石川 徹:「情報としての間取り図—間取り図の読解に関する心理学的分析—」, 都市住宅学, No. 66, pp. 14-17, 2009 年.

石川 徹:「場所・モノ・事象に対する共通識別子「Uコード」を用いた公物管理業務の情報化および業務支援システムの有効性に関する現場での検証研究」, 財団法人日本建設情報総合センター(JACIC)平成 20 年度研究助成成果報告書(第 2008-11 号), <http://www.jacic.or.jp/kenkyu/11/11-11.pdf>, 2009 年.

石川 徹:「都市における公物管理とユビキタス ID 技術—インフラとしての空間情報整備の取り組み—」, 日本建築学会総合論文誌, 第 8 号「ユビキタス社会と建築・都市のフロンティア」, pp. 61-64, 2010 年.

講演・口頭発表

浅見泰司, 石川徹:「間取り図の理解と情報の提示—心理学的分析および経済学的示唆—」, 東京大学大学院経済学研究科日本経済国際共同研究センター(CIRJE)第 18 回住宅研究会, 2009.

Toru Ishikawa: "An experimental analysis of the perception and conceptualization of house floor plans", Chinese Academy of Sciences International Workshop on Urban Geography, Institute of Geographic Sciences and Natural Resources Research, Beijing, China, 2009.

Toru Ishikawa, Tetsuo Yamazaki: "Showing where to go by maps or pictures: An empirical case study at subway exits", COSIT 2009: 9th International Conference on Spatial Information Theory, Aber Wrac, 2009.

田島剛之, 石川徹, 越塚登:「共通識別子「Uコード」を用いた公物管理の情報化におけるデータモデルの提案とシステム事例」, 土木学会第 34 回情報利用技術シンポジウム, 2009.

石川徹:「場所・モノ・事象に対する共通識別子「Uコード」を用いた公物管理業務の情報化および業務支援システムの有効性に関する現場での検証研究」, 財団法人日本建設情報総合センター(JACIC)第 7 回研究助成事業成果報告会, 2009.

温文, 石川徹, 佐藤隆夫:「大規模空間の学習におけるワーキングメモリの役割」, 日本基礎心理学会第 28 回大会, 2009.

Toru Ishikawa: "Knowing where you are and showing people where they are: Internal and external representations of spatial knowledge", GI Forum, Institute for Geoinformatics, University of Muenster, Germany, 2009. 【招待講演】

新聞・報道

Toru Ishikawa: 「Don't Throw Away Your Paper Maps Just Yet」, Miller-McCune (<http://www.miller-mccune.com/culture-society/dont-throw-away-your-paper-maps-just-yet-11077/>), 2010.

伊東 乾・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

大原 美保・准教授

研究テーマ(主たるもの)

病院向け災害対応 eラーニングシステム構築パッケージの開発

災害時に防災拠点となる病院においては、来るべき災害に備えて日頃から職員の災害対応力を向上させておく必要がある。本研究では、病院内イントラネットを活用して医師・看護師・事務職員等の災害対応力を高めるためのeラーニングシステム構築パッケージの開発を行っている。病院側は、あらかじめ病院特性やハザードに応じて用意されたコンテンツを組み合わせて選択することで、独自の教材をカスタマイズすることができる。

緊急地震速報時の対応行動学習ツールの開発

2007年10月から緊急地震速報の一般向け提供が開始されている。緊急地震速報は、受信した際に適切な対応行動を行うことで人的・物的被害を大幅に軽減することができるが、揺れまでの数秒から数十秒の猶予時間を有効活用するためには事前のイメージトレーニングが必須である。本研究では、緊急地震速報時に行うべき対応行動の学習ツールとして「緊急地震速報時の対応行動レファレンス Web」の開発を行っている。

研究業績(2009年度)

分担著書

大大特成果普及事業チーム33:「巨大地震災害へのカウントダウン ～東海・東南海・南海地震に向けた防災戦略～」, 監修:河田恵昭・林春男 編, 東京法令出版, 2009年。

雑誌論文

橋田要一・矢作直樹・原田賢治・塚田博明・赤塚健一・大原美保・目黒公郎:「災害対策マニュアルの周知方法に関するE-Learningの効果と可能性」, 日本集団災害医学会誌, 第14巻, 第2号, pp.181-190, 2009年。【査読有】

大原美保・地引泰人・関谷直也・須見徹太郎・目黒公郎・田中淳:「J-ALERTによる緊急地震速報の防災行政無線放送の効果に関する研究」, 日本災害情報学会誌「災害情報」, 第8巻, pp.96-104, 2009年。【査読有】

野村浩司, 大原美保, 目黒公郎:「都市直下型地震が地価に及ぼす影響の分析-1995年兵庫県南部地震の被災地を対象として-」, 土木学会地震工学論文集, Vol.30, pp. 655-660, 2009年。【査読有】

蛭間芳樹, 大原美保, 近藤伸也, 目黒公郎:「広域医療搬送における組織間情報共有の現状と防災情報共有プラットフォームの効果分析」, 土木学会地震工学論文集, Vol.30, pp. 669-679, 2009年。【査読有】

大原美保:「人口減少社会に求められる災害対策」, 東京大学大学院情報学環紀要情報学研究, No.77, pp. 183-185, 2009年。

大原美保・関谷直也・地引泰人・須見徹太郎・古村孝志・鷹野澄・田中淳:「廣井アーカイブスの開発研究」, 情報学研究調査研究編, No.26, pp.81-90, 2009年。

野村浩司・大原美保・目黒公郎:「都市直下型地震が地価に及ぼす影響の一考察 —1995年兵庫県南部地震の被災地を対象として—」, 生産研究, 第61巻, 第4号, pp.93-96, 2009年.

岸田幸子・大原美保・目黒公郎:「義務教育課程における防災教育カリキュラムの開発に向けた基礎的研究」, 生産研究, 第61巻, 第4号, pp.97-100, 2009年.

大原美保・田中聡・重川希志依:「構造被害写真から学ぶ住まいの耐震教育の効果に関する分析」, 生産研究, 第61巻, 第4号, pp.110-115, 2009年.

沼田宗純・野村浩司・大原美保・目黒公郎・鷹野澄:「2009年8月11日の駿河湾を震源とする地震による生研の観測記録」, 生産研究, 第61巻, 第6号, pp.90-94, 2009年.

大原美保・地引泰人・関谷直也・須見徹太郎・目黒公郎・田中淳:「J-ALERTによる緊急地震速報の防災行政無線放送の効果に関する調査報告」, 生産研究, 第61巻, 第6号, pp.103-108, 2009年.

国際会議等

M. Ohara, Y. Jibiki, N. Sekiya, T. Sumi, K. Meguro and A. Tanaka: "A Study on Residents' Response to Earthquake Early Warning at the 2008 Iwate-Miyagi Inland Earthquake in Japan", Eighth International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, Inchon, Korea, 2009.

M. Fujiu, M. Ohara, and K. Meguro: "A Basic Study on Development of New Training System for Building Damage Assessment", Eighth International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, Inchon, Korea, 2009.

講演・口頭発表

大原美保・田中聡・重川希志依:「構造被害写真から学ぶ住まいの耐震教育ツールの開発と効果分析」, 第30回地震工学研究発表会, 2009.

野村浩司・大原美保・目黒公郎:「都市直下型地震が地価に及ぼす影響の分析 —1995年兵庫県南部地震の被災地を対象として—」, 第30回地震工学研究発表会, 2009.

蛭間芳樹・近藤伸也・大原美保・目黒公郎:「広域医療搬送における組織間情報共有の現状と防災情報共有プラットフォームの効果分析」, 第30回地震工学研究発表会, 2009.

岸田幸子・大原美保・目黒公郎:「義務教育課程における防災教育カリキュラムの開発に向けた基礎的研究」, 地域安全学会第24回春季研究発表会, 2009.

大原美保・地引泰人・関谷直也・須見徹太郎・目黒公郎・田中淳:「J-ALERTによる緊急地震速報の防災行政無線放送の効果に関する調査」, 日本地震工学会大会—2009梗概集, 2009.

大原美保:「災害状況イメージーションのすすめ」, 彩の国 市民科学オープンフォーラム—大地震・大洪水から生き延びる—, 2009. 【招待講演】

JASON G. KARLIN・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

北田 暁大・准教授

研究テーマ(主たるもの)

日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会学的な手法で分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告の誕生』(2000年、岩波書店)、『<意味>への抗い』(2004年、せりか書房)などがある。

若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、「保守化」傾向や「バックラッシュ」などの現象とあわせ、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告都市・東京』(2002年、廣済堂出版)、『嗟う日本の「ナショナリズム」』(2005年、NHK出版)などがある。

理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為(者)責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したのものとして『責任と正義』(2003年、勁草書房)がある。

研究業績(2009 年度)

著書

北田暁大他:「戦後日本スタディーズ第二巻」, 紀伊国屋書店, 2009年.

北田暁大編著:「コミュニケーション」, 岩波書店, 2010年.

北田暁大他:「思想地図第五巻 社会の批評」, NHK出版, 2010年.

分担著書

原武史ほか:「政治思想」の現在」, 原武史 編, 河出書房新社, 2009年.

倉田 博史・准教授

研究テーマ(主たるもの)

Euclid 距離行列の順序構造

p 次元空間に n 個の点が与えられたとき、各点間の距離を $n \times n$ 非負対称行列の形で表現出来ることは明らかである。この逆が成立するとき、すなわち、 $n \times n$ 非負対称行列が与えられたときに、それを相互距離として持つ n 個の点が適当な次元の Euclid 空間に存在するとき、その非負対称行列を Euclid 距離行列と呼ぶ。統計学では、多次元尺度構成法などで用いられる概念である。本研究では、Euclid 距離行列の順序構造を調べている。近著として業績欄中のものの他に、Hiroshi KURATA and Pablo TARAZAGA, "Multispherical Euclidean distance matrices"(投稿中)がある。

多変量確率分布の Principal Points

平均は、確率分布を1つの点で要約する量として最も自然なものであろう。平均は最小2乗値でもある。より一般に、確率分布を複数個(k 個)の点で要約しようとするならば、どのような点の集合が選ばれるべきか。この問いに対する一つの答として、principal points (主点)があり、これは最小2乗原理を応用することによって得られる。本研究では、複数個の確率分布の混合として得られる多変量確率分布の principal points の性質を調べている。最近の研究として業績欄中のものの他に、Hiroshi KURATA and Dingxi QIU, "A theorem on the linear subspace spanned by principal points of a mixture of spherically symmetric distributions"(投稿中)がある。

群不変性統計理論

群論特に変換群や不変積分の概念を統計学に応用することにより、不変検定、共変推定、確率不等式などの分野を中心に数多くの有用な事実が導かれてきた。これらは群不変性統計理論と呼ばれる。本研究では、「群によって誘導される順序(group induced ordering)」の概念を用いて、ある種の相関行列の性質を議論している。H. Kurata, "Inequalities associated with intra-inter class correlation matrices" (Journal of Multivariate Analysis, 2004), H. Kurata, "One-sided tests for independence of seemingly unrelated regression equations" (Journal of Multivariate Analysis, 2004).

研究業績(2009 年度)

著書

倉田博史・星野崇宏:「入門統計解析」, 新世社, 2009 年.

雑誌論文

Kazumasa MORI and Hiroshi KURATA: "The MSE of an adaptive ridge estimator in a linear regression model with spherically symmetric error", Scientiae Mathematicae Japonicae, Vol.近刊(採択されたのが2009年度), 2009 年. 【査読有】

黒田佑次郎・岩瀬哲・岩満優美・山本大悟・梅田恵・川口崇・坂田尚子・倉田博史・佐倉統・南雲吉則・中川恵一: 「乳癌患者の更年期症状がQOLに与える影響について」, 総合病院精神医学, Vol.近刊(採択されたのが2009年度), 2009 年. 【査読有】

Hiroshi KURATA and Dingxi QIU: "Linear subspace spanned by principal points of a mixture of spherically symmetric distributions", Communications in Statistics-Theory and Methods, Vol.近刊(採択されたのが2009年度), 2009年.
【査読有】

講演・口頭発表

倉田博史・Dingxi Qiu: 「多変量混合分布のプリンシパルポイントについて」, 統計関連連合大会, 2009.

佐藤 洋一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

時系列フィルタと識別器の統合による人物三次元追跡手法の提案

従来の画像を手掛かりとした時系列フィルタによる人物追跡では、色ヒストグラムや輪郭の類似性など、比較的単純な画像特徴を利用するものが多く、照明変動や複雑背景下における人物追跡では必ずしも十分ではなかった。本研究では、画像から人物の顔を検出する AdaBoost 学習に基づく識別器を、時系列フィルタの枠組みに統合し、頑健かつ高精度に人物頭部を追跡する手法を提案した。本手法では、複数の識別器を人物とカメラとの関係に基づいて適応的に用いることで、頭部の向きを変えつつ移動する人物を追跡できる点を特徴としている。視野を共有した複数のカメラを用い、人物頭部を三次元追跡する実験により、本手法の有効性を確認した。

拡散光源を用いた物体の見えの標本化

任意光源環境下における物体の見えは周波数領域で定義される部分空間を用いて精度良く表現できることが従来研究により示されている。この部分空間は、任意照明下での顔認識や画像合成の研究分野において有効に利用されてきた。しかしながら、複雑な形状や反射特性を持つ実物体を対象とした場合、部分空間を張る基底画像を準備することは容易ではない。本研究では、点光源ではなく面積を持った拡散光源を用いて物体表面の見えを観察することにより、物体表面の反射特性の周波数帯域に制限をかけて不十分なサンプリングに起因するエイリアシングの問題を回避して基底画像を獲得する手法を提案する。拡散光源の利用により、複雑な反射特性を持つ物体表面に対しても、物体表面の持つ周波数帯域に左右されず、球面調和関数のサンプリング定理に基づき基底画像を獲得することが可能となる。

人間の視覚特性を考慮した投影画像の光学的補正

実世界内のさまざまな場所にプロジェクタで画像を投影するとき、不均一な反射特性を持つ被投影面や環境光などの影響により、正しい色で表示可能な画像のコントラストが制限されてしまうという問題がある。これに対して本研究では、観測者に知覚さ

れにくいような色成分と輝度成分の変動を積極的に利用して、よりコントラストの高い画像を表示することを可能にする手法を提案する。提案手法では、画素ごとに、原画像の色成分を厳密に表示可能な輝度の範囲を求めたのち、人間の視覚特性に関するモデルに基づいて、色成分と輝度成分が許容する誤差を計算する。こうして得られた各画素の輝度範囲、および、色成分と輝度成分の許容誤差を考慮し、かつ、原画像から観測画像への変換が隣接画素間で過度に変化しないようにして、観測画像のコントラストを最大化するような光学的補正を行う。本稿では、提案手法のアルゴリズムを説明し、さまざまな被投影面を用いた実験により提案手法の有効性を示す。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

Gabriel Pablo Nava, Yosuke Yasuda, Yoichi Sato, Shinichi Sakamoto: "On the in situ estimation of surface acoustic impedance in interiors of arbitrary shape by acoustical inverse methods", *Acoustical Science and Technology*, Vol.30, No.2, pp.100-109, 2009 年. 【査読有】

大野宏, 中嶋信生, 佐藤洋一, 小林貴訓, 杉村大輔, 加納梢: 「不審行動検知による万引き防止策の一提案」, *日本セキュリティ・マネジメント学会論文誌*, Vol.23, No.1, pp.26-38, 2009 年. 【査読有】

Masao Sugi, Ipei Matsumura, Yusuke Tamura, Makoto Nikaido, Jun Ota, Tamio Arai, Kiyoshi Kotani, Kiyoshi Takamasu, Hiromasa Suzuki, Akio Yamamoto, Yoichi Sato, Seiichi Shin, Fumihiko Kimura: "Quantitative Evaluation of Automatic Parts Delivery in Human supporting Cell Production System – Attentive Workbench", *Journal of Robotics*, Vol.21, No.1, pp.135-145, 2009 年. 【査読有】

Shiro Kumano, Kazuhiro Otsuka, Junji Yamato, Eisaku Maeda, Yoichi Sato: "Pose Invariant Facial Expression Recognition using Variable-Intensity Templates", *International Journal of Computer Vision*, Vol.83, No.2, pp.178-194, 2009 年. 【査読有】

Yuyu Liu, Yoichi Sato: "Recovery of Audio-to-Video Synchronization through Analysis of Cross-Modality Correlation", *Pattern Recognition Letters*, No.1016, 2009 年. 【査読有】

岡部孝弘, 近藤雄飛, 木谷クリス・真実, 佐藤洋一: 「カテゴリ共起を考慮した回帰による複数物体認識」, *電子情報通信学会論文誌*, Vol.J92-D, No.8, pp.1115-1124, 2009 年. 【査読有】

木谷クリス・真実, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 杉本晃宏: 「視覚的文脈を用いた人物動作のカテゴリ学習」, *電子情報通信学会論文誌*, Vol.J92-D, No.8, pp.1144-1152, 2009 年. 【査読有】

熊野史朗, 大塚和弘, 大和田淳司, 前田英作, 佐藤洋一: 「パーティクルフィルタと勾配法の組み合わせによる頭部姿勢と表情の同時推定」, *電子情報通信学会論文誌*, Vol.J92-D, No.8, pp.1349-1362, 2009 年. 【査読有】

国際会議等

Chung-Lin Wen, Robin Bing-Yu, Yoichi Sato: "Video segmentation with motion smoothness", *Proc.SIGGRAPH2009*, 2009. 【査読有】

Takahiro Okabe, Imari Sato, Yoichi Sato: "Attached shadow Coding: Estimating Surface Normals from Shadows under Unknown Reflectance and Lighting Conditions", *Proc. IEEE International Conference on Computer Vision (ICCV 2009)*, pp.1693-1700, 2009. 【査読有】

Shiro Kumano, Kenichi Horiguchi, Daisuke Yamaguchi, Yoichi Sato, Yoshihiro Suda, Takahiro Suzuki: "Distinguishing driver intentions in visual distractions", *Proc. ITS World Congress 2009*, 2009. 【査読有】

Takashi Ichihara, Shiro Kumano, Daisuke Yamaguchi, Yoichi Sato, Yoshihiro Suda: "Driver assistance system for eco-driving", *Proc. ITS World Congress 2009*, 2009. 【査読有】

Sosuke Matsui, Mihoko Shimano, Takahiro Okabe: "Image Image Enhancement of Low-Light Scenes with Near-Infrared Flash Images", *Proc. Asian Conference on Computer Vision (ACCV2009)*, 2009. 【査読有】

Daisuke Sugimura, Kris Kitani, Takahiro Okabe, Yoichi Sato, Akihiro Sugimoto: "Using Individuality to Track Individuals: Clustering Individual Trajectories in Crowds using Local Appearance and Frequency Trait", Proc. IEEE International Conference on Computer Vision (ICCV2009), pp.1467-1474, 2009. 【査読有】

Masashi Nishiyama, Takahiro Okabe, Yoichi Sato, Imari Sato: "Sensation -based photo cropping", Proc. ACM International Conference on Multimedia (Multimedia2009), pp.669-672, 2009. 【査読有】

Yuyu Liu, Yoichi Sato: "Visual localization of non-stationary sound sources", Proc. ACM International Conference on Multimedia (Multimedia 2009), pp.513-516, 2009. 【査読有】

その他論文

岡兼司, 築澤宗太郎, 丸谷健介, 飯島友邦, 玉木悟史, 佐藤洋一: 「超小型ステレオカメラによる車載向け顔向き視線検出技術の開発」, 画像センシングシンポジウム(SSII2009), 2009年. 【査読有】

劉玉宇, 佐藤洋一: 「音と映像の相関分析に基づく移動音源特定」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2009), pp.79-86, 2009年. 【査読有】

岡部孝弘, 佐藤いまり, 佐藤洋一: 「陰に基づく符号化による未知の反射特性・光源方向における法線推定」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2009), pp.31-38, 2009年. 【査読有】

菅野裕介, 松下康之, 佐藤洋一, 小池英樹: 「マウス操作情報を用いた逐次学習による視線推定」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), pp.266-273, 2009年. 【査読有】

杉村大輔, 木谷クリス真実, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 杉本晃宏: 「歩容特長と局所的な見えを用いた特徴点軌跡クラスタリングによる混雑環境下人物追跡」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), pp.135-142, 2009年. 【査読有】

西山正志, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 佐藤いまり: 「注目領域の多重検出による写真の主観的品質の識別」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), pp.303-310, 2009年. 【査読有】

松井壮介, 島野美保子, 岡部孝弘, 佐藤洋一: 「カラーと近赤外画像の併用による低照度シーンにおける画質改善」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), pp.1089-1096, 2009年. 【査読有】

島野美保子, 岡部孝弘, 佐藤いまり, 佐藤洋一: 「事例に基づく高時間分解能映像の生成」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), pp.1103-1109, 2009年. 【査読有】

受賞

劉玉宇, 佐藤洋一: 学生優秀論文賞「音と映像の相関分析に基づく移動音源特定」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), 2009年.

岡部孝弘, 佐藤いまり, 佐藤洋一: 優秀論文賞「陰に基づく符号化による未知の反射特性・光源方向における法線推定」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), 2009年.

特許

大塚和弘, 三上弾, 澤木美奈子, 前田英作, 佐藤洋一, 熊野史朗: 「テンプレート装置、表情認識装置、テンプレート作成方法、表情認識方法、及びプログラム」, 特願特願 2009-240577, 2009年10月.

倉橋誠, 佐藤洋一, 岡部孝弘: 「ユーザインターフェイス装置およびコンピュータプログラム」, 特願特願 2009-290197, 2009年12月.

七文 直弘・准教授

研究テーマ(主たるもの)

知識形成プロセスの分析

企業等においては、組織を単位として知識生産がおこなわれていくが、現在では組織間でのコラボレーションによる知識生産の効率化が重要視されてきている。特にR&Dに焦点を当て、研究者が果たす知識生産における2つの側面(生産と媒介)を定量的に求め、知識生産に与える影響を解析する。

コンテンツ分野における能力形成プロセスの分析

コンテンツ分野においては、突出した才能をもった個人が生産物の品質を大きく規定すると考えられてきた。しかし、個人の能力形成のミクロ分析を進めることにより、個人が置かれた環境が持つ効果(embeddedness)が定量的にわかりつつある。本テーマでは、才能をもつに至った個人の能力形成プロセスの分析を行い、制度面での含意を得ることを目標とする。

研究業績(2009年度)

鈴木 高宏・准教授

研究テーマ(主たるもの)

超柔軟マニピュレータに関する研究

本研究では、従来の弾性の存在を前提とした柔軟系モデルでは扱えない、より柔軟な非弾性的柔軟系の運動を解析し、その特性を利用して新たなマニピュレーションの可能性を拓くことを目的としている。このような系を超柔軟系と呼んでいるが、例えばひもや糸、ワイヤー、テザー、ファイバー等のような要素はその例として考えられ、これらを利用することで従来より格段に軽量かつコンパクトな機構が実現できる。こうした超柔軟系を用いた従来にない新たなロボットマニピュレーションについて研究を行っている。

メカトロニック人工食道の開発

食道のただ一つの重要な機能は蠕動による咀嚼物の嚥下である。そのため、これは機械的機構で代替することが可能であると考えられ、それにより食道癌手術等における多大な外科的侵襲を低減することができる。本研究では、スクリュウ搬送機構を利用したメカトロニック人工食道の開発を行っている。現在、試作実験機において、様々な粘度の対象物について搬送実験を行い、その有効性を確認している。

人間-自動車-交通流系の動的挙動と制御

CCR サステナブル ITS プロジェクト(sITS)に参加し、その1テーマとして研究を行っている。ITS環境の普及段階においては、自動運転車と人間の運転する手動運転車の混在が予想される。本研究では、そうした混在交通流の動的挙動を解析し、安全性や効率を向上させる制御法を提案する。

研究業績(2009年度)

ROGER DALE SMITH・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

中尾 彰宏・准教授

研究テーマ(主たるもの)

ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワーク基盤構築技術の研究

オーバーレイネットワークの研究分野では、現在そして新しい将来のインターネットを支える様々なネットワークサービスやネットワークの仕組みを、インターネット内に埋め込まれた実験基盤(オーバーレイネットワークテストベッド)を用いることで実証実験し、性能評価や問題発見などを行うことを目的とする。本研究テーマでは、このような実証実験を広域で可能にする実験基盤の構築やノードの高度化技術の研究を目的とする。

ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワークを用いた経路制御技術の研究

オーバーレイルーティング(Overlay Routing)と呼ばれる、インターネットの可用性を向上したり様々なデータ通信の特性(QoS)を最適化する技術の研究を進めている。

サステナブル・ネットワーク・サービス基盤技術の研究

インターネット上に実装されたネットワークサービスへの DoS アタックや DDoS アタックなどの脅威に対し、サーバの仮想化とプロセスのマイグレーションを利用してサステナブルなサービスを実現するための基盤技術を研究開発し可用性を向上する研究を進めている。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

Kurt Tutschku, Akihiro Nakao: "Towards the Engineering of Dependable P2P-Based Network Control -- The Case of Timely Routing Control Messages", IEICE TRANSACTIONS on Communications, Vol.E92-B, No.1, pp.17-25, 2009 年.
【査読有】

Ryota Ozaki, Akihiro Nakao: "Light-weight Slices Employing Linux Containers To Support Flexibility of CoreLab", 情報処理学会 システムソフトウェアとオペレーティング・システム研究会, Vol.111, No.20, pp.1-8, 2009 年.

Yufeng Wang, Akihiro Nakao, Jianhua Ma: "SDEC: A P2P Semantic Distance Embedding Based on Virtual Coordinate System", UBIQUITOUS INTELLIGENCE AND COMPUTING Lecture Notes in Computer Science, Volume 5585, pp.208-220, 2009 年. 【査読有】

中内 清秀, 中尾 彰宏, 下條 真司: 「特別講演 研究開発ネットワークテストベッドの国際動向と展望 (インターネットアーキテクチャ)」, 電子情報通信学会技術研究報告 IA 研究会, Vol.109, No.208, pp.17-22, 2009 年.

吉田 雅裕, 大坐島 智, 中尾 彰宏: 「Share ネットワークにおけるコンテンツポイズニングの適用と評価」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.109, No.188, pp.91-96, 2009 年.

佐々木 健吾, 中尾 彰宏: 「BF を用いたフロー同定による P2P パケットキャッシュ効率の改善手法」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.109, No.188, pp.79-84, 2009 年.

宮村(中村) 浩子, 大坐島 智, 中尾 彰宏: 「重要ノード発見のための大規模ネットワークの可視化 (ネットワークシステム)」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.109, No.188, pp.85-90, 2009 年.

Yufeng Wang, Akihiro Nakao: "Socially-inspired search and ranking in mobile social networking: concepts and challenges", Journal of Frontiers of Computer Science in China, Volume 3, No.4, pp.435-444, 2009 年. 【査読有】

Pratama Putra ; 中尾 彰宏: "Measuring peer-to-peer network topology through geo-location-aware distributed crawlers", 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.109, No.228, pp.109-114, 2009 年.

東 慎一郎, 阿多 信吾, 中尾 彰宏: 「分散アプリケーションにおける性能の均一化のためのサーバ選択法」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.109, No.273, pp.65-70, 2009 年.

富田 優子, 中尾 彰宏: 「不完全な Traceroute 情報を用いた AS Path の推測方法 (ネットワークシステム)」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.109, No.273, pp.17-22, 2009 年.

Yufeng Wang, Akihiro Nakao: "On Cooperative and Efficient Overlay Network Evolution based on Group Selection Pattern", IEEE Transactions on Systems, Man, and Cybernetics-Part B, Volume 40, No.3, pp.493 - 504, 2009 年. 【査読有】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao, Athanasios V. Vasilakos: "DoubleFace: robust reputation ranking based on link analysis in P2P networks", Journal of Cybernetics and Systems, Volume 41, Issue 2, pp.167 - 189, 2010 年. 【査読有】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao, Jianhua Ma: "SDIPR: A Generic P2P Semantic Distance Inference Approach Based on sPring Relaxation System", Journal of Internet Technology, Volume 11, No.2, 2010 年. 【査読有】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao, Jianhua Ma: "HopRec: Hop-Based Recommendation Ability Enhanced Reputation Ranking in P2P Networks", IEICE Transactions on Information and Systems, Volume E93.D, Issue 3, pp.438-447, 2010 年. 【査読有】

吉田 雅裕, 大坐島 智, 中尾 彰宏: 「P2P ファイル共有ネットワークにおけるインデックスポイズニングの動的な適用方式」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.109, No.448, pp.279-284, 2010 年.

佐々木 健吾, 中尾 彰宏: 「複数のフロー特定手法による P2P パケットキャッシュ効率の比較 (ネットワークシステム)」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.109, No.448, pp.285-290, 2010 年.

宮村(中村) 浩子, 大坐島 智, 中尾 彰宏: 「重要ノードに着目した大規模ネットワークの可視化システム」, 電子情報通信学会技術研究報告 NS 研究会, Vol.109, No.448, pp.357-362, 2010 年.

国際会議等

Maoke Chen, Akihiro Nakao, Olivier Bonaventure, Taoryu Li: "UOA: User-Oriented-Addressing for Slice Computing", 20th ITC Specialist Seminar on Network Virtualization, 2009. 【査読有】

Aun Haider, Richard Potter, Akihiro Nakao: "Challenges in Resource Allocation in Network Virtualization", 20th ITC Specialist Seminar on Network Virtualization, 2009. 【査読有】

Aun Haider, Akihiro Nakao: "The effect of router buffer size on R-bias in high-speed variants of TCP", International Symposium on Performance Evaluation of Computer & Telecommunication Systems (SPECTS), 2009. 【査読有】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao, Jianhua Ma: "SDEC: A P2P Semantic Distance Embedding Based on Virtual Coordinate System", Proceedings of the 6th International Conference on Ubiquitous Intelligence and Computing (UIC), 2009. 【査読有】

Ping Du, Akihiro Nakao: "RouteLite: One-hop path splicing with path migration", First International Conference on Future Information Networks (ICFIN), 2009. 【査読有】

Tobias Hossfeld, Kenji Leibnitz, Akihiro Nakao: "Modeling of Modern Router Architectures Supporting Network Virtualization", 2nd International Workshop on the Network of the Future (FutureNet II) in conjunction with IEEE GLOBECOM 2009. 【査読有】

Ryoichi Kawahara, Satoshi Kamei, Noriaki Kamiyama, Haruhisa Hasegawa, Hideaki Yoshino, Eng Keong Lua, Akihiro Nakao: "A Method of Constructing QoS Overlay Network and Its Evaluation", IEEE GLOBECOM 2009. Global Telecommunications Conference, 2009. 【査読有】

Veronica C. Estrada, Akihiro Nakao, Enrique C. Segura: "Classifying Computer Session Data Using Self-Organizing Maps", International Conference on Computational Intelligence and Security (CIS), 2010. 【査読有】

Hyun Yong Lee, Akihiro Nakao, Jong Won Kim: "What can P2P do for traffic control in P2P networks?", Co-Next Student Workshop '09 Proceedings of the 5th international student workshop on Emerging networking experiments and technologies, 2009. 【査読有】

Veronica C. Estrada, Akihiro Nakao: "A Survey on the Use of Traffic Traces to Battle Internet Threats", 3rd International Conference on Knowledge Discovery and Data Mining (WKDD), 2010. 【査読有】

Yucheng Zhu, Maoke Chen, Akihiro Nakao: "CONIC: Content-Oriented Network with Indexed Caching", Proceedings of the 13th IEEE Global Internet Symposium (GI), 2010. 【査読有】

その他論文

中尾彰宏: 「新世代ネットワークに向けて 基盤技術の研究・開発を推進 テーマ2.新世代サービス化技術(ネットワーク仮想化基盤の JGN2plus への展開) NICT NEWS」, NICT NEWS No 384, 2009 年. 【一般向け】

中尾彰宏: 「東京大学×EMC ジャパン クラウド・ネットワーク・プラットフォーム解析プロジェクトが始動」, On - Life In Information, 2010 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

プトゥラ プラタマ・吉田雅裕・大坐畠 智(東京農工大)・中尾彰宏(東大)・川島幸之助(東京農工大):「ファイル検索クエリを用いた Winny ネットワークのトポロジ測定方式」, 電子情報通信学会 ネットワークシステム研究会(NS), 2009.

尾崎 亮太、中尾 彰宏:“Light-weight Slices Employing Linux Containers To Support Flexibility of CoreLab”, 情報処理学会, 2009.

中尾 彰宏:“Emerging Testbeds for NwGN through Virtualization Technologies”, 電子情報通信学会 新世代ネットワーク時限研究専門委員会 第1回研究会, 2009.

陳 茂科, 中尾 彰宏:“UOA: User-Oriented-Addressing for Slice Computing”, ITC Specialist Seminar on Network Virtualization, 2009.

Haider Aun, 中尾 彰宏:“Challenges in Resource Allocation in Network Virtualization”, ITC Specialist Seminar on Network Virtualization, 2009.

中内 清秀, 中尾 彰宏:“PlanetLab Japan and Future Network Virtualization Test-bed”, OneLab2 Annual Meeting, 2009. 【招待講演】

中内 清秀, 中尾 彰宏:「PlanetLab オーバーレイネットワーク プラットフォーム」, 新世代ネットワーク推進フォーラム テストベッドネットワーク推進 WG, 2009. 【招待講演】

Haider Aun, 中尾 彰宏:“The Effect of Router Buffer Size on R-Bias in High-Speed variants of TCP”, International Symposium on Performance Evaluation of Computer and Telecommunication Systems (SPECTS) 2009, 2009. 【招待講演】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao, Jianhua Ma:“SDEC: A P2P Semantic Distance Embedding Based on Virtual Coordinate System”, UIC 2009@Brisbane, 2009.

Akihiro Nakao:「Network Virtualization as an Architecture and Its Applications」, IEICE NwGN 研究会, 2009.

中尾彰宏:「JGN2plusにおけるオーバーレイネットワークサービス ネットワーク仮想化基盤技術の研究開発」, 東海JGN2plus 推進協議会, 2009.

中尾 彰宏(NICT/東大):「JGN2plus におけるオーバーレイネットワークサービスとネットワーク仮想化基盤技術の研究開発」, 第2回東海JGN2plus 推進協議会, 2009. 【招待講演】

河合 栄治(NICT), 下條 真司(NICT/阪大), 小林 和真(倉敷芸術科学大/NICT), 知念 賢一, 篠田 陽一(北陸先端大/NICT), 中尾 彰宏(東大/NICT):「JGN-X: 新世代ネットワークのための新しいテストベッド構想」, 電子情報通信学会 新世代ネットワーク時限研究専門委員会 新世代ネットワークワークショップ 2009, 2009. 【招待講演】

中尾 彰宏(東大/NICT):「アーキテクチャとしてのネットワーク仮想化とアプリケーション Network Virtualization as an Architecture and Its Applications」, 電子情報通信学会 新世代ネットワーク時限研究専門委員会新世代ネットワークワークショップ 2009, 2009.

Vytautas Valancius, Yogesh Mundada, Nick Feamster, Jennifer Rexford, Akihiro Nakao:“Transit Portal: Bringing Connectivity to the Cloud”, SIGCOMM 2009, 2009.

東 慎一郎・阿多信吾(阪市大)・中尾彰宏(東大 / NICT)・岡 育生(阪市大):「分散ファイルシステムにおけるファイル同期を考慮したサーバ選択法」, 電子情報通信学会 2009 年ソサエティ大会. 【招待講演】

森 達哉(NTT)・中尾彰宏(東大)・上山憲昭・長谷川治久・川原亮一(NTT): “Toward scalable byte caching on high-speed core routers”, 電子情報通信学会 2010 年ソサエティ大会. 【招待講演】

Daniel Koffman(European Network Chairman),Henrik Abramowicz(ノキア), Serge Fdida 教授(UPMC), Phuoc Trangia 教授:「日本のネットワーク仮想化の研究活動紹介」, International Ieletrafic Congress (ITC21)@Paris での招致講演, 2009. 【招待講演】

中尾 彰宏(東大): “Emerging Testbeds for NwGN through Virtualization Technologies”, APNOMS2009, 2009. 【招待講演】

中内 清秀, 中尾 彰宏:「研究開発ネットワークテストベッドの国際動向と展望(特別講演)」, 電子情報通信学会 インターネットアーキテクチャ研究会, 2009.

中尾彰宏(東大/NICT),佐々木健吾:「BF を用いたフロー同定による P2P パケットキャッシュ効率の改善手法」, 電子情報通信学会 NS 研究会, 2009.

吉田雅裕(東京農工大)・大坐島智(電通大)・中尾彰宏(NICT/東大)・川島幸之助(東京農工大):「Share ネットワークにおけるコンテンツポイズニングの適用と評価」, 電子情報通信学会 NS 研究会, 2009.

宮村(中村) 浩子(原子力研)・大坐島 智(電通大)・中尾彰宏(東大)・川島幸之助(東京農工大)・鈴木喜雄(原子力研):「重要ノード発見のための大規模ネットワークの可視化」, 電子情報通信学会 NS 研究会, 2009.

Aki Nakao(University of Tokyo/NICT): “Network Virtualization for Future Network Architectures and Testbeds”, 第 2 回新世代ネットワークおよび将来インターネットに関する日欧シンポジウム, 2009. 【招待講演】

プトゥラ プラタマ・中尾彰宏:「地理的情報を利用した分散クローラによる P2P ネットワークトポロジ測定方式」, 電子情報通信学会 ネットワークシステム研究会(NS), 2009.

川原亮一・亀井 聡・上山憲昭・長谷川治久・吉野秀明(NTT)・Eng Keong Lua(Carnegie Mellon Univ.)・中尾彰宏(東大):「QoS オーバレイネットワーク構成法とその評価」, 電子情報通信学会 情報通信マネジメント研究会(ICM), 2009.

大槻 英樹, 中尾 彰宏: “Proposed definition of Network Virtualization”, ITU-T FGFN, 2009.

富田優子・中尾彰宏(東大):「不完全な Traceroute 情報を用いた AS Path の推測方法」, 電子情報通信学会 情報通信マネジメント研究会(ICM), 2009.

東 慎一郎・阿多信吾(阪市大)・中尾彰宏(東大/NICT)・岡 育生(阪市大):「分散アプリケーションにおける性能の均一化のためのサーバ選択法」, 電子情報通信学会 情報通信マネジメント研究会(ICM), 2009.

王 玉峰, 中尾 彰宏: “HopRec: Hop-based recommendation ability enhanced reputation ranking in P2P networks”, IEICE Trans. on IEICE TRANS. INFORMATION AND SYSTEMS, Special Section on Trust, Security and Privacy for Pervasive Applications, 2009.

王 玉峰, 中尾 彰宏: “DoubleFace: robust reputation ranking based on link analysis in P2P networks (long version)”, Cybernetics and Systems (Taylor & Francis), 2009.

Tobias Hobfeld(University of Wuerzburg), Kenji Leibniz(Osaka University), Akihiro Nakao(University of Tokyo): "Modeling of Modern Router Architectures Supporting Network Virtualization", FutureNet II Workshop, 2009.

Lee HyunYong, 中尾 彰宏: "What Can P2P Do for Traffic Control in P2P Networks?", ACM CoNext Student Workshop, 2009.

中澤大暁・吉田雅裕・大坐島 智・中尾彰宏・川島幸之助: 「Winny ネットワークにおける検索ネットワーク制御方式」, 電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会 (IN), 2010.

Aki Nakao(University of Tokyo/NICT): "ネットワーク仮想化", FIT Workshop in Sydney, 2010. 【招待講演】

中尾 彰宏(東大): "Network Virtualization for Enabling Network Testbeds and New Network Architectures", 電子情報通信学会総合大会, 2010. 【招待講演】

中尾 彰宏(東大): 「オーバーレイネットワークの今後の展開」, NORTHシンポジウム, 2010. 【招待講演】

Aki Nakao(University of Tokyo/NICT): 「ネットワーク仮想化」, 電子情報通信学会総合大会@仙台, 2010. 【招待講演】

朱 韵成, 中尾 彰宏: "CONIC: Content-Oriented Network with Indexed Caching", 13th IEEE Global Internet Symposium 2010 (held in conjunction with IEEE Infocom 2010), 2010.

宮村(中村) 浩子・大坐島 智・中尾彰宏・川島幸之助・鈴木喜雄: 「重要ノードに着目した大規模ネットワークの可視化システム」, 電子情報通信学会 ネットワークシステム研究会 (NS), 2010.

佐々木健吾・中尾彰宏: 「複数のフロー特定手による P2P パケットキャッシュ効率の比較」, 電子情報通信学会 ネットワークシステム研究会 (NS), 2010.

吉田雅裕・大坐島 智・中尾彰宏・川島幸之助: 「P2P ファイル共有ネットワークにおけるインデックスポイズニングの動的な適用方式」, 電子情報通信学会 ネットワークシステム研究会 (NS), 2010.

Ryoichi Kawahara, Satoshi Kamei, Noriaki Kamiyama, Haruhisa Hasegawa, Hideaki Yoshino, Eng Keong Lua, Akihiro Nakao: "A Method of Constructing QoS Overlay Network and its Evaluation", IEEE GLOBECOM2009@Hawaii, 2010.

新聞・報道

中尾彰宏: 「新たなネットワークの実現を支えるネットワーク仮想化ノードの実証実験を産学官で開始」, 情報通信研究機構 <http://www2.nict.go.jp/pub/whatsnew/press/h21/100330/100330.html>, 2009.

中尾彰宏: 「東大と EMC ジャパン、クラウド実現に向けて利用者視点の共同研究を開始」, ソフトバンクビジネス+IT <http://www.sbbbit.jp/news/13733/>, 2009.

中尾彰宏: 「東大とEMCジャパン、クラウド時代のネットワークトラフィック課題探索共同研究を開始」, NIKKEI NET <http://release.nikkei.co.jp/detail.cfm?relID=239330&lindID=1>, 2009.

受賞

中尾彰宏: コミュニケーションクオリティ研究会研究賞 「コミュニケーションクオリティ研究会研究賞」, 電子情報通信学会, 2009 年.

特許

川原亮一, 森達哉, 上山憲昭, 長谷川治久, 中尾彰宏 :「パケットキャッシュ制御方法及びシステム」, 特願, 2010 年 03 月.

川原亮一, 上山憲昭, 森達哉, 長谷川治久, 中尾彰宏:「トラフィック制御方法及びゲートウェイ仮想化ノード装置」, 特願, 2010 年 03 月.

森達哉, 川原亮一, 上山憲昭, 中尾彰宏 :「ネットワークアドレス参照方法及び装置及びプログラム」, 特願, 2010 年 03 月.

丹羽 美之・准教授

研究テーマ(主たるもの)

現代メディア史

テレビ番組や映画などの視聴・分析を通して、戦後日本や現代日本をめぐる様々なイメージがどのように生産され、表象され、受容されてきたのかを研究している。

アーカイブ研究

「TV アーカイブ・プロジェクト」「記録映画アーカイブ・プロジェクト」などを通して、メディア文化財の収集・保存・活用をめぐる課題や可能性について研究している。

制作者・ジャーナリスト教育

ドキュメンタリーの制作や批評、ワークショップやセミナーの企画・運営を中心に、次世代の映像文化や映像ジャーナリズムを担う作り手たちの教育と養成に取り組んでいる。

研究業績(2009 年度)

分担著書

丹羽美之:「近代日本メディア人物誌」, 土屋礼子 編, ミネルヴァ書房, 2009 年.

丹羽美之:「社会学ベーシックス第6巻 メディア・情報・消費社会」, 井上俊・伊藤公雄 編, 世界思想社, 2009 年.

丹羽美之:「全国テレビドキュメンタリー」, 田原茂行・鈴木典之 編, 大空社, 2009 年.

雑誌論文

丹羽美之:「日米のニュースキャスターから見るテレビ報道の課題」, ジャーナリズム, No.236, pp.46-55, 2009 年.

丹羽美之:「アーカイブが変えるテレビ研究の未来」, マス・コミュニケーション研究, No.75, pp.51-66, 2009 年.

講演・口頭発表

丹羽美之: 「インディペンデントメディアのアーカイブ構築」, 日本マス・コミュニケーション学会第31期第12回研究会, 2009.

丹羽美之: 「対話を切り拓くメディア教育の実践」, 国際シンポジウム「多文化社会における批判的メディア研究と教育の課題」(主催: 早稲田大学メディア・シティズンシップ研究所), 2009.

丹羽美之: 「いま、映画保存の裏側」, 山形国際ドキュメンタリー映画祭(主催: 特定非営利活動法人山形国際ドキュメンタリー映画祭), 2009. 【一般向け】

丹羽美之: 「記録映画の保存と活用」, 第13回京都大学国際シンポジウム「Images of Science, Science of Images: 学術研究における映像実践の最前線」(主催: 京都大学), 2009.

新聞・報道

丹羽美之: 「テレビ局は視聴者にどのように向き合おうとしているか(コメント)」, 「TBSレビュー」(東京放送), 2009.

丹羽美之: 「ローカル局のドキュメンタリー番組(コメント)」, 「TBSレビュー」(東京放送), 2010.

原田 至郎・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報社会のガバナンスに関する研究

ICTに依存する情報社会のガバナンスについて、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

アジアの人々の価値観・政治意識に関する研究

アジア・バロメーター・プロジェクトの調査結果などに基づいた分析

研究業績(2009年度)

講演・口頭発表

HARADA Shiro: "A study of Cambodian values and politics", Workshop at the Royal Academy of Cambodia, 2010.

堀 里子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

医薬品・健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築

- * 臨床事例を活用した医療従事者間情報交換・研修システムの構築と展開
- * 健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築と展開

新規医薬品情報を創製するための研究

- * ヒト胎盤組織を用いた薬物の胎児移行性及び胎児毒性の定量的評価
- * 薬物輸送担体や代謝酵素の阻害を介した消化管における薬物間相互作用の検討

薬物動態・薬力学理論に基づくテーラーメイド・処方設計システムの開発

研究業績(2009 年度)

分担著書

澤田康文、大谷壽一、山本康次郎、白坂善之、玉井郁巳、堀里子:「標準医療薬学 臨床薬物動態学」, 澤田康文編, 医学書院, 2009 年.

澤田康文、堀里子 他:「創薬科学の魅力ー東京大学大学院薬学系研究科からの発信ー」, 杉山雄一、柴崎正勝、長野哲雄、松木則夫 編, 廣川書店, 2010 年.

雑誌論文

M. Nagai, T. Fukamachi, M. Tsujimoto, K. Ogura, A. Hiratsuka, H. Ohtani, S. Hori and Y. Sawada: "Inhibitory effects of herbal extracts on the activity of human sulfotransferase isoform SULT1A3", *Biol. Pharm. Bull.*, Vol.32, No.1, pp.105-109, 2009 年. 【査読有】

K. Suzuki, K. Doki, M. Homma, H. Tamaki, S. Hori, H. Ohtani, Y. Sawada, Y. Kohda: "Co-administration of proton pump inhibitors delays elimination of plasma methotrexate in high-dose methotrexate therapy", *Drug Metab. Dispos.*, Vol.37, No.5, pp.962-968, 2009 年. 【査読有】

H. Abukawa, M. Tomi, J. Kiyokawa, S. Hori, T. Kondo, T. Terasaki, K. Hosoya: "Modulation of retinal capillary endothelial cells by M 醇・ler glial cell-derived factors", *Mol.Vis.*, Vol.15, pp.451-457, 2009 年. 【査読有】

K. Shintaku, S. Hori, M. Tsujimoto, H. Nagata, S. Satoh, K. Tsukimori, H. Nakano, T. Fujii, Y. Taketani, H. Ohtani and Y. Sawada: "Transplacental pharmacokinetics of diclofenac in perfused human placenta", *Drug Metab. Dispos.*, Vol.37, No.5, pp.962-968, 2009 年. 【査読有】

朝比奈泰子、堀里子、大谷壽一、澤田康文:「医療従事者を対象として定期的に健康食品情報を提供するインターネット研修システムの構築とその評価」, *薬学雑誌*, Vol.129, No.6, pp.773-780, 2009 年. 【査読有】

朝比奈泰子、堀里子、大谷壽一、澤田康文:「患者の健康食品使用に関する薬剤師の行動実態調査」, 医療薬学, Vol.35, No.10, pp.685-692, 2009 年. 【査読有】

山田安彦, 澤田康文, 山本康次郎, 飯久保尚, 大谷壽一, 上村直樹, 安部好弘, 上原恵子, 太田隆文, 折井孝男, 岸本紀子, 齋藤充生, 武立啓子, 樽野弘之, 近澤洋平, 仲佐啓詳, 橋口正行, 堀里子, 山元俊憲:「医薬品情報学研究のあり方 ―ワークショップにおける KJ 法に基づく問題抽出と解析―」, 医薬品情報学, Vol.11, No.2, pp.76-87, 2009 年. 【査読有】

堀 里子, 澤田康文:「「薬が効かない」を科学する(2) 薬物相互作用で起こる「薬が効かない」現象」, 医薬ジャーナル, Vol.45, No.5, pp.1407-1416, 2009 年.

澤田康文, 堀里子:「薬と食の相互作用(115) III.薬と食事の相性 55.セレギリンと食事」, 医薬ジャーナル, Vol.45, No.5, pp.1422-1426, 2009 年.

澤田康文, 堀里子:「薬と食の相互作用 (116) III. 薬と食事の相性 56. 硫酸モルヒネ製剤と食事」, 医薬ジャーナル, Vol.45, No.8, pp.2143-2145, 2009 年.

澤田康文, 三木晶子, 江頭あゆ子, 堀里子:「薬と食の相互作用 (117) III. 薬と食事の相性 57. メルカプトプリンと食事 (牛乳)」, 医薬ジャーナル, Vol.45, No.9, pp.2370-2374, 2009 年.

澤田康文, 堀里子:「薬と食の相互作用 (118) III. 薬と食事の相性 58. ラパチニブと食事」, 医薬ジャーナル, Vol.45, No.10, pp.2595-2599, 2009 年.

澤田康文, 佐藤宏樹, 堀里子:「薬と食の相互作用(119) III.薬と食事の相性 59.メルファランと食事」, 医薬ジャーナル, Vol.45, No.11, pp.2848-2853, 2009 年.

澤田康文, 堀里子:「薬と食の相互作用(120) III.薬と食事の相性 60.アリスキレンと食事」, 医薬ジャーナル, Vol.45, No.12, pp. 3095-3097, 2009 年.

堀里子, 澤田康文:「薬物動態 臨床編 8. 薬物相互作用とマネジメント」, 治療学, Vol.43, No.12, pp.1328-1332, 2009 年.

朝比奈泰子, 堀里子, 澤田康文:「インターネットを用いた医療従事者からの健康食品関連情報の収集と共有」, 薬学雑誌, Vol.130, No.1, pp.131-139, 2010 年. 【査読有】

朝比奈泰子, 堀里子, 澤田康文:「カリウムの摂取制限を受けている患者でのグルコサミン硫酸塩使用の安全性」, 薬学雑誌, Vol.130, No.2, pp.271-275, 2010 年. 【査読有】

澤田康文, 堀里子:「薬と食の相互作用(121) III.薬と食事の相性 61.セフロキシム アキセチルと食事」, 医薬ジャーナル, Vol.46, No.2, pp.809-818, 2010 年.

講演・口頭発表

堀 里子, 澤田 康文:「医師、薬剤師は医薬品使用に関するテレビ番組をどう捉えるか?」, 第 8 回科学技術社会論学会年次研究大会・総会, 2009.

堀 里子, 朝比奈 泰子, 三木 晶子, 澤田 康文:「医師・薬剤師向け健康食品情報交換・研修システムの構築」, 第 12 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 2009.

前田 幸男・准教授

研究テーマ(主たるもの)

内閣支持率の研究

新聞社等が報道している世論調査の集計結果の検討を中心に、マクロ・レベルにおける内閣支持率の変動およびミクロ・レベルにおける個人の内閣支持について基礎的な研究を行っている。

性役割分業と政治参加・政治的態度の研究

社会科学研究所が大阪商業大学と共同で行っている日本版総合社会調査 JGSS のデータを利用して、性・性役割分業と政治行動との関係を検討している。

データ・アーカイブの研究

社会科学研究所附属日本社会研究情報センターに設置されている SSJDA の運営上の基礎的研究になるが、諸外国のデータ・アーカイブについて歴史および現状について研究している。最近は米国センサス個票の保存および公開用ミクロ標本データの提供方法について調査を行っている。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

Yukio Maeda: "The Change of Government and Public Opinion: September 2005 to August 2009", Social Science Japan Journal, Vol.42, pp.6-11, 2009 年. 【査読有】

前田幸男: 「知事支持率の研究—JGSS-2008 を利用して—」, 日本版 General Social Survey 研究論文集, pp.23-34, 2010 年.

その他論文

前田幸男: 「時事世論調査に見る政権交代」, 中央調査報, 2009 年.

講演・口頭発表

Yukio Maeda: "e-Social Science in Japan [Poster Presentation]", 5th International Conference on e-Social Science, 2009.

柳原 大・准教授

研究テーマ(主たるもの)

歩行の適応制御における種々の小脳シナプス機能性分子の役割

障害物回避歩行動作における大脳—小脳機能連関ループの役割

運動の認知・予測における大脳—小脳機能連関の解明

研究業績(2009 年度)

分担著書

柳原 大:「シリーズ移動知第2巻 身体適応—歩行運動の神経機構とシステムモデル」, 土屋和雄、高草木薫、荻原直道 編, オーム社, 2009 年.

柳原 大:「身体トレーニング-運動生理学からみた身体機能の維持・向上」, 宮村実晴 編, 真興交易(株)医書出版部, 2009 年.

雑誌論文

Shogo Endo, Fumihito Shutoh, Tung Le Dinh, Takehito Okamoto, Toshio Ikeda, Michiyuki Suzuki, Shigenori Kawahara, Dai Yanagihara, Yamato Sato, Kazuyuki Yamada, Yutaka Kirino, Nicholas A. Hartell, Kazuhiko Yamaguchi, Shigeyoshi Itohara, Angus Nairn, Paul Greengard, Soichi Nagao, and Masao Ito.: "Dual involvement of G-substrate in motor learning revealed by gene deletion.", Proc. Natl. Acad. Sci. USA, Vol.106, pp.3525-3530, 2009 年. 【査読有】

柳原 大:「脳の発達と動きづくり」, 子どもと発育発達, Vol.7, pp.250-254, 2009 年.

Takeuchi, E., Yanagihara, D., Ishida, A., and Yuzaki, M.: "Effects of Cbln1 infusion on the hindlimb kinematics during treadmill locomotion in adult cbln1-null mice.", Proceedings of the 3rd International Symposium on Mobiligence, pp.161-164, 2009 年. 【査読有】

Kotajima, H., Yanagihara, D., Narumi, S., and Yuzaki, M.: "Role of the Purkinje cell-specific $\delta 2$ glutamate receptor in fear conditioned heart rate responses in mice.", Proceedings of the 3rd International Symposium on Mobiligence, pp.220-223, 2009 年. 【査読有】

講演・口頭発表

古田島浩子、柳原 大、鳴海 栄、柚崎通介:「小脳 $\delta 2$ 型グルタミン酸受容体変異マウスにおける心拍条件付け学習:保持および消去過程」, 第 17 回日本運動生理学会大会, 2009.

青木 祥、佐藤 和、柳原 大:「障害物回避歩行における小脳中間部・外側半球部の役割」, 第 17 回日本運動生理学会大会, 2009.

竹内絵理、柳原 大、石田 綾、柚崎通介:「歩行制御における平行線維-プルキンエ細胞間シナプスの役割」, 第17回日本運動生理学会大会, 2009.

持永 新、古田島浩子、花川 隆、柳原 大:「競技経験が運動予測及び予測に関わる脳活動に及ぼす影響について」, 第17回日本運動生理学会大会, 2009.

片桐友二、遠藤昌吾、柳原 大、永雄総一:「視機性眼球反応の適応によるマウスの小脳片葉プルキンエ細胞の遺伝子発現の修飾」, 第82回日本生化学学会, 2009.

青木 祥、佐藤 和、柳原 大:「障害物回避歩行における小脳中間部・外側半球部の役割」, 第10回(社)計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 2009.

山浦 祥、竹内絵理、柳原 大、平井宏和、寅嶋 崇、小山知穂:「脊髄小脳変性症3型マウスにおける姿勢の障害」, 第10回(社)計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 2009.

柳原 大:「脳と運動・スポーツ-運動が脳を育てる-」, 東京都中学校体育連盟研究奨励校研究発表会, 2010.【招待講演】

藤学宏、青井伸也、柳原 大、青木 祥、山浦 洋、荻原直道、市川 朗、土屋和雄:「ラットの解剖データに基づく後肢筋骨格モデルの構築とキネマティクスデータに基づく後肢歩行シミュレーション」, 第22回自律分散システムシンポジウム, 2010.

山内 祐平・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報通信技術を利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいるが、学習は空間／活動／共同体／人工物の微妙なバランスの中で発生する複雑な事象である。インターネットなどの情報通信技術を学びの場に導入する際に、様々な要因をどうデザインすれば適切な学習環境を構成できるかを、実践研究の中で明らかにする。

研究業績(2009年度)

分担著書

山内祐平:「「学び」の認知科学事典 [3-2 大学における学びの空間]」, 渡部信一 編, 大修館書店, 2009年.

雑誌論文

牧村真帆 山内祐平:「ワークショップ実践家が捉える空間の利用可能性に関する研究」, 日本教育工学会論文誌, Vol.33, No.Suppl., pp.173-176, 2009年.【査読有】

坂本篤郎 堀田龍也 山内祐平:「教師が協調学習場面で足場はずしを行う際の観点」, 日本教育工学会論文誌, Vol.33, No.Suppl., pp.85-88, 2009 年. 【査読有】

国際会議等

Mochizuki, T., Oura, H., Nishimori, T., Sato, T., Nakamura, Y., Ohno, T., Tateno, Y., Miyake, M., Watanabe, S., Henrik, J., Matsumoto, K., Wada, H., Miyatani, T., Nakahara, J. & Yamauchi, Y.: "eJournalPlus: Development of a collaborative learning system for constructive and critical reading skills", CSCL2009, pp.100-102, 2009. 【査読有】

その他論文

山内祐平 森玲奈 村田香子 北川美宏:「ワークショップファシリテーター研修における参加者の学習過程」, 日本教育工学会第 25 回大会講演論文集, 2009 年.

受賞

Toshio Mochizuki, Hiroki Oura, Tomomi Sato, Toshihisa Nishimori, Mio Tsubakimoto, Jun Nakahara, Yuhei Yamauchi, Johansson Kjell Henrik, Kenichiro Matsumoto, Shinichi Watanabe, Takashi Miyatani : Technology design Award 「eJournalPlus: Development of a collaborative learning system for constructive and critical reading skills」, CSCL 2009, 2009 年.

山口 いつ子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究

これまで進めてきた表現の自由、メディア法、サイバー法及び知的財産法をめぐる憲法学的考察を基盤として、今後のネット上のコミュニケーション特性を方向付けるであろう「ユビキタス化」による社会変容という文脈の下で、情報の自由、規制及び保護をめぐる法のエンフォースメントに際して諸利益間の調整のあり方が問われている幾つかの問題領域に着目し、主に日米欧の議論を取り上げて比較制度分析の観点から検討を加える作業を通じて、こうした利益調整において考慮されるべき、情報や情報通信技術をめぐる法の基底にある価値原理や、対立する諸利益の間のバランスを図るための論理技術を探求していく。

より具体的には、現在、情報の自由、規制及び保護に関する以下の三つの作業を柱として、本研究を進めている。

第一に、情報の自由の理論的基礎として、表現の自由を憲法で保障することのそもそもの意義や根拠を問いかける原理論に着目し、この自由が複数の価値の組み合わせによって支えられているという価値構造や、自由の限界を根拠付ける論理について、考察を行っている。

第二に、こうした従来の法における表現活動ないし情報流通の「自由」と「規制」のバランスが、今日、新たな情報通信技術の発達の下で問い直されている状況を、マス・メディアの報道・取材の自由、通信と放送の融合化、プライバシー・個人情報保護、著作権などの個別の争点を取り上げながら、検討している。

第三に、財産としての情報の保護のあり方をめぐって、とりわけ、「知的財産権」と「自由な情報流通」とが衝突する場面に着目し、そこでの両者の調整—つまりは、情報の「保護」と「自由」との調整—における均衡にかかわる課題に取り組んでいる。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

山口いつ子:「国際メディア事業の展開と基本的情報の提供—インターネット時代の集中排除原則のあり方をめぐって」, ジュリスト, No.1378, pp.121-132, 2009 年.

講演・口頭発表

山口いつ子:「放送メディアの自由と規制—メディア所有規制のあり方をめぐって」, 総務省情報通信政策研究所BBLセミナー, 2009. 【招待講演】【一般向け】

山本 隆一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

医療情報の安全性確保とプライバシー保護に関する研究

医療情報の可用性、完全性、機密性の適切な確保と、情報主権者の権利としてのプライバシーと教育・研修・研究・公益目的の利用を調和させるための技術的課題および制度や運用を中心とする人的要素の課題についての研究。

広域分散診療情報データベースへの知識発見手法の応用

電子カルテが普及した際に構成されると予想される広域分散診療情報データベースをモデル化し、随時蓄積される診療情報に対して動的な知識発見手法の適応についての研究

医療における公開鍵基盤の応用に関する研究

公開鍵基盤を医療ドメインに応用するにあつての、資格属性の取り扱いなどの問題の解決と国際的な調和に関する研究

研究業績(2009 年度)

分担著書

山本隆一:「情報ネットワークの法律実務」, 多賀谷 一照, 松本 恒雄 編, 第一法規, 2009 年.

雑誌論文

山本隆一:「HIS 構築における情報漏洩と防止策」, 新医療, Vol.36, No.7, pp.72-76, 2009 年. 【一般向け】

山本隆一:「訪問看護業務記録の IT 化促進事業の概要」, 訪問看護ステーションニュース, No.89, pp.8-9, 2009 年.

講演・口頭発表

山本 隆一:「個人情報保護－医療情報システムの安全管理に関するガイドラインの改定について(第4版)－」, CyberRad 2009, 2009. 【招待講演】

山本隆一:「医療情報の二次的利活用のあり方」, 第 29 回医療情報学連合大会・産官学連携シンポジウム, 2009.

R.Yamamoto: “i-Japan 2015 and Security Guidelines of Health Information Systems in Japan”, CoMHI2009 国際企画セッション・IMIA/APAMI/JAMI 学会長特別講演, 2009. 【招待講演】

山本隆一:「健康情報活用基盤構築のための標準化及び実証事業」, 第 29 回医療情報学連合大会・大会企画, 2009.

山本隆一:「厚生労働省保健医療情報標準化会議と HELICS 協議会への期待」, 医療情報標準化推進協議会 (HELICS) チュートリアル, 2009.

新聞・報道

山本隆一:「医療フォーラム ICT による高度医療社会の実現」, 日本経済新聞, 2009.

大東 誠・助教

研究テーマ(主たるもの)

レガシー情報システムのビュー統合・検索統合に関する研究

インタラクティブ 3 次元情報視覚化

多面的情報検索理論に基づく 3 次元情報アクセス空間の自動構築

研究業績(2009 年度)

小笠原 盛浩・助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

橋元良明・中村功・関谷直也・小笠原盛浩:「インターネット利用に伴う被害と不安」, 東京大学大学院情報学環情報学研究 調査研究編, No.26, pp.27-80, 2010 年.

講演・口頭発表

小笠原盛浩:「2007 年参議院選挙の政治イメージ形成に対する多メディア環境の影響」, 第 26 回情報通信学会大会, 2009.

*小笠原 盛浩, 橋元 良明, 中村 功, 関谷 直也, 高橋 克巳, 間形 文彦, 山本 太郎, 千葉 直子:「インターネット利用への不安意識とメディア接触の影響について」, 日本社会情報学会 第 24 回全国大会, 2009.

加島 卓・助教

研究テーマ(主たるもの)

〈広告制作者〉の歴史社会学

近現代日本における〈広告制作者〉という職業理念を対象にし、言説の歴史社会学という方法論によって記述される研究である。具体的には、主体の代替不可能性としての「近代的個人」と、主体の代替可能性としての「近代組織における個人」という二つの理念の間を揺らぐことでしか現象してこない〈広告制作者〉を描くことで、日本における近代の「独特な動き方」が記述される。

メディア・リテラシーとワークショップ

東京大学大学院情報学環メルプラッツや武蔵野美術大学芸術文化学科アーツプロジェクトのメンバーとして、メディア・リテラシーや芸術・デザインを活かした市民参加型のワークショップを行い、専門家と非専門家のコミュニケーション・デザインや地域活性化の支援などを行っています。

情報技術と歴史アーカイブ

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

加島卓:「若者にとって〈感覚〉とは何か 1960 年代日本における職業としてのグラフィック・デザイナー」, 『年報社会学論集(関東社会学会)』, No.第 22 号, pp.210-221, 2009 年. 【査読有】

加島卓:「〈アートディレクター〉の社会学的研究 職業理念としての広告クリエイティブをめぐる考察」, 『平成 21 年度(第 43 次)吉田秀雄記念事業財団助成論文集(要旨)』, pp.127-137, 2009 年. 【査読有】

その他論文

加島卓:「出会いと葛藤のワークショップ」,『2009年度南会津おらが芸品館アーツプロジェクト報告書(武蔵野美術大学芸術文化学科)』,2009年.

講演・口頭発表

加島卓:「若者とく感覚」:「面白さ」という文脈自由性の誕生」,青少年研究会(2009年7月4日、早稲田大学),2009.

加島卓:「マスメディア嫌いとメディア・リテラシー」,第77回国語メディア研究会(2009年9月26日、川崎市高津市民館),2009.【一般向け】

加島卓:「〈広告制作者〉の社会学:主体の代替可能性／不可能性を循環する秩序」,第82回日本社会学会大会(2009年10月11日、立教大学),2009.

加島卓:「それでも、デザインを語ることは不可能なのか」,総合デザイン演習「現実」特別講義、(2009年12月15日、多摩美術大学造形表現学部デザイン学科),2009.

受賞

加島卓:第7回竹尾賞(デザイン評論部門)「デザインを語ることは不可能なのか」、祖父江慎・藤田重信・加島卓・鈴木広光『文字のデザイン、書体のフシギ』左右社、2008年、pp.88-131,株式会社竹尾,2009年.

佐藤 朝美・助教

研究テーマ(主たるもの)

知性を育む保育環境デザインに関する研究

東京大学情報学環とミサワホームとのプロジェクトにおいて、より良い保育環境デザインについて共同研究(研究代表者:東京大学大学院情報学環 山内 祐平 准教授)を行っております。3年間かけて、保育における学びを指向した空間を提案すべく個々研究を行う予定です。今年度はその手がかりとして、社会性を育む遊具を提案・開発・評価を行います。

家族内コミュニケーションを支援するデジタルストーリーテリングシステムの開発研究

家族内コミュニケーションを支援するオンライン環境として、デジタルストーリーテリングシステムの開発研究を行っております。科学研究費補助金(基盤C)の交付により、3年間かけて成果を出していく予定です。

Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムの開発研究

幼児の物語行為における親の役割に着目し、Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムを構築し、実践を継続しております。”親子 de 物語”は、親子で物語を作成し、その過程をWebカメラで録画、ビデオを親が自身で振り返ると同時に他の親子とビデオを共有していく、自己調整学習の仕組みを備えたWebアプリケーションです。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

佐藤朝美:「幼児の Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出しの向上を支援するシステムの開発」, 日本教育工学会論文誌, Vol.Vol.33, No.No3, pp.pp.239-249, 2009 年. 【査読有】

国際会議等

MOCHIZUKI,T., OURA,H., SATO,T., NISHIMORI,T., TSUBAKIMOTO,M., NAKAHARA, J., YAMAUCHI, Y., HENRIK,J., MATSUMOTO,K., WATANABE,S., and Miyatani,T.: " eJournalPlus: Development of a Collaborative Learning System for Constructive and Critical Reading Skills", CSCL09 Community Events Proceedings, pp.pp. 100-102, 2009. 【査読有】

講演・口頭発表

佐藤朝美:「幼児の Narrative Skill 習得を促す親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムの開発」, 日本教育工学会第 25 回大会課題研究(査読あり), 2009.

望月俊男, 大浦弘樹, 樺本弥生, 佐藤朝美, 西森年寿, 渡部信一, ヨハンソン・ヘンリク:「複数の文章の比較統合を通じた批判的読解を支援する学習環境の開発とその評価」, 日本教育工学会第 25 回全国大会, 2009.

受賞

MOCHIZUKI,T., OURA,H., SATO,T., NISHIMORI,T., TSUBAKIMOTO,M., NAKAHARA, J., YAMAUCHI, Y., HENRIK,J., MATSUMOTO,K., WATANABE,S., and Miyatani,T: Awarded Paper(ベストテクノロジーデザイン賞)「 eJournalPlus: Development of a Collaborative Learning System for Constructive and Critical Reading Skills」, CSCL09, 2009 年.

杉原 周治・助教

研究テーマ(主たるもの)

基本権競合論

研究の目的は、これまで主として刑法学や民法学で論じられてきた競合の考え方を憲法学の領域に応用して、新たに「基本権競合論」という理論を織り成すことを主眼とする。基本権の領域では、しばしば、ある一個の事実関係に複数の基本権の構成要件が同時にかかわる状況が生じうるが、わが国の憲法学は、こうした問題に対してこれまでなんらの解決策も講じてこなかった。基本権競合論とは、まさにこのように、複数の基本権が重なり合う複雑な状況を解決するための理論である。本研究は、右理論の内実を、基本権における「真正な」または「不真正な」競合、「法条競合」、「規範的・規範論理的特別関係」、「補充関係」、「吸収関係」、「受け皿的機能」、「保護補完機能」、「補充機能」そして「観念的競合」といったタームを用いて、これを明らかにしていく。

研究業績(2009 年度)

竹内 文乃・助教

研究テーマ(主たるもの)

疫学研究(大気汚染)

微笑粒子状物質(PM)による大気汚染が心筋梗塞や脳梗塞といった動脈硬化性疾患に影響するかどうか、大規模な疫学研究データを解析することで検討している(統計解析を担当)

疫学研究(小児の環境と健康)

妊婦および小児の環境ホルモンや化学物質への曝露が妊娠や性比の決定、精神・身体発達などにどのように影響するか、全国6万人の妊婦を登録して追跡することで検討を行う(統計解析を担当)

研究業績(2009年度)

辻本 篤・助教

研究テーマ(主たるもの)

情報組織論

リスクマネジメント論

研究業績(2009年度)

その他論文

辻本 篤:「組織学習 ―組織の知識を共有する―⑪/「ワールドカフェ(World Cafe)-I ―その概念紹介と実践報告―」, 『OHM』 第96巻,第4号, 2009年.

辻本 篤:「組織学習 ―組織の知識を共有する―⑫/「ワールドカフェ(World Cafe)-II ―参加者の人格の早期理解―」, 『OHM』 第96巻,第5号, 2009年.

辻本 篤:「組織学習 ―組織の知識を共有する―⑬/「緊張感を和らげるための環境整備」, 『OHM』 第96巻,第6号, 2009年.

辻本 篤:「組織学習 ―組織の知識を共有する―⑭/「組織活動における社会構成主義的思考― I (理論編)」, 『OHM』 第 96 巻,第 7 号, 2009 年.

辻本 篤:「組織学習 ―組織の知識を共有する―⑮/「組織活動における社会構成主義的思考― II (実践編)」, 『OHM』 第 96 巻,第 8 号, 2009 年.

辻本 篤:「組織学習 ―組織の知識を共有する―⑯/「組織マネジメントで労働感情を扱う重要性―理論的裏付け I」, 『OHM』 第 96 巻,第 9 号, 2009 年.

辻本 篤:「組織学習 ―組織の知識を共有する―⑰/「組織マネジメントで労働感情を扱う重要性―理論的裏付け II (EQ I)」, 『OHM』第 96 巻,第 10 号, 2009 年.

辻本 篤:「組織学習 ―組織の知識を共有する―⑱/「組織マネジメントで労働感情を扱う重要性―理論的裏付け III (EQ II)」, 『OHM』第 96 巻,第 11 号, 2009 年.

講演・口頭発表

辻本 篤:「CSR 概念に対する社会的認識と疑問点、実践性」, 日本危機管理学会・「組織の社会的責任とリスクマネジメント」研究部会, 2009.

辻本 篤:「情報セキュリティ」, (財)電気通信普及財団寄付講座・講義(聖学院大学図書館情報学課程), 2009.
【招待講演】【一般向け】

受賞

辻本 篤: 情報文化学会 学会賞「情報文化学における人間系分野の組織文化の研究」, 情報文化学会, 2009 年.

南後 由和・助教

研究テーマ(主たるもの)

戦後日本における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究

都市・空間論、メディア論、芸術・技術社会学が交差する観点から、戦後日本における建築家の有名性が、建築家、国家、クライアント、ユーザーによって歴史的にいかにか表象され、建築物として空間化してきたのかを分析している。なかでも建築家の職能運動の変遷、建築ジャーナリズムの系譜、一般紙誌における建築家の表象、クライアントの属性と地理的分布に関する研究を重点的に行っている。

アンリ・ルフェーヴル、シチュアショニストの都市・建築論に関する理論的・実践的研究

理論的研究として、1950～70 年代におけるアンリ・ルフェーヴルの空間論とコンスタントの都市・建築プロジェクト「ニューバビロン」が建築界に与えた影響を分析している。実践的研究として、社会学と建築学を越境して、現代の建築家との協働の Research・プロジェクトを精力的に展開している。その他、今日的な都市の事例分析として、グラフィティ／落書きのフィールドワークを行っている。

研究業績(2009 年度)

分担著書

五十嵐太郎・長谷川祐子・石上純也・南後由和:「シンポジウム」『Diploma×KYOTO'09——京都建築学生之会合同卒業設計展』pp151-176, 京都建築学生之会 編, 建築資料研究社, 2009 年.

岸田省吾・小野良平・南後由和:「座談会 変容続ける本郷キャンパス——せめぎ合う多様と統一」『東京大学新聞 年鑑 2008-2009』pp131-134, 東京大学新聞社 編, シーズ・プランニング, 2009 年.

その他論文

南後由和:「建築の「際」を見極めて——建築の固有性と可能性を追求」, 建築ジャーナル, no.1163, p19, 2009 年.

南後由和:「1990 年代の建築家によるフィールドワーク——レム・コールハース、アトリエ・ワンを事例として」, 建築雑誌, vol.124, no.1953, pp14-15, 2009 年.

南後由和:「都市・建築のインテリジェンス」, α シノドス, vol.45, 2009 年.

講演・口頭発表

飯田豊・南後由和:「グラフィティのフィールドワーク——都市論とメディア論からの接近」, 関西学院大学大学院社会学研究科 GP 研究会, 2009.

南後由和:「都市にひそむ“ひらめき”の足跡——シチュアシオニスト・建築・グラフィティ」, 歩きながら考える×自由大学, 2009. 【一般向け】

島山直哉・南後由和:「スペクタクル展——共振する都市とアート」, 象の鼻テラス, 2009. 【一般向け】

酒井隆史・南後由和・大山エンリコイサム:「スタイルとシミュラークルのはざままで——動物的自己批判」, ポストグラフィティの開拓線, 2009.

東浩紀・磯崎新・黒瀬陽平・南後由和:「メタボリズム 2.0——都市へと回帰せよ」, Live Round About Journal 2010.

南後由和・飯田豊:「ヤンキー文化の弛緩——落書き／グラフィティをとおして」, ヤンキー文化を考えることの可能性(文化社会研究所), 2009.

長谷川豪・谷内田章夫・高木栄一・西田善太・藤村龍至・南後由和・大島滋:「デザイナーズ集合住宅の可能性」, 「デザイナーズ集合住宅の過去・現在・未来」展, 2009. 【一般向け】

中島英樹・南後由和・後藤繁雄:「オープニングトーク」, 3331 Arts Chiyoda, 2009. 【一般向け】

大西麻貴・鈴木志麻・大島芳彦・馬場正尊・猪熊純・成瀬友梨・篠原聡子・南後由和・大島滋:「集まって住むことの広がり」, 「デザイナーズ集合住宅の過去・現在・未来」展, 2009. 【一般向け】

西 兼志・助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

分担著書

ベルナルド・スティグレール:「技術と時間1:エピメテウスの過失」, 石田英敬監修/西兼志訳 編, 法政大学出版局, 2009 年.

雑誌論文

西兼志:「INA とアーカイブの思想:鏡の裏箔としてのアーカイブ」, 『マス・コミュニケーション研究』, No.75, pp.35-50, 2009 年.

講演・口頭発表

西兼志:「アーカイブ-研究をめぐって」, 情報学環/NHK 放送文化研究所共同研究, 2009. 【招待講演】

西兼志:「アーカイブの論理を捉える」, 日本脚本アーカイブス研究会, 2009. 【招待講演】

西兼志:「記号からメディアへ」, シンポジウム メディア・アートとは何か? Vol.4, 2009. 【招待講演】

松前 恵環・助教

研究テーマ(主たるもの)

情報と法を巡る現代的課題

デジタル化・ネットワーク化の進展による「情報」のあり方の変容がもたらす、「法」を巡る現代的な課題について、研究を行っている。具体的には、本来的に「情報」と密接な関わりを有するメディア法制、情報公開法制、プライバシー・個人情報保護法制、知的財産権法制等に加え、情報通信技術の発展に伴って新しく生じた、ISP の法的責任、コンピュータ犯罪、迷惑メール、違法・有害コンテンツの流通等の課題に対応するための法制を対象として、検討を進めている。

プライバシー・個人情報保護に関する法原理と制度

「プライバシー」や「プライバシー権」といった概念の意義やその価値、プライバシーの保護と個人情報の保護との関係あるいは個人情報保護制度の意義、個人情報保護制度の現状と課題等、プライバシー・個人情報保護に関する法原理の考察と制度の検討を行っている。この際、我が国のプライバシー・個人情報保護法制にとりわけ大きな影響を与えている米国、欧州の議論や制度に着目して、比較法的研究を行っている。

先端技術とプライバシー・個人情報保護

インターネットに続くユビキタス、そして、クラウドといった先端技術の進展に伴い、プライバシー・個人情報を巡る状況はどのように変容し、それによってプライバシーにはどのような脅威がもたらされているのか、そして、それに対してプライバシー・個人情報保護制度はどのようにあるべきなのか——情報通信技術の進展と情報のあり方の変容という視点から、プライバシー・個人情報保護についての研究を行い、新たな枠組みについて考察している。

研究業績(2009 年度)

分担著書

松前恵環:「情報技術の進展と法制度・政策(『情報通信アウトック 2010—躍進するモバイルブロードバンド』)」, 株式会社情報通信総合研究所 編, NTT 出版, 2009 年.

松前恵環:「内部統制と e ディスカバリ(『実践的 e ディスカバリ—米国民事訴訟に備える』)」, 町村泰貴・小向太郎 編, NTT 出版, 2009 年.

雑誌論文

松前恵環:「GPS 技術と公共の場におけるプライバシー～米国の判例を素材として～」, 法とコンピュータ, No.27, pp.103-114 頁, 2009 年.【査読有】

講演・口頭発表

松前恵環:「GPS 技術とプライバシーを巡る法的課題」, 情報通信学会情報知財部会, 2009.【招待講演】

米倉 将吾・助教

研究テーマ(主たるもの)

情動ロボティクス

ロボットが人間のように感情・情動を持つようになるためには、何が必要なのか。
また、そもそもロボットが感情や情動を持っているとはどういう事なのか。
現象論、進化論、脳科学を出発点として、エモーショナルなロボットの構成を試みている。

思いやり共感システム

誰かの悲しみを敏感に感じ取りそっと寄り添ったり、
自然や芸術の美しさを感じたり、その感動を誰かと共有したり、
このような夢のようなシステムをつくり出すために必要な
脳型情報処理システムを構築する事を試みている。

身体性知能

非限定的状況においても適応創発的に対応する事の出来るシステムを構築するために、アフォーダンス・ゲシュタルト・価値システム・身体性を軸として知能の創発、行動の創発のための構成論に取り組んでいる。

研究業績(2009 年度)

国際会議等

Shogo Yonekura, Yasuo Kuniyoshi, and Yoichiro Kawaguchi: "Development of emotional tremor-based vision system", in Proc. of IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS2009), pp.2677-2682, 2009. 【査読有】

Shigeru Ichihashi, Shogo Yonekura and Yoichiro Kawaguchi: "Simulation of Swarm Preservation -Boids as Preservation System of Swarm Behavior", in Proc. of ASIAGRAPH 2009 in Tokyo, Vol.3, No.1, pp.124-125, 2009. 【査読有】

その他論文

豊泉徹平、米倉将吾、河口洋一郎、神村明哉、多田隈理一郎: 「1 自由度球体ロボットの開発」, 第 27 回日本ロボット学会学術講演会予稿集, 3Q1-01, 2009 年.

米倉将吾、國吉康夫、河口洋一郎: 「震動型情動ロボットの開発: 身体の震えによる知覚機能の亢進」, 第 27 回日本ロボット学会学術講演会予稿集, 2L1-05, 2009 年.

豊泉徹平、米倉将吾、河口洋一郎: 「1 自由度アクチュエータによる移動球体ロボットの開発」, 第 67 回形の科学シンポジウム予稿集, 2009 年.

新聞・報道

河口洋一郎・米倉将吾・多田隈理一郎他: 「アートが生み出すサバイバル・ロボット - 河口洋一郎アート@湯島聖堂」, ロボコンマガジン 2009 年 5 月号、通巻 63 号、pp.58-59, 2009.

石川 雄章・特任教授

研究テーマ(主たるもの)

新技術の社会への実装(イノベーション・モデル)

ITをはじめとする新しい技術を社会に実装する際には、多くの場合、技術というよりはむしろ、多様なステークホルダーとの調整や既存の社会システムの見直し等が課題となる。こうした解題に対応しつつイノベーションを実現するためには、ステークホルダーの把握、共通目標の設定、コアメンバーの任命とチームの結成、権利と責任の適正な分担、検討プロセス及び場の設計、といった幅広い領域にわたる戦略的な取り組みが必要となる。

21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」では、ユビキタス技術の現場への適用をテーマに、政府、自治体などの取り組みを通じて、実証的にこのテーマにアプローチしている。

ITガバナンス(公的セクターにおける枠組みとCIOの役割)

ITガバナンスとは「企業が競争優位構築を目的に、IT戦略の策定・実行をコントロールし、あるべき方向へ導く組織能力」(「企業のITガバナンス向上に向けて」(通商産業省 1999)とされているが、公的セクターにおいてもIT戦略の策定・実行をコントロールすることは重要な課題である。特に、公的セクターは民間セクターとは異なる評価基準、行動制約があり、また社会的な制度設計という特別な機能を有する。こうしたことを前提に、COBITなどの標準的なITガバナンスのフレームワークを参考に、自らの県でのCIOの経験などを踏まえて、公的なセクターにおけるITガバナンスの枠組みとCIOの役割について研究している。

社会的合意形成

新しい技術・制度の社会への導入など、社会的に大きな影響をあたえる行為を行う際には、事前に関係者の合意を得たうえで進めることが望ましく、こうした活動を怠った場合には、最悪の場合、社会的な反発を招く恐れもある。その一方で、こうした活動を行う組織は社会的に確立しておらず、また方法論も制度として十分ではない。このため、社会的合意形成を支援するNPO法人PI-Forum(ピー・アイ・フォーラム)の活動を通じて、実証的に社会的合意形成の意義、方法、知恵、事例などを研究している。

研究業績(2009 年度)

須見 徹太郎・特任教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

分担著書

須見徹太郎他:「災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 1947 カスリーン台風」, 中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」小委員会 カスリーン台風分科会 編, 内閣府, 2010 年.

須見徹太郎他:「地域防災データ総覧ー岩手・宮城内陸地震 平成20年8月末豪雨編」, 地域防災データ総覧編集委員会 編, 消防科学総合センター, 2010 年.

雑誌論文

大原美保, 地引泰人, 関谷直也, 須見徹太郎, 目黒公郎, 田中淳:「J-ALERT による緊急地震速報の防災行政無線放送の効果に関する研究」, 災害情報, No.8, pp.96-103, 2009 年. 【査読有】

須見徹太郎:「洪水災害と情報」, 季刊消防科学と情報, No.97(2009 夏号), pp.23-27, 2009 年.

大原美保, 地引泰人, 関谷直也, 須見徹太郎, 目黒公郎, 田中淳:「J-ALERT による緊急地震速報の防災行政無線放送の効果に関する調査報告」, 生産研究, Vol.61, No.6, pp.103-108, 2009 年.

大原美保, 関谷直也, 地引泰人, 須見徹太郎, 古村孝志, 鷹野澄, 田中淳:「廣井アーカイブスの開発研究」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編, No.26, pp.81-90, 2010 年.

講演・口頭発表

須見徹太郎:「災害と情報」, 国土交通省港湾局, 防災・危機管理コース(危機発生対応コース)研修, 2009.【一般向け】

須見徹太郎:「災害と情報・危機管理」, 奈良県市町村長防災危機管理ラボ, 2009.【一般向け】

須見徹太郎:「2008 年 8 月末豪雨災害等調査について」, 名古屋大学防災アカデミー, 2009.【一般向け】

須見徹太郎・田中淳:「水害時の避難意向に関するアンケート調査」, 日本災害情報学会 第 11 回学会大会, 2009.

須見徹太郎:「ゲリラ豪雨と防災情報」, 平成 21 年度河川情報シンポジウム, 2009.【一般向け】

須見徹太郎:「豪雨災害と危機管理」, 国土交通大学校, 危機管理研修(副所長級), 2009.【一般向け】

須見徹太郎:「ゲリラ豪雨と災害情報」, 国土交通大学校, 危機管理研修(課長補佐級), 2010.【一般向け】

新聞・報道

須見徹太郎:「東海豪雨に匹敵」効果的な警報」, 毎日新聞(2009 年 5 月 30 日), 2009.

須見徹太郎:「備える:水害対策② 過去の浸水多発地 要注意」, 毎日新聞(2009 年 7 月 8 日), 2009.

須見徹太郎:「備える:水害対策⑥ 避難情報伝達に課題」, 毎日新聞(2009 年 8 月 5 日), 2009.

須見徹太郎:「上流で「ゲリラ豪雨」 鉄砲水 4 人死亡」, 毎日新聞(2009 年 8 月 21 日), 2009.

須見徹太郎:「Governance Review 局地豪雨災害への備えを急げ」, ガバナンス 10 月号, 株式会社ぎょうせい, 2009.

飯野 浩一・客員准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

小林 真輔・特任准教授

研究テーマ(主たるもの)

センサーネットワーク

小型で無線通信可能なセンサーネットワークの研究。ハードウェアからソフトウェアまでのトータルアーキテクチャの研究を行っている。

組み込みシステム

組み込みシステムのハードウェア並びにソフトウェアの研究

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

T.Terada, R.Fujiwara, G. Ono, T. Norimatsu, T. Nakagawa, M. Miyazaki, K. Suzuki, K. Yano, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: 「Intermittent Operation Control Scheme for Reducing Power Consumption of UWB-IR Receiver」, IEEE Journal of Solid-State Circuits, Vol.44, No.10, pp.2702-2710, 2009 年. 【査読有】

国際会議等

Keiichi Nakamura, Masato Kamio, Tetsushi Watanabe, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Reliable ranging technique based on statistical RSSI analyses for an ad-hoc proximity detection system", Proceedings of the 2009 IEEE International Conference on Pervasive Computing and Communications, pp.1-6, 2009. 【査読有】

M. Kamio, K. Nakamura, S. Kobayashi, N. Koshizuka and K. Sakamura: "Micro T-Kernel: A Low Power and Small Footprint RTOS for Networked Tiny Devices", 6th International Conference on Information Technology: New Generations: ITNG 2009, pp.587-594, 2009. 【査読有】

市川 暢之・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

点検・維持管理等現場業務の効率化

社会基盤の老朽化に伴う点検・維持管理業務量の増大に対応するため、現場業務で発生する情報の流れに着目した点検作業等の効率化と質の向上を実現する手法・機器等について研究する

研究業績(2009 年度)

大石 岳史・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

大規模文化遺産のデジタルコンテンツ化

大規模な文化遺産を3次元的に記録し、コンテンツ化する研究を行っている。主に幾何形状のモデル化に従事しており、レーザレンジセンサを用いて計測された複数の距離画像を位置合わせ、統合する手法の開発を行っている。現在はカンボジア・アンコール遺跡群のバイヨン寺院を対象としてプロジェクトを進めている。

研究業績(2009年度)

分担著書

大石岳史, 角田哲也: 「“AR技術による遺跡復元プロジェクト「バーチャル飛鳥京」, ARのすべて」, 日経コミュニケーション 編, 日経BP社, 2009年。

大石岳史: 「“実世界モデリング技術,” バーチャルリアリティ学, (監修) 館暲, 佐藤誠, 廣瀬通孝」, 日本バーチャルリアリティ学会 編, 工業調査会, 2010年。

雑誌論文

B. Zheng, R. Ishikawa, T. Oishi, J. Takamatsu and K. Ikeuchi: “A Fast Registration Method Using IP and Its Application to Ultrasound Image Registration”, IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications, Vol.1, pp.209-219, 2009年。【査読有】

大石岳史, 角田哲也, 池内克史: 「五輪招致プレゼン用MRシステムの開発」, 日本バーチャルリアリティ学会誌, Vol.14, No.2, pp.118-119, 2009年。

国際会議等

Y. Okamoto, T. Oishi and K. Ikeuchi: “Image-based Network Rendering System for Large Sized Meshes”, IEEE Workshop on eHeritage and Digital Art Preservation in Conjunction with ICCV 2009, 2009。【査読有】

その他論文

T. Kakuta, T. Oishi and K. Ikeuchi: “Fast Shading and Shadowing and Handling Occlusions for Asuka-Kyo MR Contents”, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2009年。

大石岳史, 大藏苑子, 川上玲, 阪野貴彦, 池内克史: 「全方位カメラを用いた光源環境と対象物の同時撮影法に基づく人物モデルのMRシステムへの重畳」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), 2009年。【査読有】

工藤雷太, 角田哲也, 川上玲, 大石岳史, 池内克史: 「屋外複合現実感における光源環境推定のための影情報抽出」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009), 2009年。【査読有】

講演・口頭発表

T. Oishi: "e-Heritage Projects in Italy, Japan, and Cambodia", CURRENT TRENDS IN COMPUTER VISION, 2009.
【招待講演】

新聞・報道

東京大学: 「生研記者会見報告 5月11日臨時記者会見 2016年東京オリンピック招致 IOC委員会現地視察に際し、複合現実感システムを用いた仮想スタジアムの合成に成功」, 生研ニュース, 2009.

金 進東・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009年度)

中村 仁・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

「キャリア」と呼ばれる国家公務員のキャリアパスに関する研究

国家公務員の中でもいわゆる「キャリア」に焦点を当て、これまで部内均衡を保ってきたと言われていたモデルが省庁再編後どのように変容しているかを研究

国内ファッション産業に対する産業政策に関する研究

繊維産業の中でも「川下」と呼ばれるアパレル産業に焦点を当て、産業振興に行政がどのような関与を行っているか、また効果的な支援はどのような政策であるかを研究

コンテンツ産業政策の政策形成過程

国内のコンテンツ産業に対する産業政策の政策形成過程を研究

研究業績(2009年度)

その他論文

中村仁: 「NYにおけるファッション教育の動向と日本のファッションへの関心」, 織研新聞, pp.7, 2009年. 【一般向け】

講演・口頭発表

中村仁:「教養教育としてのオムニバス講義導入の試み -ファッション政策を事例として-」, 大学教育学会 第31回(2009年)大会, 2009.

新聞・報道

中村仁:「未来をみつめて! - カジュアルファッションで世界に挑もう」, 『織研新聞』, 織研新聞社, 2009年5月1日, pp.7, 2009.

大谷 智子・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

コンテンツ創造における色知覚の研究

映像コンテンツ創造の研究領域において, 情報の受け手側である人間の特性を考慮した基礎研究。

研究現場と一般社会への理解増進および相互作用に関する研究

研究業績(2009年度)

分担著書

廣瀬通孝・相澤清晴・苗村健・谷川智洋・飯田誠・鈴木康広・西村邦裕・山崎俊彦・大谷智子・橋田朋子・上條桂子: 「Digital Public Art Project 空気の港～テクノロジー×空気で感じる新しい世界～」, 廣瀬通孝・相澤清晴・苗村健・谷川智洋・飯田誠・鈴木康広・西村邦裕・山崎俊彦・大谷智子・橋田朋子・上條桂子 編, 美術出版社, 2009年.

作品

オウグ オストルク・松濤智明・富樫政徳・澤田耕司・大谷智子・鈴木康広・山崎俊彦・相澤清晴: 「「未来の足跡」 Digital Public Art in Haneda Airport 空気の港 ～テクノロジー×空気で感じる新しい世界～」, 羽田空港, 2009.

松村成朗・富樫政徳・大谷智子・鈴木康広・山崎俊彦・相澤清晴: 「「自針と分針」 Digital Public Art in Haneda Airport 空気の港 ～テクノロジー×空気で感じる新しい世界～」, 羽田空港, 2009.

松村成朗・富樫政徳・大谷智子・鈴木康広・山崎俊彦・相澤清晴: 「自針と分針」, 東京大学大学院情報理工学系研究科展示, 2010.

松村成朗・富樫政徳・大谷智子・鈴木康広・山崎俊彦・相澤清晴: 「自針と分針」, 情報処理学会50周年記念大会「今ドキッのIT」, 2010.

その他論文

大谷智子: 「∞のこどもたちオープンラボ in 種子島」, 映像情報メディア学会誌, 2009年.

講演・口頭発表

大谷智子・橋田朋子・寛康明・苗村健:「LimpiDual Touch の操作性に関する評価実験」, 電子情報通信学会 MVE 研究会, 2009.

富樫政徳・大谷智子・山崎俊彦・相澤清晴:「ペン入力による動的な軌跡の描画に関するユーザビリティ評価」, 情報処理学会全国大会, 2009.

松村成朗・富樫政徳・大谷智子・山崎俊彦・相澤清晴・鈴木康広:「自針と分針:映像からの人物抽出によるメディアアート」, 電子情報通信学会 MVE 研究会, 2009.

受賞

大谷智子: 第 13 回日本色彩学会論文奨励賞「色誘導の空間的波及効果に関する一実験－視覚的注意の空間的波及効果を考慮して－」, 日本色彩学会, 2009 年.

北村 智・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

北村 智, 中原 淳, 荒木淳子, 坂本篤郎:「業務経験を通じた能力向上と組織における信頼, 互酬性の規範」, 組織科学, Vol.42, No.4, pp.92-103, 2009 年. 【査読有】

山田政寛, 北村 智:「CSCL 研究における「社会的存在感」概念に関する一検討」, 日本教育工学会論文誌, Vol.33, No.3, pp.353-362, 2010 年. 【査読有】

北村智:「協調学習研究における理論的関心と分析方法の整合性:階層的データを扱う統計的分析手法の整理」, 日本教育工学会論文誌, Vol.33, No.3, pp.343-352, 2010 年. 【査読有】

橋元良明, 北村 智, 吉田暁生:「ネット動画視聴, 周囲のネット利用者環境, ワンセグテレビがテレビ視聴時間に及ぼす影響－2009 年全国情報行動調査より－」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編, Vol.26, pp.1-26, 2010 年.

国際会議等

Matsukawa, H., Kitamura, S., Nagamori, Y., Hisamatsu, S., Yamauchi, Y., Nakano, M., Kanamori, Y., & Miyashita, N.: "Learning strategy feedback system for students using data mining technology", World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications 2009, 2009. 【査読有】

Yamada, M., Kitamura, S., Miyahara, S., & Yamauchi, Y.: "Vocabulary learning environment with collaborative filtering for support of self-regulated learning", 13th International Conference on Knowledge-Based and Intelligent Information & Engineering Systems, 2009. 【査読有】

講演・口頭発表

北村智:「都道府県におけるインターネット普及率とインターネット利用行動」, 2009 年日本社会情報学会 (JSIS&JASI) 合同大会, 2009.

山田政寛, 北村 智, 宮原詩織, 山内祐平:「Conomi+: 協調フィルタリングを用いた英語学習支援システムの開発」, 日本教育工学会第 25 回全国大会, 2009.

岡本絵莉, 北村 智:「学習環境としての工学系研究室に関する探索的調査研究」, 日本教育工学会第 25 回全国大会, 2009.

山田政寛, 北村 智:「社会的存在感を基にした学習支援のためのソーシャルソフトウェアの設計に関する一検討」, 教育システム情報学会研究会, 2010.

添野 勉・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

メディア史

メディア論

アーカイブ研究

研究業績(2009 年度)

椿本 弥生・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

De Silva Gamhewage Chaminda・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

研谷 紀夫・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

Digital Archive Digital Heritage における情報統制手法の確立

文化資源をデジタル化して公開する Digital Archive や Digital Heritage における、メタデータやオントロジなどの情報統制手法の確立を行う。

近代メディア表象論

近代におけるメディア表象を、近年では特に明治以降の国葬を対象としたメディア表象について研究する。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

研谷紀夫:「横山伊徳・石川徹也編著『歴史知識学ことはじめ』」, アーカイブズ学研究, No11, pp124-126, 2009 年. 【査読有】

研谷紀夫,内藤求:「トピックマップを用いた人名典拠情報の構築」, 情報知識学会誌, Vol.19, No.2, pp.57-62, 2009 年.

研谷紀夫:「研谷紀夫,社会的ネットワークを重視した人名典拠情報の構築-戦前期の写真師を対象とする人名典拠を中心として」, アートドキュメンテーション研究, Vol.17, pp.31 -52, 2010 年. 【査読有】

研谷紀夫 :「著者名典拠録の情報構造化記述」, デジタル図書館 Digital libraries, Vol.38, pp.25-30, 2010 年. 【査読有】

国際会議等

Norio Togiya Akira Baba: "The Digitization of Cultural Resources: An Exploration of Current Issues and the Future Outlook—A Comparison of Japan and Other Countries", WORLD LIBRARY AND INFORMATION CONGRESS: 75TH IFLA GENERAL CONFERENCE AND COUNCIL, 2009. 【査読有】

Tamako Kitaoka, Norio Togiya: "Proposal for Documentation Guidelines Related to Digitization of Cultural Heritage", XXII CIPA Symposium – Kyoto, JAPAN, 2009. 【査読有】

Norio Togiya, Motomu Naito: "Construction of Authority Information for Personal Names Focused on the Former Japanese Nobility Using a Topic Map", Fifth International Conference on Topic Maps, pp.69–75, 2009. 【査読有】

その他論文

川島隆徳 研谷紀夫: 「著者名典拠情報を拡充するための共同編集プラットフォーム」, 情報知識学会誌, 2009年.

研谷紀夫 三橋徹 高橋英一: 「Digital Cultural Heritage 構築における画像評価方法の提案とその実践」, 情報処理学会創立 50 周年記念 (第 72 回) 全国大会論文誌, 2010年.

講演・口頭発表

研谷紀夫: 「うつされた歴史——絵巻、絵画における明治期事跡表現の遷移と転移」, 表象文化論学会 第4回研究発表集会, 2009.

研谷紀夫: 「トピックマップを用いた人名典拠情報の可能性」, TMJP – Topic Maps Japan 2010, 2010.

新聞・報道

研谷紀夫: 「東京大学 研谷紀夫氏に聞く:『デジタルアーカイブにおける「資料基盤」統合化モデルの研究』出版について」, DNP Museum Information Japan artscape, 2009.

藤原 正仁・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

デジタルコンテンツ分野における人材育成に関する研究

インターンシップとキャリアディベロップメントに関する研究

就労形態の多様化に関する研究

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

藤原正仁:「ゲーム産業におけるプロデューサーのキャリア発達」, キャリアデザイン研究, Vol.5, pp.5-21, 2009 年. 【査読有】

その他論文

藤原正仁:「ゲーム開発者の就労意識とキャリア形成の課題」, デジタルコンテンツ制作の先端技術応用に関する調査研究報告書, 財団法人デジタルコンテンツ協会, 2010 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

Masahito Fujihara & Akira Baba: "Learning Process through Internship in the Japanese Content Industry", 16th World Conference on Cooperative Education and Work Integrated Learning, 2009.

藤原正仁:「コンテンツ産業におけるインターンシップを通じた学習過程」, 第 49 回 M-GTA 研究会, 2009.

藤原正仁:「ゲーム産業における職業とキャリア:情報・ネットワークからの考察」, 日本デジタルゲーム学会公開講座, 2009. 【招待講演】

藤原正仁:「コンテンツ産業におけるインターンシップによる学習プロセスの考察」, 日本キャリアデザイン学会第 6 回研究大会, 2009.

Masahito Fujihara: 「Producers' Career Development in the Japanese Game Industry」, 南台科技大学デジタルゲームデザインワークショップ, 2009. 【招待講演】

藤原正仁:「ゲーム開発者の就労意識とキャリア形成の課題」, 財団法人デジタルコンテンツ協会 3 月度セミナーわが国ゲーム産業の未来を切り拓く-最新技術動向と産業分析の報告-, 2010. 【一般向け】

新聞・報道

藤原正仁:「ゲーム開発者の就労意識とキャリア形成の課題」, 日本経済新聞ウェブ版, 2010.

別所 正博・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス歩行者ナビゲーションの研究

ユビキタスコンピューティング技術を応用した、都市環境での歩行者移動支援に関して研究を行っている。

具体的には、

- * 誘導コンテキストに応じた最適な情報 PUSH を実現するためのソフトウェア機構
 - * 障害者の移動支援を念頭とした、利用者の身体特性と環境のアクセシビリティを考慮したナビゲーション手法
 - * 都市環境でのランドマークベースの自然な道案内生成手法
- といったテーマに取り組んでいる。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

別所正博, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「ユビキタスコンピューティングと屋内環境の位置認識」, 電子情報通信学会誌, Vol.92, No.4, pp.249~255, 2009 年.

国際会議等

M. Fahim Ferdous Khan, Takeshi Yashiro, Ito So, Masahiro Bessho, and Ken Sakamura: "A Secure and Flexible Electronic-Ticket System", The 33rd IEEE International Computer Software and Applications Conference (COMPSAC 2009), pp.421-426, 2009. 【査読有】

堀 聖司・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

作品制作を中心とした錯視的映像表現に関する研究

コンピュータ・グラフィクスを使用し制作した複数の異なった視点移動の映像を、ひとつの画面内に部分的に合成することによって生じる視覚の競合を利用した錯視的映像作品の制作。切り抜き合成用に使用する動画素材にも視点移動する三次元形状のシルエットを用いることでさらに視覚の競合が助長される。

研究業績(2009 年度)

作品

Y.Kawaguchi, S.Yonekura and S.Hori: 「Bumpy Hydrodynamics Butterflies」, ASIAGRAPH 2009, 2009.

松田 剛・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

松野 将宏・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

スポーツを核とした地域活性化に関する研究

プロスポーツの存在は、その経済波及効果の観点から都市におけるビッグビジネスであるとされている。本研究では、地域における行政や財界、地域住民の連携を通じた組織間学習やソーシャルキャピタルの蓄積と応用といった視点から新たな「地域づくり・まちづくりの核」と位置づけて、地域活性化メカニズムを解明していく。

日本版 LLP 制度を活用した技術移転メカニズムに関する研究

平成 17 年 8 月より施行された有限責任事業組合 (LLP) 法により、人的資源を活用した共同事業化による創業促進が期待されている。本研究では、事例データを用いて、日本版 LLP 制度による技術移転メカニズムを分析し、新たな技術移転パースペクティブを提示する。技術系 LLP の技術移転モデルを分析枠組として、技術特性、不確実性、資源補完性、複雑性、LLP の組織・制度的要因を分析指標とし、技術移転を促進するメカニズムを分析する。

研究業績(2009 年度)

水島 希・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

Brain-Machine Interface 研究開発における倫理的諸問題への対処システム構築

文部科学省脳科学研究戦略推進プログラムにおいて佐倉統分担研究者の担当する「Brain-Machine Interface の脳神経倫理的および法的枠組みに関する研究」のうち、BMI 研究開発プロジェクト内部において、どのような倫理問題対処システムを構築すべきかを検討し、試行する。特に現在は、研究倫理コンサルテーション(ベンチサイド倫理コンサルテーション)窓口を設置し、研究のあらゆる段階で生じる倫理課題への迅速な対処を試行している。

フェミニズム科学批評による脳神経科学分析

先端科学技術領域である脳神経科学において、フェミニズム科学批評の立場から諸課題を抽出する。

研究業績(2009 年度)

その他論文

水島希:「ザ・アンチエイジング！！ 科学医療技術と女のアヤシイ関係」、『私たちの 21 世紀』、59 号、pp.32-34, 2009 年。【一般向け】

水島希:「代理母はセックスワーカーと似ているか? (特集 生殖×医療の迷宮から)」、Impaction (169), インパクト出版会, 28-31, 2009 年. 【一般向け】

筒井晴香、竹内絢、水島希:「脳特集「脳に性差はあるの?」」、婦人民主クラブ新聞・ふえみん, 2009 年. 【一般向け】

水島希、瀬山紀子、山崎明子:「事業はすでに形骸化スパイラルにおちいつている! ? ~指定管理化される女性センター、その過渡期的分析」, 「わたしの 21 世紀」No.60【特集】女性センターはどこへいく?、18-21, 2009 年. 【一般向け】

水島希:「脳神経倫理的議論は、いつ行うべきか——技術の開発段階を考慮に入れた技術アプローチによる検討」, 脳科学時代の倫理と社会 UTCP Booklet 15, pp.289-303, 2010 年. 【査読有】

講演・口頭発表

山崎明子、瀬山紀子、水島希:「指定管理化される女性センター その過渡期的分析」, 日本女性学会大会、お茶の水女子大学, 2009.

Taichi Isobe, Nozomi Mizushima, Osamu Sakura: "Toward Effective Communication between Neuroscience and Society: A Case of BMI (Brain-Machine Interface)", Society for Social Studies of Science, Washington DC, USA, 2009.

Mizushima, N., Isobe, T., and Sakura, O.: "Research ethics consultation as a method for scientific governance.", Annual Meeting of the The Society for Social Studies of Science (4S), Oct 30, 2009, Washinton DC., 2009.

水島希、磯部太一:「ブレイン・マシン・インターフェイス(BMI)の参加型技術評価に向けて——研究者は市民参加を望んでいるか?」, 科学技術社会論学会第8回年次研究大会「萌芽的技術(emerging technology)の参加型技術評価デザイン」セッション、2009 年 11 月 14 日(土)、早稲田大学, 2009.

味八木 崇・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

ヒューマンコンピュータインタラクション

実世界センシング

ユビキタスコンピューティング

研究業績(2009 年度)

国際会議等

Ken Iwasaki, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Expressive Typing: A New Way to Sense Typing Pressure and Its Applications", ACM CHI2009 work in progress, pp.4369-4374, 2009. 【査読有】

Emi Tamaki, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Brainy Hand: An Ear-worn Hand Gesture Interaction Device", ACM CHI2009 work in progress, pp.4255-4260, 2009. 【査読有】

Kensaku Kawauchi, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Directional Beaconing for Robust Wi-Fi Positioning", The 4th International Symposium on Location and Context Awareness (LoCA 2009), pp.103-119, 2009. 【査読有】

Koh Sueda, Koji Ishii, Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "Communication Grill/Salon: Hybrid Physical/Digital Artifacts for Stimulating Spontaneous Real World Communication", HCI International, pp.526-535, 2009. 【査読有】

Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "GraspZoom: zooming and scrolling control model for single-handed mobile interaction", Human-computer Interaction with Mobile Devices and Services (MobileHCI 2009), pp.81-84, 2009. 【査読有】

Kyoko Yonezawa, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Cat@Log: Sensing Device Attachable to Pet Cats for Supporting Human-Pet Interaction", Int. Conf. on Advances in Computer Entertainment Technology (ACE 2009), pp.149-156, 2009. 【査読有】

講演・口頭発表

米澤 香子, 味八木 崇, 暦本 純一: 「Cat@Log: Human Pet Interaction のための猫ウェアラブルセンシング」, 第17回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ WISS2009, 2009.

味八木 崇: 「実世界集合知による大規模都市センシングの実現に向けて」, 電子情報通信学会ヒューマンプローブ (IEICE HPB) 第一回研究会, 2009. 【招待講演】

山本 拓司・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

近代日本における身体文化の形成

概要説明 主に日本をフィールドとしながら、社会の近代化の過程における、体操やスポーツ等の身体文化および大衆文化の関係について研究を行っている。

東京大学情報学環所蔵 戦時宣伝資料のデジタル・アーカイブの作成について

概要説明 情報学環が所蔵する戦時宣伝資料(第一次世界大戦期の欧米プロパガンダポスターおよび日中戦争～第二次世界大戦にかけての日本側プロパガンダ・パンフレット、戦時号外コレクション)の整理とデジタル・アーカイブの作成を行い、それら戦時宣伝資料のメディア史においてもつ意義について研究を行っている。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

山本拓司: 「幻のオリンピックと外苑拡張計画 —明治神宮外苑の文化史」, 現代スポーツ評論, Vol.19, pp.44-57, 2009 年.

湧田 雄基・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

Human Context Recognition using Ubiquitous Sensors

主に歩行者をターゲットとして、使用者に取り付けたセンサや都市空間に配置されたセンサ(ユビキタスセンサ)からの情報を利用し、利用者の位置、状態または行為を推定することを研究目標とする。こうした利用者の情報を活用し、よりリッチなサービスの提供を実現する。

ロボットによるイベント認識のための概念構造の自立的構造化

本研究では、ロボットによる自由度が高くかつロバストな実環境における現象理解と解釈(イベント認識)を実現するためのロボット自身が保有する概念構造を自立的に獲得し構造化するためのアーキテクチャの構築を行う。なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金による援助を受けて実施する。

ネットワークロボットを用いた睡眠を中心とする生活パターン管理・調整支援

本研究では、人の日常生活を観測可能な画像センサを搭載したロボットおよびウェアラブル型の生体センサをワイヤレスネットワークでリンクすることにより、人の生活パターンを管理・調整することが可能なシステムを構築した。提案システムでは、脈波が取得可能な生体センサおよび画像認識による人状態推定手法を組み合わせることにより、日常生活での人の行動を推定することが可能である。また、生体リズムの動的変動特性に注目し、人の活性度および活動パターンを調整する手法について提案した。なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金の援助により実施した。

研究業績(2009 年度)

分担著書

Yuki Wakuda, Kosuke Sekiyama and Toshio Fukuda: "Cognitive Ontology: A Concept Structure for Dynamic Event Interpretation and Description from Visual Scene" in Distributed Autonomous Robotic Systems 8", Hajime Asama, Haruhisa Kurokawa, Jun Ota and Kosuke Sekiyama 編, Springer Berlin Heidelberg, 2009 年。

雑誌論文

Yuki Wakuda, Kosuke Sekiyama and Toshio Fukuda: "Dynamic Event Interpretation and Description From Visual Scene based on Cognitive Ontology for Recognition by a Robot", International Journal of Robotics and Automation, Vol.24, No.3, pp.263-279, 2009 年。【査読有】

今井 健太郎・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

大田 朋子・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

岡崎 直観・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

日中中日機械翻訳に関する研究

日中中日機械翻訳の実用に向けた対訳辞書を構築するための研究

自然言語処理

計算機による自然言語理解に向けた研究

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

Sophia Ananiadou, Naoaki Okazaki, Rob Proctor, Brian Rea, James Thomas: "Supporting Systematic Reviews using Text Mining", *Social Science Computer Review*, Vol.27, No.4, pp.509-523, 2009 年. 【査読有】

Danushka Bollegala, Naoaki Okazaki, Mitsuru Ishizuka: "A bottom-up approach to sentence ordering for multi-document summarization", *Information Processing & Management*, Vol.46, No.1, pp.89-109, 2010 年. 【査読有】

国際会議等

Xianchao Wu, Naoaki Okazaki, Jun: "Semi-Supervised Lexicon Mining from Parenthetical Expressions in Monolingual Web Pages", *Human Language Technologies: The 2009 Annual Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics (NAACL/HLT 2009)*, pp.424-432, 2009. 【査読有】

Yulan Yan, Naoaki Okazaki, Yutaka Matsuo, Zhenglu Yang, Mitsuru Ishizuka: "Unsupervised Relation Extraction by Mining Wikipedia Texts Using Information from the Web", *Joint Conference of the 47th Annual Meeting of the ACL and the 4th International Joint Conference on Natural Language Processing of the AFNLP (ACL-IJCNLP 2009)*, pp.1021-1029, 2009. 【査読有】

Xu Sun, Naoaki Okazaki, Jun: "Robust Approach to Abbreviating Terms: A Discriminative Latent Variable Model with Global Information", Joint Conference of the 47th Annual Meeting of the ACL and the 4th International Joint Conference on Natural Language Processing of the AFNLP (ACL-IJCNLP 2009), pp.905-913, 2009. 【査読有】

Yuichiroh Matsubayashi, Naoaki Okazaki, Jun: "A Comparative Study on Generalization of Semantic Roles in FrameNet", Joint Conference of the 47th Annual Meeting of the ACL and the 4th International Joint Conference on Natural Language Processing of the AFNLP (ACL-IJCNLP 2009), pp.19-27, 2009. 【査読有】

Yukiko Matsuoka, Samik Ghosh, Norihiko Kikuchi, Rune Saetre, Brian Kemper, Naoaki Okazaki, Sophia Ananiadou, Jun: "Community Platform for Pathway Model Building", 10th International Conference on Systems Biology (ICSB 2009), pp.139-140, 2009. 【査読有】

Yuichiroh Matsubayashi, Naoaki Okazaki, Jun: "Accurate and Robust Semantic Role Labeling with Multiple Generalization Criteria in PropBank", 5th International Conference on Generative Approaches to the Lexicon (GL 2009), pp.97-104, 2009. 【査読有】

Takeshi Kobayakawa, Tadashi Kumano, Hideki Tanaka, Naoaki Okazaki, Jin-Dong Kim, Junichi Tsujii: "Opinion Classification with Tree Kernel SVM Using Linguistic Modality Analysis", 18th ACM Conference on Information and Knowledge Management (CIKM 2009), 2009. 【査読有】

講演・口頭発表

岡崎直観, 劉瀟, 綱川隆司, 辻井潤一: 「Wikipedia からの対訳用語対の抽出」, 第 23 回人工知能学会全国大会 (JSAI2009), 2009.

岡崎直観, 辻井潤一: 「高速な類似文字列検索アルゴリズムと自然言語処理への応用」, NLP 若手の会 第 4 回シンポジウム, 2009.

田中翔平, 岡崎直観, 石塚満: 「Wikipedia からの要約生成パターンの抽出」, 情報処理学会創立 50 周年記念 (第 72 回) 全国大会, 2010.

岡崎直観, 辻井潤一: 「高速な類似文字列検索アルゴリズム」, 情報処理学会創立 50 周年記念 (第 72 回) 全国大会, 2010.

受賞

岡崎直観: 奨励賞「高速な類似文字列検索アルゴリズムと自然言語処理への応用」, 2009 年.

岡崎直観: 情報処理学会第 72 回全国大会大会奨励賞「高速な類似文字列検索アルゴリズム」, 2010 年.

田中翔平: 情報処理学会第 72 回全国大会学生奨励賞「Wikipedia からの要約生成パターンの抽出」, 2010 年.

狩野 芳伸・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

Kano, Yoshinobu, William A. Baumgartner Jr, Luke McCrohon, Sophia Ananiadou, K. Bretonnel Cohen, Lawrence Hunter and Jun: "U-Compare: share and compare text mining tools with UIMA", *Bioinformatics*. 25(15). pp. 1997-1998, 2009 年. 【査読有】

北 佳保里・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

柴田 剛志・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

滝田 啓介・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス・コンピューティングを活用した応用サービスの技術・制度・ビジネスモデル研究

ユビキタス・コンピューティング応用サービスに関する以下の内容を行う。

①技術開発・実証実験 ②制度研究・調査 ③ビジネスモデル検討・提案

研究業績(2009 年度)

野口 科子・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

地震時の表層地盤の非線形応答についての解析およびシミュレーション

強い地震動に見舞われると、軟弱な表層地盤は非線形応答を起こす。通常の地震応答計算では媒質の線形応答を前提とするため、非線形応答時の地震動の評価は困難であり、また地盤データの不足などから、現状では強震時の非線形応答の評価は不十分である。そこでまず、近年多数の記録が蓄積されつつある大加速度の強震記録を用いて地盤の非線形応答特性を把握する。また、非線形応答を考慮した地震波動伝播数値シミュレーション手法を開発し、大規模数値計算によって非線形地震動の波形合成を行う。

研究業績(2009 年度)

講演・口頭発表

野口科子・笹谷努:「表層地盤の非線形応答度合いと地震動増幅率の定量的関係」, 日本地震学会 2009 年度秋季大会, 2009.

野口科子・笹谷努:「地震記録による表層地盤の非線形応答の定量的指標」, 強震動研究シンポジウム, 2009.

Noguchi, S., T. Furumura and T. Sasatani: 「Nonlinear Site Response Due to Large Ground Acceleration: Observation and Computer Simulation」, 2009 AGU Fall Meeting, 2009.

原 忠義・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

自然言語の構文解析技術向上へ向けて

近年、Web 技術等の普及に伴い、大量の電子文書データを解析し情報を抽出する需要が高まっている。このような需要を満たす様々な応用技術においては、与えられた文の文法および意味構造を本質的にコンピュータに理解させる構文解析技術は、その不可欠な基礎として高い性能を達成することが求められる。我々は、構文解析技術の向上を目指し、特に、解析対象分野に依存せず安定した構文解析性能を達成することが可能な、より汎用性の高い技術を開発することに注力する。

研究業績(2009 年度)

国際会議等

原 忠義、宮尾 裕介、辻井 潤一: “Effective Analysis of Causes and Inter-dependencies of Parsing Errors”, The 11th International Conference on Parsing Technologies, 2009. 【査読有】

韓 昇龍・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

PYYSALO SAMPO MIKAEL・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

前田 拓人・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

東海・東南海・南海地震の連動性評価研究

将来連動して発生する可能性があることが指摘されている東海・東南海・南海地震について、被害予測精度を向上させるため、詳細な地下構造を用いた大規模計算機による強震動・津波連成シミュレーションを行う。

地震波動伝播・散乱問題

地震波は伝播する過程で固体地球内部の短波長不均質構造によって散乱され、大きく乱されていく。また、海陸境界においては音波と地震波の間の相互変換が起こり、地震による海中音響波は発生することがある。本研究では弾性波動論・基盤地震観測網による高密度データ解析・大規模数値計算それぞれのアプローチから、不均質構造内部での地震波の伝播過程をモデル化する。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

Kazushige Obara and Takuto Maeda: "Reverse propagation of T waves from the Emperor seamount chain", *Geophysical Research Letters*, Vol.36, pp.doi:10.1029/2009GL037454, 2009 年. 【査読有】

Takuto Maeda and Kazushige Obara: "Hypocenter distribution of deep low-frequency tremors in Nankai subduction zone, Japan", *Report of the National Research Institute for Earth Science and Disaster Prevention*, Vol.74, pp.13-19, 2009 年.

Takuto Maeda and Kazushige Obara: "Spatio-temporal distribution of seismic energy radiation from low-frequency tremor in western Shikoku, Japan", *Journal of Geophysical Research*, Vol.114, pp.doi:10.1029/2008JB006043, 2009 年. 【査読有】

Takanori Matsuzawa, Kazushige Obara, and Takuto Maeda: "Source duration of deep very-low-frequency earthquakes in western Shikoku, Japan", *Journal of Geophysical Research*, Vol.114, pp.doi:10.1029/2008JB006044, 2009 年. 【査読有】

Yoshihiro Ito, Kazushige Obara, Takanori Matsuzawa and Takuto Maeda: "Very-low-frequency earthquakes related to small asperities on the plate boundary interface at the locked to aseismic transition", *Journal of Geophysical Research*, Vol.114, pp.doi:10.1029/2008JB006036, 2009 年. 【査読有】

講演・口頭発表

Takuto Maeda and Kazushige Obara: 「Seismic energy radiation from low-frequency tremor」, The 2nd YESA workshop in Ehime University "Seismic Observations for the deep Earth and the Interpretation", 2009.

前田拓人・古村孝志・小原一成: 「遠地 P 波にともなう顕著な散乱波: 波群の特徴と構成要素の検討」, 東京大学地震研究所研究集会 リソスフェアの短波長不均質性の時空間変化に関する研究の高度化, 2009.

竹本帝人・古村孝志・齋藤竜彦・前田拓人:「コーダ規格化法による全国のサイト増幅特性の推定と距離減衰式を用いた震度予測への適用」, 東京大学地震研究所研究集会 リソスフェアの短波長不均質性の時空間変化に関する研究の高度化, 2009.

古村孝志・前田拓人・武村俊介:「震波伝播と強震動の大規模並列シミュレーションのための、差分法計算コード(Seism3D3)の最適化」, 地球シミュレータ利用者連絡会, 2009. 【一般向け】

前田拓人・古村孝志・小原一成:「遠地 P 波にともなう顕著な散乱波:波群の特徴と構成要素の検討」, 日本地震学会 2009 年秋季大会, 2009.

熊谷博之・前田拓人・中野優・マリオ ルイス・パブロ パラシオス:「地震波振幅の散乱特性を利用した震源決定手法とその火山監視における有効性」, 日本地震学会 2009 年秋季大会, 2009.

小原一成・田中佐千子・前田拓人:「ハイブリッド法に基づく深部低周波微動活動の再評価と短期的 SSE すべり分布との関係」, 日本地震学会 2009 年秋季大会, 2009.

竹本帝人・古村孝志・齋藤竜彦・前田拓人:「コーダ規格化法による日本全国のサイト増幅特性の推定(2) 震度の距離減衰の補正と震度予測への適用」, 日本地震学会 2009 年秋季大会, 2009.

武村俊介・小林雅弘・古村孝志・前田拓人・野口科子・竹本帝人:「2009 年駿河湾の地震による L_g 波の伝播と加速度分布」, 日本地震学会 2009 年秋季大会, 2009.

前田拓人・行竹洋平・小原一成:「地震波干渉法により推定された 2007 年大分県の群発的地震活動に伴う地震波速度低下:自己相関関数の構成要素」, 日本地球惑星科学連合 2009 年大会, 2009.

武田哲也・小原一成・針生義勝・浅野陽一・前田拓人・汐見勝彦・上野友岳・松澤孝紀・行竹洋平・松原誠・廣瀬仁・関根秀太郎:「人工地震探査から推定した四国西部のプレート境界と深部低周波微動との相対位置関係」, 日本地球惑星科学連合 2009 年大会, 2009.

熊谷博之・前田拓人・パブロ パラシオス・マリオ ルイス・中野優:「高周波振幅を用いた火山性振動現象の震源決定と常時モニターへの活用」, 日本地球惑星科学連合 2009 年大会, 2009.

小原一成・前田拓人:「深部低周波微動活動を概観するための簡便モニタリング手法」, 日本地球惑星科学連合 2009 年大会, 2009.

三輪 誠・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

Makoto Miwa and Rune S 遵`tre and Jin-Dong Kim and Jun: "Event Extraction with Complex Event Classification Using Rich Features.", Journal of Bioinformatics and Computational Biology (JBCB), Vol.8, No.1, pp.131—146, 2010 年. 【査読有】

国際会議等

Makoto Miwa and Rune S 遵`tre and Yusuke Miyao and Jun: "A Rich Feature Vector for Protein-Protein Interaction Extraction from Multiple Corpora.", the 2009 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing (EMNLP2009), pp.121—130, 2009. 【査読有】

その他論文

Rune S 遵`tre and Kazuhiro Yoshida and Makoto Miwa and Takuya Matsuzaki and Yoshinobu Kano and Jun: "AkaneRE Relation Extraction: Protein Interaction and Normalization in the BioCreAtIvE II.5 Challenge", the BioCreative II.5 Workshop 2009 special session | Digital Annotations., 2009 年.

Makoto Miwa and Rune S 遵`tre and Jin-Dong Kim and Jun: "Event Extraction with Complex Event Classification using Rich Features.", 3rd International Symposium on Languages in Biology and Medicine (LBM 2009), 2009 年. 【査読有】

受賞

Makoto Miwa: Honorable Mention Award「3rd International Symposium on Languages in Biology and Medicine (LBM 2009)」, 2009 年.

YU KUN・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

横地 早和子・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

熟達化と創造性の心理学

これまで主に職人や芸術家など、もの作りに携わっている人たちの「創造のメカニズム」や「熟達者になっていくプロセス」などの研究を進めてきました。熟達化の心理学と創造性の心理学をつなぎながら「創造的熟達とは何か」「創造的な熟達者はどんな特徴を持っているか」そして「創造的に生きる姿とはどういうものなのか」について、人間が持つ創造というすばらしい能力と、ポジティブに生きる力への希望と信頼を持って研究を進めて行きたいと思っています。

研究業績(2009 年度)

雑誌論文

Okada, T., Yokochi, S., Ishibashi, K., & Ueda, K.: "Analogical modification in the creation of contemporary art.", Cognitive Systems Research, Vol.10, No.3, pp.189-203, 2009 年。【査読有】

RUNE SAETRE・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2009 年度)

IV. 外部資金獲得状況

平成22(2010)年3月31日時点で情報学環に在籍していた教員各人が関係する外部資金の状況を、情報学環研究協力係のデータをもとに、収録しています。

1. 科学研究費補助金交付一覧
2. 寄付講座
3. 受託研究受入一覧
4. 奨学寄附金受入
5. 共同研究受入一覧
6. その他外部資金

1. 科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研究課題	研究代表者	直接経費	間接経費	計
特定領域研究	わが国における火山罹災地の複合的資料による歴史的・文化・自然景観の復元研究	馬場 章	6,400,000	0	6,400,000
特定領域研究	知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究	須藤 修	12,900,000	0	12,900,000
特定領域研究	電子化診療情報の患者への提供のあり方に関する調査研究	山本 隆一	4,200,000	0	4,200,000
特別推進研究	高度言語理解のための意味・知識処理の基礎技術に関する研究	辻井 潤一	79,400,000	23,820,000	103,220,000
若手研究(B)	ネットワーク文化情報資源で活用する人名典拠情報に関する研究	研谷 紀夫	1,000,000	300,000	1,300,000
若手研究(B)	方向感覚のトレーニング: 地理的スケールでの空間的思考とその訓練可能性	石川 徹	800,000	240,000	1,040,000
若手研究(B)	病院向け災害対応Eラーニングシステム構築パッケージの開発	大原 美保	1,100,000	330,000	1,430,000
若手研究(B)	高度眼球センシングによるライフログの拡張	味八木 崇	1,500,000	450,000	1,950,000
若手研究(B)	日本版LLP・LLCを活用した大学発ベンチャーの創出	松野 将宏	700,000	210,000	910,000
若手研究(B)	プロジェクト型組織における知識創造メカニズムの実証的研究	七丈 直弘	1,700,000	510,000	2,210,000
若手研究(B)	サブカルチャー資本と若者の社交性についての計量社会学的研究	北田 暁大	1,500,000	450,000	1,950,000
若手研究(B)	現代都市再開発における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究	南後 由和	1,000,000	300,000	1,300,000
若手研究(B)	ロボットによるイベント認識のための概念構造の自立的構造化	湧田 雄基	1,700,000	510,000	2,210,000
若手研究(スタートアップ)	KnowledgeWorkerを育成するアクティブラーニング環境の構築と評価	椿本 弥生	1,200,000	360,000	1,560,000
若手研究(スタートアップ)	情報通信技術利用が社会生活に与える影響に関するマルチレベル分析による実証的研究	北村 智	680,000	204,000	884,000
基盤研究(A)	デジタル茶室の花鳥風月的な時空間創出技術	河口 洋一郎	7,500,000	2,250,000	9,750,000
基盤研究(A)	美術創作プロセスの解明に基づく創造性教育支援	岡田 猛	7,400,000	2,220,000	9,620,000
基盤研究(A)	ライフログ情報処理基盤の構築: 取得、処理、共有へ向けて	相澤 清晴	9,800,000	2,940,000	12,740,000
基盤研究(A)	歴史情報学に基づく明治期社会モデルの研究—写真資料を用いた華族社会構造の解析—	馬場 章	13,300,000	3,990,000	17,290,000
基盤研究(A)	東アジアにおける地域協力枠組み発展の政治過程	田中 明彦	8,400,000	2,520,000	10,920,000
基盤研究(B)	センサネットワーク技術を利用した寒冷地土壌表層における面的な水循環変動プロセスの解明	溝口 勝	1,500,000	450,000	1,950,000
基盤研究(B)	混雑状況下における人物追跡にもとづく行動解析	佐藤 洋一	3,700,000	1,110,000	4,810,000
基盤研究(B)	テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究と批評プラットフォームの制作	石田 英敬	4,200,000	1,260,000	5,460,000
基盤研究(B)	大規模分散環境を用いたP2Pネットワーク流通ファイル制御システムの研究	中尾 彰宏	5,700,000	1,710,000	7,410,000
基盤研究(B)	自己調整学習を支援する協調フィルタリングを用いた英語学習環境の構築と評価	山内 祐平	7,800,000	2,340,000	10,140,000
基盤研究(B)	脳神経科学と社会の相互作用——事例研究と枠組み構築——	佐倉 統	3,100,000	930,000	4,030,000
基盤研究(B)	メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について: 8カ国国際比較研究	林 香里	5,200,000	1,560,000	6,760,000
基盤研究(B)	「中国」と向き合って: 日韓台対中進出企業の現地化プロセスに関する比較社会学的研究	園田 茂人	1,200,000	360,000	1,560,000
基盤研究(C)	情報セキュリティの相互依存性に関する経済分析	田中 秀幸	1,000,000	300,000	1,300,000
基盤研究(C)	地殻・マントル不均質性の定量化と、広帯域強震動シミュレーションモデルの構築	古村 孝志	1,100,000	330,000	1,430,000

基盤研究(C)	ユークリッド距離行列の順序構造とその多次元尺度構成法への応用	倉田 博史	1,400,000	420,000	1,820,000
基盤研究(C)	噴火災害に備えた避難システムの実効性向上に関する研究	田中 淳	700,000	210,000	910,000
基盤研究(C)	ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究	山口 いつ子	700,000	210,000	910,000
基盤研究(C)	機械学習における視覚的・対話的な半自動エラー解析を可能とした自然言語処理統合環境	狩野 芳伸	500,000	150,000	650,000
萌芽研究	低投入持続的稲作技術 SRI の信憑性を確認するための土壌物理学的実証研究	溝口 勝	500,000	0	500,000
萌芽研究	健康食品の安心・安全確保のための全国ネットワークの構築とその実証に関する研究	堀 里子	1,600,000	0	1,600,000
特別研究員奨励費	日韓メディア文化交流の歴史－戦後日韓におけるテレビ文化の形成	金 ソンミン	500,000	0	500,000
特別研究員奨励費	社会的参照行動のメカニズム－情動・感情刺激の処理と行動調整の間	松中 玲子	500,000	0	500,000
特別研究員奨励費	サービスを基軸とした情報社会経済とイノベーション政策に関する研究	木下 裕美子	1,200,000	0	1,200,000
特別研究員奨励費	感覚統合の神経基盤と応用モデル:心理・生物・工学的アプローチによる多角的検討	金山 範明	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	地殻・マントル内短波長不均質構造と高周波地震動の伝播特性に関する研究	武村 俊介	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	新書のメディア史－書物の形態をめぐる「知」の構築と変容－	堀口 剛	400,000	0	400,000
特別研究員奨励費	消費者、医療従事者の共創による健康食品の有用性・安全性情報全国ネットワークの構築	朝比奈 泰子	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	モバイル空間での利用に適した実世界指向インタフェースに関する研究	石黒 祥生	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	カメラ画像を用いた混雑環境下における人物追跡技術の開発	杉村 大輔	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	「Middle Class」のイメージと現実－一日中の事例を通してみた政治・文化	周 倩	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	3次元の手指形状推定システムを用いた自然操作インタフェース	玉城 絵美	1,200,000	0	1,200,000
特別研究員奨励費	著作者人格権の本質論	酒井 麻千子	400,000	0	400,000
特別研究員奨励費	多民族社会における世論と外国籍市民に関する政治社会学的研究－住民投票を中心に－	鄭 佳月	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	公共空間の政治経済－日本の大都市の民・官協働における新しい公共空間に関する考察	吉見 俊哉	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	戦後日本における「南洋」の記憶に関する研究	吉見 俊哉	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	「創造的表現のための鑑賞」を促す美術展示及び教育プログラムの開発	縣 拓充	500,000	0	500,000
特別研究員奨励費	アジア太平洋地域主義－その歴史、理論、可能性の検討	保城 広至	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	自然災害発生後の国際緊急援助におけるガバナンスの研究	地引 泰人	500,000	0	500,000
特別研究員奨励費	文化資源における三次元デジタルデータの活用	鎌倉 真音	500,000	0	500,000
特別研究員奨励費	ナショナリズムの知識人の社会学	新倉 貴仁	500,000	0	500,000
特別研究員奨励費	メディア表現におけるコミュニケーション・デザインの実践と思想の研究	平口(鳥海) 希世子	400,000	0	400,000
特別研究員奨励費	大規模文化財モデルをインタフェースとしたオンラインデータベースシステム	岡本 泰英	600,000	0	600,000
新学術領域研究(公募)	台頭する中産階級とその政治的・社会的インパクト:中印露比較研究	園田 茂人	1,800,000	540,000	2,340,000
新学術領域研究(公募)	社会的シグナルとしての顔表情:発達認知神経学からのアプローチ	開 一夫	2,400,000	720,000	3,120,000
特別研究員奨励費	日本のテレビゲーム産業における技術革新のマネジメントと競争優位性の研究	馬場 章	400,000	0	400,000
研究成果公開促進費(データベース)	日本政治・国際関係データベース	田中明彦	4,500,000	0	4,500,000
合計	62 件		225,680,000	54,204,000	279,884,000

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

平成23年3月 発行
編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府
東京都文京区本郷7丁目3番1号
郵便番号 113-0033
電話：03-5841-5905 Fax:03-5841-5916
Email: tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp

印刷・製本 株式会社 創志企画
東京都新宿区榎町73番
郵便番号 162-0806
電話:03-3267-5503 Fax:03-3235-3263
Email:soshi@kind.ocn.ne.jp
